池波正太郎

仇討群像

文春文庫

著者紹介

池波正太郎(いけなみ・しょうたろう)
大正12(1923)年、東京に生れる。昭和30年東京都職員を退職し、作家生活に入る。新国劇の舞台で多くの戯曲を発表し、35年第43回直木賞を「錯乱」によって受賞。52年第11回吉川英治文学賞を「鬼平犯科帳」その他により受賞する。63年第36回菊池寛賞受賞。作品に「剣客商売」「その男」「真田太平記」〝必殺仕掛人〟シリーズなど多数。平成2年5月3日急逝。

池波正太郎 仇討群像

文春文庫

仇討群像

池波正太郎

い 4 20

文春文庫

514 +税

9784167142209

1920193005141

ここに収められた九篇の仇討小説は、単なる復讐物語ではない。五百石の旗本が用人の妻に邪な情欲を燃やしたことが発端であったり、衆道が動機となっていたり、つまらぬ女にからむ殺人だったり……と、馬鹿げたことから仇討という突発事件にまきこまれた人間たちの、のっぴきならないありさまを描く異色短篇集。解説・佐藤隆介

ISBN4-16-714220-1

C0193 ¥514E

定価(本体514円＋税)

い 4 20

文春文庫

文春文庫
池波正太郎の本

鬼平犯科帳 (一)~(二十四)
蝶の戦記 (上)(下)
おれの足音 大石内蔵助 (上)(下)
火の国の城 (上)(下)
幕末新選組
忍びの風 (一)~(三)
剣客群像
忍者群像
仇討群像
その男 (一)~(三)
旅 路 (上)(下)
夜明けの星
雲ながれゆく
乳 房
夜明けのブランデー
秘 密
鬼平犯科帳の世界
ル・パスタン Le passe-temps
池波正太郎の春夏秋冬
池波正太郎・鬼平料理帳(佐藤隆介編)
「鬼平犯科帳」お愉しみ読本(文藝春秋編)

装 画・東 啓三郎
A D・粟屋 充

文春文庫

仇討群像

池波正太郎

文藝春秋

仇討群像

池波正太郎

文春文庫

文春文庫

仇討群像

池波正太郎

文藝春秋

よろいびつ……五
興奮……二九
坊主雨……一〇一
波紋……一三三
敵……一四九
情炎……一八九
大石内蔵助……二三五
逆転……三〇九
深川猿子橋……三五九
解説　佐藤隆介　三八五

よろいびつ

一

鎧櫃は、いうまでもないことながら、武士の表道具である鎧をおさめておくものであり、武家の誇りを象徴するものだから、台所や物置へほうりこんでおくなどということは、もちろんあるべき筈がない。

四谷・仲殿町に屋敷をかまえる旗本・細井新三郎の鎧櫃も、書院の床の間に、どっしりと据えられてあった。

鎧をかざりつけるのは、正月か、五月の節句のときで、ふだんは兜のみを鎧櫃の上へかざっておくのが、細井家のしきたりである。

床の間の壁には〔尚武〕の二字を大書した軸がかけられてある。この〔かけもの〕は、大御所家康にしたがい、何度も戦場を駆けまわったという細井家先祖の筆になるもので、まことに下手な字ではあるが、ともかく〔家宝〕だということになっていた。

細井家に、その事件が起ったのは、享保十一年春のことであった。

徳川幕府が日本を制御するようになってより、およそ百十年ほどの年月がすぎているこのころになると、武士というものの存在も、妙なものになってきたようだ。

その日――。

細井家の新参の家来で、池尻小文吾というものが、そっと書院へ忍び入り、鎧櫃のふたをあけ、

中へ手を差し入れて取り出したものがある。

「や――これか……」

小文吾は、取り出した蒔絵の箱のひもをとき、中のものを引き出すと、

「フム、フム――なるほど……フーム。や、これは、み、見事なものだ」

額に汗をにじませ、生つばをしきりにのみこみながら、そのものを一枚、二枚と、喰い入るようにながめはじめた。

箱の中身は、二十余枚におよぶ春画であった。しかも肉筆のものだ。

「フム、フム、フムフム――」

低く唸り声を発しつつ、二十六歳にしては酒にも女にも、かなり擦れている小文吾の熱中ぶりからおして、春画の出来ばえも相当な迫力をもっているらしい。

春画ばかりではない。鎧櫃には、まだ一包みの春本がしまいこまれていた。

つまり、これは、このころの武家の鎧櫃に、表道具のほかに、肌もあらわな男女の恍惚無我の境地を表現する芸術品が、同居をしていたということになる。

全部の武士の家が、そうであったというのではなく、そうしたことがあっても可笑しくはないという、いわば当然の秘密のごときものになっていたとも言えよう。

鎧櫃の中の一方の品には、もう用がなくなってから百年余もたっているのに、いま池尻小文吾が鑑賞をたのしんでいるもう一つの品の方が、武士にとって物の用にたっているということは、見逃すことの出来ぬ事実であった。

封建時代の、ことに武家の女たちの性生活は現代にくらべて、まことに貧弱なものであったなどと、その道の権威はのたもうが、とんでもない間違いである。大名・旗本の家の女たちは、こ

うした〔当然の秘密〕を心ゆくまで味わっていたのだから……。

池尻小文吾が、細井家に仕えるようになったのは、三月ほど前のことであった。

鎧櫃の中のたのしみを、朋輩の大竹七之助から耳うちされたのは、昨夜のことだ。

「明日は、先代様の御法事でな。殿様も奥様も、うるさい用人殿も、みな出かけてしまうから、おぬし、ちょっと行ってのぞいて来いよ、そりゃア、見事なものだぞ」

しきりに、大竹がすすめる。

「まくら絵など、もう飽きるほど見てきましたよ」

「いや、違う。まくら絵にも上下があるぞ。いいか池尻。あの殿様の鎧櫃の中のものはな、そこらで隠し売りをしているようなまくら絵とはわけが違う。何せ、むかし鎌倉のころに、宮中の絵所をあずかっていた名人、住吉慶恩筆になるものを、殿様がな、わざわざ御公儀の絵師、板谷桂梅に模写させたといわれる逸品だというぞ」

あまり気もすすまなかった小文吾だが、今日になって、主人夫婦が十八になる若さまと十六になる息女をつれ、用人、中間を従えて麻布の寺へ出かけた留守をねらい、苦笑しつつ、鎧櫃の中身をのぞいたわけだ。

苦笑が驚嘆に、そして昂奮に変った池尻小文吾は、ついに我を忘れた。

（や？）

ついでのことに、もう一包みの方も見てやれと、小文吾が、袱紗に包まれた数冊の春本を引き出したとたん、春本と共に彼の視線がとらえたものは、まぎれもなく、小判の包みであった。

「ふうむ……」

凝然と、池尻小文吾は、その金包みに見入った。

小文吾が、鎧櫃の中の金百両を盗んで逃亡したのは、その夜のことである。

ところが、同じその夜、屋敷内の長屋に住む用人・西村太兵衛の妻お秀も、細井屋敷から突然に失踪してしまった。

「おのれ!!　両人とも、しめし合せてのことじゃ」

鎧櫃の犯行を知ったとき、細井新三郎は烈火のように怒った。

用人・西村太兵衛は、主人の細井より五つ下の四十歳であったが、

「お秀が、いつ、池尻めと……し、知らなんだ。まったく知らなんだわ」

色の黒い、あばたの浮いた顔をゆがめ、わなわなと体を震わせ口惜しげに、同じようなことを何度もつぶやくのみだ。

お秀は、西村にとって二度目の妻である。

愛宕山の水茶屋ではたらいていたお秀を、細井家出入りの商人の養女ということにして、妻に迎えたのが半年前のことであった。

二十四歳のお秀の体は、遺憾なく脂肪をたたえ、愛撫するに適当なふくらみをそなえ、西村を狂喜させていたものである。

細井新三郎は、西村用人を呼びつけ、

「草の根をわけても両人を探し、首打てい。天下の直参、細井新三郎の家に、かくのごとき不始末を引き起したそのつぐないは、お前の太刀先ひとつにかかっておるのだぞ。お前にとっては妻を寝取った憎むべき奴。わしにとっては獅子身中の虫けら。ゆるしておけぬ!!」

「は――」

「必ず、斬れ!!　よいか」

平伏したが、西村太兵衛には、とても池尻小文吾を斬り伏せる自信はなかった。

二

蟬が、じりじり鳴いていた。

池尻小文吾は、汗じみた帷子に脇差一本をさしこんだきりの、うすよごれた姿で、目黒の行人坂を、ぶらぶらと下っていた。

太刀はとっくに売り払い、自棄酒の飲代に替えてしまっていた。

四カ月前に、細井屋敷の鎧櫃から盗み出した金百両は、もう小文吾の手から消えてしまっている。以前からの博打の借金を友達に返しても、六十両に近い大金が小文吾に残されたのだが、

（こうなったら、もうどうにでもなれ）

小文吾は、たちまちのうちに、酒と女と博打に、その金をつかい果してしまった。

六十両といえば、庶民たちが六年は暮せるほどの金だが、そんな生活意識は、もちろん小文吾にはなかった。

自分の犯行が奉行所に届出てあるなら、警吏の探索の眼は、江戸市中に光っている筈であった。

（ふしぎに捕まらぬが……奉行所も、おれのようなものに、かかりあうひまがないのかな）

出来るなら、早く捕えられて、二十六年の人生に結着をつけてしまいたい気持で一杯なのである。

池尻小文吾の生家は、本所林町にあって、百俵五人扶持の貧乏旗本だ。

同じ旗本でも、将軍の近くにはべる役目をもち、禄高も五百石という、いわゆる「おれきれき」の細井新三郎とは雪と墨の差がある。

ことに、貧乏旗本の二、三男は家も継げぬ邪魔もの扱いで行先の希望もなく、池尻家の次男坊に生まれた小文吾は、早くから悪友にさそわれ、悪事の一通りはやってきた。

父や母も、ぐれ出した小文吾には手を焼いたが、母親の遠縁にあたる麹町七丁目の茶問屋・久米屋与兵衛の口ききで、ようやく細井家に仕えることが出来たのである。

しかし、小文吾は、細井家に奉公して三カ月間若い体をもてあましつくしていたのだ。

細井新三郎は、何事にも武士道をふりまわすのが自慢の旗本であった。小文吾を抱えるときも、まず第一に「お前のたしなみを見たい」というわけで、小文吾は書院前の庭で、先輩の大竹七之助と木刀をもって試合をさせられた。

大竹も力自慢だったらしいが、市井の無頼どもを相手に何度も喧嘩をしてきている素ばしこい小文吾の「むちゃくちゃ流」に、手もなく叩きのめされてしまった。

「見事!!　それだけのたしなみがあれば、わしの家来として充分である」

細井新三郎は膝をうって、小文吾を賞美したものである。

また、細井の説教も有名なもので、月のうち四、五回は、家来から女中にいたるまで書院へ呼びつけ、ながながと、武士のたしなみを説いてきかせるのだ。

ことに、細井が二十二歳のころに一世を風靡した、かの赤穂浪士の仇討ちについては、

「いかに泰平の世とはいえ、武士たるものはあれでなくてはならぬ。そもそも赤穂浪士の仇討ちと申すは……」と、なかなかにうるさい。

池尻小文吾は、うんざりしてしまった。

悪友どもとかたらい、ゆすりの種を見つけたり、博打場の昂奮にひたりつくした生活が、もうたまらなく懐かしくなるばかりであった。

そこへ——あの鎧櫃の中身を見、金百両を見たということになる。

理性よりも先に手が出たのは、小文吾の性格として無理はなかった。

（どうにでもなれ!!）

この一語で、何事も小文吾は割り切ってしまう。

戦争をすることもなくなった武士の力、ことに財力が町人の手に移りかけていた時代なのだ。貧乏旗本の次男坊のすることがない。大身の旗本の家来になるものは多いのだが、わずかな給料で飼い殺しにされるのは目に見えていることだし、小文吾のような男にとっては、生甲斐をおぼえる何物も無い明け暮れであり、それが、ずっと先の先までつづいて行くのだと思うと、居ても立ってもいられなかった。

岡場所の女たちの、むんむんと匂う白粉の香を嗅ぐことも出来なければ、じだらくに寝そべって酒をのむことも出来ない。

細井家では、家来たちの出入りにやかましく、用人の西村太兵衛をはじめ細井家の会計をうけもつ給人の島原権介なども、小文吾と大竹七之助の家来や三人の中間、四人の女中たちに、きびしい監督の目をゆるめないのだ。

このような家柄であるのに、床の間の鎧櫃には妖しげなる〔当然の秘密〕があり、金百両が隠されている。

百両の金は、主人の細井が、役目柄、江戸城中で顔も利くので、出入りの商人か、どこかの知人が、何か御公儀に取入るための斡旋でも細井新三郎にたのみこみ、その礼金（つまり賄賂）か、運動の費用にとどけてきたのを、細井が鎧櫃の中に入れておいたのであろう位のことは、池尻小文吾にも推察がつく。

ともあれ、鎧櫃というものが、こうした役にたっていることは、どこの武家でも同じらしい。威厳と尊崇によろわれたものには、かえって、このような利用価値があるものだ。浄域であるべき寺社の門前に娼家が陣をつらねているのと同じようなものなのであろう。

「暑いな、今日も……」

行人坂の途中に立ち、池尻小文吾は吐息をついた。

坂の左手は明王院という寺で、いかにも目黒あたりの、ひなびた山寺といったようなおもむきが庫裡の藁屋根などにうかがわれる。

右手は茶店が軒を並べて坂の下までつづき、そこから道がひろくなって、目黒川にかかる相唐橋（後の太鼓橋）に通じている。このあたりは、神社仏閣が多く、田園の風景をたのしみがてらの参詣人の往来もあり、目黒の谷にひろがる森や、田畑や、農家にまじり、大名の下屋敷もかなりある。

「こう暑くてはかなわぬ。暑気ばらしに一杯やるか——」

懐中をさぐりつつ、小文吾は、坂を下って、相唐橋のたもとにある〔正月や〕という茶店へ入って行った。

酒もあり、きなこ餅もあるという店だ。

暑さが激しいので、あまり人通りはなく、橋の向うから牛をひいた農夫が一人、汗をぬぐいつつやって来るのが見えた。

「酒をくれ」

軒下の縁台に腰をかけた小文吾に、

「いらっしゃいまし」と出て来た茶店の女を何気なく見て、

「や!!　あなたは、用人殿の御新造――」
おどろいて目をみはった。
女も――いや西村太兵衛の妻のお秀も、これは、小文吾のおどろきとは別の意味で、はっと色を失い、ものも言わずに奥へ駆けこもうとするのを、
「御新造――」
小文吾は、お秀の腕を素早くつかみ、
「一体、これは――ど、どうなされたのだ?」
「お許し下さいまし。どうか許して――」
お秀は、必死にもがいている。茶店の奥から、主人夫婦らしいのが飛び出して来るのへ、小文吾は目顔で、
「何でもない」と言い、お秀を引きよせ、
「わからぬ。わけを話して下さらぬか」
「では、あの――私を捕えに来たのでは……」
「あなたを、私が捕える?　わかりませぬな」
「まあ……」
それから話し合って見て、小文吾もお秀も、細井家を脱け出した偶然の一致に、あらためておどろいた。
「そうなのですか、私が逃げた同じ夜に、池尻さまも……」
「そうなるわけだが――しかし、なぜ、あなたは、用人殿のところから逃げ出されたのか」
お秀は、眉をひそめて口ごもった。

髪を手ぬぐいで包み、藍染(あいぞめ)の単衣(ひとえ)の下の豊満な体を、わずかにくねらせ、うつ向いた女の姿を見て、
(西村用人の女房は、こんなに色っぽい女だったのか……)
はじめて、小文吾は気がついた。
茶店の主人にことわり、小文吾は、お秀を連れて、そこから程近い目黒不動門前の茶店へ行き、話すのをしぶるお秀の口を、ようやく開かせることが出来たのである。

三

お秀が、細井家を逃げた原因は、何と、主人の細井新三郎にあったのだ。
武士の典型をもって任ずる、あのやかましい細井新三郎は、家来西村の妻女であるお秀に、怪(け)しからぬ所行におよぶことがたびたびであったという。
西村用人を何処かへ使いに出しておいて、その留守をねらい、奥庭から、そっと西村の長屋へ忍び入って来ては、
「どうじゃ、うむ?――どうじゃ?」
何がどうじゃなのか知らぬが、いきなり抱きすくめて来たり、帯に手をかけたり、お秀のむっちりとふくらんだ胸もとへ、毛むくじゃらな手を差しこもうとしたりする。
一度は、危うく押し倒されて身動きも出来なくなったこともあるが、そこは水茶屋づとめをしてきたお秀だけに、相手にも恥をかかさぬように何とか逃げぬいて来た。しかし、それも、
「もう許さぬ。わしの言うことを聞かねば、西村太兵衛を――」
お秀の夫を、つまりクビにすると、細井新三郎はおどしはじめた。

たまりかねて、お秀は、すべてを夫に打ちあけ、

「こうなったら、もう、こんなお屋敷にいることはござんすまい。こっちから出て行ってやりましょう。ねえ。ねえ……」

お秀が水茶屋にいたころ、たった一人の肉親である病身の母親が死ぬまで、心をこめて世話をつづけてくれた西村太兵衛だけに、年齢の差はあっても、お秀は夫を憎からず思っていたことは、たしかであった。

「旦那さまが、どこかへ落着くまで、私がはたらき、決して困るようなことにはさせません。だから、一緒に、このお屋敷を出て下さいな」と、お秀は迫った。

ところが西村太兵衛、煮え切らないのだ。

「うーむ……こ、こ、困ったのう」

頭を抱え、青ざめて、なすところを知らない。

言うまでもなく馘首がこわいのである。父の代から細井家の用人をつとめ、それ以外の世界を全く知らぬ西村太兵衛だけに、中年になってから、無一物で妻と共に放り出されることは、考えて見ただけでもぞっとしたらしい。ついに……。

「い、い、一度だけ——な。たのむ。一度だけでも……」

一度だけでも、殿さまの言う通りになってくれと、西村用人は手を合せてお秀を拝んだものである。

ここに至って、お秀は、ついに、夫に愛想をつかしてしまった。

西村から受けた恩をおもえばこそ、堅苦しい武家の家来の妻にもなったのである。子宝にもめぐまれず「子がほしい」と言い暮す西村のために、何とか私も子をうみ、旦那さまによろこんでもらおうとまで思いつめていたお秀だけに、一度だけでも主人に肌をゆるせと夫に言われたのでは、もうたまったものではなかった。

「なるほどなあ……」

話を聞いて、池尻小文吾も、大いに同情し、大いに怒った。

「無理もない。いや、御新造の申されること、実に、無理もない。何だ。あの細井新三郎め、いっぱしの旗本づらをして、赤穂義士討入りの説教を、おれに何度も聞かせおった。武士の魂が聞いてあきれる。それに、西村殿もまた西村殿だ!!」

「で、あなたさまは?」と、今度はお秀が訊いて来た。

「実は、よろいびつの……」

小文吾は、もう細井家に対して「ざまを見ろ」という気持になり、これもすべてをお秀に打ちあけると、

「ま——いい気味」

お秀は唇をゆがめ、おそれげもなく、そう言うのだ。

「しかし、こりゃア、お秀さん……」と、いつの間にか御新造とよんでいたのがお秀さんに変ったのに自分では気もつかず、池尻小文吾は肩をゆすって、

「こりゃア、なんだな。あんたと私が、しめし合せて金百両を頂戴、そのまま手に手をとって逃げ出したと、こう細井のところでは思っていますよ」

「かまいません!!」と、お秀は断固として言う。

小文吾は、興奮の血があざやかにのぼっているお秀の襟あしのあたりに視線を射つけながら、

「よし。今夜は二人で、大いに飲もうじゃないか」と言った。

その夜の二人が、何処でどうなったか——それは語るにも及ぶまい。

間もなく二人は、目黒川沿いにある空納屋を借り、同棲するようになってしまった。

そこは、お秀がつとめる茶店からも近く、相変らず彼女は、茶店へ通って働きつづけた。

「こうなったからには、いっそ江戸を出て、上方へでも二人で行こうか」と、小文吾が言い出すと、お秀は、

「でも、馴れぬ土地での苦労は大変なものだと言いますものねえ。あれから、もう半年もたっているのだし、このぶんでは、私たちのことも、御奉行所の方へは、とどけていないのかも知れない、そう思うんです、私——」

「ふむ……あの、何事も武士の体面にこじつけねばすまぬ細井新三郎だからな。おのれの家の不始末を、このんで世にさらすことはせぬというわけか……」

「あいなあ」

「ふむ。そう思えば、そうも思われるなあ」

「このまま江戸に——ねえ、大丈夫ですよ、小文吾さん」

こうなると、女の方が気持はすわってくるものらしい。考えれば考えるほど、小文吾も（面と向って、細井新三郎や西村用人に見つからぬかぎりは、大丈夫だ）と、気も楽になってきた。

一緒に暮してみると、なるほど、お秀は逸品であった。

西村太兵衛が、用人として細井家からもらう給金のあらいざらいをつぎこみ、それでも足らなくて、先祖から伝わる小さな田畑まで売り払い、お秀の借金やら、めんどうやらを見つづけ、ついに、自分の妻にまでせずにはいられなかった気持も、

（わかるなあ……）

にやにやと小文吾は顎をなでつつ、お秀の愛撫に、おぼれきっていた。

「やっぱり、だめ」と、お秀は言う。

「何が？」

「だめ、前の旦那さまでは——」

「ほう。そりゃ、どういうわけだ」

「あんたとは、肌が違いますもの」

「肌がか」

「あい。四十をこえた西村さんの肌と、あなたの若い肌とは、もうほんとに……」

「ふ、ふ、ふ……」

まず、天下泰平といったところだが、何にしても、お秀の稼ぎだけでは、二人暮しは苦しくなるばかりであった。

小文吾も、お秀からせびったいくばくかの金を元手に博打場を廻り歩いていたが、とったりとられたりで、結局は身につかないのだ。

悪友たちにさそわれ、ゆすりやたかりに一役買えば、何とか小文吾も稼げるのだが、

（まだ、それだけは危ない）

小文吾も、もう少し、細井家の事件のほとぼりを冷ましてからと、我慢した。

（それにしても、この女と一緒に何処まで暮して行けるのか……）

もう、とても実家へは足ぶみも出来ないし、行先を考えると、ため息が出るばかりだった。

そこへ、こんな話が、ころがりこんで来た。

それは、お秀が働く茶店〔正月や〕の主人から持ちこまれたものであった。

〔正月や〕主人の女房の弟は、根津権現門前の料理茶屋の主人で、しかも、門前から宮永町にかけて密集している娼家の元締のようなこともやっている。つまり〔ところ〕の顔役なのだという。

この男の名を、三ノ松の平十という。

平十は、そのほかに香具師の商売の元締でもある。

羽振りもよく、金もあるし、姉夫婦に金を出してやり、目黒で茶店をやらせているのも、平十の才覚なのである。

「ともかく、一度、会ってごらんなさいよ。せっかく、そう言ってくれるんですから――」

お秀にすすめられて、池尻小文吾は三ノ松の平十と会う気になり、上野の山から五町ほどの根津へ出かけてみると、平十の家は、権現社総門をくぐった門前町の右側にある立派な料理茶屋であった。

二階座敷へ通され、小文吾は、平十と面談した。

鶴のようにやせた体つきだが、平十という男の眼は針のように光ってい、長い鼻も長い顎も、何となく奇妙な顔貌をそなえていて、しかも、おかしがたい貫禄があった。

「池尻さんとやらお言いなすったね。まずお聞きなせえ。これからはもう、侍が腰に二本ぶちこみ、いくら肩で風を切って歩こうとも通らねえ世の中になってくる。つまるところは金の世の中だ。お前さんも思いきって、この平十に体をあずけなさるなら、行末きっと、お前さんの身がたつようにはからいますがね」

姉の紹介だけに、平十は親切に言ってくれた。

小文吾もまたその場できっぱりと心をきめ、

「何でもやってみよう」と返事をした。

「そうときまったら、まず一杯――」

平十も、小文吾に好感をもったらしい。すぐに酒肴を運ばせ、盃をあげた。

「まず、わっしの片腕ともなっておくんなさるためには、いろいろなことから覚えてもらわにゃなるまい。はじめは辛いだろうが、それが、わっしのやりくちなのでな」

「よろしい。何でもやってみよう」

「そうかえ、それでよし。それなら早速に、そのお秀さんとやらを連れてこっちへやって来なせえ。いい男が女房を働かせておくことはねえ。わっしからも正月やの主人には話を通しておこう」

こういうわけで、数日後に、小文吾とお秀は目黒を引きはらい、根津へやって来た。

三ノ松の平十は、権現社から程近い七軒町の町家をすでに借りていてくれ、二人はそこに住むことになったが、時を移さず、平十の言いつけで子分たちが世帯道具一式を運びこんで来た。

「なるほど、行きとどいたものだな」

「いったん引受けたなら、どこまでも世話をしてくれるというお人らしいと〔正月や〕でも言っていましたもの」

「何、おれもこうなって、いっそ、さばさばした」

池尻小文吾が、先ず、三ノ松の平十から命ぜられたことは、諸方の盛り場にある香具師の商売を見習うことであった。

「いずれは、お前さんに束ねをしてもらう。そのためにも一応は何から何まで覚えてもらわにゃなるまい」

と、平十は言った。

まさか、盛り場で、種々雑多な品物の呼び売りをさせられるとは思わなかったし、それに盛り

場にいれば、どんなやつに顔を見られるか知れたものではない。
まだ身辺の危険が消えたわけでもないのだし、実家のものや親類たちの顔にぶつからぬともかぎらない。
（困ったな、これは……）
小文吾が、ためらっていると、すぐに平十はそれと察し、じろりと睨み、
「それが厭なら、わっしは手を引かせてもらおうよ」
と、なかなかにきびしく、
「どうだ、二た月か三月のことだ。すぐに香具師というものがどんなものか、それがわかる。その上で、そっちの束ねは、池尻さんにまかせるつもりだ」
「わかりました。やってみよう」
自分の前科については、何もうちあけてはいない小文吾であった。
お秀も、さすがに心配をしたが、案ずるより生むがやすしで、盛り場の床見世をまわるようになっても、小文吾だけは別格の扱いをうけた。
いずれは三ノ松という親分の片腕ともなる男というので、香具師仲間からも重んじられたし、盛り場に起りがちな喧嘩さわぎにも水際だった腕前を見せたので、小文吾の人気は高まるばかりだった。
香具師が売る品物は、主に膏薬の類であって、これがまたよく売れるのだ。
そのころの外科治療は、もっぱら膏薬にたよるほかなかったので、需要も多い。
「ええ、手前見世の練り薬の効能は、これより御披露つかまつりますが……」
などという呼び売りは、小文吾が直接にするわけでもなく、つまり香具師たちの実態と、盛り

場の営業権や縄張りについての知識をおぼえればよいというのが、三ノ松の平十の言いつけであった。
その年が暮れるころには、池尻小文吾も一通りのことはおぼえた。
三ノ松の平十の上に、もっと大きな香具師の親分が君臨していることも知った。
小文吾は、もうすっかり町人の姿になり、名も弥助と替えていた。

四

一年たった。
その日は、つい先頃までの炎熱が夢のように思われるほど、空が高く深く見え、さわやかな秋の風が、江戸の街を流れていた。
池尻小文吾は、替り縞の着物に、いま流行の「だまされ髷（まげ）」という格好で、内藤新宿の盛り場へやって来ていた。
内藤新宿は、元禄の頃、土地のものが公儀に願い出て、宿駅の公認を得たところだが、享保のはじめとなり、わけあってこれを廃した。
しかし、甲州街道をひかえての盛り場は、近頃になって、またも息を吹き返し、一時は追い払われた娼家も、ぽつぽつと店をひらきはじめてきている。
玉川上水に沿った天竜寺の門前町から新宿上町にある子育て稲荷の境内にやって来た小文吾は、よく根津の三ノ松へやって来る由五郎という男が膏薬の呼び売りをしているのを見かけ、声をかけた。
「どうだ、売れるか」

「へえ。まあ、どうにか——どうも、お見廻り、御苦労さまで」
「うむ」
「親分は、お変りございませんか」
「元気だよ」
「それはそれは——こうして、弥助さんが、親分のかわりに見廻るので、親分も大よろこびだそうで——」
「どうだかな」
弥助の小文吾は、もう平気で、四谷仲殿町の細井屋敷からの道のりも近い内藤新宿へもたびたびやって来る。
昔の仲間へ鼻薬をきかせて、そっと探ってもらったところによると、どうも奉行所へは自分の犯行を届出ていないらしいとわかり、小文吾も此頃では、（もう大丈夫——）という気になっている。
お秀にも飽きがこないし、三ノ松の平十は、
「わしには女房や何人もの子がいるが、お前さんのような役に立ってくれるものは一人もいねえ。何なら、お秀と二人で夫婦養子になってもらい、わっしの後を継がせてえと思っているのだ」
こんなことを言い出してもいたのだ。
「それじゃア、由五郎。精出して稼げよ」
「へえ。ありがとうございます」
夕暮れも近くなったので、小文吾は新宿の通りを大木戸へぬけ、塩町へさしかかった。
このあたりから、次第に細井屋敷へ近づくことになるので、さすがに気持がわるく、小文吾はいつも、竜昌寺横町を左へ切れこむことにしていた。
（あれから一年半……早いものだな）
ふと、そう思いながら、小文吾が横町へ一歩足を踏み入れたときであった。
「う!!」
小文吾は、後頭部に焼けつくような、しかも激しい衝撃をうけ、百人組屋敷の土塀へぶつかり転倒した。
「だ、誰だ!!」
血まみれになって振り向く小文吾へ、
「ええい!!」
見たこともない屈強な侍が踏みこんで来て、刀をふるった。
「うわ……」
必死に逃れようとする小文吾に、
「つ、妻の敵——」
その侍のうしろから、細井家用人の西村太兵衛が、土気色となって顔の眼球を白くむき出し、刀を突き出してきた。
（し、失敗った……）
よろよろと逃げまわりつつ、小文吾の灰色にかすんでくる意識の中に、お秀や、実家の父や母や、兄などの顔が、ちらちらと浮かんでは消えた。
何といっても最初に頭へうけた一撃が、致命的で、小文吾の体は思うように動いてくれなかった。

「う、う、う……」

やっと竜昌寺門前まで逃げて来たが、池尻小文吾は、もうがっくり倒れ伏し、西村太兵衛が、むちゃくちゃに振りまわす刀の下で、絶命した。

人だかりが、遠まきにしているのを、かすかに感じつつ、西村太兵衛は、荒い呼吸を吐き、ぼんやりと、小文吾の死体を見つめた。

「西村殿。これでよい、殿様もおよろこびなさるでしょうな」

最初に小文吾の頭を斬った侍が近寄って声をかけた。

この男は、小文吾が出た後で細井新三郎に抱えられた笠原重次郎というものだ。笠原はかなり剣術もつかう。つい先頃まで、笠原は西村用人と共に、小文吾とお秀を探し、木曾から美濃のあたりをまわり、つい半月ほど前に江戸へ戻って来たばかりであった。

「姦夫姦婦の首を、どうしても討つのだ!!　そもそも赤穂浪士は……」

主人の細井新三郎は、やっきとなり、西村用人を督励した。

細井は小文吾の犯罪よりも、むしろお秀を憎んでいたのである。

(お秀だけは、わしの手にかけられるものではない……)

助太刀の笠原と共に旅をしながらも、西村太兵衛は悩みぬいていた。お秀が前非を悔いているなら許してやって、一緒に、どこかの片田舎へでも行き、何とか食べて行こうなどとも考えてみたりしたものだ。

だが、その日、主人の使いで笠原と同道し、千駄ヶ谷まで出かけたその帰り道に、四谷大木戸で、前を歩いて行く池尻小文吾を見たときには、

(おのれ!!　ぬけぬけと江戸に……)

まさか江戸に二人がいようとは、細井も西村も思って見なかったことだ。

「近いうちに、今度は東海道を探して見よ」

細井新三郎からも、そう命令されていたところだったのである。

さすがに、小文吾を見かけた西村太兵衛は、こみあげて来る怒りを押えかねた。

「あ、あいつだ」

笠原重次郎に、そっと囁くと、重次郎は「よし!!」とうなずき「人を斬るのは、これで三度目ですよ」と、言い放った。

笠原が居なければ、とうてい小文吾を討つことは出来なかったろうと、西村太兵衛は思いながら、血だらけの小文吾を見下していると、

「西村殿。斬ってしまったが、最後まで後をつけ、女の居どころをたしかめるのでしたな」

笠原重次郎が、そう言った。

夕陽をあびて、西村用人は、いつまでも動かなかった。笠原がもぎとってくれるまで、西村太兵衛の硬直しきった両手は刀から離れなかった。

この事件があって、すべてが奉行所にも知れ、お秀は捕えられ、しかるべく処刑をされた。

「馬鹿め!!　なぜ、小文吾めの後をつけて行き、姦婦の居どころをつきとめなかったのだ。奉行所の手をわずらわすまでもないではないか」

細井新三郎は苦虫を噛みつぶしたような顔になり、西村用人を怒鳴りつけたものだ。細井は、何よりも、お秀が奉行所の白洲で、自分の醜行をしゃべりはしないかと、おそれていたのである。

お秀はすべてを告白し、細井新三郎は役目を免ぜられた。

西村太兵衛は馘首され、何処かへ旅立って行った。

興奮

一

事件は一瞬の間におこった。

そのとき……。

北条造酒之助と川野九十郎は、御殿内の〔ひかえの間〕で、昼の弁当をつかっていたのだ。

造酒之助は十六歳、九十郎は十八歳。

ともに、主人・山名主殿頭矩豊の小姓をつとめている。

〔ひかえの間〕には、二人きりであった。

食事をすませた九十郎が、白くふっくりとした手に銀製の耳かきを持ち、これで耳のあかをとっていた。

〔殿さま〕の山名矩豊は、よく、九十郎にひざまくらをさせ、この銀の耳かきで耳そうじをさせる。

その間……四十をこえた殿さまの両腕は、九十郎のやわらかい腰を巻きしめたり、ゆびをのばして、ぽってりと紅い美少年のくちびるへふれたり、愛撫にやすむことを知らぬ。

つまり、川野九十郎は殿さまの寵愛ただならぬ小姓なのである。

その、主人用の耳かきで自分が耳そうじをしている九十郎には、だれの眼から見ても驕慢の色が濃い。

北条造酒之助が、箸の手をとめ、ちらと九十郎を見やり、不快の表情をうかべたが、何もいわず、また食事にかかった。

川野九十郎が、それと知って、露骨に軽侮の笑いをうかべた。

(おなじ小姓づとめをしていても、お前とわしとは、まるでちがう。わしは殿さまの愛情をうけているのだ)

という得意満面の心境が、九十郎のうす笑いにはっきりと読みとれる。

造酒之助が食事を終え、茶わんに白湯をそそいでから、塗物の弁当箱を片づけはじめた。

そのとき……。

彼の視線が逸れたすきをねらい、九十郎が左掌にためておいた耳あかを、造酒之助の茶わんの中へ落しこんだものである。

主人の愛を背景にした十八歳の若者の、これは傲慢ないたずらといってよい。

すばやくやったつもりなのだが、造酒之助がふっと振り向き、このさまを見てしまった。

「九十郎どの。いま、なにをなされた?」

向き直った造酒之助が顔面蒼白となり、

「私がのむ湯へ、なにを落しこまれた?」

「ふ、ふふ……」

「なにが、おかしいのです!!」

色白で豊満な九十郎とはちがい、色あさぐろい痩身ながら、造酒之助もかなりの美少年といってよろしい。

「おかしいか、九十郎どのはおかしいのか?」

もう一度、問いつめたとき造酒之助の五体が微かにふるえはじめている。
「ふ、ふふ……」
うす笑いをのこし、川野九十郎が片ひざをたてて室外へ去ろうという姿勢をとりかけた転瞬、腰の小刀をぬきざま北条造酒之助が異様な叫びを発し、猛然と躍りかかった。
組みつかれて仰向けに倒れた九十郎は、低く、にぶい、それでいて部屋の中の空気がゆれうごくかのようなうめき声をあげたかと思うと、そのまま、ぐったりとなった。
おびただしい血が、九十郎の胸から腹にかけて流れ出しはじめた。
障子の外の中庭に、春昼の陽ざしがあくまでも明るい。
造酒之助は死体からはなれ、灰色の面上を烈しく痙攣させつつ、わななく手で小刀を鞘におさめ、宙に浮いているような足どりで戸口へ行き、板扉をあけて廊下の左右を見た。
小姓の〔ひかえ所〕は、表御殿からも奥御殿からもはなれた中庭の能舞台傍にあったし、殺害は一瞬の間におこなわれた上に、被害者の悲鳴も大きなものではなかったから、広大な屋敷内にいた多勢の人びとも、まったく、これに気づかなかったらしい。
造酒之助は廊下へ出た。
大広間傍から小廊下へ切れこみ、しばらく行くと、右手に小さな部屋があって、人声がきこえた。
「もし……」
部屋の外で、造酒之助が声をかけた。
「なんじゃ？」
「御部屋内には、どなたさま……？」

「池田七郎左衛門に浅田十兵衛じゃ。その声は、造酒之助だな」
「はい」
「入れ」
「は……」
部屋へすべりこんで来た死人のような少年を見て、池田と浅田が瞠目をした。
造酒之助が手みじかに、犯行を告白した。
池田と浅田が、この山名家の横目（家来たちの行動を監視する役目）をつとめていたので、造酒之助は、いさぎよく名乗り出たのだ。
「ふうむ……」
「殺ったか……」
と、二人は眼と眼を合せ、すぐにうなずき合った。
「造酒之助、逃げい」
と、池田七郎左衛門がいった。
「かまわぬ。九十郎を討ったのは、御家のためじゃ」
浅田十兵衛（一説に十郎兵衛ともいう）も得体の知れぬ興奮に駆りたてられていた。
去年の夏。
浅田は、邸内の台所蔵の裏手で、通りかかった川野九十郎をとらえ、たまりかねてひげ面をこすりつけようとしたことがある。
そのとき九十郎は浅田を突き放し、
「殿へ申しあげまするぞ!!」

怒鳴りつけ、ひるむ浅田の面前へつばを吐き捨てて去った。
そのときのくやしさを、いまもって三十五歳の浅田は忘れきれぬ。
池田は二十八歳だが、これも九十郎の美しさにひかれて、しかも到底のぞみを達せられぬあきらめのくやしさがいつも内攻している。
男色がさかんであった当時として、これは別に、あやしむにたらぬことだ。
傲慢な九十郎への愛慕から転じた二人の憎しみが、造酒之助への同情に転化してしまったわけである。
「逃げい。後は、どうにでもする」
「うむ、うむ。あとはわれわれで……」
「は……な、なれど……？」
「かまわぬ。早く、早く……」
二人はいくばくかの金と、しかるべき指示をあたえ、北条造酒之助を北門の手前の塀を乗りこえさせ、逃がしてやった。
ときに、寛文十一年三月というから、現代より約三百年ほど前のことである。
ところは呉服橋内にある山名矩豊の江戸屋敷であった。

二

日本に、いわゆる戦国時代を現出せしめた素因ともいわれる〔応仁の大乱〕は、ときの足利将軍をめぐっての、守護大名たちの勢力あらそいが激化したものだ。
京都を中心にしたこの戦乱は東西両軍にわかれてつづけられたが、その西軍の総帥だった山名

持豊（宗全）から八代目が、山名矩豊ということになる。
天下の覇権が、信長から秀吉へうつるころから、山名家は徳川家康によしみを通じ、おとろえかけていた家格をかろうじて保つことを得た。
そして、かの関ヶ原戦争の後に、先祖代々の領地であった但馬の国（兵庫県の一部）の内、七味郡で六千七百石（七千石ともいわれる）を領し、徳川幕府につかえた。
いまの殿さまの山名矩豊は〔寄合〕とよばれる閑職だが、のちには高家衆をつとめたりした。
幕臣と一口にいっても七千石の大身ともなれば、すべてが大名なみで、山名矩豊は領地治政の中心を但馬の村岡へおき、ここへ陣屋をかまえ、屋敷をいとなみ、何年おきかには故郷へも帰る。
刃傷沙汰をおこした二人の小姓の主人は、まず、こうした〔殿さま〕であったわけだ。
山名矩豊は、事件を耳にするや、
「おのれ……けしからぬ造酒之助めが」
激怒ただならぬものがあった。
自分の男色の好みをおもうまま、たのしく発揮することができた愛寵の川野九十郎は、もう、この世にはいない。
「造酒之助をさがし出し、一時も早く、斬りすてい!!」
と、そう命じられた家来たちも、川野九十郎のことだけに、
「いいざまじゃ」
「殿の御威光をかさにきて、あれほど野放図に慢心しきっていた九十郎だ。きゃつめ、死んでくれたほうが御家のためということよ」
などと、ささやき合い、北条造酒之助探索のことには、あまり気がのらぬ。

「まだ見つかりませぬ」
「いずこへ姿をかくしましたことやら……」
山名矩豊へはうまく言上しておき、適当に探索のまねごとをしているにすぎない。
そして……。
北条造酒之助は、すでに江戸から姿を消していた。
亡父・主馬の親友だった近藤源太兵衛をたより、下総の佐倉へ逃げたのである。
源太兵衛は、佐倉の城主・松平和泉守の家来で、以前、江戸藩邸勤務だったころ、造酒之助の父と知り合ったらしい。
以来、主人は異なっていても両家の交際はふかまるばかりで、北条主馬が四十一歳で病死したときは、わざわざ下総から江戸へ出て来てくれ、十三歳だった造酒之助を、
「これでそこもとは、両親ともにうしなってしもうた。兄弟もなきひとり子ゆえ、いろいろと苦労もござろう。おもいあまることあらば遠慮なく、それがしをたよられたい」
と、なぐさめてくれたものである。
それから三年後のいま、同僚を斬殺して脱走した造酒之助が、おもいあぐねて、佐倉の近藤源太兵衛をたよったわけだ。
「さようか、よろしい」
造酒之助からすべてをきき終え、源太兵衛はすぐさま、
「親友の子たるおぬしがことは、それがしがきっとひきうけ申した」
たのもしく、かくまってくれることになった。
北条造酒之助の縁類の者も、但馬・村岡の国もとにいるにはいるが、とてもたよりにはならな

い。
〔おたずね者〕の造酒之助が、殿さまの国へもどるわけにもゆかぬ。
殺された川野九十郎には、これも村岡に老父がいるけれども、なにしろ六十に近い老齢だし、父が子の敵を討つことは禁止されてい、きょうだいも女ばかりで、九十郎は末の子であった。
こうして、一年の月日がまたたく間に経過したのである。
この間に……。造酒之助は、一時ではあるが江戸へ出て来ていた。
近藤源太兵衛が、江戸に住む兄の宇右衛門へ、
「このままでは造酒之助の長い将来がおもいやられます。どこぞへ奉公の口はござらぬか？」
たのみこんだ。
近藤宇右衛門は、家を弟へゆずりわたして、気らくな浪人の身となり、好きな学問をたのしみながら、のんびり暮しているだけに、諸方の知名人とも交際が多いのである。
江戸へ潜入して来た造酒之助を、宇右衛門は本郷の浪宅へ親切にかくまい、
「弟・源太兵衛が、むかし世話になった北条主馬殿の御子息とあれば、どのようにもおたすけ申そう」
ちから強く、はげましてくれた。
近藤兄弟の親身なこころづかいに、逆境にある北条造酒之助の若い胸が、どのような感動でみたされたことか、いうまでもなかろう。
間もなく……。
近藤宇右衛門は、上野・寛永寺を通じ、上州・安中の城主・堀田備中守へはたらきかけてくれたが、

「よろこびなさい。そこもとの奉公口がきまりましたぞ」
温顔をほころばせ、
「そこもとのことは内々に、先方へくわしくつたえてあるなれど……うむ、一応は姓名を変えて奉公なされ」
と、告げた。
造酒之助は〔近藤一学〕と変え、近藤兄弟の甥という名目で、江戸を去り、安中へ行き、今度も小姓として堀田家へつかえることになった。
ちょうど、そのころであるが……。
山名家の横目・池田七郎左衛門と浅田十兵衛が、同僚四名と酒宴をひらいたとき、
「それにしても、北条造酒之助は何処へ逃げたのであろうかな？」
「村岡へも立ちまわった様子がないそうな……」
同僚たちが、うわさをしはじめると、池田と浅田が意味ありげに顔を見合せ、にやりと笑い合ったので、
「おい、浅田。知っているのか、造酒之助の行方を……？」
「池田、何か知っておるなら、きかせてくれい」
執拗に同僚がせがむ。
浅田と池田も、したたかに酔っていたし、この席にいるだれもが九十郎を憎み、造酒之助へ同情を抱いているとおもいこんでいたので、
「もう、よかろう。そっと洩らしても、な……」
「うむ。ただし、他言は無用だぞ」

同僚たちは色めきたった。
「で、造酒之助は、いま何処に？」
「それは知らぬ。なれどあのとき、造酒めを逃がしてやったのは、わしと池田の二人じゃ。あの日な、二人して控え部屋にいると、突然、造酒之助があらわれて……」
と、浅田十兵衛と池田七郎左衛門が、あの事件があった日のことをぺらぺらとしゃべってしまったものだ。
翌朝、酒の酔いがさめてから、
(ああ……つまらぬことをしゃべってしもうた)
二人とも後悔したが、すでにおそい。
いかに〔他言無用〕と念を押したところで、それが通るものではない。三日もすると、
「あのとき、造酒之助を逃がしたのは、あの二人だ」
というささやきが山名屋敷内へ、ぱっとひろまってしまった。
こうなると、忠義顔で〔殿さま〕の耳へ入れようというものも必然あらわれてくるのがなりゆきであるから、
「おのれ、けしからぬ!!」
殿さま、忘れかけていた怒りをおもい出し、
「池田と浅田をよべ!!」
と、命じた。
(しまった……)
二人は真青になり、蹌踉(そうろう)として山名矩豊の前へあらわれ、平伏をした。

「腹を切れ!!」
いきなり怒鳴りつけられ、二人はもう、どうしようもなく、いっさいを白状におよんだ。
「よし。では造酒之助をさがし出して、みごと討ちとってまいれ。さすればそのほうたちをゆるしてつかわす」
「ははっ……」
こうなってはしかたもない。
浅田も池田も、屋敷内の長屋には妻もいるし、子もいるのだ。
「承知つかまつる」
というので、二人は、その日のうちに山名屋敷を出た。
自分たちが逃がしてやった北条造酒之助を、今度は二人がかりで〔上意討ち〕にしなくては、屋敷へ戻れぬことになったのである。
「おのれ……造酒之助のために、とんでもないことになってしもうた」
「まったくじゃ。きゃつめがおらなんだら我々ふたり、このようなばかばかしい目に会わずにすんだものを……」
池田と浅田は、こうなると自分たちがしてのけたことを忘れてしまい、ひたすら造酒之助をうらみはじめ、そのうらみが〔憎悪〕に変ってゆくのを、どうしようもなかった。

三

その日。
朝から五月雨（さみだれ）がけむっている。

すなわち事件の二年後、延宝元年五月十六日の午後もおそくなってからだが……。
近藤宇右衛門は、駒込に住む幕臣・大河内某から夕飯に招かれてい、
「いささか頭痛がする。なれど、せっかくのおまねきゆえ、いまになってことわるのもどうかな」
おもいきって、本郷元町の浪宅を出た。
駕籠をやとい、これに乗った宇右衛門へ、下男の与平治がつきそった。
ときに宇右衛門は四十二歳。細面の、いかにも温和な風貌だし、学識も趣味もひろく深いので、相変らず知名人との交際がなかなかにいそがしい。
宇右衛門を乗せた駕籠は、元町の通りを北へすすみ、小笠原佐渡守・中屋敷の向い側を東へまがり、本郷四丁目と三丁目の境へ出た。
「待たれい!!」
出たとたんに、曲り角へ立っていた二人の侍が駕籠の棒鼻へ立ちふさがった。
二人とも編笠をかぶり、雨合羽を羽織っている。
「どなたでございます？」
下男の与平治が問うや、
「別に、あやしい者ではない」
と、二人が編笠をとり、
「近藤宇右衛門殿でござるな？」
「いかにも……」
と、これは宇右衛門が駕籠から顔をのぞかせてこたえた。

二人の侍は、池田七郎左衛門と浅田十兵衛であった。
この二人は、去年以来、北条造酒之助をさがしつづけてきた。
一応は、但馬の国もとへも出向いて調べて見たが、造酒之助の立ちまわった様子はない。そこで二人は、かねてから造酒之助が、
「亡き父にかわりともなって、いろいろと相談にのって下さいます」
と洩らしていた下総・佐倉の近藤源太兵衛のことをおもい出した。
そこで、ひそかに佐倉の城下へ潜入し、様子をさぐって見ると、どうも造酒之助らしい美少年が近藤家にいたらしい。だが、いまはいない。
近藤家の小者や下女の口から、
「造酒之助さんは江戸へ行かれたらしい」
ことを二人はきき出した。むろん、直接にではなく、間に人を介してのことである。
二人とも横目の役をつとめていただけに、こうした探索には相当に通じている。
江戸には、源太兵衛の実兄・近藤宇右衛門がいることを、佐倉の城下で知らぬものはない。
「そこだ!!」
すぐさま、二人は江戸へ向った。
これが去年の暮れであった。
今年に入ってから、二人は本郷の近藤宇右衛門宅を見張りつづけてきたが、どうも造酒之助が隠れている様子はない。
それでも尚、辛抱強く、宇右衛門の身辺をあらい、外出時には後をつけたりしたが、わからぬ。
「この上は、直接に当って見るより仕方がない」

「よし!!」
決意した二人が、この日に、宇右衛門宅へ乗りこむつもりで本郷元町へ来かかると、ちょうど、宇右衛門が駕籠に乗って出て来るところだ。そこで二人は先へまわり、宇右衛門を待ちかまえていたのである。
「近藤うじは、北条造酒之助と申す者を御存知であろうな?」
いきなり、浅田十兵衛がいった。
「いいや……」
近藤宇右衛門は事もなげにかぶりをふって見せ、反問した。
「そこもとは?」
浅田も池田も、こたえない。
宇右衛門は軽く会釈をし、
「駕籠を……」
と、命じた。
駕籠かきがすすみ出そうとするのへ、
「待て、待て!!」
池田七郎左衛門が血相を変え、
「近藤うじ、ぜひとも、造酒之助の行方をうかがいたい。何事も御承知の筈ではないか!!」
「いや、存ぜぬ」
おだやかな宇右衛門ではあるが、こうなれば一歩も退かなかった。二人の侍が山名家の士らしいことを早くも看破していたし、弟・源太兵衛と共に、どこまでも造酒之助のちからになってや

るつもりでいる近藤宇右衛門なのである。
「姓名も名のらず、無礼でござろう」
二人が駕籠前から退かぬのを見て、宇右衛門がたしなめた。
両側は火除地になってい、人通りもなかった。
雨が強まり、夕闇の濃さが倍加されている。「な、なにが無礼だ!!」
池田七郎左衛門は、まる一年にわたる探索行に倦みつかれてもいたし、生来短気な男であったから、
「おのれ、武士に向って無礼とは……」
いきなり腕をのばし、駕籠から宇右衛門を引きずり出そうとした。
「な、なにをなさいます」
夢中でしがみついてきた与平治を、池田はしたたかになぐりつけた。
駕籠かきが駕籠を置き捨て、何かわめき声を発しつつ、本郷の通りへ駈け去って行ったのは、救いをもとめるつもりであったと、後に彼らは語っている。
「名のれ。どこのたれじゃ？」
「だまれ。造酒之助の行方を申せ」
「知らぬ」
「くそ!!」
ついに、宇右衛門は雨しぶきのあがっている泥濘（でいねい）の道へ引きずりおろされた。
「わあっ……」
叫んだ与平治が、これも走り出した。あきらかに救いをもとめるためと見て、今度は浅田十兵

衛も逆上してしまい、
「いえ、いえ!!」
池田と共に宇右衛門のえりもとをつかみ、泥の道へ横倒しにして暴力的に責めつける。
宇右衛門もさすがにたまりかねたらしい。
必死に二人の腕をはらい、我が身を守るために腰の小刀をぬき、しかも声は冷静そのもので、
「ここは町中じゃ。用あらばあらためてまいれ。去れ、去れ」
と、いった。
そのことばを、二人はしかときいてはいない。ただ、もう宇右衛門がぬいた刀の光に激昂してしまい、
「こやつめが!!」
浅田がとめる間もなく、池田七郎左衛門が抜き打ちに宇右衛門へ斬りつけた。
近藤宇右衛門の悲痛な叫びがあがった。
よろめいて、ひざをついた宇右衛門の頭から肩にかけ、池田は狂人のように何度も刃を打ちおろした。すさまじい血しぶきである。
「いかん。おい、七郎左、逃げろ。逃げるのだ」
浅田十兵衛は三十七歳で、池田より七歳の年上だけに、
「まずい、いかん……」
とっさに判断し、池田の腕をつかんで雨の中を走り出した。
与平治や駕籠かきの救いをもとめる声に、人びとが現場へ駈けつけて来たのは、間もなくのことだが、近藤宇右衛門は息絶えていた。

実に無惨をきわめた死様で、下男の与平治が失神してしまったほどだという。

この惨劇、文章にすると長い時間のように感じられるが、ほんの三、四分間の出来事といってよい。

浅田と池田の二人は、編笠を投げ捨てたまま、逃げた。よほどあわてていたのだろうが、この編笠の緒に、それぞれ二人の名前が記されてあったのだ。

名前だけのことだが、兄の急死をきいて佐倉から江戸へ駈けつけて来た近藤源太兵衛に、

「この編笠をかぶっておりました」

と、与平治が差し出したのを見て、源太兵衛は、

「この池田と浅田は、山名家の士(もの)だ」

すぐに、こういった。

自分を逃がしてくれた二人の名を、造酒之助が源太兵衛に告げていたからである。

いっぽう、浅田と池田は呉服橋内の山名屋敷へ逃げこみ、保護をねがい出た。

近藤宇右衛門と共に、北条造酒之助も斬って捨てた、と、嘘をついたのである。

こうなれば山名家でも捨ててはおけない。

重役たちは、二人の所業の拙劣さに困惑しつつ、山名矩豊には内密で、池田と浅田を屋敷内へかくまった。

山名家・重役たちの不安は現実のものとなった。

すでにのべたように、殺された近藤宇右衛門は知名人との交際がひろい。

その一つ、上野の寛永寺は徳川将軍家の菩提所であるし、時の老中・久世大和守の「お話相手」をつとめることもあった宇右衛門だから、本郷の浪宅へは諸家からの弔問が後を絶たぬ。

「これは、うっかりとしてはいられぬ」

「もしも、池田と浅田両人を外へ出し、近藤宇右衛門の遺族たちにでも見つけられたら、当家にも傷がつこうし……」

重役たちは、苦悩した。

この事件の原因というものが、そもそも下らぬことなのだ。山名矩豊という「殿さま」が家来たちはおろか、年少の小姓たちさえ満足に統制でき得なかったことが、こうしたみにくい事態をひきおこしたのである。

もしも、このようなことが幕府の耳へ入ったとしたら、山名家がどのような罰をうけるか知れたものではない。それでなくとも、老中・久世大和守は、使者をつかわし、近藤源太兵衛から種種事情を聴取したというではないか……。

重役たちは、かくしきれなくなって山名矩豊へすべてをうちあけ、

「池田、浅田の両名を国もとへ隠しおきましては……」

と、言上をした。

殿さま、大いにおどろきもし、怒りもしたが、重役たちに説得をされ、「近藤なにがしまで殺(あや)めてしもうたのはけしからぬが、憎い造酒之助を討ちとったのであるから……」と、しかたなく二人を国もとの但馬・村岡へ送ることをゆるした。

池田と浅田は五名の士にまもられ、夜陰に江戸を発して村岡へ向った。

この後……

町奉行所を通じ、それとなく池田と浅田について問い合せが来ると、山名家では、

「もとは両名とも、たしかに当家へつかえおりましたなれど、一昨年、わけあって暇をとらせ、

その後は行方知れずでござる」
何くわぬ態で応答をした。
こうなると、奉行所も後の手段がない。
そこで……。
「かくなったからには、わしひとりで兄・宇右衛門の敵を討つのみじゃ」
と、近藤源太兵衛がいった。
彼は、下総・佐倉へもどり、主人の松平和泉守へ〔仇討ち〕の許可をもらい、浪人の身となった。
宇右衛門の死は、上州・安中へもどき、北条造酒之助の〔近藤一学〕は、すぐさま、
「親がわりの近藤宇右衛門様が、私のために殺害されたとあっては、このまま御当家に御奉公もかないませぬ。ぜひにも宇右衛門様の敵を討たねば士の義理がたちませぬ」
と、藩庁へ申し出て、暇をもらった。
安中の堀田家では、造酒之助の旅立ちをはげまし、応分の金子を餞別としてあたえたそうな。
造酒之助が佐倉へ到着すると、
「うれしゅうおもうぞ」
近藤源太兵衛は感動し、
「亡き兄も、これでこそ、死ねたのであろう」
と、いった。
宇右衛門・源太兵衛の近藤兄弟の人柄の立派さは、これまでの推移を見ても判然たるものがある。

近藤兄弟から恩義をうけている人びとが、合せて二十余人も駈けつけて来、
「ともに、宇右衛門様の敵を……」
といい、いくら源太兵衛がことわってもきかぬ。
もしも、池田と浅田が山名家にかくまわれているとすれば、
「いざとなれば、山名屋敷へも討ち入らねばならぬ」
のであるから、源太兵衛にしても造酒之助にとっても、二十余名の助勢は大いにこころ強い。
結局、
「では、おたのみ申す」
ということになった。
助勢の主な人名は、次のごとくである。

丹羽重兵衛（五十一歳。近藤兄弟の叔父）
高橋喜兵衛（四十歳。近藤兄弟の従弟）
小山田清左衛門（二十六歳。近藤宇右衛門の学問上の弟子）
山本五郎兵衛（三十八歳。宇右衛門の亡妻の兄）
山田又市（二十歳。近藤兄弟の甥）

この五名に、それぞれの家来や小者がついて来たので、合せて二十二名。
それに、宇右衛門の下男・与平治が加わった。
ときに近藤源太兵衛は三十六歳。

北条造酒之助は十八歳であった。

山名家では、まだ造酒之助の生存を知ってはいない。

四

但馬の国・七美郡（現美方郡）村岡は、江戸から約百六十里のところにある。

吉田東伍博士は〔大日本地名辞書〕に、

「……七美郡は村岡殿山名氏の邑なり、四面山をもって囲まれ、通行はなはだ難し、村岡は八鹿を去ること七里にして山中の大邑なり。天正年中、豊臣秀吉、山名豊国を此地に封じ、江戸幕府はこれを交代寄合衆に班せしめ、待遇は大名に準じたりといえども、小邑主たるをまぬがれざりき」

と、記されている。

当時の〔道中記〕にも、村岡の地名は記されていないほどだ。

浅田十兵衛と池田七郎左衛門は、村岡へ到着するや、陣屋の南にある小さな屋敷をもらい、となり合せに住むことになった。

村岡は、山名矩豊の本拠である。

大名ではないから城こそかまえていないが、約七千石の大身だから、村岡に住む家来たちも足軽などを合せて百名をこえている。

江戸時代も、後年になると諸般の経費がかさみ、どこの家でも家来の数は減ってしまったが、延宝のこの時代は、戦乱の世がおさまり、徳川政権のもとに日本統一が成ってから六十余年ほどを経過しているにすぎず、万事に不便ながら、また万事にあわただしくない人間の生活が存在していたのである。

池田と浅田の屋敷は、山名家の士によって厳重に警備され、

「二人とも外出をしてはならぬ」

きびしく、いいわたされた。これは我が身の危険をふせいでくれるのだから二人とも結構なのだが、

「おい、七郎左」

と、浅田十兵衛が、

「北条造酒之助を、われわれはだな、近藤宇右衛門と一緒に斬って捨てたことになっている」

「その通り」

「だがな、実は造酒めを討ちとってはいないのだ」

「いかにも」

「おぬし、落ちついていてよいのか？」

「あわてても、もはや、どうにもならぬではないか、十兵衛殿。われらが造酒めを討ったと嘘を申しあげたからこそ、殿は、こうして、われらをかくもうて下されている」

「いかにも……」

と、今度は、浅田十兵衛がうなずく。

「だが、この嘘が発覚したなら……」

「殿は、お怒りになる」

「と……われらはどうなるかな？」

「これじゃろうよ」

と、浅田が腹を切る手つきをして見せた。池田はくびをすくめ、
「このままで、よいのかな……」
「では……殿に、ありのままを申しあげようというのか？」
「ば、ばかな……」
「江戸からのうわさによると、宇右衛門の弟の、ほれ近藤源太兵衛な、きゃつめ、下総の佐倉を発って、どこかへ向ったという……」
「どこか、と申すのは、おそらく、この村岡へでござろう」
「われらの首を討ちに……」
「その通り」
「よせ!!　おぬしのその通りをきくと、ぞっとなるわい」
「しかしそれは、まず大丈夫。ここは村岡だ。山名の士がわれらをしっかりと守っていてくれる」
「近藤源太兵衛ひとりかな……？」
「村岡へ乗りこんで来るとすれば、助勢なくしてはむりだ」
「他人事のように申すな」
「いや、十兵衛殿。拙者だとてこわい。おそろしい。夜中、ねずみが走る物音にもはっと目ざめてしまうし、ことに……」
「ことに？」
「便所が、こわい」
「おぬしもか、わしもじゃ」

「どうもいかぬ。便所で、しゃがみこんで用をたしているとき、もしも斬りこまれたら、とっさに、こちらは敵をふせげぬ」
「それよ、そのことよ」
「拙者も、武術にはかなりの自信もあった、つもりなのだが……敵もちの身になると、こうも不安なものか、我ながらなさけなくなる」
「こうして、味方に守られていてもなあ……」
「いや。来るとなったら来る。どのような手段をもってしても、しのびこんで来る……」
「よせ、もう……」
顔と顔を見合せ、ついには二人ともげっそりとなって陰鬱にだまりこんでしまうのが例であった。
敵もちの恐怖と共に、主人への嘘が発覚せぬか……という不安にさいなまれ、村岡へ来て一年ほどの間に、
「二人とも、すっかりやつれてしもうたぞよ」
「七郎左などは、とても三十の年齢には見えぬ。白髪がひどいぞ」
などと、二人の屋敷を警備している山名の人たちがうわさし合った。
延宝三年になった。
近藤宇右衛門が殺害されてから足かけ三年目である。
そのころになると、村岡の状況も、いくらか変ってきた。
近藤源太兵衛の消息は絶え消えたままであるし、浅田十兵衛も池田七郎左衛門も、いくらか元気を取りもどし、

（ここにいるかぎりは、まず安心）

という気もちにもなってきた。

江戸の山名屋敷でも、

「もうよかろう」

というので、池田・浅田両名の家族を村岡へ送ってやることにした。

当時、すべてにのんびりしたもので、北条造酒之助が斬殺されたという嘘を、山名家ではだれ一人、うたぐってもいない。

造酒之助は上州・安中の堀田家へつかえたとき〔近藤一学〕の変名で通していたから、近藤兄弟の甥の一学が安中を去ったことは確認されていても、北条造酒之助の存在は、けむりのように消え果ててしまっている。

池田も浅田も、徹底的に自分たちの〔嘘〕をつらぬき通す肚をきめてしまった。

「こうなると……妙なもので、造酒めを討ったような気がしてくるものだ。なあ、七郎左」

「その通り」

「また、その通りか……は、はは……ま、今夜は酒でものもうではないか」

「それはよいが十兵衛殿。ちと肌さみしい」

「待て。いまごろはおぬしの女房どのが、江戸を発って、こちらへ向いつつある。わしの女房もだがな、ふ、ふふ……」

「久しぶりだなあ……」

「何が、何がよ？」

「あのこと、あのこと」

「わしもな、この年になって、妙にこの、このごろは、そのな……ふ、ふふ……」

などと両人、だいぶんにゆとりが出てきたようである。

この年の四月に、二人の家族が村岡へ到着をした。

三十八歳の浅田十兵衛の家族は妻・えつ（三十歳）と、弟の浅田郷右衛門二十四歳。この夫婦には子がない。

三十一歳になった池田七郎左衛門は、妻・もよ（二十二歳）ひとりで、この夫婦にも、まだ子が生まれていない。

両家の奉公人たちも合せて五名ほど、村岡へ来た。

家族を迎えて、浅田も池田もいよいよ元気が出たようである。

「来るなら来い、近藤源太兵衛め！」

と、池田七郎左衛門は、

「見事、返り討ちにしてくれる!!」

と、息まいた。

五

そのころ……。

近藤源太兵衛、北条造酒之助は、助勢の人びとと共に、京都へあつまって来ていた。

これまで、村岡へ乗りこんで行かなかったのは、

「しばらくは、村岡の見張りもきびしく、両人も油断はすまい。いますこし、鳴りをしずめていよう」

と、近藤源太兵衛が慎重にかまえていたからであった。
さいわいに、北条造酒之助以外は、村岡のものに顔を知られていないので、行商人や旅人に変装して但馬へ入りこみ、かなりくわしく村岡の様子をさぐることを得たのである。
そして、延宝三年が去ると、源太兵衛が、
「いよいよ、今年中には決行いたす」
と、いい出した。
これまでに、当初の二十五名は十五名に減っている。
身のかるい旧奉公人たちが、いつとはなく姿を消してしまったのである。
春から夏にかけて、近藤党の探索が何度もくり返された。
敵二人が身を隠している屋敷の見取図も出来た。
この絵図を前に、一同が〔討ち入り〕の作戦計画をねりすすめるとき、彼らの顔貌は生き生きとした緊張につつまれ、
「何やら、富士の裾野へ討ち入る曾我兄弟のような心地がしてくる」
「いかさま。見事に敵の首二つ討ちとって、亡き宇右衛門殿の墓前へささげるときのことをおもうと、この……この胸が躍るようじゃ」
「この皮を切らせて、肉を断つ!!」
「肉を切らせて、骨を断つまでじゃ!!」
当人たちは意識をしていないのだが、彼らの、これまでに歩んで来た〔人生〕のうちで、このように劇的な生活を味わうことはまたとあるまい。そのことが彼らを興奮させ、むしろ潑剌とさせているのであった。

「いよいよですね」
「うむ、いよいよだ」
北条造酒之助と山田又市は、京都出発を明日にひかえた夜、二人きりで、五条・寺町の浪宅を出ると、鴨川の河原へ向った。
だれにも邪魔されず、たがいに愛を語るためである。
造酒之助は二十歳になってい、山田又市は二つ上の二十二歳だが、共に近藤党の〔仇討ち〕に参加してからは、若者同士、たちまちに意気投合してしまった。
そして、そのうちに……。
この二人は、同志であり友人であるということから、さらに深いまじわりをむすぶようになっていたのである。
造酒之助も、彼が殺した川野九十郎に負けをとらぬほどの美貌のもちぬしであるし、山田又市は背丈も高く、がっしりとした体格の、体毛の濃い、音声のふとい、見るからに強くたのもしげな若者なのだ。
この又市が何かにつけて造酒之助をいたわる。
京へ来てまもなく、造酒之助が高熱を発して重態になったとき、山田又市は昼夜ねむらずの看病にあたった。
高熱にうかされつつ、時折、ふっと気がつくと、造酒之助のくちびるへ、又市の肉の厚い口唇がふれているのを何度も感じた。
そうしたことがたびかさなるうち、造酒之助の胸の中に〔甘えごころ〕がわいてきた。父母に早くから死に別れ、肉親の愛情に飢えた幼、少年の時代を送ってきているだけに、又市の親切が

たまらなくうれしく、耐えがたく切なくなってきて、
「あ……又どの、又どの……」うわごとのように叫びつつ、双腕を又市のふといくびへ巻きつけ、甘えかかるや、又市もまた息をはずませ、
「み、造酒どの、おれはおぬしを……好きだ。たまらなく、好きだ」
まだ熱のひかぬ造酒之助の寝衣の下から腕をさしこみ、なめらかな、それでいて引きしまった造酒之助の胸や腹を撫でさすりながら、
「ああ、造酒どの。おれは、うれしい」
「私もです、又市どの」
「唇吸うてよいか……え、吸うてよいか？」
「か、かまいませぬ。私も、私も……」
造酒之助もまた、又市の濃い胸毛をもてあそびつつ、ついにはしっかりと抱きしめ合う。
同志の人たちも、やがては、この二人のことに気づいたけれども、当時の男色——ことに武士同士のそのことには、男と男の愛情の強さ、武士の義理を底にひめた結合として、世間もこれをゆるし、別にめずらしいことではなかったので、近藤源太兵衛なども、
「造酒之助は美しいからのう。わしだとて、いま少し若かったなら……」
などと、微苦笑をまじえて同志たちに語ったほどであった。
ねばねばとむし暑い京の町の夏が、夢のように去った八月下旬のある日。
行商人に変装した数名が京を先発して行き、十日ほどを経て、五条・寺町の本拠を引きはらった近藤源太兵衛、北条造酒之助、山田又市、丹羽重兵衛など九名が、但馬・村岡へ向った。
まず、但馬の出石（ここは小出氏二万九千石の城下）へ出て、先発隊からの報告を受け、あらためて作戦計画をたて、一気に村岡へ潜入するつもりである。
出石から村岡まで、山越えに十二里ほどであった。

六

九月九日。
源太兵衛、造酒之助、又市など近藤党八名が三手に分かれ、但馬・出石を発し、浅間峠を越えて八鹿の村へ入った。
八鹿は、西の山間部からながれ来る八木川と、日本海へそそぐ円山川の合流点にあり、網場の河岸には舟の往来が絶え間なく、村とはいえ、形態は町といってよい。
このあたりは、山また山であった。
その山と山の谷間を道と川がむすび、人が住む。
道中が難儀なかわりに、人の目を忍んで行くには絶好ともいえる。
一行が八鹿へ到着をすると、小山田清左衛門が小者二人と共に待ちかまえ、
「首尾は上々でござる」
と、報告した。
彼は旅商人に変装し、先発の一行と共に村岡の様子をさぐっていたものである。
「よし!!」
ここで同勢は十一名となる。
別手の四名は、いまごろ、まだ村岡のまわりにいて注意をおこたらない。
夕暮れ前に、十一名の一行は八鹿を出外れ、小佐川沿いの村落をぬいつつ、妙見山へのぼりは

じめた。

この夜は、山腹の木立ちの中で野宿をしたようだ。

翌十日。

この日も快晴であった。

昼前に、一行は妙見山へのぼりついた。この山は別名を石原山ともいい、日本海を通行する船が望見して航海の目標としていたほどだという。

頂上には名草神社の古びた社が鬱蒼たる樹林に囲まれてい、一行は、この社殿にぬかずき「念願達成」をいのった。

昼すぎ、妙見山を西へ下り、作山をすぎて小山道を北西へ切れこみ、さらに下って行くと猿尾の滝へ出る。

その少し手前の樹林の中に、先発の四名が待っていた。

一同、あたまをあつめ、村岡の町と敵(かたき)ふたりが住む屋敷の絵図面をひろげて、決定的な作戦をねった。

「よし。これでよし」

と、近藤源太兵衛は、

「日暮れまで、ねむっておこうではないか」

秋の木もれ日の下へ、躰を横たえた。

一同、これにならったが、なかなかにねむれるものではない。

もっとも年長の丹羽重兵衛（五十三歳）だけが、手槍を抱えたまま、烈しい鼾声(かんせい)をあげている。

決闘への緊張を忘れたというのではなく、老体そのものが疲労しきっていたのであろう。

先発隊の報告によれば、

「このごろは、警固の人数も以前ほどではなく、表裏に二名ずつ、双方の屋敷の人数を合せても十名には足りませぬ」

と、いうことだ。

これらの山名の士をふせいでいる間に、屋敷へ乱入し、一時も早く、池田と浅田を討ち取ってしまわねばならぬ。

決闘の時間が長びけば長びくほど、こちらは不利になる。

山名家からの助勢が駈けつけて来るからだ。

「なれど……」

と、薬商人になっていた高橋喜兵衛が、

「池田七郎左衛門が住む屋敷の北側が小さな沼地になっておりまして、ここには見張りが出ておりませぬ。ゆえに、こなたから沼をわたって塀へ取りつき、山名家の見張りには気づかれずに塀をこえ、ひそかに屋敷内へ入り、入ってから二手に分かれ、一挙に両名を討ち取りましては、いかが――」

と、いう。

先発の人びとは、みな、この高橋説に賛成をしたので、近藤源太兵衛も、

「喜兵衛殿の申す通りにいたそう。このようなときには、あまり迷うてはならぬ。ここぞと決めた一事へ突きすすむのみだ!!」

顔面を充血させ、眼球をむき出して叫んだ。

あれだけに落ちついていた源太兵衛も、いざ、兄・宇右衛門の敵を討つとなると、やはり尋常

ではなくなる。山林の中に同志たちだけが顔をよせ合って相談をしているのだから、何もわめきたてるにはおよばないのだが、他人にはきこえぬという安心感が、いっそうに源太兵衛の言動を大仰なものにするのであった。

他の同志たちも、これを異常とは見ていない。

彼らも血相を変え、泥のかたまりでものみこんだような音声になるかとおもうと、突如、甲高い声を張りあげたりしている。

北条造酒之助と山田又市は、同志たちからはなれた木蔭へ入り、じっと、たがいの躰を抱きしめ合い、ささやきかわしては、瞑目の態で唇を吸い合い、またささやき出す……それをくり返している。

「こ、これでいよいよ、亡き宇右衛門様の御恩に、いささかなりとも、むくいることができますなあ。私は死を決しています、又市どの」

と、造酒之助がいえば、

「おぬし一人を死なせはせぬ。おれも共に、な……共に死ぬ」

「うれしゅうござる、又市どの」

「共に死ぬ……ああ……共に死ぬ」

「うれしゅう、おもいますぞ」

抱き合ったまま、そこへ打ち倒れ、夢中の愛撫をかわしはじめた。

七

夕暮れになってから、一行は火を燃やして飯をたき、干魚を焼き、じゅうぶんに腹ごしらえをした。

荷をほどいて、白の下着、鎖襦袢などを着込み、足ごしらえもしっかりとかため、

「では、まいろうか……」

近藤源太兵衛の声で、一同は山林から出た。

このあたりの道は、何度もの探索によって知りつくしている先発の同志は提燈のあかりだけで迷うこともなく、一行を誘導した。

やがて、日影の小さな部落へ出る。

灯ひとつ洩れてはいない。

ときに四ツ（午後十時）ごろであったろう。

ここから湯舟川にそった道を北へ約一里余で、村岡へ達する。

道幅もひろいし、農家も両側に点在していい、油断はならない。

一行は本道を避け、川岸をたどって村岡の町の南から入り、右手に町をのぞみつつ、山すその小道を西へぬけた。

だれにも見とがめられてはいない。

大きく迂回して町を西へぬけると、本道を突切り、今度は村岡の町の西北にある丘陵の突端へ辿りついた。

ここで、討ち入りの時刻を待つことにした。

八ツ半（十一日の午前三時）ごろが、適当だと考えていたからである。

「では、お先に」

と、北条造酒之助と山田又市、それに高橋喜兵衛の三名が、ここから先発して行く。

沼をわたり、池田家の塀のあたりを警戒するためであった。
三人が先発してから、どれほどの時が経過したろうか……。
「や……？」
「あれは、な、なにか？」
丘陵の森蔭にひそんでいた近藤党十二名が腰を浮かせた。
木立にさえぎられて見えぬが、眼下の村岡の町や、いま自分たちが通りぬけて来た西方の山村から、異様などよめきがつたわってきたのである。
「見てまいる」
と、走り出て行った山本五郎兵衛が、すぐに森の中へ駈けもどって来て、
「た、た、大変でござるぞ!!」
「どうした？」
と、近藤源太兵衛。
「た、松明が……おびただしく……」
「なんじゃと……」
一同、森を出て、見て愕然となった。
おびただしい松明の列が、町の西がわの山道につらなり、ゆれうごいている。
また、先刻までは黒一色だった村岡の町の陣屋周辺にも松明がうごき、篝火らしいものも燃えているではないか……。
「し、しまった」
頭領であるべき近藤源太兵衛がうめくように、

「み、見つけられたか……」
といったので、同志たちも一様に動顚してしまったものだ。
実はこの松明に、わけがある。
このあたりの百姓が、秋に年貢の米をおさめる日には、夜明け前に起き出し、松明をつらねて、祝いの意味の大さわぎをしながら、供出の準備をするのが、ならわしであった。
この日が、まさにその日であって、領内の百姓たちは前夜は早くねむり、八ツごろから起き出し、大声に祝い唄をうたったり、駈けまわったりしながら、一家総出、村々総出で年貢米供出の支度にかかるのだ。
山名家・領内に、このような風習があることまで、近藤党はさぐり出してはいない。
「いかぬ、もう、いかぬ……」
「ど、どういたそう」
「逃げる……まず、それだ」
「あっ……松明が、こなたへ走って来るぞ」
「げ、源太兵衛殿。ど、どうなさる？」
ついて来た小者たちは、これまで、主人と共に闘うつもりの意気込みも忘れてしまい、闇にまぎれ、主人たちを放り捨て、単独で、早くも逃走にかかったようだ。
「むう……」
近藤源太兵衛が、ふらふらとひざを地につき、あたまを抱えた。
（造酒之助たち三人を、どうしたらよいのか……？）
であった。

危急を知らせている時間はない、と思う。

いや、向うでも今頃は、ゆれうごく松明の群とざわめきを知り、逃走にかかっているやも知れぬ。

（いや、それにちがいない。たしかに……造酒之助たちも、逃げたにちがいない）

逃げたにちがいない……と、源太兵衛はむりやりに、自分で自分を納得させてしまった。とにかく、ここで山名のものに捕えられては兄・宇右衛門の敵ふたりを永久に討てなくなることも事実であった。

いや、真の〔事実〕は、年貢おさめのにぎわいを、近藤党が勘ちがいしているにすぎないのだが、近藤源太兵衛は得体の知れぬちからで押し出されるように、

「に、逃げい」

と、わめいてしまった。

頭領たるものが「逃げろ」と先に立ったのでは、どうにもならぬ。むしろ、この一言を待ちかまえてでもいたかのように、一同は、ころげるように森へ飛びこみ、必死に走りつづけ、背後の山の中へ逃げこんで行った。

ところで……。

北条造酒之助、山田又市、高橋喜兵衛の三人は、どうしたろうか。

町の西北にある小さな沼をわたり、池田家の土塀際まで忍んで来ると、見張りの者の影もない。

「高橋殿。まさに、これは……」

と、造酒之助が双眸をかがやかせ、

「まさに、ここから討ち入るが上々でござる」

「な、そうでござろうが、な」

高橋喜兵衛、緊張のうちにも得意げに、

「ここに見張りの眼がとどかぬことをつきとめるまで、三日三晩、それがしはな、あの森の中にひそんでさぐりつづけたのでござるよ」

すると、山田又市が、

「われらで、中へ忍び入って見よう」

と、いい出した。

高橋は制止したが、造酒之助は同意した。

入って、後から来る同志のため、塀を乗りこえやすいように足場をつくり、ついでに邸内の様子をさぐっておこうというのだ。

結局、高橋喜兵衛が塀外へ残ることにした。

又市が先に塀を乗りこえ、後から来る造酒之助の躰を下から抱きとめて、ゆっくりとおろしてやり、彼の両足が地についたとたん、又市はぐいと抱きしめ、造酒之助の唇を吸った。

造酒之助も吸い返し、

「うれしゅうござる、又市どの」

「おれもだ」

「私も……」

「共に死のう」

同じことをくり返して、飽くことを知らぬ。

山田又市にしても、我が子のように可愛がってくれた伯父・近藤宇右衛門の〔仇討ち〕なのだ

から、決死の覚悟をきわめたつもりでいるのだ。

二人、手をとり合って邸内へ歩みかけたとき、

「おや……？」

又市がぎょっと足をとめ、

「造酒どの、何か、きこえぬか？」

と、ささやいた。

このときが、町外れの丘で近藤党が松明の群とざわめきに気づいたのと略おなじ時刻であったろう。

「おい……おい、これ……」

塀の上へ顔を出して、高橋喜兵衛が、

「大変だ。松明が……」

と、低く声をかけてきた。

これから後は、三人も近藤党と同様の驚愕を味わうことになるのだが、それでも、

「ともあれ、同志の人びとと別れた場所へ……」

と、造酒之助がいえば、

「たとえ捕えられても、同志たちとはなれてはならぬ、死なば共にじゃ」

と、山田又市はしきりに「死ぬ、死ぬ」という。

で、三人は、それこそ決死の覚悟で、もとの丘の森の中へ引き返したのだが、年貢おさめの百姓たちは、彼らのことに関心があるわけではないから、だれの目にもふれずに元の場所へもどれた。

同志たち、いない。

捕えられたのか……といえば、その様子もない。

ここに至って、三人も逃走する気持になった。

そして、同志たちが逃げこんだ山林へ、三人も駈けこんだのである。

こうして近藤党十五人は、一人も捕えられることなく、山越えに北へ北へと逃げ、日本海沿岸の香住へ出ると、追跡をおそれて四方へ逃げ散って行った。

翌日になって……。

丘の森の中に、手槍二、大槌一、梯子一などが捨てられてあるのを、村人が発見し、陣屋へとどけ出た。

おどろきのあまり、近藤党のだれかが、放り捨てて逃げた、そのときの遺留品なのであった。

これを見た山名家では、

「まさに、村岡へ討ち入るためのものにちがいない」

「近藤一味のものであろうか？」

「なんとも知れぬが……そう見てよいのではないか」

「これは、油断ならぬ」

「それにしてもじゃ。何故に、これらのものを置き捨てて姿をくらましたのか？」

「そのことよ。それがわからぬ」

彼らも、年貢おさめのさわぎが、どのように近藤党へ作用をしたのか、まったく気づかぬ。

土地の習俗というものは〔生活〕の一部であるから、村岡に住むものにとっては異常ではないのだ。自分たちが異常ではないから、近藤党の〔異常〕に気づかぬのである。

しかし、とにかく油断はならぬ。

池田七郎左衛門と浅田十兵衛も、このことをきいて、またも夜ふけの便所通いが面倒になってしまったし、山名家の警備も二年前へもどり、厳重をきわめるようになった。

八

このときの大失敗は、近藤党にとってあまりにも強烈な衝撃であった。

失敗したならばやり直せばよいわけだが、やり直すためには自信を喪失しすぎてしまった。

なかでも頭領であり、敵を討つべき当人である近藤源太兵衛は、京都へ逃げ帰ってから、あのときの自分の態度、処置をかえり見るたびに、

（わしは、もはや同志の人びとに顔向けならぬ男となり果ててしもうた……）

その苦悩が昂じて、数カ月の間は得体の知れぬ病患にかかり、しきりに心臓の痛みをうったえ、造酒之助たちと顔を合せることを拒み通したということである。

源太兵衛は年齢も四十に近く、念流の剣術を幼少のころからまなび、佐倉の松平家では剣士としても高く評価をされていたほどだ。

大名の家来としても間然するところなき奉公ぶりで、上下からの信頼も厚かった。

源太兵衛自身も、そうした〔武士の座〕にあってすごして来、これからもすごしてゆかねばならぬわが人生に、十分の自信をもっていたのである。

それが一度に消滅してしまった。

なによりも源太兵衛が自責に耐え得ぬのは、あの松明の群を見たとき、敵地へ先発して行った造酒之助たち三人を見捨てて、自分が逃走したことであった。

あのとき、

（造酒之助たちも、きっと、逃げたにちがいない）

と、自分になっとくさせはしたが、それはあくまでもこじつけにすぎない。

要するに、

（わしは恐れて逃げた）

なのである。

しかも、造酒之助たちはこちらの身を心配し、集合地点まで引き返してくれたというではないか……。

この〔敵討ち〕の遠因は、いうまでもなく北条造酒之助にあるものだが、現在の当事者は近藤源太兵衛で、彼が兄のかたきを討つのだ。それを造酒之助が助太刀してくれるのである。

（そのわしが……わしがまっ先に逃げ出してしもうた。なんという、なさけないことだ。これでもわしは武士であったのだろうか……）

さらに、後になって知れたことだが、あの〔松明さわぎ〕が年貢おさめの行事にすぎなかったということだ。

あわてふためいたばかりに、ばかばかしくて他人にも語れぬ失敗をしてしまったのである。

落ちついて様子を見きわめていたなら、むしろ、年貢おさめのさわぎの最中に討ち入ったほうが、効果的であったかも知れない。

まる二年もの間、じっと辛抱をして、敵が油断をするのを待っていたのが、今度の失敗ですべて水泡に帰してしまった。

故郷の佐倉には、源太兵衛と故宇右衛門の父・忠太夫が、吉報をまちわびている筈だが、源太

兵衛としては、この恥を書き送る気持にもなれぬ。
（このことをきいたなら、父はあきれ果ててしまうだろうし……故郷の人びとへ顔向けがなるまい。真実を知ったなら、父は自害をなさるやも知れぬ）
であった。
若党や小者たちは、村岡から逃げたきり、もう戻って来なかった。
さいわいに、京の五条・寺町にあった以前の浪宅が、まだあいていたので、源太兵衛は叔父の丹羽重兵衛、小山田清左衛門と共に住みつき、山本五郎兵衛が世話をしている。
北条造酒之助は、山田又市、高橋喜兵衛と三人で、建仁寺裏へ小さな家を借りた。
同志合せて、七名のみとなったわけだ。
近藤党は源太兵衛をはじめ、こころがけのよいものが多く、小金をもっていたし、当分は暮しに困るようなことはないが、問題は、今度は何時、どのような方法で目的を遂行するかである。
その方法を考える気力も失せた七人であった。
五条・寺町の四人と建仁寺裏の三人は、たがいに気まずくなり、往き来もせぬようになってしまった。
一年もすると……。
「ああ、実にどうも、おもしろくない」
と、高橋喜兵衛が、造酒之助と又市に別れ、寺町の近藤源太兵衛のところへやって来て、
「今日から、こちらへおいていただく」
「どうしたのじゃ？」
「いやもう、造酒之助と又市め、まるで夫婦気どりよ。見てはおられぬ。ばかにして、おのれ……」
はじめは、自分たち三人を見捨てて逃げた源太兵衛たちに反感をもち、造酒之助・又市と行動を共にした喜兵衛なのだが、
「男どうしで口吸い合うて、寝床も一つじゃ。おれは、ああしたことを好かぬ、好かぬ」
大分に見せつけられ、怒っているらしい。
高橋喜兵衛が寺町の四人と合流してから、また一年の歳月がながれた。
この二年の間、七人は虚脱と悲観の中で、愛し合い、ののしり合い、食べて寝て、生きてきたのであった。
ところが、延宝五年になると、鎌倉の扇ヶ谷で仇討ち事件が起り、天下の評判となった。
これは野田宗畔（医師）という高利貸を、兄の敵として松枝久左衛門が見事に討ち果たしたものである。
久左衛門は仙台藩の能役者だそうだが、叔父の岩井利兵衛と二人きりで、警固の男たち数名にまもられて扇ヶ谷の亀ヶ坂下へ来かかった敵の宗畔へ斬りかかり、みずから重傷を負いつつ奮闘し、ついに首を討ち取ったのであった。
この評判は、すぐに京都へもつたわり、近藤源太兵衛たちを尚更、憂鬱にさせた。
だが、刺激をうけたのも事実である。
次いで、翌延宝六年には、江戸で、また仇討ちがあった。
これは二十年ごしのもので、荒川三郎兵衛を松枝主馬が討ち取ったものである。主馬は、前の鎌倉の仇討ちの松枝久左衛門と同姓だが両人の関係は別にない。
このうわさをきいたとき、

（こうしてはおられぬ）

と、近藤源太兵衛の失意が、発奮に変ってきた。

同志たちも、さすがに武士だけに、こうした他人の〔仇討ち〕の成功をきいては、いても立ってもいられなくなってくる。

こちらも、池田と浅田の首を討たねば故郷へは帰れぬ。そこには武士としての〔体面〕と〔意気地〕にしばられた生活があり、その生活があるゆえにこそ、彼らは封建の世の武士として存在することをゆるされているのだ。

封建の世（江戸時代）というのは、日本の封土を、幕府（将軍）が諸大名や幕臣にわけあたえ、大名たちはそれぞれに領有するわが封土をおさめ、さらにこれらの大名たちの上に、徳川幕府という日本全体を統治する政権が存在した時代をさす。

だから、A大名の領国で殺人を犯しても、B大名の領国へ逃げこんでしまえばA領内をおさめるA大名の法律も政治もちからをうしなってしまうわけだ。こうして、当時の日本には無数の〔国境〕があったのである。

〔敵討ち〕または〔仇討ち〕の制度は、ここに生まれた。

つまり、殺された者の肉親が犯人を追って行き、直接に罰を加える。

簡単にいうと、正当な〔敵討ち〕は〔復讐をふくめた制裁〕なので、現代人から見れば野蛮に見えようが、その時代の西洋諸国にくらべれば、まだしも文明的な制度であったといえよう。

ことに武士の敵討ちは、目ざす敵を討って帰国しなければ、必然、家もつぶれるし、自分もまた一生、路頭に迷わねばならぬ。

だからこそ、近藤源太兵衛たちの失望も大きかったのだが、そのかわりに発奮したとなると、

「いま一度、やり直すのだ!!」

七人は、ふたたび精気をよみがえらせた。

北条造酒之助と山田又市も、すべてを忘れて、寺町の五人と交流しはじめた。

「では……」

というので、山本五郎兵衛と高橋喜兵衛、小山田清左衛門の三人が、またも但馬の国へ潜入することになった。

「今度は、村岡の近くへ住みついて見たいと存ずる」

と、小山田清左衛門がいった。

そこで、清左衛門と山本五郎兵衛が、但馬の出石城下へ入り、ここで〔小間物屋〕の店をひらくことにした。この商売は、以前、旅商人として村岡を探索したときに経験ずみの両人であった。

高橋喜兵衛も〔鏡研ぎ〕になって、出石の本拠を中心に、村岡をさぐる。

源太兵衛たちは、随時、京都と但馬を往復してはたらく、と、こう決まった。

このころ、近藤源太兵衛の主人・松平和泉守は下総・佐倉から肥前・唐津七万石へ国替えを命ぜられ、九州の新領国へ移っている。だが、近藤党の家族たちは依然、佐倉へとどまっていたのであった。

近藤党の活動が再開されてから一年後の延宝八年になると、またまた〔仇討ち事件〕が起った。

今度は、長州・下ノ関において、春城三左衛門という小倉藩士を、父の敵として曾根靱負が、討ち果たしたのである。

「よし、われわれもだ!!」

と、近藤党の発奮が、烈しい闘志に変ってきた。

ここ数年は仇討ち大流行で、成功したものはよいが、近藤党のように、まだ敵を討てぬ人びとが日本に何組あったろうか……。いずれも肩身のせまいおもいにさいなまれ、懊悩し、焦慮していたことであろう。

この前の村岡討ち入りに失敗してから、すでに五年の歳月がすぎ去っていた。

ちなみにいうと、但馬・村岡では、浅田十兵衛の妻が、すでに病死をしている。

九

天和元年の春になった。

近藤源太兵衛は、但馬に潜入している同志三名を京都へ呼びよせ、種々、報告をききとった後に、

「早ければ今年のうちに……おそくとも来年の秋までには、村岡へ討ち入ろう」

と、いった。

敵ふたりの屋敷は、五年前ほどでないにしても、まだ警戒の手をゆるめてはいない。

一度の失敗の重さは、取り返しがつかぬことになっている。

数日にわたって、七人は協議をかさねた。

ついに、決定的な到達点へ意見が合致した。

「もはや、迷うまい。これでやろう。やりぬこうぞ!!」

と、近藤源太兵衛がいい、

「この方法で決行をする以上、もはや、生きてはもどれぬとおもうてくれい」

「いうまでもござらぬ」

一同も、過去八年にわたる苦労が今さらに想起されて、源太兵衛の仇討ちの助勢をする、というよりも、それぞれがそれぞれの敵を討つ心境になってきていた。

「それで……」

源太兵衛が、しずかに、

「この夏ごろまでに、みなそれぞれに別れ、おもうところを目ざし、別れを告ぐるべき人には別れを告げ、たのしみを味わうものはこころおきなく味わい……」

と、いったとき、北条造酒之助と山田又市が手と手をにぎり合い、そっと眼くばせをし合って、にっこりとうなずき合った。

その態をちらと見た高橋喜兵衛が不快の表情となり、するどく舌打ちを鳴らした。

老体の丹羽重兵衛が、くすりと笑った。

のちに、丹羽老人は甥の源太兵衛に、

「喜兵衛は、そもそものはじめから造酒之助におもいをかけていたのじゃ。わしにはようわかっていた。ところが、それを山田又市にうばわれてしもうた。おもえば喜兵衛も気の毒じゃわえ」

七名は、京都で別れ別れになった。

近藤源太兵衛と丹羽重兵衛の二人だけが京に残った。

造酒之助と又市は、

「間もなく、もどります」

といいおき、手をたずさえ、有馬の温泉をはじめに、近辺の風光をたのしみ、こころゆくまで男どうしの愛をたしかめ合ったようである。

もっとも、二人が京へもどるのはかなり遅れた。

それは、山田又市が佐倉に残して来た老母へ、別れを告げに行ったからである。造酒之助も同行した。

あのときの失敗以来、近藤党は故郷へも身内にも一通の便りをも出していない。恥じるこころが強いあまり、筆がとれなかったのだ。

けれども、山田又市の母をはじめ、近藤源太兵衛の老父・忠太夫も、討ち入り失敗のことを知っていた。

江戸の武家たちの間では、

「ばかな奴どもよ」

と、近藤党の失敗が笑いばなしにされていたそうだから、下総・佐倉へも、うわさがつたわっていたのは当然であろう。

山名家でも、近藤党を笑いものにし、〔殿さま〕の山名矩豊は、

「愉快とは、まさにこのことじゃ」

手をうってよろこび、

「尚も油断すな」

厳命を下したという。

ところで山田又市、夜陰ひそかに老母をおとずれるや、

「何しに帰った。出て行け」

どなりつけられた。

そこで、又市と造酒之助が、いよいよ決行の日の近づいたことを告げると、老母は、

「それでよし、なれど又市、敵に捕えられてはならぬ。もしも捕えられてはずかしめをうけるよ

うなれば、ただちに自害をせよ」

「は……」

「そのことを約定できますか、又市」

「できます」

すると老母の栄は、主家の移封によって以前の屋敷を明けわたし小さな家へ引き移っていた近藤忠太夫を、その夜のうちに訪問し、又市たちがひそかに来ていることを告げ、

「京の源太兵衛どのに御伝言はなきや？」

と、問うた。

栄は、忠太夫の長女で、故宇右衛門の妹、源太兵衛には姉にあたる。山田家へ嫁いで又市を生んだのち、若くして夫をうしない、寡婦となった。

近藤忠太夫は、沈思の後に、一通の手紙をしたため、金三十両をそえて、

「では又市に、この手紙を京の源太兵衛へわたすようたのんでくれい」

と、いった。

山田又市が、この手紙を京へもって帰ると、近藤源太兵衛は一読して、涕涙やまなかった。八年ぶりに、父の声をきくような気がした。

手紙の大要、次のごとし。

「……村岡での、お前たちの失敗を世に知らぬものはない。わしも残念である。それにしても、この六年もの間、ぐずぐずと日を送っていたお前を、まだ待つ気になっているのは、かならずやりとげてくれようとの、父のはかないおもいがあればこそじゃ、しっかりとせい。わしは、もはや敵両者の首を討ちとれ、とはいわぬ。お前が敵地へ乗りこみ、おもうさま闘い、敵の屋敷をま

くらに討ち死にをしてくれれば、それでよい。わしも、もはや先の知れたいのちじゃ。この老父に孝をつくしたいとおもうなら、一時も早く討ち入って死ねい」

おもいきって烈しいことばであったが、源太兵衛のみか、同志たちも、この忠太夫老人の手紙を読んで非常に闘志をかきたてられた。

小山田、山本、高橋の三名に、造酒之助も又市も加わって、但馬へ入り、この年いっぱいを決行準備についやした。

源太兵衛は病気がちの叔父・丹羽重兵衛をいたわりつつ、武器その他の支度をととのえている。源太兵衛は、この叔父を、村岡討ち入りへ同行させぬつもりであった。重兵衛はあくまでも同行する決意らしいから、いざというときは、京都出発の日を内密にしておき、ひとりひそかに出て行くつもりでいた。

秋がすぎ、冬が来た。

山ぶかい村岡へ討ち入るためには、冬の季節であってはならない。行動の自由が、雪と寒気にうばわれてしまうからだ。

年が暮れ、天和二年の年があけた。

「今年の四月に決行する」

という指令を、源太兵衛は但馬の同志たちへ送った。

兄・近藤宇右衛門が討たれてから足かけ十年が経過していた。

北条造酒之助が川野九十郎を刺殺してから十二年目である。

あのとき十六歳だった造酒之助は、二十七歳になっていた。

近藤源太兵衛が、四十五歳。

山田又市、二十九歳。

丹羽重兵衛、六十歳。

高橋喜兵衛、四十九歳。

山本五郎兵衛、四十七歳。

小山田清左衛門、三十五歳。

十

近藤党が、但馬の出石に集結をしたのは、この年の四月二十九日である。

近藤源太兵衛は、予定通りに、叔父の丹羽重兵衛を京都へ置き去りにしてきた。

重兵衛は、このところ体力がすっかりおとろえてしまい、よく血痰を吐く。源太兵衛の手前、寝込むことはせぬが、到底、但馬の山国へ仇討ちに出かけることはむりであった。

だが、老人は同行するつもりでいた。

その決意の頑強さを知りつくしている源太兵衛は、重兵衛に手紙をのこし、夜半ひそかに京都を発したのである。

（わしが出て行ってしまえば、叔父もひとりではよもやって来まい。とても、あの病体では、わしの後を追いかけられぬ筈だ。あきらめて、佐倉へ帰って下さるにちがいない）

と、源太兵衛はおもっていた。

前から、出石の城下に小間物屋として住みついている小山田と山本の家が、近藤党の本拠となったわけだが、源太兵衛が到着をした翌二十九日には、先発していた北条造酒之助と山田又市も八鹿から戻った。

〔鏡研ぎ〕の高橋喜兵衛は、決行の日時が切迫するまで、村岡の周辺をさぐっている筈であった。

三十日になると、造酒之助と又市が、また出て行った。

これは、高橋と源太兵衛たちとの間の連絡をたもつためだ。

この日の夜ふけに、源太兵衛と小山田、山本が刀剣の手入れをしていると、

「や……？」

小山田清左衛門が飛び上るようにして刀をつかみ、行燈のあかりを吹き消した。

表戸をたたく音をきいたからである。

源太兵衛も山本も同様に緊張した。

出石の町へは、村岡の山名家の者もよくあらわれるし、微少の油断もできぬ。

戸を叩く音が、強くなった。

「はい……はい、はい、ただいま」

と、小山田が、すっかり板についた町人ことばで、二人へ眼くばせをしつつ、刀をかまえて、土間へ下り、

「どなたさまでござりまするかな？」

「わしじゃ……」

戸の向うから、しわがれた声が、

「重兵衛じゃ」

といった。

小山田がおどろいて戸をあけると、丹羽重兵衛老人が、ころげるように土間へ入って来て、

「源太兵衛、置き去りとは、ひどいぞよ」

土間にへたりこむようなかたちとなり、泣き声をあげたものだ。

「お、叔父上……」

「源太兵衛。わしが、のめのめと故郷へ帰れるとおもうか。足手まといになるは、百も承知じゃ、承知の上で来た。連れて行ってくれい、たのむ、たのむ……」

合理的ではないが、初一念をつらぬこうとする老人の気魄は、その時代の男の〔情熱〕でもある。源太兵衛たちも、重兵衛老人をかこみ、しばらくは声も出なかったが、たがいに、この病体の老人を同行するつもりになっていた。

京都からここまで、馬や山駕籠をつかったとしても、丹羽重兵衛が必死で追いかけて来た一事は、源太兵衛たちの心情を悲壮なものとしたし、そうした感傷が強まれば強まるほど、彼らの闘志はふくれあがっていったのである。

翌五月一日の未明……。

源太兵衛たち四名は、出石の城下を隠密に出発した。

出石の人びとにあやしまれたため、急いで町を出たともいうが、本篇では採らぬことにする。

当時の五月一日は、現代の六月上旬にあたる。

毎日、快晴がつづき、一行の計画は狂うことなく、その日のうちに八鹿をぬけて、八年前の村岡討ち入りの際に野宿をした妙見山の山腹の林の中で、夜を迎えた。

八鹿には、造酒之助と又市が待ちかまえていたから合せて六名。高橋喜兵衛は、まだ村岡の近くにいる。

「明日の決行にて、よろしいと、喜兵衛殿から伝言がありました」

と、造酒之助が源太兵衛にいった。

「さようか……」

「山名家では、八年前のあの折、われらが北方より入りこんだとおもいこんでいるらしく、北の国境などはいまもって見張りの眼もきびしゅうござるが、こちら側は大丈夫、あまり敵の眼もとどいてはおりませぬ」

「何よりのことだ。今度こそは失敗してはならぬ。いや、失敗ってもかまわぬ。しゃにむに押し通らねばならぬ」

山林の闇に、青葉の匂いが濃密であった。

その闇の中で地に寝た丹羽重兵衛のうめき声が断続してきこえていた。

他の者に心配をさせまいと、苦痛をこらえながらも、こらえきれずに出てしまううめき声であった。

「御老体、いけませぬようで……」

と、山田又市。

「いかぬ。今朝、出石を出てから急にまた、悪うなったようじゃ」

「やはり、共に……？」

「うむ」

うなずいた源太兵衛が、

「共に死んでいただくつもりじゃ。なれど、いざとなったとき叔父ごにはかまうな。わしもかまわぬ。叔父ごがたとえ一人にても敵の刃をうけて下さるなら、その隙に、われらは一歩だけ先へ進むことができる。それでよい、そ、それで……」

ついに、声をつまらせてしまった。

十一

翌朝、まだ暗いうちに一行は出発した。

空が曇っていて、昨日までの初夏の陽ざしは消えて、谷間から吹きつけて来る山風が強く、冷たい。

造酒之助と又市が、木の枝を切り、これで簡単な輿のようなものをつくって、重兵衛老人を乗せた。

山道をすすむうち、

「あ……う、うう……む……」

何度も血痰を吐き、重兵衛が輿の上へ躰を折り屈め、そそけ立った白髪をふるわせ、呻吟しはじめた。

だれも、これにこたえない。

いたわりの声もかけない。

こうなれば、そうした言動の一切がむなしくなってしまったかのようである。

「う……あ……ま、待て」

いま少しで妙見山頂へ着くという崖道で、丹羽重兵衛が突如、

「と、とめてくれい」

と、いい出した。

造酒之助たちが輿を山道に下すや、重兵衛が、

「もはや……これまで」

苦悶の表情顔貌をこらえようともせず、
「源太兵衛、おるか？」
「叔父上……」
「わしを、立たせろ」
「こう……こうでござるか？」
「よし、わしの躰を、うしろから、ささえてくれい」
「は……」
一同、とっさに重兵衛が何をしようとしているのか、わかりかねた。
その転瞬……。
「わあっ……」
重兵衛老人が怪鳥のような叫びをあげたかとおもうと、みずから前にたばさんでいた小刀を引きぬきざま、これを逆手に、両手でつかみ、最後のちからをふりしぼって自分の腹へ突きたてたものだ。
血が疾った。
一同が制止する間もない。
重兵衛は我が腹に突き立てた刃をつかみしめたまま、山道から崖の下へ身を躍らせた。
近藤源太兵衛が空間に手をさしのべ、飛びつくようにこれをとどめようとしたが、一瞬、おそい。
谷底を埋めつくしている樹々の中へ、重兵衛の躰が落ちこみ、見えなくなった。
源太兵衛は、飛びついたまま崖縁に伏し倒れ、土を嚙むかたちで面もあげず、異様なうめきを

発した。同志たちも崖縁へ駈けあつまり、虚脱の表情で谷底を凝視していたが、やがて五人の号泣が、すさまじい響みとなってわきおこった。
丹羽重兵衛老人の、この自殺は、たしかに、それだけの効果があったといえよう。
いや重兵衛は、源太兵衛を追って京都を発したときから、そのつもりでいたのかも知れなかった。
同志の人びとの闘志を尚もかきたて、彼らの怯懦をいましめるため、敢然と自分の死様を見せつけたのであろう。
やがて……。
妙見山頂を目ざして山道をのぼる五人は、一語も発せず、早くも死の影と共に歩んでいるかのような、むしろ決然たる足どりになっていた。
妙見山頂には、高橋喜兵衛が出迎えていた。
彼も重兵衛の死をきいて顔色をあらため、
「では、ただちに」
と、一同をうながした。
今度は夜を待たぬのである。
あかるいうちに討ち入るのである。
猿尾ノ滝に近い山林の中で、六人は身仕度をととのえた。いずれも鎖襦袢をつけ、新しい肌着に黒の筒袖の上着。斬り合いの邪魔にならぬように袴はつけなかった。これは八年前の逃走の折、袴が足にからんで躰のうごきを封じられた経験を生かしたものだ。
ここで約一刻(二時間)を休憩した。

北条造酒之助と山田又市が肩を抱き合い、彼方の樹林の中へ消えて行くのを見ていた高橋喜兵衛は、このとき別に不快の様子ではなかった。

その、しずやかな表情を見て、近藤源太兵衛は、

(喜兵衛も覚悟をきわめているな)

とおもった。

また源太兵衛自身にしてからが、この期におよんで、それだけの観察ができたというのは、心身の動揺がなかったのだ、といえよう。

八年前のあのとき、このあたりで敵地にせまり、源太兵衛はじめ同志の人たちは、足が宙に浮いているようで、ただもうあたまの中だけに興奮の血が充満し、躰も手足も硬直しきっていたものである。

だが今度は、肉体そのものに闘志の興奮がみなぎりわたり、それを頭脳が制御している。

このときの、近藤党の人びとの脳裡には、無私無欲の自殺をとげた丹羽重兵衛の印象が強烈にみちわたっていた。

造酒之助と又市は、森の中で、しずかな愛撫にひたりこんでいる。二人とも、もう若くはないし、余人が見たならばあまり美しい情景とはおもわぬだろうが、二人にとっては、日常のならわしを無心にくり返しているにすぎない。

人間の世界には、いつも〔異常〕な環境の中に〔平常〕がある。闘いつつ愛し合い、殺し合いつつ食べ、ねむるのである。

この間に、小山田と山本が火を起し、用意の〔にぎりめし〕に味噌をたっぷりとつけ、これを火に炙りはじめた。湯をわかし、野菜の味噌漬を出す。

用意がととのうと、一同あつまって、腹ごしらえをし、別盃の冷酒をくみかわした。

「では……」

近藤源太兵衛が立ちあがると、一同は鉢巻をしめ、この上から菅笠をかぶって面をかくし、足ごしらえをあらためた。上着はひざまでの短さで、脚絆、足袋、わらじがけの両足は露出している。いかにも身軽な支度であった。

大小を差しこみ、上から道中合羽を着た。

「まいるぞ」

「心得た」

山道を下って、村岡へ通ずる道へ出たときに、高橋、小山田、山本の三名が何やら用意の包みを抱えて一足先に走り出し、道の両側の山道へ二手に分かれて姿を消した。

残る三名は、一里余の本道を村岡へ向う。

夕暮れに近いのだが、初夏のことだ、あたりはまだあかるい。

村人たちにも出会ったが、別にあやしむ様子はなかった。

先発の三人は、高橋が村岡の町の南側へ、小山田と山本が東側の小高い雑木林にひそみ、本道をやって来る源太兵衛たち三人を待った。

村岡の町には、まだ灯も入らぬ。

家の前へ出てあそぶ子どもたちの声も、まだ絶えぬ初夏の夕暮れなのである。

高橋喜兵衛のひそんでいる木立には栗の木が多く、ほころびかけた白い栗の花が特異な匂いを放っていた。

喜兵衛は、一瞬、北条造酒之助の裸身を想いおこした。これまでに数度、共に入浴したときの

印象からであった。

その造酒之助を先頭に、又市、源太兵衛の順で、三人が本道へ姿を見せたのがこのときである。

高橋は深く掘った穴へ、木の枝やら、煙出しの草（用意してきたものだ）を入れ、これに火をつけた。

向うの山腹にいる小山田、山本も同じことをしたのである。

村岡の町の入口の両側、その背後の木立から、もくもくと黄色い煙があがりはじめた。

高橋、山本、小山田の三名は、

「火事だ!!」

「火がひろがるぞ!!」

大声に、わめきながら駈け下って、町の入口の番所へ突入した。

「何？」

「火事だと……？」

番所には山名家の足軽四名が詰めていたが、木戸口へ出て見ると、なるほど物凄い煙が空をおおいはじめている。

「あっ!!」

仰天した。

町の人びとも、おどろいて道へ駈け出る。

消火設備が発達せぬ当時にあっては、火事の恐ろしさは想像を絶するものがあったと見てよい。

「大変だぞや!!」

「火の手が、火の手が……」

町が火事にならぬようにしてあったのだが、煙の勢いは非常なものだ。

たちまちに、村岡の町が混乱しはじめた。

近藤源太兵衛、北条造酒之助、山田又市が本道から町へ入って来た。

番所の足軽たちも、さわぎにまぎれ、これに気づかぬ。

「それ!!」

「応!!」

路地にかくれていた高橋、小山田、山本が合流して同志六人、まっしぐらに町の裏道を西北に向けて駈けた。

町の中央で、道が北へ分かれている。

六人は表通りへ飛び出し、この北道を走った。

火事を知らせる半鐘が鳴り出した。

町の人たちが、あわてふためき、荷物を運び出したりしているその中を、六人はしばらく走って、山名家の陣屋手前の小道を左へ切れこんだ。

このあたりへは、山名の士や足軽たちが消火のために出動して来て、混乱はさらにひどかった。

武家屋敷が両側にならぶ道を突き当ったところが、敵・池田七郎左衛門と浅田十兵衛の屋敷であった。

駈けすすむ六人のまわりには、山名家の者たちも〔火事さわぎ〕の叫びを発しつつ往来しているのだが、まったくそれと気づかぬ。

まるで、嘘のように、六人は敵の屋敷前へせまることを得た。

手前が浅田十兵衛、その向うが池田七郎左衛門の屋敷である。

かつて打ち合せたように、近藤源太兵衛、北条造酒之助、山田又市が池田邸へ、高橋、小山田、山本が浅田邸の門前へ駈け寄り、

「火事だ、火事だ。火の手がまわりましたぞ!!」

叫びつつ、笠と合羽をはねのけ、門内へ突入した。

見張りの士と足軽が、両家の門内に四名ずつ、合せて八名も詰めていたのだが、町のさわぎで、このうちの半数が外へ飛び出してしまっている。

残る番士たちは「火事だ!!」と叫びつつ、突風のように駈けこんで来た近藤党を見ても、何か山名家の士が来たのだと勘ちがいをしたらしく、とがめようともしなかった。

池田七郎左衛門邸の玄関口へさしかかったとき、近藤源太兵衛が大刀を引きぬき、造酒之助と又市をかえり見て、

「いまこそ、死ぬるぞ」

と、いった。

十二

このとき、池田七郎左衛門の屋敷へ、となりから浅田十兵衛があそびに来ていて、二人は奥庭に面した十畳の間で碁を打っていたのである。

そこへ、あの「火事さわぎ」となった。

二人は碁石を捨てて立ちあがり、しばらく町のざわめきをきいていたが、

「火事がひどいらしいな。こりゃ、おれたちも身仕度せねばなるまい」

「いかにも……」

で、浅田十兵衛が次の間から、玄関へつづく廊下へ出たとき、近藤党三名が白刃をふりかざして突進して来るのを見た。

「あっ……」

悲鳴をあげて四十六歳になっている浅田が、もう池田のことなどを忘れてしまい、自分ひとり助かりたい一心で廊下をへだてた向うの小部屋へ飛びこんだ。

そこへ、池田七郎左衛門が、

「もよ、もよ……」

と、妻の名をよびつつ、廊下へあらわれた。

これをしかと目にとめた北条造酒之助が、近藤源太兵衛へ、

「池田七郎左にござる!!」

と、教えた。

池田も愕然となる。

池田七郎左衛門、このとき三十九歳。十余年前は、どちらかというと痩身であったのだが、ほとんど外へ出ずに飽食していたものだから顔も躰もでっぷりと肥えてしまっている。

「近藤源太兵衛、推参!!」

よばわりつつ、源太兵衛が廊下を踏み鳴らし、猛然として池田へ斬りつけた。

池田は肥体を障子へ打ちつけて、部屋の中へ逃れた。

源太兵衛がこれを追い、造酒之助と又市も後につづこうとしたとき、

「曲者!!」

台所のあたりから飛び出して来た大男が脇差をふるって二人の背後から襲いかかった。この男

が浅田十兵衛の弟・郷右衛門である。

彼は「火事さわぎ」を知って、若党の山口半左衛門と共に、池田家を訪問している筈の兄を迎えに来たところへ、近藤党の討ち入りがおこなわれたのだ。

せまい廊下から、三人が、ほとんどつかみ合うようにもみ合い、玄関傍の板戸を蹴やぶって前庭へころげ出たとき、山口半左衛門が刀をふりかざして馬屋の方向から走って来た。

ここで、造酒之助と郷右衛門。又市と半左衛門との決闘が開始された。

屋内では……。

池田七郎左衛門と近藤源太兵衛が烈しく闘っている。

この決闘の最中に、池田の妻と女中が源太兵衛へ組みついたので、仕方なく、源太兵衛は女二人を手にかけた、という説もある。

池田は、いままで浅田十兵衛と碁を打っていた十畳の座敷へ逃げこみ、長押にかかっていた薙刀を取るや、

「うぬ!!」

決然と振り向き、源太兵衛を迎え撃った。

池田は剣術よりも薙刀が得意であったから、この武器をつかむことによって、

(よし、返り討ちにしてくれる)

闘志に燃えたったのであろう。

池田の薙刀が源太兵衛の大刀を叩き落した。

源太兵衛は、すぐさま差ぞえの脇差を抜いて闘ったが、

「えい、おう!!」

咆哮してあばれまわる池田七郎左衛門に圧倒されかけている。

一方、浅田十兵衛邸へ討ち入った高橋、小山田、山本はどうしたろうか……。

彼らが打ちこんだとき、すでにのべたように浅田十兵衛は隣家の池田をたずね、碁を打っていた。

両家は庭をへだてた低い土塀へつけた潜門でつながれ、たがいに、自由に往来している。

そして、弟の郷右衛門と若党・半左衛門も、火事さわぎを知らせるため、潜門から池田家の敷地へ入ったところであった。

小山田清左衛門は、小間物の行商人として何度も村岡へ来ていたし、二度ほど浅田十兵衛の顔を見たことがある。

門前へ出て来て、山名家の番士たちと談笑している姿を目撃し、のちに番士たちへ取り入って商いの品物をやったりしながら、たくみに、はなしをもってゆき、先刻、彼ら(番士)と語り合っていたのが、この家の主人であることをつきとめていた。

だから、小山田を先頭に、三人が邸内へ駈けこんだのである。

下女や小者が悲鳴をあげて逃げ走る中を、三人は刃をふるいつつ、部屋から部屋へと浅田十兵衛をさがしまわったが、

「おらぬ。おのれ、どこへ……?」

小山田が歯ぎしりをした。

屋敷といっても、母屋は七間ほどの小さなものだし、

「十兵衛の弟もおらぬらしい」

「おい、小山田。と、となりへ逃げたのではないか」

「こうしていてもはじまらぬ。すぐにも山名の手の者が駈けあつまって来よう」
「ともあれ、となりの池田屋敷へ……」
「よし!!」
駈けまわりつつ、叫びかわし、三人は再び玄関口へ出た。三人とも庭に潜門があることを知らなかった。
浅田の門を出た三人は、すぐに池田屋敷の門内へ駈け入った。
山名家の番士四名が、ようやく近藤党の討ち入りに気づいた。
〔火事さわぎ〕は頂点に達していたが、町の入口のあたりのさわぎはしずまりかけている。すさまじい煙の原因がつきとめられたからであった。
三人が池田の門内へ駈けこんだのを、
「待て!!」
「こやつ、何者だ?」
番士たちが抜刀して、小山田ら三人へ斬りかかった。
番士の一名が、急を知らせに陣屋へ走り去った。
門内から玄関口へかけて、小山田ら三人と番士たちの斬り合いがはじまった。
このとき、山田又市と半左衛門。北条造酒之助と浅田郷右衛門の決闘は、互いに軽傷を負いつつ、玄関口から垣根をこえ奥庭へ移動している。
その奥庭に面した十畳の座敷では、近藤源太兵衛が、またも脇差を叩き落されてしまい、仕方なく池田七郎左衛門の腰へ組みついたので、池田も薙刀をさばきかね、
「おのれ、うぬ……うぬ、こいつめが……」

ついに薙刀を捨て、源太兵衛と引き組み、座敷の中をころげまわりつつ格闘している。
半左衛門が顔から肩にかけて血みどろになり、山田又市に圧倒されかけたとき、又市はこの敵を捨てて反転するや、造酒之助と闘っている浅田郷右衛門の背中を浅く斬った。
「み、造酒。早う、かたき……」
と又市が叫んだ。叫んだつもりだが声にならぬ。しかし、造酒之助はすぐさま、うなずいて縁側へ飛びあがった。
このとき、近藤源太兵衛は池田七郎左衛門に組み伏せられていた。
池田は落ちていた脇差をつかみ、組みしいている源太兵衛を二度三度と突いたが、鎖襦袢にさまたげられて致命的な打撃をあたえることができないでいる。
そこへ……。
「やあ!!」
縁側から屋内へ入って来た北条造酒之助が、池田七郎左衛門の後頭部を横なぐりに斬りはらった。
あたまから血を噴出させ、池田は脇差を落し、両腕を天井を突きあげるようにして腰を浮かせたが、たまらず転倒した。
組み伏せられていた源太兵衛が起きあがり、脇差をひろって池田七郎左衛門の躰へのしかかり、
「あ、兄のかたき……」
唸るようにいい、とどめを突き入れた。
池田が、わずかにうめき、そのまま、ぐったりとなった。

その態を見てから、造酒之助は庭へ引き返した。
山田又市は手負いの浅田郷右衛門と闘ううち、よろめくように刀を突き入れて来た半左衛門に脇腹を刺され、さらに郷右衛門の一刀を額にうけて、倒れかけている。
造酒之助が、又市へ次の太刀を打ちこもうとしている郷右衛門の背後から刃をたたきつけた。
浅田郷右衛門が、がくりと両ひざをつき、戦闘不能となった。
若党の半左衛門は、地に伏せたまま、あえいでいる。手傷も負っている上、疲労しつくしてしまったらしい。
「十兵衛は？」
と、近藤源太兵衛が大刀をひろって縁側へ出て来た。
そこへ、番士たちを斬り捨て、または追い散らした高橋ら三名が駈けつけた。
池田邸内を、六名が残る敵の浅田十兵衛をさがしまわったが、ついに発見できぬ。
浅田は自分の屋敷か、また戸外へ逃げたのではないかとおもったが、事態は切迫している。
近藤党の討ち入りを陣屋へ知らせに走った番士がいるのだ。
「これまでじゃ……」
荒い呼吸を吐きつつ、近藤源太兵衛が、
「兄へ、直接に手を下したという池田七郎左を討ったからには、これでよい。さ、引きあげい」
と、いった。
池田の死体から髪の毛が切りとられ、これをしっかりとふところへしまいこんだ源太兵衛を中心に、六人が門へ向った。
山田又市は刀を杖にしている。かなりの重傷であった。

「又市どの、大丈夫ですか」
「造酒どの、案ずるな……」
血と汗と泥にまみれた六人が門外へ出たとき、すでにあたりは暗い。
夕闇が夜の闇に変ったその中に近辺の人びとが群れあつまり、六人を注視している。
わあっ……。
喚声が陣屋の方向から、こちらへ近寄って来た。
山名家の士三十名ほどが槍と松明をふりかざして、肉薄して来る。
六名は走り出した。
逃げたが、包囲された。
せまく、折れ曲った街路で双方がぶつかり合い、芋を洗うような混戦となった。
退去のときの混戦で、近藤党六名は離れ離れになったが、近藤源太兵衛、北条造酒之助、小山田清左衛門の三名が因幡との国境近くの山中に出会い、蒲生峠まで来ると高橋喜兵衛、山本五郎兵衛が追いついて来た。
けれども、山田又市の姿は、ついに再び見ることを得ない。
重傷の又市は、混戦中に或る町家の中に逃げこみ、とても脱出は不可能だとさとり、脇差で胸を突き、自殺をとげた。
山名家の士が駈けつけたとき、まだ、かすかに息が通っていて、口をうごかしているので坂井某という者が耳を近寄せると、
「みきどの……さらば……」

という又市の声が、わずかにきこえたという。

山田又市の死を知ったときの北条造酒之助の悲嘆はさておき、無事に鳥取藩の領内へ逃げこんだ近藤党五名は、鳥取藩（松平家）に引き取られた。

下総・佐倉から肥前・唐津へ移っていた旧主の松平和泉守まで、近藤党が送りとどけられた折には、鳥取藩が、騎馬十八、足軽五十、雑兵二百余をもって護送し、近藤党は八年前の不評などを完全に忘れきったかのような大歓迎をうけて唐津へ迎えられたのである。

ところで……。

死をまぬがれた一人の敵（かたき）・浅田十兵衛はどうしたかというと、彼は戸外へも自邸へも逃げたのではなかった。

浅田は、池田屋敷内の風呂場へ逃げこみ、水が張ってある風呂桶へもぐりこみ、あたまの上へ蓋をかぶせたまま、近藤党が引き上げて行くまで、息をころして隠れていたのだ。

小山田清左衛門と山本五郎兵衛が、風呂場をのぞいたのだが、蓋がしてある風呂桶の中まであらためなかったのは、未熟というよりほかはない。

小山田清左衛門が後年、正直に、こういっている。

「拙者、斬り合っている最中は、夢中で、すこしも恐ろしくなかったが、池田七郎左衛門が討たれて、斬り合いが一段落し、残る浅田をさがしまわっているうち、山名家の討手が駈けつけて来ることを考え、急にぞっとするほど恐ろしさがこみあげて来て、一時も早く逃げのびたいとおもいました」

坊主雨

一

夕飯のときは、酒が一合つく。

恩師の蜂賀大学は飲まないから、師の膳と向い合せのまま入江長八郎は手酌で、ゆっくりとのみはじめる。

一合の酒をのみ終えると、下女が熱い汁とめしを運んで来て、これを合図に、奥の部屋から師の蜂賀大学がふらふらとあらわれ、

「今日もごくろう」

やさしく、声をかけてくれる。

この一言で、長八郎は一日の疲れも苦労も忘れてしまう。師は、二年ほど前から労咳（肺病）にかかっていて、道場へ出て竹刀をにぎることもできなくなっていた。したがって、この道場へ住みこんでいる高弟の入江長八郎が、師に代り、門弟たちへ稽古をつけているのだが、

「蜂賀道場も、もう駄目だ」

以前には七十余名もいた門弟たちも減るばかりで、いまは、小旗本の子弟が少しと、あとは町家の若者たちが合せて二十名ほどになってしまった。

それでも、二十四歳の長八郎にとっては道場の維持経営にも気をつかわねばならぬし、何かと門弟の数もふやしたいと考え、稽古をつけるときもずいぶんと神経をつかい、

「何とか評判をとるようにしなくてはならぬ」

懸命であった。

辛いことは辛いが、老いて病みおとろえた師匠はよろこんでくれているし、旗本屋敷へ奉公をしている兄の栄之助も、ひまがあれば訪ねて来て、

「しっかりやれ。老先生は、この道場をお前にゆずって下さるそうではないか」

「はあ……」

「ありがたいことだ。なんといっても、このひろい江戸に、東軍新当流の剣術をつたえる道場は、ここ一つだそうな。おれも肩入れする。一生懸命にはげめよ」

ちから強く応援をしてくれるし、俸給も大してもらっていない筈なのに、兄はよく小遣をくれたりする。

贅肉がなく、鞭のようにしなやかで、しかも、強靱な長八郎の体軀とは反対に、兄の軀にはふっくらと肉がついており、黒目がちの愛嬌たっぷりな顔だちであった。

父の代からの浪人ぐらしで、兄弟ふたりきりであったが、

「おれの身の上がこれでは、長男だからというて家名をつぐことも無益だ」

と、父はいい、少年のころの兄は、信州・飯山在の親類へもらわれて行ったことがある。この親類は金子惣右衛門という大庄屋だったが、五年前の父の死を機会に、

「どうしても、江戸で武家奉公がしてみたい」

兄の栄之助が信州から江戸へ戻って来た。

養家とも円満に話合いがついたらしいけれども、兄は長八郎へ、

「入江の家はお前がつげばよい。養家のたのみもあるし、おれは金子姓で通す」

と、いった。

だから、遠縁にあたる旗本・山口市之進の世話で、兄が堀内家へあがったときも信州・飯山出身の〔金子栄之助〕として奉公することになったのである。

そのとき、兄はいった。

「養家では、おれの戻ることをのぞんで籍をぬいてくれぬのだが……なに、おれは戻らぬ。なんといっても江戸がよい。これからは、どんな苦労をしても、兄弟二人でやってゆこうな」

その兄が急死をした。

ただの死ではない。

同僚に斬り殺されたのである。

この知らせを入江長八郎がうけたのは安永九年（一七八〇）二月十日のことで、彼は例のごとく、師と共に夕飯の膳に向っていたのだ。

堀内屋敷からの知らせで兄の変死をきいた長八郎が顔面蒼白となり、

「先生。おきおよびのごとくでございます。ごめんを……」

大刀をつかみ、駈け出ようとするとき、

「待て、長八郎」

蜂賀大学が厳然といった。

「兄の敵、討つまでは道場へ戻るな」

自分や道場のことは気にかけてはならぬ、と、いってくれたのである。

金子栄之助が奉公をしていた堀内五左衛門邸は、神田・今川小路にあった。

堀内は、いまのところ無役ながら千石取りのれっきとした幕臣で、裕福の家柄だというし、奉

公人も用人、侍から下男下女をふくめて三十名をこえる。

栄之助を斬殺したのは、中小姓をつとめていた坂田彦蔵という若者であった。

若党の島田益六の言によれば、

「七つ（午後四時）少し前でございましたろうか……坂田さんが金子さんの腕をつかむようにして、馬小屋の向うの土蔵の蔭へ入って行くのを見ました。その様子が只事でないので、妙だな、と、そのときは思いましたなれど、まさかに、このようなことになろうとは思いもかけず、私、何気なく、こちらで中間の平助と話しこんでおりますうち、土蔵の方で、そりゃもう、すさまじい叫び声がきこえましたので、ハッとして振り向きますと、金子さんが土蔵の蔭から突き飛ばされるようにふらふらっと、こちらへ……そのときはもう顔が血だらけで……すると、今度はうしろから坂田さんが飛び出して、倒れた金子さんの躰を踏みつけるように、こちらへ駈けて来ました。何しろ、血刀を抜いて、おそろしい形相をしていたもので……」

若党も中間も、立ちすくむかたちになったその横手をすりぬけ、坂田彦蔵は勝手門から逃走したのだという。

信州では、飯山城下の道場へ通い、一刀流をまなんだとかきいているし、剣術の心得もある筈の兄が、頭からひたいへ一カ処、腹に一カ処の深手を負い、間もなく息絶えたときいて、

「あ、兄上、兄上……」

邸内・長屋の一間に横たえられた兄の死体へ取りすがるようにして、入江長八郎は涕泣した。

その悲嘆が、兄を殺した坂田彦蔵への怒りを層倍のものとしたのはいうまでもあるまい。

間もなく、長八郎は書院へまねき入れられ、この屋敷の主人夫婦から悔みの言葉をうけた。

「金子は、よう気もつき、精を出して相つとめてくれたに、残念なことをいたした」

と堀内五左衛門がいった。

堀内は五十五歳。病身ときいていたが、ひょろりとした躰つきの、おだやかそうな人物である。夫人の伊津子は四十がらみの大柄な婦人で、これは、ふくよかな顔貌に血をのぼらせ、

「にくいにくい坂田彦蔵めを、かならず討ちとって下さるよう」

叫ぶように、たまりかねた口調で長八郎へよびかけてきた。

（奥様もこのように兄の死を惜しんで下さる。兄は、一生懸命に御奉公をしていたにちがいない）

兄の死体は、縁者の山口市之進が引きとり、ここで葬式を出した。

同じ旗本でも、山口は千石取りの堀内家とはちがい、大番組に属して百五十石の小身だし、屋敷は本所・石原町にあった。

通夜は、その夜におこなわれたわけだが、堀内夫人の伊津子が中年の女中をしたがえ、駕籠で本所まで来てくれたのには、入江長八郎はむろんのこと、山口市之進も大いに感激したものだ。

逃走した坂田彦蔵の行方は、まったく知れなかった。

二

山口市之進は、入江兄弟の亡母につながる縁者なのだが、

「立派に兄のかたきを討て」

ちからを入れてくれ、〔仇討ち〕のための手つづきにも奔走し、さらに、「坂田彦蔵の実家をさぐらねばなるまい」と、いった。

彦蔵は、これも旗本の坂田半太夫の三男である。この殺害事件が起ると同時に、公儀の手によって下谷・二長町の坂田屋敷へも調べが行ったけれども、彦蔵が実家へ立ちまわった様子はない。

「だが、油断はならぬ。彦蔵としては行くべきところがないのだから、いずれは実家へ忍んで来るにちがいあるまい」

というので、山口市之進は本所界隈でも顔の売れた御用聞きで、伊兵衛という者に、坂田屋敷の見張りをたのんだ。このためには、山口も相当な物入りであったろう。

それとは別に入江長八郎も江戸市中を歩きまわって敵をさがした。

坂田彦蔵は、おそらく江戸からぬけ出してはいまい、と伊兵衛もいった。

堀内屋敷の奉公人たちから長八郎がきき出したところによると、彦蔵はまだ二十歳という若さで、これも奉公第一のまじめな青年であったらしく、口数も少い、どちらかといえば陰気な性質だし、実家以外に立ちまわる場所の見当もつかぬという。

（おのれ彦蔵。どこに隠れひそんでいるのか……）

長八郎は焦躁した。鉛色に変じた面に両眼が白く光り、頬骨が尖り、ろくに物も食べず、夜を日についで町々を探しまわっている。

事件があってから、たちまち十日ほどを経た。この間に、浅草・元鳥越の蜂賀道場では、蜂賀大学が病死している。寝たきりの病人でもなかったのだが、病状が急変したものであろうか……。

恩師の死を、まだ長八郎は知らない。

その日の午後……。

入江長八郎は思いもかけぬ女に出逢った。

今川小路の堀内屋敷を訪ねての帰途、駿河台から昌平橋へ出た長八郎を、

「もし……入江さまの長八郎さんじゃアございませんか」

声をかけられ、ぼんやりと歩をはこんでいた長八郎が、
「や……おつなさんか」
さすがに、まだ忘れてはいなかった。
おつなはもう四十をこえているのだろうが、小肥りの躰つきにも、まだ、どことなくなまめいたものが匂いたっているし、はきはきとした言葉づかいも以前のままであった。
「ま、ほんにお久しぶりでございますねえ」
「元気らしいな」
「はい、おかげさまで」
八年ほど前、この女は長八郎の家に住んでいたことがある。
それは、長八郎の母が亡くなってから一年目の夏が来ようとするころで、父がおつなをどこからか連れて来たのだ。
「女中がわりに、な」
と父は微妙な苦笑をうかべつつ、おつなを紹介したものだが、老いて尚、そのほうでは旺盛だった父の欲求をみたすために住みこませたのだということは、長八郎にもわかった。
おつなの前身はよく知らぬが、半年ほどして何のことわりもなしに彼女が消えてしまったとき、
「なに、よいのさ。どうせ、いかがわしいところから拾ってきた女だ」
ちなみにいうと、このころ、栄之助は信州にいたし、だからおつなは兄の顔を見たこともなかったけれども、当時十六歳だった長八郎のめんどうは、よく見てくれたものだ。
父も病床につく前は、種々雑多な内職にくびを突込み、浪人者にしては世事にも長じ、書もまいというので、父子二人の暮しには困らなかった。

それだけに、父は酒も女あそびもさかんなもので、長八郎もこれには辟易したものだが、
「長八郎さん、長さん……」
なれなれしくよびかけては人なつかしげに世話をやいてくれるおつなには、
(いやな……けがらわしい女め)
思いつつも、つい、
「明日は、豆腐の味噌汁が食べたいな」
などと、甘えてしまう。
事実、おつなが来てからは、家の中が見ちがえるようになり、朝夕の膳に向うのがたのしみにさえなったものだ。
だから、おつなが消えてしまったとき、
「父上。小母さんをさがして来ねば……」
長八郎がいうと、
「かまうな。逃げたのじゃ、あの女……」
「はあ……？」
「わしも老いてなあ。うは、はは……あの女、もう、わしでは食い足りなくなったのじゃろうよ」
「くいたりぬ」
「ふ、ふふ、お前も大人になれば、そのわけがわかるさ」
それから八年目の再会なのである。
「ま、こんなところで立ちばなしもできませんから……」

おつなは、昌平橋の上から長八郎を、湯島横町の「千草(ちぐさ)や」という茶づけ屋へさそい入れた。
徳川の天下統一成って、日本国内に戦火絶えてより約百六十年。食生活のゆとりが味覚(みかく)の奢(おご)りをよび、近年の江戸市中には先を争うように、種々の食べもの屋が店をひらきはじめている。
茶づけ屋もその一つで、温飯に季節の魚菜をそえ、客に供した。
「あのころからあなたは、お父さまのお相手をしていらしたんですから……」
と、おつなはすぐに酒を注文し、入れこみの大座敷の一隅へ席をしめると、
「どうなさいました？　ひどくお疲れのようで」
「そう見えるかね？」
「あい」
「ときに小母さん。父上は亡くなったよ。五年前に……」
「ま、さようで……フム、さようでございましょうねえ。あのころから、だいぶ、お弱りになっていらっしゃいましたものねえ」
「そうだったかな」
「これはまあ……」
おつなは顔を赤らめたが、
「それはともかく、少しも存じませんで……」
神妙に、あたまを下げた。
「おつなさんは、いまどこに？」
「へえ。相も変りませずで……それでもいまは、小女(こおんな)ひとりを使い、浅草で甘酒やをやっているんでございますよ」

「一家の女あるじか……それはよかった」
「あなたさまは？」
「ほれ、あのころから通っていた剣術の道場へ、いま住みこんでいるのだ。師匠が病気ゆえ、かわりに門弟たちへ稽古を」
「そりゃまあ、大したことで……」
「先頃兄が死んでな」
「へえ……あのころ、どこか遠国の御親類へ行っていらっしゃったとか……」
「うむ……その兄がな……」
いいかけたとき、小女が酒と料理をはこんで来た。
「ま、おひとつ」
おつなの酌で盃をとったとき、
(この女に語ったところで仕方もないな)
長八郎は、今度の事件へはふれぬことにした。
おつなもまた、顔を見知らぬ兄には関心がないらしく、
「急に、あったかくなりましたねえ」
「うむ。春だな」
「ぼーっと、何かこう、空が白っぽくけむったようになって朝晩に水をつかっても苦労でなくなりましたし……」
それでも懐石(かいせき)ふうに、盆の上の皿、小鉢へ気取ってもりつけられたみる貝とわけぎの白味噌あえや、木の芽をあしらった甘鯛の焼きものへ箸をつけつつ、長八郎もおつなへ酌をしてやった。

昼飯をぬいているので、さすがに空腹だったし、酒のほてりと一緒に、どっと疲労が出てくる感じであった。

（それにしても……）

おつなのおしゃべりに相槌をうちながらも、長八郎は顔をしかめた。

それは、堀内屋敷の自分へのあつかいが、急に変ったからである。今日も堀内邸を訪ねたのは、敵の坂田彦蔵の所在について、何か新しく耳に入れることがないだろうかと思い、立ち寄ってみたまでであるのに……。

「もう何も申しあげることはござらぬ」

と、家来たちも素気なくいうし、用人の鈴木老人も、とげとげしい口調で、

「これからは、当家も坂田彦蔵には何の関係をもたぬと思われたい」

すぐに帰れといわぬばかりなのである。

あれだけ、兄の死を悲しんでくれた夫人も出て来てはくれぬし、ほとんど門前払いというかたちで、長八郎は堀内屋敷を出たのだ。

「どうなさいました？」

気がつくと、おつながこちらをのぞきこんでいる。

「む……いや、何でもない。なに、いささかな、おもしろくないことがあったものだから……さ、小母さん、酌をしよう」

「おもしろくないといえば……」

と、おつなは盃でうけてから、また酒を注文し、あたりを見まわしながらの低い声になり、

「いえね、長八郎さん。あなただから申しあげますけれど、私の妹の子で……」

「おつなさんに妹がいたのか」

「へえ。これはまあ、私とちがって堅い女でしたけれども、下谷・二長町の坂田半太夫さまという御旗本へ御奉公にあがりましたところ、だんなさまのお手がつきましてね」

「さかた、はんだゆう……」

おそらく、入江長八郎の顔色は一変していたろうが、おつなは、これに気づかない。

「お手がついたといっても、百石にも足らぬ小旗本。ですけれど、男の子を生みましてねえ。この子が彦蔵という名をいただき、坂田家の三男坊として何とかまあ大きくなったとおぼしめせ」

「む……」

「大きくなって、さる御旗本へ御奉公に上ったんです。まじめな子でしてねえ。おふくろ……いえ、私の妹は二年前に亡くなりましたし、私もめったに顔を見たこともないんですが、その子があなた、つい先頃、同じ御屋敷の御家来を斬り殺してしまったんです」

三

新しい酒がきて中断したが、おつなのはなしは尚もつづいた。

「それでも坂田さまが御心配下されましてねえ……」

坂田彦蔵の父・半太夫から、ひそかにおつなのもとへ使いが来て、

「もしも、そちらへ彦蔵が立ちまわったなら、二長町の屋敷へ戻っては危ない。すぐにこれをわたして、どこかへ逃がすか、隠すかしてくれるよう」

と、半太夫の意をつたえ、金十両をもたせてよこしたそうな。

半太夫は、妾に生ませた三男を可愛がっていたようだ。

「それで、その……おぬしの甥ごの……その彦蔵、どのとやらは、まだ、姿を見せぬのか？」
長八郎は、つとめて自分の表情のうごきを見せまいと気をつかいながら、かすれた声できいた。
「それがあなた……」
おつなは唇を長八郎の耳へよせて、
「見えましたんですよ、一昨日」
「なに……」
「いえもう、ちゃんと、他人にはわからないところへ隠してしまったんです。だってあなた、甥が殺した、その金子何とやらいう男には何でも実の弟がいて、甥をさがしまわっているのだそうで……かたきうちをしようというんでございましょうが、そうはまいりません」
「ふむ……」
「そもそも彦蔵は……いえ私の甥は、曲った事が大きらいな性質でございましてね。その男を殺したというのも、つまりは、その金子何とやらが御屋敷の奥方さまと不義をはたらいていたのを……」
「何だと……？」
「不義密通でございますよ、長八さま」
と、おつなは長八郎の真剣な顔つきを親身のものと勘ちがいしたらしく、
「少し前に、坂田の家へ顔を見せたとき、彦蔵が父ごさまに、そっと相談をもちかけたそうにございますよ。金子と奥方さまの不義を知っているのは自分だけだが、何としたものだろうと……半太夫さまは、いま少し様子を見ていよ、大身の家柄だけに迂闊なことはできぬからと、こう申されたそうで……これは半太夫さまからのお手紙に、ちゃんと書いてございました」

胸にたまっていただけに押えきれなくなったのであろう、おつなは一気にしゃべった。
金子栄之助が〔長八さん〕の実兄だとは、知るよしもないおつなであるから、むかし半年も共に暮し、しかも自分に馴ついてくれた長八郎だけに、どっと心がゆるんだものか……。
「こ、ここは、おれのおごりにしてくれぬか、小母さん」
長八郎も必死である。尚も酒を注文し、おつなの口を割らせようとつとめた。
そして、ついに、兄の敵の所在をつきとめることを得た。
しかし、入江長八郎の心は重い。
（兄が……あの兄が主人の妻女と姦通をしていた……）
このことである。
現代とちがい、そのころ男女の不義密通は重罪であった。当人たちが死罪になるのはやむを得ぬとしても、周囲の人びとまで〔責任〕が転嫁されてとがめをうける。
だから、坂田彦蔵もうっかりとこれを洩らすわけにはゆかず、父・半太夫へのみ相談をもちかけたのだ、と、いうことになる。
（あの兄が、主人の妻女といまわしい不義を……）
考えもおよばぬことではないか……。
しかし、今日の堀内屋敷の気配が急変した様子を考え合せると、堀内五左衛門が夫人と兄の不義を知り、あわてて、これが世間へもれることをふせぎにかかったとも見てとれる。
（もしや、坂田彦蔵が手紙をもって、すべてを堀内様へ告げたのではあるまいか……？）
これは、その通りだったことが後に知れた。
さらに……兄の死に際して見せた堀内夫人の興奮も、考えてみれば異常なものではなかった

か……。

酒に酔い、しゃべりすぎたことを後悔しているらしいおつなから、くどくどと念を押され、茶づけ屋で別れた入江長八郎は、虚脱したように、なまあたたかい春の夕闇の中へさまよい出た。

彼が、本所・石原の山口市之進方の近くまで帰って来たのは、もう夜もふけてからで、

(明日は、坂田彦蔵の隠れ場所へ行き、真偽をたしかめてからのことだ)

と、そのころには、ようやく心もきまっていたようである。

気がつくと、霧のような雨がけむっている。

左は大川が黒くひろがり、右側は武家屋敷と御竹蔵で、あたりには全く人気が絶えていた。

「もし……」

突然、道に屈みこんでいたもの(長八郎は野良犬かと見た)が立ち上って、声をかけてきた。

「もし……入江長八郎どのか……」

「なに……?」

「坂田彦蔵です」

長八郎は驚愕し、何やら意味もわからぬ叫びを発して飛び退り、

「おのれ……」

抜刀して身がまえた。

「さ、早く」

坂田彦蔵が、ほとばしるような声で、

「早う、お斬り下さい。早う、早う……」

「な、なに……」

彦蔵は、長八郎の眼前まで這うように寄って来、くびをさしのべるようにした。

彦蔵のあたまには髷がなかった。まるまると剃りあげたばかりの坊主あたまなのである。彼の手や体に、刃物らしきものが何一つないのが判然としていた。

「早く願います、早く願いますッ」

両眼をとじ、合掌しながら、彦蔵がわめいた。

兄のかたきが、みずから首を討たれに出たのである。

「む……」

かまえた刀が、長八郎にはどうしても打ちこめなかった。

「人を殺したとき、武士たるもの、みずから腹切って死ぬべきが本当のこととされています。なれど、私には出来なんだ。早う……早く決心かわらぬうち、この、この首を討って下され」

彦蔵には、以前、兄をたずねて堀内屋敷へ行ったとき、二度ほど顔を合せたことがある。

右の小鼻のわきに大きな黒子のある、まだ少年のおもかげがほのかに残っているような童顔を、長八郎は闇の中に見すえ、

「なぜ、兄を斬った?」

「……」

「あ、兄が堀内様御内室と、ふ、不義をしたと……そりゃ、まことか」

「あなたは、それを、だれから……?」

「では、やはり……まことのことだったのだな……」

長八郎のつかんでいる刀の切先が、だらりと地へ垂れた。

四

この夜……。

入江長八郎は、ついに坂田彦蔵を討つことができなかった。

彦蔵は、おつなの縁類にあたる戸塚村(現在早稲田のあたり)の百姓・八十吉方の物置へかくれていたそうだが、これからの逃亡の人生を想い、さらに殺人の罪をおもって、長八郎に斬られる決意をかためたという。

二十歳の若者にしては出来すぎた決心というべきであろう。

封建時代の〔敵討制度〕というものは、国境がいくつもあった当時の国情が生んだ〔無言の法制〕であって、討つものも討たれるものも、その苦労は言語に絶する場合が多い。

坂田彦蔵は、この夜、坊主姿になって江戸をぬけ出すといい、百姓・八十吉にあたまをまるめてもらったのだそうだが、その底意には、亡き金子栄之助の冥福を祈るこころがひそんでいたことはいうをまたない。

さらに……

栄之助の不義一件は事実であった。

彼が、屋敷内の夫人寝所へ忍んで行くのを彦蔵が目撃したのは、去年の夏のころで、丁度、主人の堀内五左衛門が熱海へ湯治に出かけた留守中のことだそうな。

手びきは夫人附の中年の女中でこうというものがしたらしい。その後も、両人の不義は、上野池ノ端の出合茶屋〔笹や〕において度々おこなわれたことも、彦蔵はたしかめている。

堀内夫人は、前に彦蔵をもさそったことがあり、

「わるいようにはしませぬ。身のまわりにも不自由はさせませぬし、そなたの行末もよくよくめんどうを見てあげるつもりゆえ……」

そのかわりに、あぶらぎった中年女の性欲をみたせ、というわけだ。

家つきむすめに生まれ、病弱な養子の夫を迎えて、二女を生んだ夫人であるが、そのうち一人は病死している。

不義姦通の発覚を心配した坂田彦蔵が、あの日、土蔵の蔭へ栄之助を引きこみ、

「当家への御奉公をやめていただきたい」

と、迫ったのは、主家への忠義だてにはちがいないが、主人・五左衛門は彦蔵の性格を愛し、中小姓という役目柄、片ときも身辺をはなさぬ〔秘書〕として重く用いていた。

この主人の信頼に対して、彦蔵が主家をおもう心が並々でなくなってきたのは当然であろう。

で……。

彦蔵の詰問に対し、金子栄之助は、こういったそうである。

「子供のくせに、よけいな気を病むな」

この一言で、彦蔵は逆上し、いきなり脇差を抜き打った。

栄之助も「まさか……」と思っていたろうし、はずみというものは恐ろしいもので、第一撃が栄之助の脳天へ致命傷をあたえてしまった。

「殺すつもりはありませんでした。うらみもありません。私、ただもう逆上……」

興奮していいつのる坂田彦蔵をそのままに、入江長八郎は刀をさげたまま走り出していた。

「あっ……お待ち下さい。入江どの。お待ち下され!!」

はね起きて、ぬれ鼠のような旅僧姿の彦蔵が後を追った。

長八郎は、夢中で走った。
（兄が……あの兄が……）
その夜、長八郎は石原の山口宅へ戻らなかった。
そして翌日。池ノ端の出合茶屋〔笹や〕方へあらわれて、女中に金をつかませ、兄と堀内夫人の不義が事実であったことをたしかめるや、彼の姿は江戸から消えた。

十五年の歳月がながれた。
すなわち寛政七年の秋も暮れようとする或る日の午後のことだが……
北国街道・屋代宿外れの雑木林の中で、旅の浪人者四人が、すさまじい斬り合いをはじめた。
一対三の決闘であったが、三人を相手に中年の浪人者はよく闘い、一人を傷つけたけれども、ついに斬殺され、三人は死体を放り捨てたまま、どこかへ逃走してしまった。
目撃していた百姓の和佐松というものが、宿役人へ語ったところによると、
「なんでもはあ、酒の上の喧嘩らしく、口汚なくののしり合って、そりゃもう乱暴なもんで……」
だという。
なるほど、中年浪人の死体にはまだ酒の香が残っていたし、旅にやつれた灰色の顔には二カ所も古い切傷が見られた。
むろん名も身状もわからぬ。
宿役人たちは、こうした場合、いつもするように、この無惨な死体を雨宮村に近い山林の中にある小さな寺へ運びこんだ。
寺の名を〔桃青寺〕という。

ここに、七年ほど前から住みついた僧が、いまは住職となり、無縁仏や行き倒れの死体のめんどうをよく見てくれるのである。
了誉という和尚は、まだ四十前の年齢だそうだが、ときには、
「六十をこえた老僧……」
にもみられるらしい。
しわの多い顔だちで、小鼻のわきに大きな黒子がある。
了誉和尚は、担ぎこまれた中年浪人の死顔を見るや、凝然として合掌し、ややあって、
「たれが蒔いた種やら……」
ひくく、ひくくつぶやく声が、傍の小坊主の耳へ入った。
死体が、裏山の土に埋められた。
夕暮れになって、小坊主が和尚によばれ、竹林にかこまれた居間へ入って行くと、了誉が白木の墓標へ筆をはしらせている。
のぞきこんで、小坊主が目をみはり、
「和尚さま、それは、さっき埋めましたお人の……？」
問うと、了誉がうなずき、
「わしも、このお人も……たれが蒔いた種やら……」
また、つぶやくのがきこえた。
墓標にしるされた文字は、
〔俗名・入江長八郎之墓〕
である。

波紋

「和尚さま、ごぞんじのお人でござりましたのか？」

和尚は、こたえなかった。

時雨(しぐれ)が、竹林をたたいてきはじめた。

一

三宅権十郎光少の衆道（男色）好みが何時からのものか、それは筆者も知らぬが……。

彼が三十になった寛永二年の秋、剣法指南役として朝倉家へ奉公をするようになって間もなく、

「堀端の妖怪に気をつけいよ」

と、藩士たちが、うら若い子弟どもへ冗談ながら注意をあたえたというから、すでに権十郎の衆道狂いは家中にひろまっていたものと見える。

〔堀端の化けもの〕とよばれたのは、権十郎の屋敷が三の丸外濠の一角にあったからだろうけれども、彼の容貌は別に〔化けもの〕あつかいされるほどのものではなく、針のように細く光っている両眼をのぞけば、その造作のすべてが大きく、厚く、たくましく、むしろ武士として立派な——と、見てよい。

二十歳のころ、大坂夏の陣へ出て猛戦したときの傷痕が七カ処ほど残っている体軀も堂々たるものだし、むろん剣士としての力量も相当なものであった。

大坂の戦役に豊臣家がほろび、徳川の天下となって十年目のそのころは、武士ばかりか町農民にいたるまで、生きてある人びとの気風が強く張りつめており、武道はすたれず、男色もむしろ流行の徴を見せていたほどだ。

三宅権十郎が〔化けもの〕にされる理由はない。

だが、

「先生に見つめられると、生き蛙をうのみにしたような気持になり、得体の知れぬ気味悪さが背すじへ這いあがってきて、木太刀をかまえることも忘れてしまう」

などと、権十郎に剣術を習う家中の若者たちは語り合った。

若者たち——それもまだ少年のおもかげを濃くとどめている者へ稽古をつけるとき、権十郎の面がぬめぬめとあぶらに光りはじめ、眼の光が凝って、厚い唇が見る見るうちに紅潮してくるのだ。

「えい、おう!!」

けだもののような叫びをあげて相手の木太刀を叩き落し、今度は組みつき、へなへなと倒れる弟子の若々しい肉体を押えこむと、もうなかなか放してくれない。

「どうだ、うむ……武士の卵ならば、はね返して見よ。さ、どうだ……うむ、どうだ」

何がどうだ、なのか知らぬが、汗とあぶらにぬれた顔や体を押しつけ、ときには先生の唇が、くびすじや頬に這いまわるのである。

こういうときの権十郎の体臭はひどく強烈なもので、稽古を見ている者たちまでが（生ぐさい）と、顔をしかめた。

「おれは、あのような妖怪に剣術を習うのはいやだ」

「おれはもう父上に申しあげて、稽古はやめにしたぞ」

いい出す少年たちが増え、そうなると家中の士も、

「子どもたちから袖にされるとはな」

権十郎を莫迦にしてしまい、剣法指南の威厳も稀薄になるばかりである。

長阪忠太夫の子で、折之進という者も、稽古をやめた一人だが、権十郎はこの美少年に対して狂おしいばかりの愛慕をよせ、何度も恋文を送りつけるし、夜がふけると長阪邸の塀外から口笛を吹いたりして、夢中であった。

寛永三年の晩春の或る日に、折之進が父からすすめられて、城下外れの草地へ乗馬に出かけ、雨になったので、

（これは、いかぬ。帰ろう）

馬首をめぐらしたとき、傍の榎の木陰から、ぬっと、三宅権十郎があらわれ、

「折よ。おれが文への返事はよこさぬつもりか」

といった。

白い雨の中に立ちはだかった権十郎の体からは腐魚のような匂いがただよっている。この遠州・掛川の城下へ来てから半年以上になるというのに、権十郎は一度も湯浴みをしたことがないらしい。これは権十郎の下僕、下女の口からもれたことで、いくら彼らが入浴をすすめても、

「きらいだ」

一言のもとに、はねつけてしまう。

長阪折之進は顔をしかめながらも、馬を下りた。師の前にいて当然のことをしたまでだが、権十郎は、いきなり大手をひろげて折之進を抱きすくめ、

「この思い、とげずにはおかぬぞ」

折之進の唇を千切れるほどに吸った。

「あ、あっ……」

たまりかねて、折之進が権十郎を突放し、馬へ這いのぼるのへ、

「これ、ようきけい」

三宅権十郎が凄まじい声をかけた。

「おれが願いをきかぬとあらば、きさまの細首をはねてくれる。忘るなよ」

十六歳の折之進は無我夢中で馬腹を蹴った。

帰邸したその夜、この少年は高熱を発し、そのまま寝込んだが、一カ月ほど後には憔悴しつくして骨と皮ばかりになってしまった。もともと体質が柔弱であったし、神経もか細い折之進なのに、権十郎は夜毎、塀外へ来て、例の口笛を吹いたり、手をまわして文をよこし、

「二人が内密事を他へもらせば殺す」

とか、

「いま一度、口を吸いたい、吸わせてたもれ」

とか、それはもう執拗をきわめた。

梅雨に入って、折之進の病勢は急にあらたまった。

彼の死後、父・忠太夫は一人きりの息子が書いた遺書により、その死因を知った。

「まさかに、これほどのものとは思わなんだ。わしも迂闊であったが、これは我家のことのみではない。権十郎を当家にとどめておくことの害は、はかり知れぬ」

忠太夫は、主君・朝倉筑後守宣正に、すべてを通じた。

「権十郎め、けしからぬ奴。ただちに押しこめよ」

と、殿さまも激怒した。亡き折之進は小姓をつとめ、殿さま夫妻の気に入りであった。

重臣たちも口々に「権十郎放逐」を叫ぶ。

こうなると、三宅権十郎は新参の士だけに、だれひとり味方になるものがない。

ちなみにいえば——。

権十郎の亡父・三宅玄蕃光久は、常陸・宍戸五万石、秋田安房守の家来で、大坂戦争では権十郎と共に真田幸村の猛襲を正面から受け、父子合せて十数個の首をとったほどの奮闘をしたのに、戦後、主人からの恩賞が少ないというので、

「三宅父子のはたらきを五万石では養いかねるのか!!」

見得をきって主家を飛び出し、浪人となった。

間もなく、玄蕃は病歿し、以来、権十郎は年少のころからまなんだ念流の剣法にみがきをかけ、かなり名を知られるようになったのを、幕臣・大久保彦左衛門忠教がきいて、江戸へよびよせ、

「おぬしが父・玄蕃は、わしもよう知っておる。どうじゃな、仕官をしては——今度、朝倉筑後守が加増になり、掛川の城主となるにつき、家来も増やさねばならぬということだ」

朝倉宣正は、二代将軍・秀忠の三男・徳川忠長付の家老であったが、このとき一万石の加増があり、計二万六千石を領して掛川へ封ぜられることになったのである。

大久保忠教の推挙で権十郎の仕官がきまったとき、朝倉宣正は、

「たのもしげなる武士ぶりじゃな」

大いに権十郎を買っていたという。

それだけに、屋敷へ押しこめられ、ふとい青竹を門扉に打ちつけられ、閉門の処置をうけたとき、

「武士たるものの衆道をとがめるとは、きいたこともないわ。おりゃ、主を見損のうていたぞ」

権十郎は火がついたように怒り出し、押しこめられてから四日目の夜、門を破って外へ躍り出し、

「おりゃ、目明きの主人につかえるわ。そのように筑後守へつたえておけ」

警衛の士卒五名を撲り倒して城下を出奔した。

このとき、士一名、足軽一名が、権十郎の棍棒によって撲殺された。

「追えっ。追って斬れ!!」

と、筑後守の怒りも只事ではなくなってきた。

「それがし、まいる」

ただちに応じたのは長阪忠太夫である。

我子の敵討ちはゆるされぬことだから、忠太夫は忿懣をこらえぬいていたのだが、この場合は主の命によって〔上意討ち〕となる。忠太夫は勇躍し、騎乗で城下を発した。

「忠太夫一人にては危うい」

重臣たちが、その後で相談し、三田源蔵、松好八右衛門が、つづいて出発した。二人とも朝倉家中では屈指の剣士である。

三宅権十郎は、このときの追跡をうまく逃れた。

ために、三田、松好の二人は掛川へ帰り、長阪忠太夫一人が若党・吸沢喜六、下僕・弥市をつれ、あらためて掛川を出て権十郎を探索することになった。

二

三宅権十郎は、一時、中国すじへ逃げたが、翌寛永四年の正月、大胆にも掛川城下を通過して相模・小田原へ入り、小田原郊外・一色村へ住みついた。

この村に長徳寺という小さな寺がある。

和尚は智山という老僧で、これが権十郎の亡父・玄蕃の従兄にあたる。

「何じゃ、権十郎。朝倉侯につかえていたのではないのか？」

と、智山は、まったく去年の事件を知らぬらしい。

「朝倉侯は、ひとかどの武人がたのむお方ではござらぬ」

権十郎は、事もなげにいった。

彼は、掛川を出奔したとき、撲りつけた二人の番士が息絶えたことを知らなかった。

長阪折之進も、いえば病死したのだし、罪を犯したとあれば閉門謹慎の身で出奔した一件のみだと考えている。

十年前、亡父と共に、旧主の秋田安房守へ悪態をあびせて出奔したときも、追って来る者はいなかった。

大久保彦左衛門なども、亡父が秋田家を出奔したことについて、

「腰ぬけの主人なぞは、こちらから見限るのが、まことの武士じゃよ」

などとほめてくれたものだし、力ある者の就職（しかん）は容易だという戦国のころの通念から、権十郎はぬけきれなかった。

だから、去年の掛川出奔のときも、彼は悠然と東海道を京へのぼったのだが、追手の三人は江戸へ向けて馬を飛ばせたので、権十郎をとらえることが出来なかったのである。

（腰ぬけどもめ、追手もかけなんだわ）

そのときは、むしろ気ぬけがしたほどだが、いまになると、

（掛川では、もはやおれのことを忘れているだろう）

と思い、さらに、

（しばらく、ここで様子を見てから、また江戸へ出て、大久保様をたずねてみよう）

しごく楽天的に考えていた。

家康以来、徳川の旗本として歴戦の勇をほこる大久保忠教は老いて尚、戦国武人の気風さかんで、朝倉家から権十郎出奔の件が通告されたときも、

「ただ一人の権十郎に追い討ちもかなわなんだか。こりゃ朝倉筑後も知れてあるわ。権十郎が逃ぐるのも無理はない」

笑い飛ばした。

だが世の中は、こうした大久保の気骨だの、権十郎の無謀だのに顔をそむけはじめていたのである。

諸国の大名たちには厭戦の気分が濃厚となるばかりだし、徳川将軍も三代・家光となり、その威風は、天下泰平をのぞむ大名たちの上にゆるぎないものとなりつつあった。

（そろそろ、江戸へ出て見ようか……）

と、三宅権十郎が腰をあげかけたのは春になってからで、その日、権十郎は酒匂川をさかのぼった西側にある沼へ鮒をつりに出かけた。

（よし、明日発とう）

釣糸をたれつつ、心をきめた。

長徳寺の小坊主たちへみだらなことをするので、今朝、和尚が権十郎を叱りつけたのが口惜しくてたまらないのである。

（出て行くときは、見ておれよ）

長徳寺へ放火するつもりなのだ。

いたずらですむことではない。
けれども、戦火が絶えてからまだ十年余という当時にあって、一度でも戦場の匂いを嗅いだ者の、世に容れられぬときの乱暴さは、この三宅権十郎などを一典型としてもよいのである。
やがて、権十郎は沼をはなれて帰途についた。
酒匂川の水は浅く、街道を来る旅人は徒歩渡りして川を越える。
この日、小田原へ入る最後の旅人が五人ほど、川を渡って来るのが見え、堤から一色村への道へ下りかけた権十郎は、
(や……?)
息をのんだ。
すでに、川を渡りきった二人は町民らしいが、まだ川水の中にいる三人の顔を、権十郎は忘れていなかった。
(長阪忠太夫だ!!)
見つけられたと思った。一色村にいる自分を斬りに来たのだと、とっさに感じた。
長阪忠太夫主従は、これまで江戸にいて権十郎を探しまわっていたのだが、ついに発見出来ないので、
「では、京へのぼって見ようではないか」
前日の早朝に江戸を発って来たところであった。
「来たか」
三宅権十郎は、釣竿と魚籠を投げ捨て、抜刀した。
ながい間、衆道好きも満足に果せず、武力の発散にも耐えていただけに、その鬱憤が激しい闘志に変って、

「うわあ!!」
咆哮しつつ川へ飛びこんだ権十郎が水しぶきをあげ、忠太夫へ肉迫して行った。
忠太夫が、これに気づき、若党と下男へ何か叫んだ。
若党の吸沢喜六が忠太夫の前へ出て刀をぬいたとき、権十郎の体軀が押しかぶさり、喜六の悲鳴があがった。
夕闇がたちこめている川面を、長阪忠太夫は必死で後退し、ようやくに柄袋をはねて、
「おのれ、権十郎……」
ふり向いて抜刀したが、もう遅かった。

三

長阪忠太夫と吸沢喜六が討ちとられたことを掛川へ報じたのは、下僕の弥市である。
弥市は夢中で川水の中へ伏しもぐり、三宅権十郎が、忠太夫の死体をさぐり、懐中の金を奪いとって逃走するのを見た。
こうなると朝倉家中のものの憤激は非常なもので、権十郎探索の志願者が五十名に達した。
朝倉筑後守は彼らに籤をひかせ、討手三名をえらんだ。
染川銀右衛門(二十二歳)上村貞八(三十七歳)井関角兵衛(三十一歳)である。
三人は、ただちに掛川を発した。
封建の世のことであるから、他国へ逃げた犯罪者を罰するためには、どうしてもこの手段に出るより仕方はない。これは敵討ちの場合も同様である。

事件も、ようやく世上へ知れわたりはじめたが、三宅権十郎の返り討ちは士道不名誉ではなく、この一事のみですんだら、むしろ彼の人気は上ったろうと思われる。

しかし、相手の死体から財布を奪ったのは致命的であった。

この一事のために、権十郎は仕官への望みが絶ち切られ、追手の刃を待つ浪人の境遇を脱すること不可能となった。

大久保忠教が、家来にいった。

「権十郎め、よもやあらわれまいが、来たら追い返せ。わしの槍先にかけぬことが、せめても亡父・玄蕃への心づくしじゃというてな」

逃げ隠れしているうちに、自分の評判をきいて、

(しまったことを……)

と、権十郎も後悔をした。

斬った忠太夫のふところへ手を入れたのは、彼の生存本能がそうさせたのである。

掛川を出て、一色村の寺へ落ちつくまでの流浪生活は一年にみたぬものであったが、

(武士たるものが、金を手にせねば生きて行けなくなった)

厭というほど思い知らされたものだ。

以前、亡父と共に浪人暮しをしていたころは、名ある旗本からの救助もあったし、知人たちも手をさしのべてくれた。いずれも三宅父子の武勇と過去の栄光に敬意を表してくれたのである。

それが変った。

いまの世には、武勇が暮しの手段とならぬのである。

それでも権十郎は、あきらめきれず、

「おたのみ申す」

二、三の旗本屋敷へ身柄引取りを依頼しに行った。

武士の意気地によって上意討ちの仕手を返り討ちにしたから、かくまってもらいたいというわけだ。

「たのまれたからには、もはや引けぬ」

という場合も例もある。むしろ戦争が絶えただけに武人の意気地や争い事が権十郎事件以外にも諸方で頻発していた時代であった。

一例をあげるなら、備前・岡山の松平(池田)家で渡辺源太夫を斬って逃走した河合又五郎を、幕臣たちが庇い立てして、岡山三十一万石の大名と対抗したことが、それだ。この事件は八年後に、荒木又右衛門を有名にしたわけだが、

「盗賊に用はござらぬ」

三宅権十郎の場合、どこへ駆けこんでも全く相手にされない。

それのみか、うかうかと江戸市中にはいられない状況となった。

どこの大名も、どこの旗本も、掛川藩に好意をもち、権十郎の所在がわかれば、

「朝倉へ教えてやろう」

という気配もある。

たまりかねて、権十郎は江戸を脱した。

翌寛永五年夏に、彼が但馬国・出石へあらわれるまでの足跡は不明である。

一度、一色村の長徳寺へ忍んで来、和尚から路用の金をもらって行ったが、

「二度と、わしが前へあらわれるなよ」

きびしく念を押されたらしい。

権十郎は名を変えた。

〔吉村〕と亡母の実家の姓をとり、名を〔長右衛門〕とつけたのだが、この物語は三宅権十郎でのべてゆきたい。

ところで——。

権十郎が、但馬・出石の庄屋・太田玉右衛門方の世話をうける動機となったのは、こういうことなのだ。

はじめ、諸国遍歴の剣客とふれこんで一夜の宿を乞うた。

この夜、盗賊七名が庄屋邸へ入った。

権十郎が、これに立ち向い、庄屋の下男たちと共に賊を追い払った。

権十郎のはたらきは水際立ったもので、

「よろしければ、いま少し御滞在を——」

庄屋・玉右衛門の信頼は、この一夜で絶大なものとなった。

権十郎が庄屋邸の庭で、近くの農民たちへ剣術を教えるようになったのは、それから間もなくのことだ。

出石は、但馬・豊岡の南方二里余のところにあり、丹後の国境にも近く、一日歩けば日本海の海鳴りをきくことも出来る。

権十郎にもはじめての土地だから、猟犬のような追手の鼻も嗅ぎつけにくいだろう、と思われた。

農民たちを相手の、のびやかな毎日がつづいた。

権十郎もさすがに、いままでの破局が、いずれも自分の男色によって惹起されたことに考えおよび、懸命に自戒をした。

出石の人びとが彼に寄せる信頼は、この年の暮れに、またも盗賊数名を権十郎が村から追い退けたことによって増大した。

浪人くずれだの、かつては戦さ馴れした足軽くずれなどの盗賊が諸方をうろついていたころで、農民たちの剣術稽古も熱心であったし、

(ここをのがしたら、いかぬ)

権十郎も、次第に世なれてきた。

さびしかろう、と庄屋がつけてくれた村の寡婦を、こわごわ抱いたのもこのころだ。

三十をこえた権十郎が、はじめて抱いた女体なのだが、それだけに、

(これも、悪うないな)

目をみはるおもいがした。

衆道は、大阪の戦場でおぼえたものであり、性欲の発散を、それによってわきまえた権十郎だけに、反って、

(女は、けがらわしい)

と、観念してしまったのである。

(出来れば、この出石で一生を終えてもよいな)

いや、それがもっともよいのだ。それよりほかに道はない。

権十郎の顔に愛想笑いが浮かぶようになった。

同時に、追手への恐怖が層倍のものとなった。

その追手だが……。

染川銀右衛門ほか二名の追手たちは、権十郎の足跡がつかめぬまま焦っていた。

ところが、寛永六年の春、京にいた三人の追手たちの耳へ、掛川から情報が飛んだ。因州・鳥取の城下に、権十郎らしい男がいるという。

これは、掛川へ来た旅商人から、掛川城下の旅籠屋〔ねじ金や平兵衛〕がききこんだものである。

三人、勇躍して鳥取へ向った。

京から丹波へ入り、福知山から山越えして但馬へ、そして権十郎のいる出石も知らぬままに通過し、豊岡へ泊した。

権十郎も三人が出石を通ったことを知らない。

豊岡には、杉原伯耆守の陣屋があって、このあたりの一要衝である。

三人は、旅宿の者の口から、出石の剣士について自慢気にきかされた。

(これは……もしや?)

鳥取にいるらしい権十郎はともかく、このあたりで評判の剣士をさぐって見る必要があると三人が思ったのは当然であろう。きいた顔かたちが、まさに権十郎を彷彿とさせたからだ。

今度こそ失敗がゆるされぬ。

何気なく、三人は宿の者に受けこたえをしておき、翌日、ひそかに出石近辺をさぐり、

(間違いなし)

と、きまった。

三人の追手が、庄屋邸の別棟に寝ている三宅権十郎を襲撃したのは、この夜であった。

三人とも、堂々と名乗りかけて乗り込んだのはよいが、

「盗賊じゃ!!」

はね起きた権十郎はわめきつつ、いきなり枕頭の法螺貝を吹いた。

すると、母屋の法螺貝がこれにこたえ、それからそれへと法螺の音が村中にわき起ったのは、かねて権十郎が盗賊侵入のときの用意に村民を訓練しておいたのが効果をあげたのである。

庭へ逃げた権十郎が、三人を相手に必死で応戦するうち、

うわあ……。

喚声をあげて、多勢の村民たちが獲物をつかんで押し寄せて来た。

「おのれ!!」

「権十郎、卑怯!!」

「みなの者きけい、この三宅権十郎は……」

三人が懸命に叫ぶ声も喚声に消された。

石が飛ぶ。棍棒がうなる。

勇敢なのは鎌や鍬をふりかざして、三人へ殺到して来た。こうなっては村民の襲撃をふせぐのが精一杯になってしまった。

権十郎は村民たちと共に襲いかかり、すばやく染川銀右衛門を斬り殪し、さらに上村貞八の腕を傷つけた。

結局、三人とも死んだ。

死体をあらためて見ると、どうも盗賊ではないらしい。

「こ、こうなっては……わしが、この村にいては迷惑がかかろう。なぜ、わしが、こやつらに襲

われたものか、それは知らぬ。おそらく人違いでもあろうが……とにかく、ここにいてはいかぬ。みなに迷惑をかけてはならん」

村人が引きとめるのを振り切って、

（あ……また旅へ出るのか……）

権十郎は嘆息を吐きつつ、夜も明けぬうちに出石から去った。

この後始末を出石の農民たちが、どうしたものか、それはつたわっていない。

三人の追手の死が掛川へ知れたのは、もう夏がすぎようとするころで、これも旅商人の口からもれたのだという。

三人の遺体は、出石に埋められてあった。

「またも権十郎に、してやられたのか」

と、世評が一変した。

「朝倉には武士がおらぬのか」

ということだ。

是非にも、権十郎の首を討たねばならぬ。討たねば二万六千石の大名が物笑いになってしまう。

「私めが、まいります」

名乗り出たものがいる。

亡き染川銀右衛門の弟・銀之助であった。

この場合、兄を討たれたのだから、〔敵討ち〕が成り立つわけだし、まだ十三歳の銀之助ではいたいたしい気もするが、屈強の助太刀をつけてやることによって、

「これは、やはり銀之助に討たせてやりたい」

筑後守や重臣たちの意向もきまった。

助太刀の一人に、銀之助の姉智で、下俣（しもまた）の郷士・千原佐市がえらばれた。佐市は山口流をまなんで剣術ではきこえた男だ。これに染川家の若党で浪川藤右衛門という屈強の者がつき、さらに側面から、三田源蔵、松好八右衛門が応援することになった。三田、松好の両士は、権十郎が掛川出奔のとき、長阪忠太夫と共に騎馬で追いかけたことがある。

五人の仕手（して）が掛川を出発したのは寛永六年の十一月であったが翌々年の八年に、あの駿河大納言事件が起った。

この現将軍家光の弟・徳川忠長の悲劇についてのべる余裕をもたぬが、

「駿河大納言のふるまい凶暴にして、去年より罪なき士を殺すこと多し、これ全く狂癲（きょうてん）のするところなり」

というのが表向きの理由で、忠長は将軍の命によって甲府へ押しこめられ、朝倉筑後守も、輔佐の責任を問われて領地没収の上、松平忠明へ預けられてしまった。

三宅権十郎の行方は、まったく知れなかった。

四

寛永十一年十一月七日に、伊賀・上野で荒木又右衛門・渡辺数馬が、河合又五郎を討ち、敵討ちと亡き主君の恨みを同時に果した。

この敵討ちの背後には、大名と幕臣との抗争もあっただけに万事が派手にあつかわれ、又右衛門の名は、一躍、天下に知れわたったようだ。

荒木たちの成功を、染川銀之助はどのようにうけとったろう。

朝倉筑後守は、まだ大和・郡山の松平忠明へあずけられたままで、家臣たちも四散してしまい、助太刀についていた三田・松好の二人も、いつの間にか、どこかへ消えてしまった。

それでも尚、染川銀之助が病弱の身をよく耐えて、権十郎を探しつづけていたのは、これが殿さまの命によってというよりも、あくまで彼が亡兄・銀右衛門の敵だったからである。

まだ若くて死んだ銀右衛門ではあるが、銀之助にとっては父がわりのやさしい兄であった。

「どこまでも、やりぬけ」

と、はげましたのは姉智の千原佐市で、敵討ちの費用は、この千原家がまかなってくれた。

寛永十二年となった。

三宅権十郎が出石を逃げ、消息を絶ってから六年を経過している。

染川銀之助は、十九歳になっていた。

この年の秋に、銀之助たちは何度目かの大坂へ来ていたが、

「来春まで、少し体をやすめておいたほうがよろしい。その間に、私も故郷へ帰って、いろいろと家の始末をつけて来たい」

と、千原佐市がいい、銀之助と若党の浪川藤右衛門を大坂・釣鐘町の旅宿へ残し下俣へ帰って行った。

六年の旅で、銀之助は疲労しつくしていたのである。

「もしも……」

と、千原佐市は出発に当って念を入れた。

「万が一にも敵の消息がわかったなら、必ず、私に知らせてから……いや私が戻ってからのことにすることじゃ、よいな」

「わかりました」

こたえたが、皮肉にも義兄千原が大坂を発して三日目に、

「権十郎が歩いておりましたぞ」

外出していた藤右衛門が興奮して旅宿へ駆け戻った。

彼は、錫屋町の大坂城代下屋敷の塀外を通る三宅権十郎を見かけた。ほとんど正面から行き合ったのだが、権十郎は、この染川家の若党の顔をおぼえていないらしく、連れの武士と共に談笑しつつ南へ行く。

藤右衛門は後をつけ、権十郎が玉造の、俗に墓ノ谷とよばれる寺院の多い町の一角にある町道場へ入ったのを見とどけ、近くの天竜院という寺の門前の茶店へ入り、それとなく亭主から、きき出したところによれば、

「名も吉村長右衛門とあらため、二年前から道場をひらき、繁昌のよしにござる」

であった。

二人は相談し、藤右衛門の意見で、とにかく千原佐市へ知らせることが第一と決し、藤右衛門は夕暮れになったのもかまわず大坂を発し、千原の後を追った。

「くれぐれも、手出しはなりませぬぞ」

と、藤右衛門はきびしくいい置いて出たのだが、銀之助は、たまりかね、数日後の朝、旅宿の主人を説きふせ、その縁類の者というふれこみで、玉造の権十郎宅へ向った。

剣術の稽古に通いたい、というのである。

旅宿の主を木口屋勝六という。

木口屋は、

「旅先のことで保証人もおらぬので、こなたへたのむ。連れの者が戻るのは来春ゆえ、それまでが所在ないので、剣術をまなびたいのだ」

と、落ちついていう銀之助の言葉をうたがう様子もなく、すぐに引きうけてくれた。

三宅権十郎は銀之助を見るや、

「ならばその連れのものが戻るまで、この道場に寝起きしたらいかが？」

と、すすめた。

まったく見おぼえていないらしい。権十郎が掛川にいたころ、銀之助は十歳の子供だったし病弱で寝ていることが多く、剣術の稽古もあまりしたことはないが、こちらでは権十郎を何度も見かけている。

（それにしても……）

と、銀之助は、子供心におぼえている権十郎の風貌が一変していることに気づいた。顔かたちが変ったというのではない。あのころの肩を怒らせた細い眼をきらきら光らせつつ、掛川の城下を、まるで物を突き飛ばすような勢いで歩いていた三宅権十郎のイメージが変ってしまっていたのだ。

血色のよい顔つきもなごやかだし、口のききようも丁重で、しずかなものだ。

このときの権十郎は妻もあり、主馬といって七歳になる男子をもうけている。毎日のように入浴もするし、ひげも剃る。門人は大坂在番の幕臣もいるし、町家の者もいて、これに対する稽古の仕様も、しごく穏当なものだから評判もよかった。

玉造へ道場をかまえることが出来たのも、京橋口の油問屋・加島屋惣左衛門の肩入れがあったというから、権十郎の世渡りも、かなり巧妙になってきている。

また、そうしなくては生きて行けなかったので、これは、酒匂川で長阪忠太夫の金を奪いとったのと、彼の場合は同じことなのである。

（見破った上で、住み込ませようというのか……？）

はじめは一応うたぐってみた銀之助も、思いきって権十郎の言葉にしたがうことにした。

何事もなく、数日がすぎた。

しかし、復讐の殺意と、それを何気なく隠していることによって、銀之助の緊張は非常なものとなり、ついに発熱し、寝込んでしまった。

「よく面倒を見てつかわせ」

と、権十郎は家のものへいいつけ、

「その体では稽古のことも、よほどにうまくせねばなるまいな。よし、よし。元気になったら、わしがゆるりと手をとって教えよう」

銀之助へ、やさしくいった。

十日ほど寝ているうちに、銀之助も落ちつき、

（藤右衛門は義兄に追いついたろうか。大坂へ戻るのは、いつだろうか）

その日が待たれて

（よし、明日は起きよう）

運んでもらった熱い粥で夕飯をすまし、早目に寝入ったのが十一月四日であった。

ぐっすりと眠っていたのだが、異様な感触をおぼえて、銀之助は目ざめ、

「あ……」

おぼえず声を発した。

三宅権十郎の肥体が、みっしりと自分の体を抱きしめ、熱い息が鞴のように鳴っている。

「見たときから……わしは、おぬしを愛しゅう思うていたぞよ」

と、四十歳の権十郎が泣くような声をふるわせ、

「な、たのむ……よいではないか」

いきなり、銀之助の寝衣を引きむしろうとした。すでに権十郎は着物も帯もぬぎ捨て、下着一枚となって床にもぐりこんでいた。

「あ……あっ……」

叫びつつ、銀之助は両腕を突っ張り、辛うじて上体を床の上へ出した。権十郎は両腕で銀之助の腰を巻きつけ、顔を下腹へもぐりこませてきた。

銀之助は、夜具の下の短刀をようやくつかんだ。こんな機会は二度とあるものではない。わざと、銀之助は仰向けになった。

うなり声をあげつつ、自分の下半身をむさぼりはじめた権十郎のくびすじのあたりへ、銀之助が猛然と、両手につかんだ短刀を突き入れた。

三宅権十郎を討ち果したとき、染川銀之助は左腕二カ処を骨折している。

権十郎の抵抗も、またすさまじいものだったらしいが、はじめの一突きは致命的なものであったし、突き差した短刀をそのまま、はね起きた銀之助が脇差を抜いて立ち向ったのがよく、二人の決闘はたちまちに終った。

銀之助はそのまま外へ飛出し、翌朝、単身で大坂町奉行所へ出頭した。

朝倉筑後守が六十五歳で配所に病死したのは、この翌年であるから、銀之助の敵討ちは、旧主を大いによろこばせたことであろう。

筑後守が死んだ後に、幕府は、孫の朝倉内膳宣成をもって三百石の旗本に取立てたので、染川銀之助は内膳の家来となったが、内膳が青木甲斐守の養子になったとき、ここを離れた。

間もなく銀之助は、石見・津和野四万三千石、亀井家に百石二人扶持、馬廻役として抱えられた。これも彼の敵討ちが大きく物をいったのであろう。

銀之助は、延宝三年に五十九歳で歿しているが、この間、ついに妻を迎えなかった。

こんな話がある。

染川銀之助と婚約をしていた旧朝倉家の侍医・岡本松伯のむすめ睦子が、玉造の敵討ち後九年を経た正保元年に、江戸四ツ谷・長谷寺裏の岡本宅で自殺をした。

二人の婚約は、二人が幼少のころにととのったものだが、十三歳で敵討ちの旅へ出て以来、睦子と銀之助の交情は書簡の往復によってあたためられた。

敵討ちがすんでからも、岡本家から結婚の催促が何度もあったが、銀之助は、

「敵三宅権十郎には七歳の男子がござりました。この者が、私を敵としてつけ狙うは必定と思われます。私は、睦子どのに、亡き権十郎の妻の憂目は見せたくはありませぬ」

頑として受け入れず、そこまで考えおよぶには当るまいといった人には、

「いや、復讐にかける人の心ほど根ぶかく、すさまじきものはございませぬ。それを、私はようわきまえておりますほどに……」

と、こたえた。

しかし、睦子があくまでも独身を守った後に自殺したことをきいてからの染川銀之助の風貌は、にわかに陰鬱なものとなり、彼は、亀井家の人びとから、

「偏狭の仁じゃ」

敵

と、うとまれながら、次第に老いて行った。

尚、三宅権十郎の妻は、あの但馬・出石のときの寡婦だったともいうが、二人の間に生まれた子と共に、以後の消息は絶えている。

一

「決して、外へ出てはなりませんよ」
と、大黒屋儀助から、口ぐせのように念を押されているし、山崎十次郎自身も、
（うっかり、外へ出てはあぶない）
われとわが身へいいきかせている。
いいきかせながら、こらえきれなかった。
十次郎が、故郷の伊勢の国・津の城下を出奔してから、足かけ三年になる。
そのとき、江戸へ逃げて来て、上野・池ノ端仲町にある薬種屋〔大黒屋儀助〕方に姿を隠してから、つい一月ほど前まで、十次郎は一歩も大黒屋から外へ出ていなかったのだ。
大黒屋の奥庭にある〔離れ〕の中で、十次郎は、
（いったい、いつまで、このような暮しをつづけていればよいのか……まるで死人同様ではないか。なるほど、大黒屋儀助どのは親切にしてくれる。危ないおもいをしながら、これまでに私の面倒を見てくれるというのは、なかなかにできないことだ。だが、私は死人だ）
おもいなやむ気力さえ、失せてしまいかけていたものであった。
むりもない。
山崎十次郎は、まだ二十五歳の若さなのに、二年もの間、

「贅沢な監禁」
を強いられていたのだから、これはたまったものではない。それも真の監禁状態……たとえば悪事をして牢獄へ押しこめられているのであれば、また、あきらめもつこう。
それに、刑を終えれば、
「牢を出られる」
の希望もあるはずだ。
だが十次郎の場合は、みずから努めて〔監禁〕されていないと、命が危ないのである。それも、これから先、おそらく何十年にもわたってのことだ。
二年前までの十次郎は、伊勢・津三十二万三千石、藤堂家の家来であったが、殺人を犯して、城下を脱走した。
武士の殺人である。
当然、十次郎が殺した相手の息子たちは、
「父の敵」
として、十次郎を探しまわっているにちがいない。
見つけられれば、斬り殺されるにきまっている。
（だが……だが、こうしていると、何も彼も忘れてしまうな。こうしているときに、私は、もう斬られてもかまわぬ。生きているということは、まさに、こういうことなのだ。生きている最中に殺されるのなら、それもよいさ）
と、十次郎は女の白い乳房へ顔を埋め、躰化粧の強烈なにおいで目も眩み、おののく五体の官能にゆさぶられ、おぼれこみ、

「ああ、おふじ。私はもう、たまらぬよ。おい、たまらぬ……」

うわごとのような声を発し、女の細い躰にしがみついていた。

女は、おふじといって、娼妓である。

ここは、谷中の「いろは茶屋」とよばれる岡場所であった。

ここへ、十次郎をつれて来たのは、大黒屋にいる三人の番頭のうちのひとりで、亀蔵という三十男である。

一月ほど前に、大黒屋儀助が、離れにとじこもったまま憔悴しきっていた十次郎を見て、

「あのままでは病気になってしまう。若い身そらだし、むりもない。月に一度ぐらいは、外へ出してやりましょう。なあに、こっちが充分に気をくばっていれば、大丈夫ですよ」

と、妻のおまきにいった。

おまきは、十次郎の叔母にあたる。つまり十次郎の亡母・きねの妹がおまきなのである。

おまきは反対であったが、

「大丈夫だ。私にまかせておきなさい」

と、大黒屋儀助が番頭の亀蔵をよび、

「お前さんは口も堅いし、気性もしっかりしているゆえ、十次郎さんが敵持ちの身の上で、藤堂家の人びとからねらわれていることを語りあかしてある。知っての通り、この足かけ三年、十次郎さんも、あの離れの中から、せまい空を見あげるだけでは、実にもって気の毒だ」

「はい。それは私も……」

「そこでね、月に一度ほどは、外に出してあげたいとおもう」

「けっこうなことで……」

「だが、うっかりとは出来ませんよ。この江戸には藤堂様の御屋敷がいくつもあるし、家中の人びとも市中を歩いているのだからね。さいわい、十次郎さんが私の義理の甥にあたることは、だれにも知られていない。そこでね、お前さんにつきそってもらい、十次郎さんを外へ出そうとおもうのだよ」

「よろしゅうございますとも」

亀蔵は、浅草・鳥越に住む大工・清八の次男に生れ、十二のときから大黒屋へ奉公にあがり、二十年もつとめあげた男であった。

単に実直な番頭というのではなく、なかなか俠気もあり、いつのことだったか雨の日に、小僧の万太郎をつれて本郷の通りを歩いているとき、小僧がうっかり、すれちがった武士の袴へ泥水をはねあげてしまったことがある。

「おのれ、ぶれいな！」

と、その武士が万太郎のえりがみをつかまえたので、亀蔵がしきりにあやまったが、日中から酔っている武士が承知をせず、万太郎を斬る、といい出した。

そこで亀蔵が、すぼめた雨傘で武士をなぐりつけ、万太郎を引っ抱えて逃げたというのだが、これは相当に肚がすわっていなければ、できないことだ。

亀蔵は、十次郎を駕籠へ乗せ、上野山内へはこびこんだ。

できるなら、駕籠から下ろさずに、外の空気を吸わせるつもりでいたのである。

折しも葉桜のころで、上野山内の、したたるような若葉にむせて、十次郎は目まいがしたほどであった。

そのとき、亀蔵が、

「これは十次郎さま、旦那には内密でございますよ」
と、つれて来てくれたのが〔いろは茶屋〕の〔つちや〕という娼家であった。
そのとき、十次郎の相手になったのが、おふじで、
「あれ、お客さまは、女を抱くのが、はじめてかえ」
ぎこちない十次郎の所作を見て、狂喜したものだ。
おふじは背の高い女で、十次郎が立ってならぶと、おふじの唇より十次郎のそれが二寸は低い。
痩せてはいるが、こりこりと引きしまった肌身がぬけるように白く、しなやかでやわらかくて、しかも針金のように強靱なおふじの肉体であった。
それが一月前のことで……。
それから今日が四度目の山崎十次郎なのである。
四度のうち、二度は、番頭の亀蔵が大黒屋儀助に内密で、そっとつれ出してくれた。十次郎が〔つちや〕でおふじに抱かれている間に、亀蔵は客の用事をすませて谷中へもどり、乗って来た駕籠に十次郎を入れ、大黒屋の裏口から離れへ帰すのである。
今日は、儀助も十次郎の外出を知っている。だから、ゆっくりとしていられるのだ。
「日暮れに、亀蔵が迎えに来てくれる。まだ、間もあるし……なあ、おふじ。お前の好きな酒でものもう」
「あれ、うれしいこと」
おふじは、十次郎の胸毛をつまんで引きぬいた。あばら骨が浮いているほどに細い体軀の十次郎であったが、体毛すこぶる濃い。
「痛っ……なにをする」

「うれしいからですよう」
この谷中いろは茶屋は、安永のいまから百年も前にもうけられた岡場所だそうな。
谷中・天王寺前にもうけられた岡場所だけに、
〔武士は嫌。町人好かぬいろは茶屋〕
などと、川柳によまれていることでもわかるように、谷中に密集する僧侶たちが、客の大半をしめている。
それだけにまた、敵もちの山崎十次郎が女あそびをするには、
「手ごろなところ」
と、番頭の亀蔵は考えたのであろうか……亀蔵もまた〔つちや〕へは月に何度かあらわれ、おつなという妓をひいきにしている。
酒がはこばれてきた。
物倦い晩春の夕暮れがしのび寄るころ、酔いがまわったおふじが、十次郎へこういった。
「昨日の今ごろ、嫌なやつが来て、ひどい目にあいましたよ」
「客か……」
「ええ。おさむらいの……」
「ここでは、さむらいはもてぬそうな」
「十さまだけは別」
十次郎は、おふじに、浪人・井上十蔵と名のっている。
「二人とも、乱暴なやつでねえ」
「二人を相手にしたのかい」

「いいえ、二人づれで来たんです。一人はあたし、一人はおうめさん。それで、さむらい風を吹かせて、さんざ、しつっこくなぶっておいて、それからこの座敷で、二人してお酒をのんで……いつまでもだらだらと……ほんとに辛気くさくて、頭痛がしてしまって……」
「ふうん……」
「その二人のさむらい、親のかたきを討つのですとさ」
「な、なに……？」
「酔ってねえ、二人とも。親のかたきの居どころを知っている人をつかまえたのですとさ、三月ほど前に……」
「ふむ……」
「あれ、十さま、顔色がわるいような……？」
「な、なんでもない。それから、どうした？」
「え……？」
「その、二人のさむらいのことだ」
「あ……ところがね。つかまえた人が、どうしてもかたきの居所をいわない。いくら責めたてても口を割らないものだから、とうとう殺してしまったと……」
「この江戸でか？」
「いえ、上方で」
「上方……」
「あい、なんでも京の町でとか……」
「……」

「二人ともねえ、かたきはきっと、江戸にいる。草の根をわけても探し出すと、いえもう大変な気炎をあげていましたよう」
十次郎は、こたえなかった。
痩せこけて青白い十次郎の顔が、それこそ死人のようになっていた。

二

山崎十次郎が、上役の中尾九兵衛を殺害し、津の城下を脱走したのは、足かけ三年前の安永八年二月十八日のことであった。
当時の十次郎は、亡父・四郎左衛門に引きつづいて、藩の納戸役をつとめていたものである。納戸役は〔大納戸〕と〔小納戸〕に別れていて、大納戸は藩主家の物品会計をつかさどり、小納戸は主として〔殿さま〕の衣服・調度などを管理すると共に、殿さまの〔御手許金〕を保管するのが役目であった。
納戸役は何人もの藩士がつとめているけれども、十次郎は〔小納戸〕の内の〔内用掛〕といって、藩主家の金銭の出し入れを取りあつかう役目についていた。
内用掛は、十次郎のほか三名。その上に〔頭取〕とよばれる上役・中尾九兵衛がいた。
津三十二万三千石は、徳川幕府成ってより百六十余年の間、藤堂家が領していて、藩祖は、かの藤堂高虎である。
いまの殿さまは、九代目の藤堂和泉守高嶷という。
内用掛の内二名は、御城内の納戸役・用部屋につめていて、十次郎と瀬古半平の二人が、城外の〔勘定所〕内の一間につめている。

〔勘定所〕は、伊賀口門外にあり、城の外壕の西側にあった。この役所は勘定奉行の支配に属し、納戸役のみか諸役の会計・計算・金品のうけわたしをおこなう。

こういうわけだから、山崎十次郎は武士であっても、剣術をおぼえるより、

「わしの跡をつぐからには、先ず、算盤を習わねばならぬ」

と、亡父の四郎左衛門は十次郎が七歳になるや、みずから手をとって算勘の術を教えこんだ。

徳川将軍の威命の下、百何十年も天下泰平の世がつづいているのだから、戦争に用のなくなった武士は、ほとんど〔官僚〕化してしまっている。

また、剣術よりも算勘に長けているさむらいのほうが、立身出世の機会をつかむことが多いのだ。

山崎四郎左衛門は、十次郎が二十歳になった安永四年の夏に病歿した。まだ五十前であった。

すぐに十次郎は亡父の役目をつぐことをゆるされた。

その前年に、十次郎の母・きねが病歿している。十次郎は一人息子であった。

そのころの内用掛・頭取は中尾九兵衛ではなく、渡辺伊織という老巧の人物で、勘定所へ出仕して来た若い十次郎を、にこやかに迎え、

「せがれや。亡き父に負けず、はげんでくれよ」

十次郎のあたまを撫でんばかりに、やさしくいってくれたものだ。

渡辺伊織は六十をこえた老齢で、十次郎を、

「せがれよ、せがれよ」

と可愛がってくれたし、十次郎もまた、算盤の方では決して他人に負けをとらない。

金の出し入れも、計算も、帳簿の記入も、まことに早くて正確であり、勘定所が忙しいときに

は、他の役方へも、

「ぜひ、たのむ」

と、駆り出されることがしばしばであったという。

ところが、三年ほどして渡辺伊織が亡くなり、長男・甚之助が三十八歳で跡目をついだ。そのとき、渡辺甚之助は、若いころから殿さまの小姓に出ていた故もあり、その才能を藤堂和泉守が見こんで、抜擢をおこなったのであろう。

そして、新しい内用掛・頭取は中尾九兵衛に命ぜられた。

九兵衛も六十をこえた老人であったが、前の渡辺伊織とは、まるで人柄がちがう。ふくよかで温雅な伊織の風貌が、いまさらになつかしくおもわれるほどで、中尾九兵衛は老人のくせに憎々しいまでの背丈の高さで、鷲鼻をうごめかせ、傲然として勘定所へあらわれる態を見て、愉快におもう者は一人もいなかったろう。

九兵衛は、前の渡辺伊織と仲が悪かったそうな。屋敷も隣り合せだけに、まったく性格のちがう二人がうまくゆくわけはない。しかし、伊織のほうで取り合わなかった。

伊織が亡くなって、その子の渡辺甚之助が破格の昇進をとげたのが、これまた、九兵衛はおもしろくなかったらしい。九兵衛には伝四郎・平馬の二子がいるけれども、この二人は、城下に一刀流の道場をかまえる高瀬大学の門へ入り、剣術のほうでは、なかなかの、

〔あばれもの〕

だそうな。

しかし、泰平の世に〔あばれもの〕は必要ない。伊織の子の甚之助が早くから殿さまの側近く

つかえていたのにくらべて、九兵衛の子たちは、城下の「鼻つまみ」だといわれていた。
腕力にまかせて、町人相手の喧嘩沙汰が、ことに長男・伝四郎に多かった。
ま、それはそれでよい。
ところが、である。
頭取として内用掛へあらわれた中尾九兵衛は、なにかにつけて、山崎十次郎へ辛く当りはじめた。
それもこれも、
「亡き渡辺伊織に目をかけられた十次郎め、おもしろくないやつ！」
というのだから、十次郎もたまったものではない。
こうした上役が、下の者へどのような意地悪をするか……それはいちいちのべなくとも、容易に想像がつこう。
山崎十次郎は、それでも凝と堪えていた。
安永七年の十一月。
十次郎が婚約をした。
相手は、亡き渡辺伊織の末のむすめ・初である。この縁談は渡辺甚之助が、
「亡き父上が、おぬしをひどく気に入っておられたことゆえ、末の妹をぜひとも……」
と、申し入れてきたのだ。
初は、このとき十九歳で、平凡な容姿であったけれども、父ゆずりの温和な性格のむすめで、
「なによりのことでございます。おきめなされませ」
と、永らく山崎家に奉公をしている小者の徳七が熱心にすすめた。

徳七は、小柄で弱々しい五十男だが、もう三十年も山崎家へ奉公をしており、
「飼い殺して下されば、本望でございます」
といい、独り身のまま、忠実に奉公をつづけ、病身なのに一度も寝込まず、ことに十次郎の母が亡くなってからは、主人の膳ごしらえも、女中がおよばぬほど上手にやってのけた。藩中でも身分の低い山崎家では、徳七のほかに中間二人、女中二人の奉公人がいるだけであった。
「徳七が、それほどにすすめるのなら、私に異存はない」
十次郎は、そういって、この婚約をうけたのである。
それがまた、頭取・中尾九兵衛には、
（おもしろくない）
のである。
他人の幸福が、
（おもしろくなくて仕方がない）
というのが中尾九兵衛の性格になってしまっている。
そして、ついに……。
初との結婚を二十日後にひかえた十次郎が九兵衛を殺害したのであった。

三

藤堂藩の納戸役の決算は、毎年二月におこなわれる。諸役それぞれに勘定所の決算は異なっているのだ。
すると……。

殿さまの「御手許金」の内、金十八両余が、紛失していた。つまり、帳尻と合わないから、「紛失した」ことになるのだ。

（そんなはずはない）

十次郎は青くなった。半月ほど前まではきちんと合っていたのである。

「おのれ、婚礼の仕度金に困り、御手許金をくすねたな」

と、いきなり中尾九兵衛が十次郎にいった。

「な、な、何を申されます……」

十次郎は驚愕した。

まったく、身におぼえのないことであった。

同役の人びともいる部屋の中で、

「だまれ、だまれ。おのれ、これは只事ではすまぬぞよ」

と、九兵衛は、たたみこむように声を張りあげ、あたまから十次郎へ罪を着せようとする。

役所の退出の時を告げる太鼓が城内から鳴りはじめた。

十次郎は必死となり、

「いま一度……」

帳簿の計算をやり直し、金庫の御手許金と照らし合せたいから、頭取に残っていただきたい、と申し出た。

このまま罪を着せられてしまっては十次郎、腹を切るより仕方がないことになる。

「よろしい」

言下に中尾九兵衛はうなずき、

「他の者は帰れ」

と命じた。

それから十次郎が血眼になって算盤をはじいた。帳簿に間ちがいはない。金庫の御手許金は、やはり、十八両余が不足している。

十次郎は懸命に弁明をした。

九兵衛は、気味のわるいうす笑いをうかべ、無言で十次郎の弁明をきき終えたのち、

「むだじゃ。おのれが責任ではないか」

と、いいはなち、

「これより、御奉行へ申しあぐる」

さっと立ちあがり、部屋を出て行った。

十次郎にとっては一大事である。

「お待ち下され」

勘定所の門を出て、濠端の道を左へ曲った中尾九兵衛に追いつき、十次郎は、

「身におぼえのないことでございます」

叫んで、九兵衛のたもとをつかんだ。

すでに十次郎は、十八両余の紛失が中尾九兵衛によってひそかにおこなわれ、それが自分をおとし入れるためであった……と、直感していた。

「だまれ。盗人！」

わめいた九兵衛が振り向きざま、手にした白扇で十次郎のあたまを強く打った。

それから後のことを、十次郎はよくおぼえていない。

気がつくと、自分の小刀が地に倒れた九兵衛の腹へ突き立っていた。九兵衛はすさまじい形相で息絶えていた。

あわてて九兵衛を追って勘定所を出た山崎十次郎は、わが大刀を置き忘れてしまっていたのである。

すでに、夜の闇がたちこめていた。

さいわい人気もない。細い道の左側が勘定所の土塀。右側が火除地の草原であった。その草原へ中尾九兵衛の死体を引きずりこんでおいて、十次郎は無我夢中で、新町の外れにある自宅へ駈けもどった。

すぐに居間へ入り、小者の徳七をよび、

「徳七。とんでもないことになった……」

すべてを打ち明けると徳七が、間髪を入れぬ決断をして、

「さ、すぐにお逃げなされませ。徳七、お供をいたします」

と、立ちあがった。

すでに徳七は、有金だけをふところに入れ、着のみ着のままの十次郎と共に、外に出た。

他の奉公人へは、

「渡辺様のお屋敷へ……」

と、いっておいた。

そのまま、二人は夜の闇にまぎれて津の城下を脱出した。

中尾九兵衛の死体が発見されたのは、それから一刻(二時間)のちのことである。

九兵衛の二人の息・伝四郎と平馬が、その夜のうちに、山崎十次郎を追った。

状況は、あくまで十次郎に不利である。

〔つかいこみ〕

を発見されたので、上役を殺害したことになってしまった。九兵衛を殺したことによって、十次郎が御手許金を盗んだことが決定的なものになってしまった。

城下を脱け出した十次郎と徳七は、伊勢湾沿いの街道をさけて、安濃村のあたりから経ヶ峰の山林へ逃げこんだ。

これがよかった。

山の中の道をえらんで、迂回しつつ、二人は伊賀から近江の甲賀へぬけた。

ここまで来れば他国である。

藤堂藩の追手もかからぬ。

すぐさま二人の後を追って津の城下を出た中尾伝四郎と平馬の兄弟も、いったんはあきらめ、城下へもどって、正式に父の仇討ちの許可をねがい出た。

藩庁も、これをゆるさぬわけにはゆかなかった。

山崎十次郎の行動を見れば、御手許金を盗んだ罪が明白のように、一応は見えるけれども、ところある藩士たちは、

(どうも怪しい……?)

と、おもっているらしい。

婚約者の身を案じて嘆く妹の初に、渡辺甚之助が、こういった。

「いまとなっては詮ないことだが……これは、中尾九兵衛が仕かけた罠へ、十次郎が落しこまれたのであろう。九兵衛を殺しさえしなければ、まだいくらも手段があったに……なれど、あの温

和しい十次郎が刀をぬいたというのは、よほどのことであったにちがいない。この上は、なにともして、逃げのびてもらいたいものだ」

さて……。

十次郎の供をして、小者の徳七は京都へ出た。

徳七は伊勢・桑名の出身で、ただ一人の妹・まんが、京都の油小路三条下ルところに住む〔研師〕の吉兵衛という者の女房になっている。

徳七は、この研師・吉兵衛方へ山崎十次郎をつれこんだ。

しばらくは、ここにひそみかくれたのち、二人は充分な旅仕度をととのえ、山越えに琵琶湖の西岸に出て、さらに西へまわり敦賀から福井へぬけ、北陸道から信濃へ……そうして、ようやくに江戸へたどりついたのであった。

大黒屋儀助の妻おまきは十次郎の叔母にあたる。その縁をたよったのだ。十次郎の亡母・きねは京都・寺町五条上ルところの薬種問屋〔田中宗悦〕の次女であり、おまきは三女に生まれている。

この田中宗悦の曾祖父・田中次郎三郎は、もと藤堂家につかえていたこともある。十次郎の家とは遠い縁つづきになる。

徳七は、京都へ逃げこんでから、田中宗悦へ相談に出向いた。

「わしの家と山崎家とが縁つづきであることは、藤堂家にも知れてあるゆえ、いずれは中尾のせがれどもが、それと知って、こちらへ目を向けよう」

と、宗悦は、わが孫にあたる十次郎の身を案じ、

「よし。では、こうしよう。わしの妾腹のむすめおまきが、江戸の薬種屋、大黒屋へ嫁いでいる。妾腹なれど、十次郎どのの母とは仲もよかったことじゃし、わしからも、よくよくたのんでみる。おまきのことは、藤堂家にも知れてないゆえ、安心じゃとおもう」

と、手紙をしたためてくれた。

大黒屋儀助は、こころよく、十次郎と徳七をかくまってくれた。儀助も京都の出身で、若いころ、田中宗悦には大恩をうけていたらしい。

そして……。

去年の十一月も末のころになってから、徳七が十次郎に、こういい出した。

「一度、京へまいり、田中宗悦さまへ、旦那さまが御無事に暮しておいでのことをお知らせしてまいらなくては、私めの義理がたちませぬ。いえ、なるほど手紙にてお知らせはしてございますが、ともあれ一度、私が……」

それのみではない。徳七は京都へもどり、出来得るなら津の近くまで潜入し、中尾兄弟のうごきを探って見るつもりになったのである。律義で用心ぶかい徳七だけに、相手がどの程度、こちらの様子を知っているか、兄弟がどこにいて、こちらを探っているのか……。

(それを知っていなければ、こちらも安心できぬ)

と、おもいたった。

徳七は、十次郎や大黒屋夫婦がとめる手をふりきって「なに、大丈夫でござります」と江戸を発ち、やがて、京都へ着いたとの知らせが大黒屋へとどいたのは、今年の正月十日のことであった。

それから約四カ月を経たいま、十次郎は、谷中いろは茶屋の〔つちや〕の娼妓・おふじから、徳七らしい者が殺されたことをきいた。

それを得意げにはなしていた二人の武士というのは、中尾伝四郎・平馬の兄弟にちがいない。おふじの口からきいた二人の風貌が、中尾兄弟そのままであったからだ。

十次郎は、いよいよ、徳七が殺された、とおもった。

どちらにせよ、

（たしかめずには、おられぬ）

と、彼は決意した。このところ、京都からは何の便りもなく、実に案じていたところなのだ。いのちがけで自分を助け、まるで〔わが子〕のようにいつくしみ、身をまもってくれた小者・徳七の愛情を十次郎が忘れきれるものではない。

山崎十次郎が、忽然として〔大黒屋〕方から消えたのは、翌々日の夜ふけであった。

〔離れ〕の十次郎の部屋には、

「……かならずもどりますゆえ、御案じ下されまじく……」

と、手短かにしたためられた大黒屋夫婦あての書き置きが残されていた。

大黒屋夫婦はおどろき、すぐに京都の田中宗悦へ、このことを急便で知らせると共に、番頭の亀蔵を呼び、

「十次郎さんは、徳七どんの身を案じて京へもどったのやも知れぬ。いまのところ、そのほかにこころあたりはないのだから、お前、すぐに追いかけておくれ。あぶないことだ。もしも中尾兄弟に見つけられたら、取り返しがつかない」

「よろしゅうございます」

四

山崎十次郎が京都へ入ったとき、空の青さも風のにおいも、すでに初夏のものであった。

十次郎は、まっすぐ田中宗悦方へ駈けつけた。

宗悦老人は十次郎を見るなり、

「いったい、どうなされた？」

「徳七に……徳七は、おりまするか？」

「なんじゃと……徳七は、二月はじめに江戸へ発ちましたぞ」

「ええっ……？」

そこで十次郎が〔いろは茶屋〕できいたことを、つつみかくさずに打ち明けた。

田中宗悦は緊迫の表情となり、

「すると……この家が、中尾兄弟に見張られていたのやも知れぬ。江戸へ旅立った徳七を途中で捕え、お前さまの居どころを白状させようとしたが、徳七は口を割らず、そのために兄弟が怒って、ついに徳七を殺害してしまった、のではあるまいか」

と、いった。

のちに……。

藤堂藩にいる中尾兄弟の縁者の口からわかったことであるが、田中宗悦の推測は、略々あたっていたようだ。

しかし、徳七は江戸へ向ったのではなく、甲賀から伊賀へぬけ、さらに、津の城下近くまで行き、情報を得るつもりだったのではあるまいか……。

そこのところは、徳七が死んでしまったので、判然としていない。

だが……。

中尾兄弟は、田中宗悦方へ目をつけていたのではない。
偶然に、三条白川のあたりで旅姿の徳七を見かけて、引っ捕えたのだそうである。
これも、のちになって中尾兄弟の縁者の口から知れたことだ。
中尾兄弟は、どうも、田中宗悦と山崎十次郎の関係を、よくしらべていなかったものと見える。
研師・吉兵衛方でも、こたえは田中宗悦と同じであった。
「ふうむ……」
うなり声を発して顔面蒼白となり、山崎十次郎が沈黙した。
「こうなれば、江戸へもどるのはあぶない。ともあれ、ここにかくれていなされ。大黒屋へは、すぐに知らせよう」
と、宗悦老人が、
「可愛い孫のことじゃ。わしも、いのちがけでお前さまをまもろうぞ」
「か、かたじけなく……」
わずかにいった十次郎の満面が、泪でぬれつくしている。
「私の不始末から、みなみなさまに御迷惑をおかけ申し……」
「なんの、なんの……」
「徳七……あの徳七まで、死なせてしもうた、とすれば、私はもう、どうしてよいのやら……」
宗悦も、その長男・宗順夫婦も、十次郎をなぐさめ、大黒屋からの返事が来るまでは、ここをうごかぬようにといった。
こうして十次郎は、田中宗悦方の奥二階へひそみかくれたわけだが……。
翌々日の朝、姿を消してしまった。

置手紙が残っていた。
「……これよりのちは、私のことを御放念下されますよう」
と、ある。
それから二日後に、江戸から大黒屋の番頭・亀蔵が田中宗悦方へあらわれた。十次郎とはちがい、亀蔵は「道中手形」をもらい、旅行の許可を町奉行所で得てから江戸を発したので、一足ちがいで十次郎と会えなかったのである。
亀蔵は田中宗悦から、十次郎が「つちや」のおふじの口から耳にしたことをきき、
「すこしも存じませなんだ……」
愕然として、
「すぐに私も……十次郎さまは、きっと、江戸へ向けて発たれたにちがいありませぬ」
といい、一夜を宗悦方へ泊し、翌朝早く、京都を発し、江戸へ急行した。
亀蔵の足は早かったが、先を行く山崎十次郎は道中手形もないだけに、金をつかって馬をやとったり、関所の裏道をぬけたりして、死物狂いといってもよい速度で江戸へ入った。
もう、夏である。
江戸へ入った十次郎は大黒屋へ立ち寄ることもなく、古着屋で夏の着物を買って着替え、その夜のうちに、谷中いろは茶屋へ出かけた。
「あれまあ、どうしていなすったんですよう。ほんにまあ、このひとは……」
「つちや」のおふじが、十次郎を迎え入れてむしゃぶりつき、
「ほんにまあ、十さま。大黒屋の番頭さんもあれから顔を見せず、あたしはもう気にかかって気にかかって……」

「おふじ、これにはわけがある」
「え……？」
「こうなれば、お前だけがたのみなのだ」
「なんですって……？」
「私が一生のたのみだ。きいてくれるか？」
「まあ、そんな大それた……いったい、どうしなすったので？」
「ま、きいてくれ、たのむ」
山崎十次郎は、つつみかくさず、この娼妓にすべてを語った。
おふじも、十次郎の、そのひたむきな熱意にこころをうたれたと見える。
「ようござんすとも」
引きうけてくれた。
あらためて十次郎は、おふじから、かの二人の武士の容貌をききとったばかりでなく、そのうちの一人が「兄者」といい、もう一人が「平馬」と呼ぶこともきいた。
あれから中尾兄弟、五日に一度ほどは〔つちや〕へあらわれるらしい。
十次郎のふところには、十五両余の金が残っていた。質素な暮しをしていた亡父・山崎四郎左衛門が五十二両余の金をのこしておいてくれ、これを津の城下から逃走するとき持って出た、その残り金なのであった。
十次郎は〔つちや〕の亭主・与兵衛の世話で、日暮里の宗林寺という寺へ寄宿することができた。むろん、与兵衛はくわしい事情を知らない。
それから七日目に、中尾兄弟が〔つちや〕へあらわれた。

例によって、おふじとおうめが、兄弟の相手に出た。
この夜、
おふじは弟の平馬を相手に、たくみにいざなって、平馬の口から兄弟の居所をつきとめることを得た。
中尾兄弟は〔いろは茶屋〕から程近い天王寺・門前町の西側にある海雲寺に寄宿し、毎日、市中を歩いては十次郎をさがしまわっているらしい。
中尾兄弟の祖父と曾祖父は、藤堂藩の江戸屋敷詰めの藩士で、そのころは中尾家の墓所が海雲寺にあったそうな。そのゆかりもあって、いま、中尾兄弟は海雲寺の世話になっているのである。
翌朝。
中尾兄弟が海雲寺へ帰ってから、おふじが日暮里の宗林寺へ駈けつけ、
「十さま、わ、わかりましたよ」
と、中尾兄弟の居所を告げた。
「そうか……」
山崎十次郎がうなずき、
「ありがとうよ」
金十両を、おふじの手につかませ、
「これは、お礼だ」
「いえ、こんなことを……」
「いいのだ、とっておけ」
「十さまは、何をなさろうというのです？」

「徳七の敵を討つのだ」

武士の家に生まれてこのかた、ろくに剣術をやったこともない十次郎が、一刀流の手練者である中尾兄弟を討とうと決意したのも、兄弟に殺された小者・徳七のことを、いかに深く想い、慕っていたかが、よくわかろうというものだ。

五

考えて見ると……。

中尾兄弟も、思慮が足りなかった。

仇討ちの旅に出るとき、彼らも一応は藩庁に、山崎十次郎の身寄りを問いただした。

だが、そのとき……。

どういうわけか、藩庁は、京都の田中宗悦と山崎家との関係を中尾兄弟に告げていない。なぜ……？

はっきりとはわからぬが、藤堂藩では、山崎十次郎をそれとなく、かばってやろう、という感じがあったようだ。

中尾兄弟が江戸へ来てからも、藤堂家の江戸藩邸では、兄弟に協力をしてやっていないのである。

さて……。

山崎十次郎は、おふじへ、

「私がことはだれにもいうな。いうてはならぬぞ。お前が私のことにかかわり合って迷惑をこうむってはならぬ。よいか、よいな」

くれぐれも念を入れて、おふじを〔つちや〕へ帰した。

昼すぎになって、十次郎が宗林寺を出た。

宗林寺と道をへだてて東側に、長大寺がある。

この寺の横道を、まっすぐに東へぬけると、すぐに天王寺・門前へ出る。

出て、視線を右へ転ずれば、門前町の通りの右側に、海雲寺の山門がのぞまれる。

それほどの近くに中尾兄弟が住んでいようとは、おもいもよらぬ十次郎であったし、兄弟もまた、このことを知ったら、

（どのような顔つきになることか……）

であった。

山崎十次郎は、大胆にも丸腰となり、単衣の裾を端折って、素足にわらじばき。菅笠を深くかぶり、小さな風呂敷包を肩にかけるという姿で、見たところは、日暮里あたりの百姓である。

そして、海雲寺へ近づいた。

臆せずに、山門をくぐり、境内へ入った。

以前の温順な彼には、このような勇気があろうはずもなかったのである。

強敵の中尾兄弟に見つけられたら、到底、逃げきれることはできまい。

もとより、闘って勝てる相手ではない。

境内の木立に、蟬が鳴きこめていた。

十次郎は、かなり長い間、境内の其処此処を見てまわり、それからゆっくりと門前町の通りへ出た。

天王寺の西門へ入る道の角に〔津崎屋〕という茶店がある。

ここへ入り、茶とだんごをもらい、十次郎は休んだ。
通りをへだてて、ななめ向うに海雲寺の山門が見える。
夏のさかりの昼すぎには、参詣の人の足も絶える。
谷中の、このあたり一帯は大刹・天王寺をはじめとして、諸宗の寺々が塀を接し、大屋敷を競い、それがまた上野の山につづく深い木立と、まがりくねった坂道とにつつまれ、一種、別天地の感がする。
やがて十次郎は〔津崎屋〕を出て、先刻来た道を宗林寺へ引き返した。
それから〔津崎屋〕でわけてもらった冷酒をのみ、ぐっすりと夜に入るまでねむりこんだ。
五ツ（午後八時）ごろに目ざめ、水を浴びて汗をながしてから、寺の小坊主がはこんで来てくれた夕飯をしたためたのち、十次郎は、ごろりと、また横になった。
彼が起きあがったのは、宗林寺が寝しずまってからである。
十次郎は、これも昼間の外出の折、三崎町の古着屋で買っておいた単衣を着こみ、裾を端折って白の脚絆をつけ、新しいわらじをはいた。菅笠はかぶらずに背へ負い、竹筒の水筒を腰につけた。
夕飯のとき、そっとこしらえておいた〔にぎりめし〕を二つ。これを竹の皮へ入れ、風呂敷に包んで腰にさげる。
それから、亡父ゆずりの勝国の銘刀・一尺八寸三分の脇差を帯び、宗林寺の庫裡の外れにある小部屋からぬけ出した。
裏庭の塀をこえ、御切手同心の組屋敷の横手、坂の多い小道を何度も曲り、十次郎は海雲寺と観音院の境の細道へ入りこんだ。

夏の夜の闇が重くたれこめている。
人影は、まったくない。
風も絶えていた。
十次郎が海雲寺の塀へ飛びつき、塀を越え、寺内へ潜入した。
そこは、海雲寺の裏庭であった。
中尾兄弟は、この寺のどこへ寝泊りをしているのか……。
そこまではまだ、突きとめていない十次郎であったし、突きとめようともしなかった。
また、寺の境内で何かするつもりではない。
裏庭から本堂の背後へ出て、しばらく考えていた十次郎は、本堂の縁の下へもぐりこんだ。
本堂正面の縁の下から見ると、左手に庫裡がのぞまれ、右手に鐘楼。正面の彼方に山門が見える。
つまり、この縁の下からは海雲寺へ出入りする人の姿が、一目瞭然ということになる。
縁の下の闇に、十次郎は寝ころんだ。
さすがに目が冴えている。
とても、ねむるどころではなかった。
そして、朝が来た。
やがて……。
頭上の本堂で、朝の勤行がはじまった。
境内に、うすく朝靄がただよっている。
と……。

本堂北側の庫裡の一角から、二つの人形があらわれた。

中尾伝四郎・平馬の兄弟であった。

このとき伝四郎は三十一歳。平馬は二十六歳。ともに筋骨たくましい体格である。

兄弟が、本堂前をぬけ、南側の木立にかこまれた石井戸の前へ行くのを、縁の下から山崎十次郎が凝視している。

この石井戸は、三十年ほど前まで、海雲寺の庫裡があった、その名残りである。

三十年前、南側の庫裡が火事で焼け、以後、北側へ再建したのだ。

中尾兄弟が下帯一つになり、石井戸の水を浴びながら、

「おもえば、あのとき、徳七めを殺さねばよかった」

と、伝四郎がいう。

「兄者が短気を起したからです」

「つい、かっとなってな。いかに責めても徳七め、十次郎の居所を吐かなんだゆえ……」

「そもそも、徳七を捕えずにおけばよかったのです。きゃつめは、京を出て、東海道を下ろうとしていたにちがいない。そっと、徳七の後をつけて行けば、十次郎の居所も知れたはずだ」

「何を申す。徳七を見かけるや、まっ先に飛びかかって引っ捕えたは、お前ではないか」

「そ、それは……」

「いまさら、くだくだと申すな。ともあれ十次郎めは、かならず、江戸にいるにちがいない」

「となれば、江戸に身寄りでも？」

「江戸屋敷のものにきいても、知らぬ存ぜぬだ。われら兄弟の仇討ちに家中の人びとは、すこしもちからを貸してくれようとはせぬ。まことにもって、けしからぬ」

「なんとしても、早く十次郎を……」

「そうだ。今日も暑くなりそうだが、手わけをして市中をまわって歩こう。どうも、こう暑くては、うんざりする」

「涼風のたつころまで、躰をやすめてはいかがで？」

「そうだのう」

「いかがです、兄者、今夜、つちやへまいりませぬか」

「ばかもの。よいかげんにせい」

縁の下から出て来た山崎十次郎が、石井戸のうしろの木立へ入り、勝国の脇差を引きぬいたのは、このときである。

十次郎は、兄弟がこのように早く姿をあらわし、しかも石井戸で水を浴びようなどとは、考えても見なかった。

中尾兄弟が、自分をさがすために外出をする、その後をつけて、二人が海雲寺を出たとたんに襲いかかるつもりでいた。

これは、

「徳七の敵を討つ！」

の一念より発したこと、いうことをまたぬ。

十次郎は、すでに〔敵もち〕の身であることを忘れていた。徳七を殺害した中尾兄弟へのうらみに、ぬいたこともない刀をはじめてぬいたのである。

はじめは寺の境内を避けるつもりでいた十次郎だが、小刀一つを帯びたきりの兄弟が、しかも、その小刀も帯も着物もぬぎ置き、水を浴びているのを見ては、

（いまこそ）

と、おもわざるを得なかったろう。

〔いろは茶屋〕の妓のうわさで、兄弟が高笑いをあげたとき、木立の中から躍り出した山崎十次郎が、

「徳七の敵、中尾兄弟覚悟！」

わめきざま、脇差を両手につかんで前へ突き出しつつ、

「やあ！」

猛然として、兄の中尾伝四郎へ突進した。

「ああっ、兄者……」

平馬が、叫んだ。

振り向いた伝四郎の腹へ、十次郎の脇差が突きこまれた。

「うわあ……」

絶叫を発しつつ、伝四郎が十次郎の脇差の刃を両手でつかんだ。

「うぬ、うぬ……」

無我夢中で、必死に十次郎が脇差ごと躰を伝四郎へ押しつけ、押しまくった。

「うわ、わわ……」

二人が、もつれ合うように転倒した。

敵の腹へ突きこんだ刀を引きぬき、弟の平馬へ切りつけるだけの余裕がこころにも技倆にもない山崎十次郎であった。

一瞬、あまりの衝撃に立ちすくんだかたちとなった中尾平馬だが、

「おのれ、十次郎！」

気を取り直して、仰向けに倒れた兄の上へのしかかっている十次郎のくびすじをつかみ、兄の体から引き離し、蹴飛ばした。

「あっ……」

十次郎がしっかりとつかみしめた脇差は、このとき伝四郎の腹から引きぬかれている。

伝四郎が、たまぎるような悲鳴をあげ、のたうちまわった。

平馬は、石井戸の傍に置いてあった小刀を引きぬき、よろよろと半身を起した十次郎のあたまへ斬りつけた。

「うわ……」

こうなると十次郎は、とても平馬にはかなわない。

十次郎のあたまから顔へ、見る見る血がふき出した。

「こいつ、こいつ！」

中尾平馬が二度三度と十次郎の顔、あたまを斬った。

山崎十次郎の上体がぐらりとゆれ、前のめりに倒れ伏した。即死である。

「あ、兄者……」

小刀を捨て、平馬が伝四郎を抱き起した。

伝四郎は、白い眼をむき出し、これも息絶えている。

海雲寺の僧たちのさわぐ声も、平馬の耳へは入らなかった。

六

こうして……。

山崎十次郎は、小者・徳七の敵の一人を討ち果した。

中尾平馬は、父と兄の仇を討った。

平馬は、津の城下へ帰り、仇討ちの報告をすませ、中尾家をついで当主となったわけである。

けれども……。

藤堂家の人びとは、中尾平馬の仇討ちには冷やかな態度をしめし、そのかわりに、

「それにしても、山崎十次郎は立派な男であったな」

「とるにたらぬ小者の仇討ちをした」

「なかなか、できることではない」

十次郎の行為が、ほめたたえられた。

〔殿さま〕の藤堂和泉守も、中尾兄弟が裸体で水を浴びているところを、十次郎に襲撃されたときいて、

「不様なことよの」

にがにがしげに、つぶやいたそうである。

翌天明元年の秋になって……。

中尾平馬が、江戸屋敷へ〔転勤〕を命ぜられた。

津の城下では、いつまでも山崎十次郎の評判が消えず、平馬はすっかり憔悴し、苛だち、酒色におぼれて乱暴の所業が多くなったので、藤堂藩としては、平馬を江戸藩邸詰めにしたほうがよい、とおもったのであろうか……。

平馬は、まだ妻を迎えぬまま、津を発して江戸へ向った。

年が暮れ年が明けて、天明二年となった。

その三月十日の昼下りに、中尾平馬が、両国橋・東詰の本所横網町にある藤堂和泉守・下屋敷を出た。

江戸の官邸ともいうべき上屋敷の勤務ではなく、平馬は、別邸の下屋敷につめていて、これといった役目にもついていない。

これは、平馬が藤堂家から冷遇されていることを意味している、といってよいだろう。

この日。

非番の平馬は、深川の、どこかの岡場所へでも行き、女でも買ったらしい。

平馬が、したたか酒に酔って、深川から本所へもどって来たのは暮六つをすこしまわったころであった。

平馬は、竪川へかかる二ツ目橋の南側の道を一ツ目橋へ向っていた。

一ツ目橋を北へわたれば本所の地へ入り、藤堂家の下屋敷の大屋根が間近にのぞまれる。

竪川沿いの道は〔竹河岸〕となっていて、竹置場が両岸にならんでいる。

春の夕闇が、あたりにたちこめていた。

中尾平馬が、竹河岸と弁天社の生垣にはさまれた道へ、ふらふらとさしかかったとき、

「来ました。あれが中尾平馬や」

竹置場に、ひそみかくれていた二人のうちの一人がいった。

これは、京都の研師・吉兵衛であった。

吉兵衛の女房が、亡き徳七の妹なのだから、吉兵衛にとって徳七は、

〔義兄〕

ということになる。

「よし！」

吉兵衛の声に、ちから強くうなずいたのは、大黒屋儀助方の番頭・亀蔵である。

二人とも、高々と裾を端折り、足ごしらえを厳重にし、鉢巻・たすきの仕度で脇差をぬきそばめていた。

「吉兵衛さん、いいな！」

「よしとも！」

声を合せて二人が、ぱっと道へ飛び出し、

「中尾平馬、山崎十次郎さまの仇を討つ！」

「義兄のかたき！」

叫びざま、前後から斬ってかかった。

「何をする……」

酔ってはいるが、そこは剣客の平馬だけに、身をよじらせるようにして竹置場の中へ逃げこんだ。

「畜生め！」

すぐに亀蔵が、束ね立ててある竹を押し倒した。

その竹の束に躰を打たれた平馬が、

「おのれ……」

狼狽してひざをついた。

そこへ、駈けこんで来た吉兵衛が、

「こいつめ！」

叩きつけるように脇差をふるった。

「あっ……」

平馬が、あたまを斬られつつ、必死に大刀をぬきはらったとき、つづいて駈けこんだ亀蔵が、

「この野郎！」

怒声をあびせ、脇差を突きこんだ。

「ぎゃあっ……」

すさまじい中尾平馬の悲鳴であった。

大刀を落し、ぐっと反りかえった平馬の背中を、吉兵衛が存分に斬り下げた。

仰向けに倒れ、まだ死にきれずにひくひくとうごいている中尾平馬を見おろし、

「やったね、吉兵衛さん」

「む……義兄のかたき。討った、討った……」

「お前さんのおかみさんも、さぞ、よろこびなさるだろう」

「十次郎さまも、よろこんでくれるやろか？」

「そうとも。徳七どんのかたきを吉兵衛さん、二人して討ちとったのだものね」

「うむ、うむ……」

平馬は、もううごかなくなった。

息絶えている。

「さ、吉兵衛さん。お前さんは、すぐに京へお逃げなさい。お前さんが、わざわざ津の城下へもぐりこみ、中尾平馬の身辺をさぐっていてくれたので、どうにか、十次郎さまのかたきを討つこ

とができました。ありがとうよ、吉兵衛さん」
「わしも、いっしょに名乗って出る」
「それはいけない。かねてから、このことは、お前さんもききわけていてくれたはずだ。お前さんには女房子がいる。私はまだ独り身なのだ。ね、だからたのむ、吉兵衛さん。お前さんに万一のことがあっては、私は死んでも死にきれない」
「うむ……」
「さ、早く。逃げて下さい。たのむ、たのむ」
「そ、それなら、亀蔵さん……」
「早く、早く……」
「わかった」
吉兵衛は身仕度を解き、脇差を捨てて、逃げ去った。
さいわい、このさわぎに気づいたものはない。
亀蔵は悠々と後始末をし、それから身仕度をあらため、南町奉行所へ名乗って出たものである。
取り調べがおこなわれた。
藤堂家へも、町奉行所から照会が行った。
すると……。
藤堂家が、
「中尾平馬なるもの、いま当家には、まかりおりませぬ」
と、返事をよこした。
「平馬は以前、まさに当家に奉公いたしておりましたなれど、半年ほど前に、不行跡のことあって追放いたしました」
というのである。
ときの南町奉行・牧野大隅守は、尚も入念に亀蔵を取り調べたが、四月二十日になって、亀蔵の仇討ちをみとめた。
亀蔵は、
「主人・山崎十次郎の仇討ちをした」
ことになっている。
牧野大隅守の臨機応変の裁決といってよかろう。
亀蔵は町奉行所から出されて、大黒屋へもどった。
翌天明三年の秋。
亀蔵は、大黒屋儀助からのれんをわけてもらい、湯島一丁目に店をもって独立した。
そのときに、亀蔵は妻を迎えている。
その妻は、かつて、亡き山崎十次郎の婚約者であった渡辺甚之助の末妹・初である。
この夫婦は、男女合せて十二人の子をもうけたそうな。

情炎

一

その日の午後にふり出した雨に風が加わった。
夜に入ると、ひどい吹き降りとなった。
「政七、いるか？」
足軽長屋の一つに住む伊東政七のところへ、同僚の弓足軽で内山文五郎というものが、雨仕度であらわれ、
「中西様が、およびだ。すぐに行ってくれ」
と、政七にいった。
中西様というのは、政七や文五郎が所属している一組十六人をあずかる組頭である。
「何か、急ぎの御用か？」
と、政七が熱い味噌汁の椀を膳に置き、すぐに立ちあがった。
このとき伊東政七は二十九歳で、妻・ぬいとの間に、三歳のむすめ・たかをもうけている。
その、ひとりむすめのおたかは、ちょうど、梅雨期の不順な気候に下痢をおこし、発熱して、次の間にねむっていた。
「行って来る」
と、政七が傍にいる妻にいった。

ぬいが、うなずいて仕度にかかった。
使いに来た内山文五郎は土間に立ち、雨にぬれた笠をぬがぬまま、
「では、たのむぞ」
顔をそ向けるようにしていい、政七の返事もきかぬうちに戸外へ去った。
ちなみにいうと、この日、政七は非番であり、文五郎は御城へ出て、西ノ門の番士をつとめていたはずである。
「何の御用なのかな……？」
と、伊東政七が、この足軽長屋のみか城下でも評判の美しさを、夫婦になってから六年にもなるのに、まだうわさされているぬいに、
「おたかに、気をつけてな」
「あい」
「すぐに、もどれるだろう」
いいおいて、雨仕度をした政七が出て行った。
それを見送り、ぬいが、自分ひとりの食事をつづけようと箸をとった瞬間に、土間へ、ずっと男がひとり入って来た。
いま、政七へ組頭のことばをつたえた内山文五郎なのである。
「あ……」
ぬいの顔色が変った。
文五郎が、ものもいわずに、獣のような俊敏さで、ぬいへ躍りかかった。
文五郎は三尺ほどのふとい木切れを持っていて、これで、いきなりぬいのくびのあたりを撲りつ

けた。

ぬいは、驚愕の眼をみはったまま昏倒し、気をうしなった。

土間と二部屋から成る足軽長屋である。

文五郎は次の間にねむっているおたかをたしかめてから、雨仕度をかなぐり捨て、戸じまりをし、すぐに、倒れているおぬいの躰へおおいかぶさって行った。

がっしりと骨ぶとい内山文五郎の体軀が汗をふき出している。

「見ろ、見ろ……ざまを見ろ……」

ぶつぶつと、ののしり声を発しつつ、文五郎が狂暴に、ぬいの着物をはぎとった。

ふっくらと白く脹った、ぬいの乳房へ、ひげあとの濃い、あごの張った文五郎の顔が埋まった。

そのころ……。

足軽長屋を出た伊東政七は、城の外濠に沿った道を東へすすんでいる。

右がわは、宝光寺、蓮昌寺などの寺院がならび、左手は濠をへだてて上級藩士の邸宅がならんでいた。

組頭・中西作兵衛の屋敷は、外ヶ輪裏の一角にあり、まだ遠い。ちなみにのべておくと、伊東政七の妻ぬいは、政七と結婚する前に、中西作兵衛方へ奉公をしていたことがある。

激しい雨の中に笠をかたむけつつ、知りつくした道だけに提燈も持たぬ政七が八軒町の通りへ出た。

と……。

右手の、石黒万之介という藩士の屋敷の門が開き、中から道へあらわれたのが、なんと中西作兵衛なのである。

中西は、小者を一人つれ、雨提燈を持たせていた。

「あ……」

伊東政七がそれと知って駈け寄って行った。

「御組頭様……」

「や……政七ではないか……」

「御屋敷に、おいでのこととばかり存じましたが……」

「いや、昼すぎから、この石黒家へまいっておった。万之介殿と碁を、な」

「はあ……」

中西作兵衛が囲碁を好むことは政七も知っている。

(それにしても、妙な……?)

と、感じた。

内山文五郎は、組頭が石黒邸に来ていることなど、まったく口にしていない。

「どうしたのだ、政七」

「は……?」

「どこへまいる?」

いよいよ、おかしい。

「いえ……およびだときましたので……」

「わしがか?」

「はい」

「よばぬ」

「急の御用とか……」
「知らぬぞ」
「内山文五郎がまいりまして、さように……」
ここで、心得のある士なら異常を感じたろうが、好人物ながら凡庸な中西作兵衛は気にもとめず、
「なにかの間ちがいであろう。わしは呼ばぬ。もどれ」
いい捨てて小者をうながし、さっさと遠去かって行く。
(……?)
くびをかしげたが、こうなっては、自宅へもどるよりほかはない、
伊東政七は帰途についた。
寺町通りを左へまがったところが足軽長屋の入口で、幅二間の道をへだてて、同じ間取りの家が数十軒も向い合っている。
角から二軒目の左手の家が、政七のものだ。
雨勢は、強まるばかりであった。
すべての物音は豪雨の響みに消されている。
伊東政七が、この足軽長屋の道へふみこんだとき、灯はもれているけれども、だれ一人、道に出てはいない。
笠の緒に手をかけつつ、政七がわが家へ向ったとき、その表の戸が内がわから開いた。
(や……?)
おもわず足をとめた政七の眼が、中から飛び出して来た男の黒い影をとらえた。

「あ……文……」
と、いいかけたのが、伊東政七の最期である。
黒い影が脇差を引きぬき、無言のまま、これを政七の腹へ突き刺した。
「うわあ……」
政七の悲鳴がおこった。
黒い影が、よろめく政七の腰を蹴って脇差を引きぬき、今度は政七のあたまをしたたかに斬った。
またも、政七の悲鳴があがる。
黒い影は、そのまま、暗闇に溶けこむように逃げ去った。
政七の声をきいた足軽長屋の人びとが、外へ飛び出して来たとき、すでに、伊東政七は息絶えていたという。
人びとは、政七の長屋へ入った。
半裸のぬいが、あたまをかかえて、炉端にもがいている。
彼女のあたまからの流血が、乳房から肩、腕にまで飛び散り、目もあてられぬありさまである。
「おぬいさん……」
「どうした?」
抱きおこして見ると、ぬいは、
「う、わ、わ……」
白い泡を口から吹き出し、両眼をつりあげ、わけもわからぬうめき声を発して、身をもがくのみだ。

次の間で、三歳のおたかの泣声がするのに、人びとは気づいた。
いつの間にか目ざめたらしく、おたかが、声をしぼるようにして泣き叫んでいる。
「これは、いったい……？」
「と、とんだことになった」
人びとは顔を見合せ、悽惨な、この夜の異変に呼吸をのむばかりだ。
この夜。
弓足軽の一人、内山文五郎が城下から逃走した。
寛政十年（西暦一七九八）の初夏の或る夜のことであった。
この惨劇があったところは、越後の国・新発田五万石、溝口出雲守城下の足軽長屋である。

二

新発田藩庁は、この事件を内密にとりはかろうとした。
足軽・伊東政七を殺害し、その妻ぬいに暴行をはたらき、城下を脱走した犯人は、〔内山文五郎〕
と、見きわめがついている。
一応は、新発田藩でも文五郎を捕えるべく、追手を出した。
しかし、ついにこれを発見することができなかった。
捜索の仕方に、あまり情熱がなかったともいえよう。
殺された伊東政七は、祖父の代から藩の足軽として奉公してきたものだが、内山文五郎も四代つづいての足軽奉公である。

このとき、内山文五郎は三十二歳であった。当時なら、子の二人や三人があっても当然なのだが、文五郎は妻も子もない。両親も、すでに病歿している。
こうした身軽な文五郎が、政七の妻ぬいに想いをかけ、今度の兇行におよんだのであろう、ということになった。
「すこしも、気づかなんだ」
「政七と文五郎とは、仲も悪くはないように見えたが……」
「そうとも」
「それにのう、文五郎がおぬいさんに妙なそぶりを見せたことはないし、見たこともないようにおもうたが……」
との、足軽長屋のうわさであった。
さて……。
夏もすぎぬうちに、藩庁の内山文五郎へ対する捜索が、打ち切りとなった。
いうまでもなく、当時は、徳川将軍の威令の下に、諸大名がそれぞれの領国を統治していた〔封建の時代〕である。
ゆえに……。
殺人犯人が他国の領内へ逃げこんでしまえば、それを藩庁が追いかけることもならない。
つまり、当時の日本には無数の〔国境〕が存在していたのである。
そこで、
「殺された者の肉親が犯人を追って行き、死者のかたきを討つ」
ことが、武家社会の間に一種の不文律の制度として容認された。

正当な〔敵討ち〕であれば、領主から日本全国共通の〔敵討ち免許状〕が下付される。
もちろん、幕府へも、このことが領主なり藩庁なりからとどけ出されるのだ。
だから……。
これは親族のうらみをはらすということのほかに、殺人犯人へ制裁をあたえるという大きな意味がふくまれている。
しかし、肉親の敵を討つといっても、親のかたき以外の、伯父叔父、妻などのかたきを討つことは、事情によってゆるされるし、兄のかたき討ちもよいが、姉や弟妹のかたき討ちには、まず正式の許可がおりないことになっている。
これは、どういう意味をもつものであろうか。
筆者も長い間、このことを考えているが、なっとくのゆく解決がつかめていない。
姉妹弟のかたき討ちは、
「ならぬ」
のである。
なぜか……？
これまでの〔敵討ち研究〕にも、このことがじゅうぶんに解明されてはいない。
それはさておき……。
伊東政七の場合は〔かたき討ち〕が成りたつのだ。
だが、むずかしい。
たった一人の子は、三歳の女児にすぎぬ。
それに。

かたきの内山文五郎から、すさまじい暴行をうけたぬいは、以来、すこし気が狂ってきたようだ。
ぬいの実家は、新発田城下の東南四里のところにある二王子山のふもとの、田貝村の百姓であった。
当主は、ぬいの実兄・与惣である。
与惣はいった。
「その、内山文五郎というやつ。釜ゆでにしてもあきたらぬが……さりとて、三つのおたかにかたきを討たせることもならぬ。妹も気が狂ってしもうた。くやしゅうてくやしゅうてならぬが、こうなれば仕方もない。妹と、妹の子をおれが引きとろう」
犯行後、間もなく、与惣は、ぬいとたかを引きとっている。
藩庁も、これを諒とした。
足軽は〔武士のはしくれ〕であっても、こうしたときは万事につけ、正当の藩士としてあつかわれない。
藩庁の、この事件に対する態度と処置には熱情が見られなかった。
田貝村の与惣は、
「冷たいものだ」
ひそかに、鬱憤をもらしていたとか……。
兄・与惣のもとに引きとられたぬいは、依然、容体がおもわしくない。
ほとんど言葉をもらさず、凝と床の上へすわり、うつろな眼で一点を見つめたまま、長い時間をすごしている。

そして、夕暮れになると、
「痛、痛……」
と、あたまを抱え、のたうちまわるようにして、頭痛をうったえるのであった。
それでも時折は、いくらか正気にもどることがあるらしく、傍で無心にあそぶおたかのあたまを撫でながら、
「かわいそう……かわいそうに……」
つぶやく声を、与惣夫婦はたまらぬおもいできいた。
ともかく、こうした妹が、まさか自殺をとげようとは与惣も考えていなかったろう。
それは、秋がすぎようとする或る日のことであったが、前日からの雨で、外の仕事ができないから、与惣夫婦は台所の炉端で「こもはり縄」をなっていた。
与惣の子の千太郎（七歳）、みつ（四歳）の二児と共に、おたかも炉端にいてあそんでいる。
すると……。
奥の部屋にいたぬいが、出戸座敷の縁側づたいに、内庭とよぶ大土間へ下りて来た。
与惣夫婦は、これをちらと見たが、別に気にもとめない。
内庭の一角にある馬屋のとなりの便所へ、このごろのぬいは人の手を借りずに行けるようになってきていた。
与惣夫婦の視線がぬいからはなれたとき、ぬいがすっと馬屋へ入った。
この馬屋の壁に鎌が掛けてある。
この鎌をつかんだぬいが、いささかのためらいもなく、おのれの喉笛を掻き切った。
ぬいの絶叫があがった。

「あれっ……」
「なんだ？」
与惣夫婦が駆けつけ、
「あ、こりゃあ……」
「おぬい、おぬい！」
抱き起したときには、ほとんど、ぬいは死んでいた。
それほどに、この自殺はみごとなものだったといえる。
「よくもまあ、こんなまねが、妹にできたものだ」
与惣は、おどろきと悲しみがないまぜになって、
「こんなことがあっていいか、あっていいのか……」
泪声で何度もいった。
与惣夫婦は、このときからおたかを、
「おれたちの子にしよう」
と、誓い合った。
ぬいは、密葬された。
こうして、五年の歳月がながれる。
おたかは八歳になった。
与惣夫婦は（およし）という子が新しく生まれ、このめんどうを、おたかが実によく見る。とても八つの子とはおもえなかった。
おたかがぬいの子であることを知っているのは、与惣の長男・千太郎で、これは十二歳になっ

ている。

千太郎は利発な子で、父親が、

「おたかは、このうちの子だ。お前の妹だということを忘れてはいかぬ」

といったのを、よくわかり、おたかに対しては他の妹たちと同様に接している。

このまま行けば、おたかも二王子山麓の村のむすめとして、おだやかな一生を送ることができたろう。

おたかは、亡母ぬいそっくりの顔だちで、

「末がたのしみだ。よいところへ嫁にやりたいものだな」

与惣は、たのしみにしていた。

ところが……。

そのころになって、村人の間に、五年前の新発田城下での事件が、ひそかにうわさされるようになってきた。

これは、四里はなれた城下でのうわさが、ようやく、この村にまでひろがってきたことを意味する。

うわさが二王子山麓の村々にひろまるころには、新発田城下でのうわさは消えてしまってい、当夜のことを話題にのぼせるのに、城下の人びとは飽いてしまっている。

(これは困った……)

と、与惣夫婦は苦悩した。

といって、人の口に戸をたてるわけにはゆかぬ。

だが、おたかは八歳になっていし、しかも大人びたところがあるし、もしも、村人のうわさがおたかの耳へ入ったなら、これまで自分たちを真の両親だとおもいこんでいるおたかを苦しませることになる。

さらに、あのような、いまわしい事件のために異常死をとげた伊東政七夫婦のことを知ったら、おたかの苦しみは倍加することになる。

「どうしたら、よいものか……」

「こまったなあ……」

なるべく、おたかを外へ出さぬようにしてはいるのだけれども、そうすることによって、おたかは与惣夫婦を異様におもうであろう。

ついに、与惣が決意して、妻に、こういった。

「おもいきって、おたかを江戸へやろう」

三

与惣がおもいついたのは、江戸で〔印判師〕をしている母方の叔父のことであった。

この叔父は、名を〔左右助〕といい、少年のころから大坂の阿波座・豊嶋町にある〔印精堂・藤木六右衛門〕のもとへ引きとられ、ここでみっちりと印判屋としての腕をみがいたようである。

当時の印判師というものは、なかなかに格式があったもののようだ。

左右助は三十をこえて、ようやくゆるしを得、印精堂の名をわけてもらい、江戸へ来て独立をした。

いまは、三人ほどの弟子もいるし、武家方や寺社からの注文も多い、と、与惣はきいている。

〔印精堂・藤木左右助〕の店舗は、江戸の上野山下、池ノ端仲町にあった。

さいわいに、交際も絶えていない。
というのも……。
与惣の亡父が、幼いころの左右助を非常に可愛がったことを、左右助はいまも忘れかねていると見え、年に一度ほどは、江戸の名物を送りとどけてくれたりするし、与惣もまた、こちらの田舎の物をお返しに送る。
左右助の実家は、すでに絶えてしまっているが、新発田城下の西方一里余の佐々木村に墓所があり、二十年ほど前、左右助が大坂から江戸へ移るときにさいして越後へ立ち寄り、墓参をおこなった折、与惣も亡父母と共に佐々木村へ出向き、りっぱに成長した左右助叔父を見ている。
与惣の亡母の実弟だけに、
「あごと鼻が長うて、ひょろりとした躰つきまで、おふくろさまにそっくりでな」
と、与惣は妻のこうによく語ったものだ。
与惣は、江戸の左右助叔父へ手紙を書いた。
百姓といっても、与惣の家はむかしからかなりの余裕があって、彼は少年のころ、新発田城下の寿昌寺という寺へ年に何度か、泊りがけで文字をならいに行くことができたのである。
手紙は、たどたどしくても長文のものであった。
与惣は、この手紙を書くのに五日を要した。
手紙の中で、与惣は、おたかに関するいっさいのことをうちあけておいた。
しばらくして、左右助から返事が来た。
印判師という職業柄か、左右助のかな文字はすばらしいものだ。
(叔父ごの修行はなみたいていのものではなかったのだな)

と、おもいつつ、与惣は手紙を読んだ。
左右助叔父は、こういってきた。
「……お前の妹のぬいが、そのようにして死んだとは、すこしも知らなかった。ぬいの顔を一度も見ていないわしだが……お前の手紙を読んだときには、くやしくてくやしくて、一夜ねむれもせなんだ。が、なるほど、こうなっては仕方あるまい。
そのおたかという子を、そちらで暮させてはいけない。お前のいうとおりだ。よろしい。わしが引きうけよう。
わしも、五年ほど前につれあいを病で死なせてからは、お前も知ってのように子もないので、五十の坂をこえたこのごろ、いささか、さびしいおもいもしていたところだ。
おたかをわしの養女ということにして、引きとりたいとおもう。お前が江戸まで連れて来るというが、もしもむりなようなら、わしがそちらへ出向いてもよい」
このように、左右助叔父がこころよく引きうけてくれたので、与惣夫婦は、ほっとするおもいであったが、
「けれども、おたかにはなんといいきかしたらよいものか？」
と、妻にいわれて、与惣も困った。
困ったが、ここまできては仕方もないことだ。
妹のぬいが自殺をとげたとき、おたかは三歳の幼女であったし、そのころの記憶は全くないといってよい。おたかは、どこまでも与惣夫婦を実の両親だとおもいこんでいるようであった。
結局……。
与惣は、なにもいわぬまま、おたかをつれて江戸へ旅立つことにした。

「江戸の叔父さまのところへ行くのだが……そうだ、おたかをいっしょにつれて行こう」

こういい出したのである。

父と共に、おたかが江戸見物に行くというので、千太郎と幼女のおよしはさておき、九歳になるみつが、うらやましくもねたましくもおもったのだろう。しきりに駄々をいってすねるのをなだめ、与惣は、おたかをともない、村を発して江戸へ向った。

四

池ノ端仲町は、上野の不忍池の南岸に細長くのびた町であって、近くには上野・東叡山をひかえ、山下のにぎわいも眼のあたりにした江戸でも一流の商店街といってよい。

大きな店舗ではなくとも、この町すじにならぶ店は、いずれもそれと知られた〔名店〕ぞろいというのだから、藤木左右助の〔印精堂〕も相当なものなのであろう。

別に目立つほどの店がまえではない。

格子戸のはまった表口に、

〔御金印・石印彫——印判板木司——印精堂〕

と記した木彫りの額が、かかげられているのみであった。

「や……これは、よう来てくれたな」

与惣とおたかを出迎えた印判師・藤木左右助が、おたかをひと目見て、

「ふうむ……」

嘆声を発した。

おたかは、母のぬいに生き写しである。

ぬいはまた、その母のすわにそっくりだといわれていたものだ。

すわは左右助の姉であり、与惣の実母ということになる。

「おお……おう、おう……」

と、藤木左右助がおたかを抱きしめ、

「可愛い子じゃ、よい子じゃ」

たちまちに涕涙をした。

あとで与惣が、

「似ておりましょう、叔父ご」

「似ておる。姉の……いや、おぬしの母にそのままじゃ」

「妹のぬいにも生き写しなので……」

「ほ、そうか……ふむ、なるほどのう」

藤木左右助は、与惣が二十年前に見たときとくらべると、まるで風貌が変っていた。

ひょろりと長い体軀はそのままであったが、長い鼻にもあごにも、ふっくらと肉がつき、仕事の上で絶えず研鑽をおこたらぬ故か、その教養が身にも顔にも、かくそうとしてもかくしきれぬ。

(叔父ごは、まことに上品なお人になられたなあ)

と、与惣はおどろきもし、感嘆もして、

(それでいて、すこしもおごりたかぶったところがない。こういう叔父ごがおたかを引きとってくれるなら、大安心だ)

と、よろこんだのである。

左右助叔父は、まだ与惣が、おたかにはなしをしていないことを知るや、

「よし、よし、まかせておきなさい」

それから五日ほどは、与惣とおたかをつれ、毎日のように自分がつきそい、江戸見物につれ歩いた。

この間、藤木左右助は懸命におたかのめんどうを見て、おたかの気に入られるよう、つとめている。

八歳のおたかが、なにごとにも控え目で、左右助と与惣のいうままに、おとなしく、おだやかに、それでいて、さもうれしげに、江戸の町々を見物して歩く態をつくづくとながめ、左右助がこういった。

「与惣よ。ああしたおたかのふるまいは、まさに亡き姉……いや、おぬしの母ごにそっくりじゃ」

ころあいを見て……。

左右助が、わざと与惣を同行せず、おたかのみをつれて、同じ仲町にある〔志き嶋屋〕というすしやへ出かけた。

〔志き嶋屋〕は、笹巻ずし、海苔巻ずし、玉子巻などが名物で、主人の勝三郎は大坂の出身だし、長い歳月を大坂ですごした藤木左右助とは親交がふかい。

この二階へ、おたかをつれて来た左右助が、いろいろなすしを御馳走してやりながら、

「ねえ、おたかや」

と、切り出した。

「お前のね、お祖母さん（与惣の母）にそっくりなお前を、わしは可愛くて可愛くてならないのだよ。どうだろうかねえ、ひとつ、おもいきって、わしの子になってくれないかえ？」

すると、おたかは手にとったばかりの玉子巻を皿の上に置き、しばらくは、まじまじと左右助老人の顔を見つめていたという。

その、八歳の少女にしては、何やら深沈たる双眸の色を見て、藤木左右助は得体の知れぬ胸さわぎをおぼえたそうである。

ややあって、おたかが、

「それは、父も知ってのこと？」

と、問うた。

「む……昨夜はなした。父はいやじゃというたが……なれど父には、ほかに三人もの子がある。だから、どうしても、お前をわしの子にくれ、とたのんだのじゃ」

「父は？」

「ようやくにな、お前がよいというなら、と、こういってくれたのじゃ。な、たのむ。わしの子になってくれよ」

「はい」

と、おたかのこたえは、あっけないほどのいさぎよさであった。

左右助老人のほうが、むしろ狼狽した、といってよい。

こうして、おたかは江戸に残ることになった。

与惣が江戸を去る日。

藤木左右助と共に、これを千住大橋まで見送ったおたかが、

「父さん、さようなら、ながい間、ありがとうございました」

と、いい出したときには、与惣もぎょっとした顔つきになり、左右助叔父を見やって、

「なんとも、これは……いやはや、いうことばもありませぬなあ」
むりに笑いかけた顔が、たちまちにゆがみ、あふれる涙をかくそうともせず、しっかりとおたかを抱きしめ、
「しあわせでな、しあわせでなあ……」
泣声で、何度もくり返した。
与惣が越後へ帰ってから、さらに十年の歳月が経過した。
おたかは十八歳になった。
藤木左右助は六十一歳。しかし、元気いっぱいであった。
そのころ……。
おたかに、恋人ができた。
この恋人、藤木左右助公認の若者であって、名を〔木村源治郎〕という。
池ノ端仲町の〔印精堂〕から程近い下谷・長者町一丁目に一刀流の道場をかまえる斎木達之進という剣客は、剣術も名人だそうだが、常識もふかく、書もよくする。ゆえに、印精堂へも種々の印鑑やら篆刻をたのみに来て、いわば藤木左右助の〔得意先〕といってもよい。
左右助も、長者町の道場へは、よく出かけて行く。
そして木村源治郎は、この斎木達之進の門弟なのである。
師の斎木の使いで、彼が印精堂へあらわれることもめずらしくはない。
源治郎は、和泉橋通りに屋敷がある、旗本の木村孫左衛門直宣の次男で、剣術に熱心なところから父の屋敷を出て、斎木道場へ住みこみ、修行にはげんでいたのだ。
こうしたわけで、木村源治郎は、おたかが十五、六のころから見知ってもいたのだけれども、

しだいに、おたかの姿態が桃の花片のように匂いたち、みなぎるような若さにふくらむのを見るうち、
（おたかどのこそ、おれの妻に……）
と、源治郎の思慕はつのるばかりとなった。
彼は、おたかの意中もたしかめぬうち、いきなり、藤木左右助へ、
「おたかどのをもらいうけたいのです」
と、申しこんだものである。
「おたかは、このことを知っているのかね」
と、左右助。
「知りません。何も申してはいない」
「これは、いさぎよいことだ」
「御主人から、はなして下さればありがたい。その上で、もし、おたかどのが私をいやと申されるなら、あきらめます」
「いさぎよいな」
「おねがいします。いけませぬか？」
「気に入ったよ。源治郎さん」
「え……？」
「いま、気に入ったばかりじゃ」
「これは、どうも……」
「お前さんになら、おたかをやってもよい。ただし、おたかが承知するならば、じゃ」

「ありがたいことです」

そこで左右助老人が、おたかの気もちを問うてみるや、おたかが、見る見るうちに顔をあからめたものである。

「そうか……お前もなあ……」

芽吹くときの樹のような鮮烈さとみずみずしさそのものの木村源治郎は、早くもおたかの胸のうちに、そっと、たいせつに仕まいこまれていたらしい。

ところで……。

おたかが江戸へ来ることもなく、ひいては木村源治郎との婚約がととのうことがなかったなら、実の父の敵・内山文五郎に出合うこともなかったろう。

もっとも、この出合いは一方的なものであった。

なぜなら、おたか自身は、文五郎を眼前に見ても全くそれと気づくはずがなかったからである。

五

さて……。

木村源治郎とおたかの縁談については、源治郎の実家が無役ながら二百石の幕臣ゆえ、すこしはもめたこともあったようだ。

源治郎の父・木村孫左衛門が、この次男坊をどこぞの幕臣の家へ養子に行けることをのぞんでいたのは、当然であったろう。

しかし源治郎は、堅くるしい養子縁組をするつもりはさらさらになく、

(どこまでも剣術で行く)

つもりである。

さらに、彼の師匠である斎木達之進は、

「源治郎なら、やって行けよう」

その技倆をみとめてくれていたし、斎木先生も、

「印精堂の養女なら、すこしもおかしいことはない」

みずから木村邸をおとずれ、源治郎の父兄を説得してくれたものだ。

そして、ようやくにはなしがまとまったのである。

夫婦になれば、斎木道場の近くへ、小さな家でも借り、ここから源治郎が道場へ通い、老いた師匠の代稽古をしたり、出稽古もしたりすることになる。

藤木左右助も、おたかに養子をとって家業をつがせる、などというつもりはない。自分も気に入っている男と夫婦になり、近くへ住み暮してくれるなら、

「これにこしたことはないわい」

なのである。

それは、文化十年九月の或る日のことであったが……。

斎木達之進と藤木左右助につきそわれたおたかが、はじめて木村源治郎の実家を訪問することになった。

すでに簡略ながら結納のこともすんでいる。

和泉橋通りの木村屋敷へ、三人が到着したのは四ツ(午前十時)ごろであったろうか。

まっ青に晴れあがった秋日和で、片番所つきの長屋門を入ると、そこに出迎えていた五十がらみの中間で幸平というのが、門を入って来るおたかを見て愕然とした。

幸平は、おどろくのと同時に顔を伏せ、あたまを低く低くたれ、三人を出迎えるかたちをとったので、三人は気にもとめず、玄関へ向った。

玄関に、木村源治郎があらわれ、にっこりと笑いかけた。

幸平は、すぐに門番小屋へ飛びこんでしまった。

(来た……とうとう来た……)

これであった。

幸平こそ、四十七歳になった内山文五郎なのである。

十五年前のあの夜。

文五郎が見知っているのは、三歳のおたかにすぎない。

それなのに、十八の処女に成長した彼女を見て、瞬間、

(あっ、おぬいのむすめ……)

と直感したのは、すでにのべておいたように、おたかが、美貌の亡母そっくりであったからだ。

文五郎が、はじめてぬいを犯したのも、ちょうど、ぬいがおたかの年ごろであったときだ。

そのころ、ぬいは新発田藩の足軽組頭・中西作兵衛屋敷で下女奉公をしていたものである。

年に一度、盆の前後にゆるされる休暇を得て、ぬいが二王子山麓の実家へもどる、その途中に待ちうけ、文五郎が、

「おれと夫婦になってくれ」

と、執拗にもちかけた。

ぬいは、ことわった。

断固として、はねつけた。

すると、文五郎がぬいを強打して失神させ、犯した。

こうした狂暴な仕様は、文五郎がもって生まれた性格なのか。それとも一人子に生まれ、亡き父母から甘やかされて育ちあがり、身分の軽い足軽ながら、欲望がみたされぬときの怒りを押えきれぬわがままな男になってしまったものか……。

女のことで、当時の内山文五郎にとかくのうわさはなかったようだが、同僚たちとは、よく力ずくの喧嘩をしたそうである。

ぬいを犯し、文五郎は去った。

この後に、ぬいが立ち直り、その傷痕をかくし、中西作兵衛のすすめるまま、組下の足軽・伊東政七に嫁いだのは、其の後、文五郎がぬいの前へはあらわれず、脅迫がましいまねをしたことがなかったからであろう。

それが……。

おたかを生んで二年もすると、文五郎が政七の留守をねらって、ひそかにあらわれては、情交をせまるようになった。

これまで沈黙していただけに、文五郎の狂った慕情は内攻をふかめ、屈折の度合いを増していたのだ。

だから、あのころのぬいは、夫・政七へかくしてある過去の秘密と、その秘密を餌に、ふたたび自分に襲いかかろうとする文五郎とをもてあまし、日毎にたかまる不安と恐怖に心身をさいなまれていたにちがいない。

六

（やっぱりそうだ……やっぱり、来た……）

内山文五郎の〔幸平〕は、主人の次男が嫁をもらうことを知らないではないが、そのむすめの名を、まだ耳にしていない。

半刻（一時間）ほどして、斎木達之進にともなわれ、左右助とおたかが木村邸を辞去したのち、文五郎は、そっと他の奉公人の口から、源治郎の妻となるむすめの名を、

「おたか」

と、ききとることができた。

（こ、これは、いけねえ）

文五郎は、わが胃の腑を得体の知れぬちからで撲り撃たれたような気がした。

すぐに木村屋敷から脱出しようとおもった。

だが、よくよく考えてみると、どうも自分をめざして乗りこんで来たようにもおもえぬ。

次男・源治郎の結婚は事実なのだ。

（名は同じで、顔は似ていても、別人ということもある）

すこし、落ちついてきた。

こわごわ、数日をすごしてみたが、べつだん、自分がうたがわれている様子もないし、おたかもあらわれない。

（別人かな……なんでも池ノ端仲町の印判師のむすめ、だというが……）

おたかが、印精堂左右助の〔養女〕であることを、木村屋敷の奉公人たちは、まだ知らなかった。ほんとうのむすめだ、とおもいこんでいたようである。

（別人らしい……）

文五郎は、そうおもいはじめた。

伊東政七を殺したのち、彼は、ぬいとおたかが実家へ引きとられたであろう、と、推察していた。ぬいが自殺をとげたことも文五郎は知らなかった。

ぬいの実家がある二王子山麓の村にいるだろう母娘と、江戸でも名の通った印判師とでは、どうにも、事情を知らぬ文五郎の脳裡にはむすびつかないのである。

それにしても……。

おたかを見た印象は、文五郎にとって強烈であった。

（おれは、ただなぐさみに、おぬいを、あのような目にあわせたのではねえのだ）

その、焼けつくような想いを、彼はいつも抱いている。

政七を殺害してからの文五郎は、上方から中国すじを放浪して歩き、八年前に江戸へ来た。

新発田藩から追われる身であることはもちろんだが、文五郎としては、それよりも、未亡人となったぬいが、おたかをつれ、実家の兄・与惣をたのみ、夫の敵討ちの旅に出ることが考えられた。

足軽とはいえ、伊東政七は武士のはしくれなのである。

ぬいよりも、文五郎にとっては、与惣の助勢がおそろしかったのである。

江戸へ来てからは、麻布にある中間専門の口入屋を介して、文五郎は旗本屋敷をわたり歩き、去年の春に、木村屋敷へやとわれた。

いわゆる（わたり中間）というわけで、酒も博打も、悪いことはすべてやりつくした文五郎だが、五十近くになったいまは、さすがに気力も体力もおとろえてきて、只ひとりの身寄りもないおのれに、

（これから、おれは、いったいどうなることか……）

たえきれぬ寂寥に抱きすくめられ、夜ふけの中間部屋で、男泣きに泣くことがあった。

それでいて、髪に白いものがまじりはじめた文五郎が、毎夜のように想いうかべるのは、あの夜のぬいのことであった。

政七と夫婦になる前のぬいを林の中へ引きずりこみ、犯したときよりも、政七を殺した、あの雨の夜のぬいのことが、その顔が、その肉体が忘れきれない。

あのとき、文五郎はぬいを全裸にした。

そのときまで、渇望しつづけてきたぬいの裸形であったのだ。

まっ白な乳房は、おもく、ゆたかに脹っていたし、あぶら汗の浮いた下腹や腕のふくらみが、いまも目に焼きついている。

政七を殺さなくとも、文五郎は城下を逃げるつもりだった。人の妻となったぬいと、同じ土地に住むことの苦痛が、彼をあのような行為にふみきらせた。

短い、せわしない、あのときのぬいに加えた一方的な愛撫（といえるか、どうか）の思い出だけが、これまでの文五郎をささえてきたともいえる。

あの夜――。文五郎は、最後に、かすかなうめきを発しつつ、まだ正気にもどらないぬいの下腹へ顔を埋め、その恥毛を数本、引きぬいて紙に包んだ。

他人から見れば、なんともおろかな所業であろうが、内山文五郎にとっては、いまも、守り袋の中に、かたく仕まいこんであるぬいの恥毛が、そのまま彼の〔人生〕であったといえる。

それほどまでに、文五郎はぬいを想いつめていたのであった。

こうして……。

翌文化十一年となった。

その三月十日に、木村源治郎とおたかの、結婚の式が質素におこなわれた。

式の場所は、木村邸である。

文五郎は、ひそかに、おたかの花嫁姿を見た。

たまらないおもいがした。

このころになると、文五郎は、おたかが〔別人〕だとおもいこむようになっていたようであるが、この結婚がすんで間もなく、

「故郷の近江へ帰りたいと存じます」

と、いい出て、文五郎は木村家から暇をもらい、どこへともなく去った。

文五郎は、近江へなど行かぬ。

そのまま、江戸にいた。

またも麻布の口入屋を通じて、下谷・竹門に屋敷がある、これも旗本の尾林友蔵へ中間奉公に出たのである。

おたかは、斎木道場の西側にある南大川町の、もとは町医者の住居だったとかいう小さな家を借り、木村源治郎との幸福な新婚生活にひたりきっている。

その、おたかの家を、文五郎はつきとめた。

いや、つきとめるために江戸へ残り、同じ下谷の旗本屋敷へ奉公に出た、といったほうがよいだろう。

つとめの暇があると、文五郎は南大川町のあたりを、それとなくうろつきまわり、新妻となったおたかを路上に見かけることに情熱をかたむけはじめた。

おろかしい、と知っていて、
（どうにもならねえ）
のである。
日に日に、おたかは変っていった。新妻の色気が、にわかにゆたかになった肢体にただよいはじめた。
（源治郎が、そうさせやがるのだ）
そうしたおたかを見るたびに、内山文五郎の眼の色が妖しく光った。
夏になると、おたかは身ごもった。
文五郎は依然、おたかを見張りつづけている。
おたかを見かけることができた日の夜には、ふとんの中へもぐりこみ、文五郎は守り袋の中から、ぬいの恥毛を出し、頬ずりをしたり、口中にふくんで身もだえしたりした。

七

文化十二年四月。
二十歳になったおたかが、女児を生んだ。
夫・源治郎の父・木村孫左衛門が、
〔縫〕
と、命名してくれた。
「ぬい、とか……」
これをきいて、藤木左右助の面に、一瞬、暗い陰がよぎった。

偶然とはいえ、左右助老人は、
（不吉な……）
とおもったのであろう。
「養父さま。どうなさって？」
と、おたか。
「いや別に……なんでもない、なんでもないわえ」
智の実父がつけてくれた名を、
「変えたほうがいい」
などとは、とてもいえぬ。また変える理由もない。
おたかは、そうした左右助を見て、
（養父さまは、御自分で、この子の名をつけたかったのだろう）
と、おもった。
それはさておき。
このころになると、内山文五郎が、尾林家から暇をもらい、何処ともなく消え去っている。
かといって、彼が江戸を去ったのではなかった。
奉公をしていたのでは、おたかの姿を垣間見る機会が、おもうように得られないからであった。
それは、この年の夏もすぎようとする或る日のことであったが……。
早朝から斎木道場へ出かけ、門人たちに稽古をつけていた木村源治郎が、昼前に自宅へもどり、
「たか。腹がへったぞ」
あぐらをかいて、赤子の縫を抱きあげ、

「ま、おぎょうぎのわるい……」

と、おたかにいわれながらも、そのままのかたちで昼餉の箸をとった。

千魚の焼いたのに香の物、それに源治郎の大好きな葱入りの煎り卵で食事をすますと、

「さて、出かけるぞ」

源治郎が外出の仕度を、おたかに命じた。

この日。

彼は、老師・斎木達之進の代りとして、常陸・土浦九万五千石の大名・土屋采女正屋敷へ稽古をつけに行くことになっていた。

これは殿さまが、剣術の稽古をするのではなく、家臣たちのためのもので、五日に一度ほど、源治郎は代稽古に行く。

このほか、市橋下総守、松平伊賀守などの大名屋敷へも斎木達之進は出入りをしている。門人の中には大身旗本の子弟も少なくないのである。

わが家を出た木村源治郎は、小笠原左京太夫・中屋敷の塀に沿って右へ曲り、御成街道へ出ると、そのまま外神田の方へ向う。

土屋采女正の屋敷は、神田の表猿楽町にある。

筋違御門前へ出た源治郎が、加賀原を右手に見て、昌平橋へかかろうとしたとき、

(あ……)

忘れものに気づいた。

それは、土屋家の家来で、高柳司という人物からたのまれ、前日、明神下の刀屋からとどいた丹後守兼道一尺八寸余の脇差を、今日は持参して、高柳に見せることになっていたのだ。

時間も早かったし、

(一走り、もどって……)

源治郎は、まようことなく踵を返した。

ちょうど、そのころ……。

南大門町の木村宅の前を、編笠をかぶった男が、行ったり来たりしている。

汗くさい帷子の着ながしに、大刀一本を落し差しにした浪人体の男なのだが、これこそ、内山文五郎であった。

文五郎はいま、博打の金で日を送っている。

そればかりではなく、三人ほど、人を殺害してもいた。夜の道で、町家の者の背後から襲いかかり、財布を奪い取ったのである。

小笠原屋敷の長い塀に沿って、ゆっくり、二度三度と往来すると、たまさかには、赤子を寝かしつけたおたかが、小路の彼方に見える小さな裏庭へあらわれ、洗濯物を干したりする姿を垣間見ることができるのであった。

傍まで行って見たい欲望は強烈であるが、怪しまれては元も子もなくなる。

だが、おたかが縫を抱き、仲町の〔印精堂〕へ月に二度ほどは出かけるときに行き合わしたことも、何度かある。

こうしたときには、こころゆくまで後をつけて、めっきり若女房らしい肉置きになったおたかの後ろ姿を、編笠の中から凝視しつつ、

(あ……おぬい。ぬい……)

内山文五郎は胸のうちに思慕の声を発しつつ、ふらふらと、後をしたって行くのである。

養父の家からもどるおたかが、文五郎につけられていることはいうまでもない。
この日。
おたかは、なかなかに姿を見せてくれない。
それでも尚、立ち去りかね、小笠原屋敷の木立からきこえる法師蟬の声をぼんやりと耳にしているうち、文五郎は、もうたまりかねてきた。
（ひと目……ひと目でもいい）
道をへだてた向うの小路へ、文五郎が物に憑かれたようになり、足を向けたとたんに、彼方の小笠原屋敷の辻番所から、辻番が道へ出て来た。
文五郎の様子に気づき、
（怪しい男……）
と、見たのであろう。
文五郎は、はっとした。
（いけねえ。これは、いけねえ……）
急いで、文五郎は身を返し、先刻、木村源治郎が行った道を、小笠原屋敷の塀に沿って御成街道へ出た。出て、ふりかえって見ると、番士が追って来る様子はない。
（あ……よ、よかった……）
文五郎は編笠をぬぎ、満面をぬらしている冷汗をぬぐいつつ、堀丹波守と酒井越前守両屋敷の間の道へ切れこもうとした。実にそのときであった。
「待て！」
すぐ傍で、大声がきこえた。

通りがかりの武士が、文五郎を呼びとめたのである。
ぎくりと、振り向いた文五郎の前へ、駈け寄って来た老武士が、
「おのれ、内山文五郎だな」
と、叫んだ。
「ああっ……」
文五郎の声は、悲鳴に似ていた。
文五郎が新発田藩の足軽だったころ、組頭をつとめていた中西作兵衛の、めっきり老けた顔が、そこにあった。
「やはり、文五郎」
と、中西作兵衛が文五郎の右腕をつかみ、
「逃さぬぞ」
「う、……う、う……」
「来い！」

八

中西作兵衛は、二年前から新発田藩の江戸屋敷へ転勤を命ぜられていたものである。
この日。中西は主人・溝口伯耆守直諒の使者として、御成街道の石川日向守（伊勢・亀山の城主）屋敷へおもむき、公用をすませて帰途についたところであった。
御成街道を外神田に向って歩んでいると、道を横切って来た浪人者が笠をぬぎ、顔の汗をふいた。

何気なく、その横顔を見て、
(内山文五郎ではないか……)
中西も、むかしは自分の組下の足軽だっただけに、文五郎を見忘れることはなかった。
それに、中西作兵衛としては、伊東政七殺害の犯人として、文五郎を憎悪していた。政七とぬいを夫婦にさせたのは、中西の口ききによるものだし、その後、ぬいが無惨な自殺をとげたことも風聞している。
文五郎の探索は打ち切りになって久しいけれども、発見したとなれば、捕えても斬ってもよい。新発田藩における内山文五郎の犯罪が、消えたわけではないのである。
「おのれ、こやつ!」
右腕をねじりあげようとする中西作兵衛の足を、内山文五郎が蹴った。
「あっ……」
中西も六十に近くなっているだけに、おもわずよろめいた。
「うぬ!」
怒気を発した中西が立ちあがり、刀へ手をかけたとき、われを忘れた文五郎が抜刀し、
「うわあっ!」
いきなり、中西作兵衛へ切りつけた。
脇差を取りに引き返して来た木村源治郎が、このときちょうど、ここへさしかかって、
(喧嘩だな)
と感じ、
「待たれい!」

声をかけ、二人を引き分けようとして駈け寄って来た。
文五郎がこれに気づき、源治郎を見て、
「ああっ……」
愕然とした。
このとき文五郎は、源治郎と中西がしめし合せ、自分を待ちかまえ、ぬいの敵を討とうとしている……そう錯覚をした。
(やはり、おれは怪しまれていたのだ……)
かっとなり、あたまに血が逆流し、内山文五郎は半ば錯乱状態となった。
「うわ……畜生……」
両手につかんだ刀を振りまわしつつ、群れあつまりはじめた野次馬の中へ、文五郎が躍りこんだ。
「おのれ、文五……」
肩先を浅く傷つけられた中西作兵衛が、屈せずに、刀をぬき、これを追った。
文五郎が、小笠原屋敷南面の道へ飛びこんだ。
(あの……いかぬ)
木村源治郎が、中西作兵衛と躰をぶつけ合うようにして小笠原屋敷の道へ駈けこんだ。
源治郎は身なりの変っている文五郎を、
(狂人だ)
と、おもった。
とっさのことで、文五郎が以前に父の屋敷で〔幸平〕と名のっていた中間だとは、まだ気づい

ていない。

中西が、走りつつ、

「あやつめは罪人でござる。敵持ちでござる！」

と、ほとばしるように源治郎へいった。

「さようか……」

前を駈けて行く内山文五郎が、逃げ走る商人ふうの男をなぐりつけるように斬って、道を左へ曲った。

源治郎はあわてた。

わが家の方向へ、狂乱の男が刃をかざし、すさまじい速力で走って行くのである。

文五郎の脳裡には、十七年前のあの夜、おのれの暴力に屈したぬいの白い裸身がいっぱいにうかんでいる。

「ぬ、ぬい……ぬいよう……」

彼の血走った眼が、木村家へ通ずる小路をとらえた。

「ぬい、と、共に死のう、死のう！」

わめき声を発しつつ、小路へ駈けこもうとする文五郎に、ようやく追いついた木村源治郎が、

「やっ！」

体当りをくれた。

もんどりうって転倒した文五郎が、わが持つ刃で顔を傷つけ、流血する血をふりまきつつ、猛然と立ちあがり、

「どけ、どけ！」

びゅっ、びゅっ……と、刀をふるって源治郎にせまる。

「あっ……おのれは、幸平」

と、このときはじめて、源治郎がそれと気づいた。

「畜生、畜生……」

またも身を返し、文五郎が小路へ走りこもうとする。

「こやつ……」

その足を、源治郎が蹴った。

「かまわぬ。お斬り捨て下されい！」

中西作兵衛が叫ぶ。

「畜生め！」

はね起きた内山文五郎が、恐るべき執念で、またも小路へ向うのを見て、木村源治郎もこれまでとおもい、

「む！」

右足を一歩ふみ出し、抜き打ちに、文五郎の胴をなぎはらった。

「うわ……」

両眼を白くむき出し、刀を放り捨てた文五郎が、両腕を宙に突きあげるようにし、

「う、うう……」

がっくりと両ひじをつき、もはや、声にならぬ声で、

「ぬ、ぬい、共に死……」

ぱくぱくと口をうごかしたかとおもうと、前のめりに倒れ伏した。

小路の向うに、縫を抱きしめたおたかが、
（何が起ったのか……？）
と駈けあらわれ、この様子を見て、源治郎へ、
「だ、旦那さま……」
と、よびかけた。
そのおたかを見た中西作兵衛が、仰天し、
「あっ。……ぬい……」
おもわずいった。
源治郎は源治郎で、これまで見たこともなかった武士に、わが子の名を呼ばれたので、瞠目（どうもく）をした。

この事件には、いちおう町奉行所の取調べがおこなわれたけれども、新発田藩からも十七年前、幕府に対して「内山文五郎罪科の一件」がとどけ出されていたし、文五郎を斬った木村源治郎も、また中西作兵衛にも、
「落度なし」
ということになったのは、当然である。
こうなって、中西作兵衛の申したてから、はじめて木村源治郎は、妻おたかの亡き父母のことを知ったわけである。
それには、印精堂・藤木左右助が、すべてをうちあけたからでもあった。

そのきっかけとなったのは、中西がおもわず、おたかを見て、発した、
「ぬい」
の一言であったようだ。
新発田藩主・溝口伯耆守（ほうきのかみ）は、
「ぜひにも」
木村源治郎を召し抱えたい、といい出した。
期せずして、源治郎は妻に代り、妻の両親の敵を討ちとったことになった。
「これは、実に、おどろいたことだ」
源治郎があきれ顔にいうと、おたかは、
「これで、ようやく、わかりました」
しみじみという。
「何がだな？」
「ずっと、何年も前から、夢でもなしに、何やらむかしむかしのことが、ふっと胸にうかんでまいることがございました」
「ほう……」
「あの……」
「いってごらん」
「はい。それが、あの……白い、裸の、女の人が、暗い部屋の中に、仰向けになっていて……炉の火が燃えて……」
「ふむ、ふむ……」

「黒い、大きな男が、雨の中に立ちはだかっていて……」
「とすれば……お前が三歳のときの記憶ということになるな」
「おそろしいことでございます」
「それにしても……あの内山文五郎というやつ。まさに、お前をつけねらっていたのだろうか……」
「いや、いや。おそろしい……」
しがみついてくる妻の背を、しずかに撫でてやりつつ、
「もう、すんだことだ」
と、木村源治郎が、
「これからはもう、何もおもい出さずにすむ」
「は、はい」
この知らせが、藤木左右助から越後の与惣のもとへとどいたとき、与惣夫婦のおどろきは非常なものであったろうが、妹夫婦のうらみを、おたかの夫がはらしてくれたことへのよろこびも、また大きいものであったにちがいない。
与惣は、
「……もはや、いつ、あの世へ行こうともおもいのこすこととてありませぬ」
と、木村源治郎へ手紙を送ってよこしている。
おたかは、縫をあやしながら、よく、こんなつぶやきをもらした。
「お母さんには二組の御両親があるのですよ。お前にも二組のおじいさまと、おばあさまがいる。おわかりかえ……もっと、縫が大きゅうになったら、ゆっくりと、おはなしをしてあげましょうね」
木村源治郎は、溝口家からのさそいをことわり、後年、老師亡きのちの道場を引きうけ、夫婦養子のかたちで老師の姓をつぎ、斎木源治郎となった。

大石内蔵助

一

なにがきっかけで、こうなってしまったものか……大石内蔵助良雄にもよくわかっていないし、寡婦のおやすにもわからなかったろう。

だが……。

理屈ではわからなくとも、二人の官能では何も彼もわかっていたにちがいない。

おやすの顔立は……つい一月ほど前まで内蔵助が住み暮していた京都郊外・山科の山林でよく見かけた小狸に似ている。

だが……。

いざとなって、内蔵助の手ゆびが自分の秘所へわけ入ってき、陶酔の両眼を閉じたときのおやすの表情は、まるで別の女のように、

（可愛ゆげな……）

であった。

平常は美しい顔立をしていながら、男の愛撫に惑溺しているときの表情が、がらりと変って醜悪をきわめる女がいる。こういう女は、女としての性情にうるおいの欠ける女だと内蔵助はおもっている。

「あ……ああ、もう……」

おやすが堪えかねて、腰を、わずかにゆりうごかしはじめた。

五尺一寸そこそこという、当時の男としても小柄すぎる内蔵助に程よいおやすの小さな肉体なのだが、腰も腹もむっちりとした肉置きで、これはまさぐったとき、

（むむ……）

内蔵助が会心の微笑を洩らしたほどに、なめらかな肌ざわりであった。

三十をこえた百姓の寡婦で、子供も三人ほど生んでい、亡夫のかわりに田畑ではたらく一方、いま内蔵助が泊っている庄屋の屋敷へも手伝いに来たりしてなりふりかまわず、汗と土にまみれて一日を送るおやすなのである。

引きつめ髪も赤茶けてつやなく、陽と風にさらされた顔の肌はくろい。

だが……。

あえぎをたかめつつ、内蔵助の手によって露呈されたふくよかなおやすの下半身の肌は飴色に凝脂がみなぎってい、秘毛の茂り工合も、

（ほう……）

大いに内蔵助、好みにかなったらしい。

もとは播州赤穂五万石・故浅野内匠頭長矩の城代家老をつとめていた大石内蔵助は、このとき四十四歳。同志の赤穂浪人五十余名と、江戸へ隠密裡に集結をし、亡き主君・浅野長矩のうらみを奉じ、吉良上野介義央の首を討つべく、いまや江戸へ乗りこもうとしている内蔵助である。

ここは、六郷川（多摩川）の北東四里の彼方に江戸市中をのぞむ川崎の宿駅から北へ一里余。平間村の庄屋・軽部五兵衛の屋敷内だ。

このあたりは鎌倉時代からひらけているところで、多摩川の右岸にひろがる聚落はゆたかな収

穫にめぐまれ、人情もこまやかときいている。

内蔵助が軽部邸へ入ったのは先月（十月）の二十六日で、ここを内蔵助の宿所とすべく、かねてから手配にはたらいていた同志の一人富森助右衛門が、内蔵助一行を川崎まで出迎えてくれた。すでに同志のほとんどは江戸へあつまり、諸方にわかれ、ひそんでいる。

京都の閑居を発した内蔵助は、潮田又之丞ほか四名の同志をつれ、名を池田久右衛門と変え、鎌倉へ一泊してのちに平間村へ入った。

庄屋の軽部五兵衛は、先代から浅野家の江戸藩邸へ出入りのもので、五兵衛にだけは〔吉良邸討入り〕の大事を、うちあけてある。

五兵衛は、ひろい屋敷内の奥庭に面した一隅に、茶室風の〔離れ〕をわざわざ新築し、内蔵助を迎えてくれた。

屋敷の者たちへは、五兵衛から、

「京のな、ある御公家の御家来で池田様と申される」

と、いってある。

内蔵助が、ここへはじめて泊した翌朝。

「どうも見苦しき面体にはござりますれど……なかなかに気ばたらきのよい女でござりますれば、お身のまわりなどの御世話を……」

五兵衛がこういい、離れへつれて来たのが、小狸のような……おやすであった。

内蔵助は一眼で、洗いざらしの粗服の中にひそむこの女の肉体を看破した。

（ふうむ……味わいのよろしげな……）

である。

おやすもまた……。

内蔵助の小肥りで色白な体軀や、鳩のように小さくて愛くるしい光をたたえた両眼や、かたちのよいふくらみを見せた唇から発せられるやさしい声音やらに、つよく、こころをひかれたらしい。

また、それがすぐに内蔵助へつたわり、さらに内蔵助の反応が一段と変るや、この農婦は敏感にこれをうけとめ、無言のうちの仕ぐさに、胸のうちを少しずつ、ひらいてゆくのであった。

（わしとしたことが、まだ、このくせがやまぬ……）

内蔵助は胸底に苦笑をうかべた。

大名家の家老職という身分でありながら、内蔵助の好色ぶりは知る人ぞ知るもので、現に、ここ一年間の京都における遊蕩ぶりを見て、

「大石様があれほどに……」

同志のほとんどがあきれはてたようだが、なに、いまにはじまったことではないのだ。赤穂にいて、城をまもっていたときの内蔵助は気ぶりにもそのようなところを見せず、背丈が五尺四寸もある大女の妻女・りく一人をまもっているけれども、いったん、赤穂をはなれたとなるや、行き当り次第、手当り次第、下賤な売女などはもっとも好むところであるから、機会さえあればまめに手をさしのべてきている。

そうした機の……。

ただ一夜のちぎりで、男と女の胸のうちにひそむあたたかい情感がぴたりと一つにとけ合う不思議さ……その何ものにもかえがたい醍醐味こそ、内蔵助のもとめてやまぬところで、若いころは十人に一人、二十人に一人ほどの確率が年を経るにしたがい、こちらの眼のつけどころもちが

ってきた故か、ここ十年ほどは売女と遊んで厭なおもいをしたことがほとんどない。で……。

軽部屋敷の離れへ入ってから七日目の今日。

同宿の同志たちが江戸へ連絡に出て、内蔵助ひとりのところへ、おやすが午後の茶をはこんできた。

いつもの癖で、ひじまくらをして寝そべっていた内蔵助が、茶の盆を差し出すおやすへ、

「おい……」

やさしく、いった。

転瞬。おやすの眼もとが酒に酔ったように赭らむのを見るや、内蔵助もたまりかね、身をおこして女の腰を引きよせ、唇を吸った。すばやいこと、この上もない。

おやすは、いささかもさからわず、この七日間の結実へ身をゆだねてきた。

一昨年、夫の弥治郎を病気でうしなったおやすである。

「むうん……」

揺々として内蔵助の手ゆびにもだえていたおやすが、かすかにうめき、つよいちからで左腕を内蔵助のくびへ巻きつけ、われから畳へ倒れた。

内蔵助は、さからわぬ。

外は、小春日和であった。

しめきった障子を透して、午後の冬の陽ざしがあたたかくながれこむせまい部屋の中に、健康な百姓女の熟れた体臭がむれこもっている。

はだけきったおやすのえりもとから、梨の実のような乳房がこぼれてきた。それを内蔵助は下

から吸った。

「ああ、もう、……もう、ようござりますか……あの、ようござりますかえ……」

うわごとのようにつぶやきつつ、おやすが内蔵助の上からのしかかってくる。現代ならめずらしいことでもあるまいが、二百六十余年前の当時としては、女のこうした積極的挙動はめったにないことである。

内蔵助は、なにごとも、おやすにまかせることにした。

おやすは、内蔵助へおおいかぶさり、烈しく身をもみながら、もどかしげに、片手で帯をときはじめた。

やがて、うすい夕闇が障子へ下りた。

「茶を、な……いれかえてくれぬか」

内蔵助は、恥ずかしげに身じまいをするおやすのうしろへまわり、帯をむすぶのを手伝ってやりながら、

「熱い茶を、な」

「あい」

「おやすや」

「あい？」

「わしは、うれしかった。たのしかったぞよ」

「あれ……」

たもとで顔をおおい、飛び出して行ったおやすが、かなり長い時間の後に茶をいれかえてあらわれ、行燈をともした。

そして夕飯になった。
給仕をしつつ、おやすは、身状の一端を内蔵助へもらしたりした。
おやすは、安房・保田の生まれで、両親に早く死にわかれ、
「いろいろとわけもございましたがの、そのうちに……」
江戸のさるところへ下女奉公にあがり、そこの主人の世話で、平間村の百姓・弥治郎へ嫁いできたのだという。
「江戸の御主人さまは、ここの庄屋さまともお知り合いでございまして」
「ふうむ。それはよかった。江戸のなんという……？」
他意なくきいた内蔵助へ、
「あい。池ノ端・仲町の道具屋で、鍔屋家伴さまというが、もとの御主人さまでございます」
「鍔屋……」
大石内蔵助の双眸がきらりと光った。両眼の外形は小さいのだが、白い部分がほとんど見えぬほどに双眸がくろぐろとしている。
「あい鍔屋家伴さま……」
おやすが、こういったとき、渡り廊下を踏んで近寄る足音がした。
同志のうちでも、内蔵助がもっとも信頼を寄せている吉田忠左衛門の足音であった。
江戸から来た忠左衛門は、おやすが入れかわりに膳を下げて行くのを見送ってから、
「すべての手筈、ととのいました」
と、六十二歳の老顔をほころばせ、
「大石様御宿は、主税殿と同じ、石町の小山屋弥兵衛裏店にきめてござる」

「けっこう。で、潮田たちは？」
「母屋にて夕餉をしたためおります」
「わしは、いつ、ここを発てばよい？」
「明日にても」
「いや、……あと三日ほどは、ここにいよう」
「は……」
老巧な忠左衛門も今夜は興奮しているらしい。堪えに堪えていた江戸の同志たちは、頭領の内蔵助がいよいよ腰を上げての江戸入りを前にして、
「年を越さぬうちに吉良上野介の首が討てる!!」
勇躍しているらしい。
内蔵助もそのつもりである。
（だが……一日先のことは、まったく、わからぬ）
これが内蔵助の信条であった。
吉良を討つつもりでいても、たとえば老体の相手が今夜にでも急病を発し、死んでしまったらどうなるのだ……。ないとはいえぬことなのである。それなら一日も早く討入り決行をすべきなのだが、それはそれでまた、いろいろとめんどうなことがあるのだ。
「この二年……おもえば十年にも匹敵すべき長い月日でござった……」
めずらしく感傷にひたっている吉田忠左衛門を横眼で見やって、内蔵助はうすく笑い、香を焚きにかかった。

二

数日後の、元禄十五年十一月五日。

大石内蔵助は平間村を発して江戸に入り、日本橋石町の小山屋弥兵衛が家主の、小さな家へ旅装を解いた。

ここには、すでに京都を先発した内蔵助の息・主税（十五歳）や小野寺十内などが住んでいて、他の同志たちは、市中の諸方に、それぞれ身分と名を変えて住みついている。

本所・松坂町の吉良屋敷近くに住む同志たち十余名の中には、相生町二丁目で米屋や小豆屋の主人となり、吉良屋敷の探索に余念のない前原伊助や神崎与五郎などもいる。

小山屋の借家へ、池田久右衛門の変名で滞留することになった内蔵助は、これらの同志たちがあつめてくる情報を受け、それにもとづき、裁断を下せばよい。

「めっきりと、寒うなった」

若いころからの寒がりぐせで、内蔵助は綿入れの胴着を二枚もかさね、小肥りの躰が尚も着ぶくれて、炬燵へかじりついたまま、用がないときは、うつらうつらと居ねむりばかりしているのであった。

これは、家老職をつとめているときからそうなので、赤穂の城へ出仕しても、よく居ねむりをしていたものだ。

政務はそれぞれ担当の役職があり、みなが懈怠なくつとめていれば、家臣の長たる内蔵助が口をさしはさむこともない。

〔昼あんどん〕

と、彼が呼ばれた、などという俗説が世上にながれたのもそうした彼の日常があったからだし、また内蔵助自身も、みずから眠る牛、すなわち〔眠牛〕と号していたという説もある。

（父祖代々の家老を居ねむりしながらつとめていて、朝夕の食事をおいしく食べ、たまさかにはおもいきり女の肌の香におぼれる……ま、人の一生というものは、つきつめれば、只これだけのことが渋滞なくおこなわれてゆくことにあるのだから、このまま、あと十年か、二十年か……ゆったり生き、やがて死ねればよいのだが……）

そうねがっていたけれども、おもいどおりにはならなかった。

去年の三月十四日。

勅使饗応の役目をつとめていた主君・浅野長矩が、江戸城中において高家筆頭・吉良上野介へ刃傷におよんだ事件については、ここにくだくだしくのべるにもおよぶまい。

内匠頭長矩は、将軍・綱吉の命によってその日のうちに切腹。浅野家五万石も即日、取りつぶしときまった。

この第一報が、江戸藩邸から赤穂へ、早駕籠によってとどいたのは十九日の早暁であった。同夜、第二報の早駕籠が到着した。急報を受けたとき、大石内蔵助は、はじめのうち、

（相手方の吉良殿も、殿の刃をうけて亡くなられたのだ）

と、おもった。

なぜならば、幕府には〔喧嘩両成敗〕の定法があるゆえに、片手落ちの裁決は、みじんあるまいとおもいきわめていたからである。

江戸城中で喧嘩さわぎをおこした浅野と吉良は、共に、同じような罰を受けねばならぬ筈であったからである。

それが……。

負傷した吉良上野介には何のとがめもなく、

「危難にのぞみながら、よく時節をわきまえ、場所がらをつつしみ、手向いをいたさざりしは神妙である。よって何のおかまいもなし。勝手次第に御城を下り、傷の養生をいたすように」

との沙汰があったという。

これは……高家筆頭として権勢をふるう吉良が、将軍家にも近しく、幕政を一手に切りまわすほどの権力をもつ側用人・柳沢出羽守とも親密な間柄で、彼と、小大名の浅野家との差が政治的に歴然とあらわれたものであった。

くわしい取りしらべもないまま、主君は即日に腹を切らされてしまい、吉良のほうでは、

「浅野は乱心」

だと、いいつのるばかりなのだから、両人の喧嘩の、くわしい理由はだれの目にもよくわからず、

内蔵助にも、

（わからぬ……？）

のである。

内蔵助は、殿さまの浅野内匠頭長矩を〔名君〕だとは決しておもっていない。この事件の後は、一言のもとに〔短気〕の風評に性格づけられてしまった殿さまだが、余人以上の〔短気〕だともおもわぬ。

潔癖で、体質もあまり丈夫でないのに床へつくこともせず、懸命となって、父祖が遺した五万石の領国経営に熱中していたあるじであった。

戦乱が絶え、徳川幕府の統治のもとに、天下泰平が、もう九十年近くもつづいてきて、世の中がぜいたくになるし、物価は上るしで、

「なにごとにも倹約を……」

というのが、亡きあるじの信念であった。

国をとざし、ただもう国内に生産される米を経済の中心にしている日本のことだから、

（持っているものを減らさぬため）

には、倹約をするほかに道はない。

長矩は、勘定方の帳面にまで眼を通さねば承知をせぬ殿さまで、のんびりつとめている内蔵助を見ると、時折は実に厭な顔つきになったものだ。

だからといって内蔵助は赤穂にいるとき、長矩の気にさわるようなぜいたくはしていないし、主人が参覲で江戸藩邸へ行っている留守中、只の一度もあやまちをおこしてはいないのだから、長矩も怒る理由がない。

一度、叱られたことがあった。

内蔵助が、我が家の侍女でうめというものへ、ついつい手をつけてしまい、これが身ごもったので仕方もなく、妻女のゆるしを得て、邸内に側妾としてとどめおいたことがある。

「内蔵助。城代家老たる身が、ちと、つつしんでもらわねばならぬ」

それが殿さまの耳へ入って、こういわれた。

側妾の一人や二人、一藩の家老職が邸内においてもふしぎはない時代なのだが、殿さま自身、夫人との間に子がなくとも、他の女へ手をつけるようなまねは決してしない。

「子が生まれねば弟の長広へ家をゆずる」

つもりなのだ。

つまり完全な一夫一婦の清潔さを遵守し、参覲を終えて江戸から赤穂へもどり、江戸屋敷に残っている夫人と別れている長期間にも別だん不自由にはおもわぬらしい。これでは家来たるもの、たまったものではない。

「折を見て、邸内から出すように」

厳命である。

仕方なく、子が生まれるとうめは、親もとへ帰った。親もとは藩の足軽で、山本宗六という者である。うめが生んだ女子はおふうと名づけたが、早世してしまった。

これが内蔵助にとって、只ひとりの妾腹の子である。

(ふしぎなものだな……)

いま、小山屋の炬燵でぬくもりながら、内蔵助は、その早死にをしたおふうの顔ばかり、おもいうかべているのだ。

妻女のりくは、次男・大三郎ほか一男一女をつれ、今年の春に、但馬・豊岡にあるりくの実家へ帰してある。

りくは大女で、内蔵助よりも背丈が高かった。

(どうしているか……)

妻女との閨房においては内蔵助もつつしみぶかかった。

売女相手のときのような曲芸なぞを、りく女に教えこんでしまったら、女というものは奇妙なもので、千五百石の家老夫人にはならなくなってしまうのである。

だが……。

あくまでもつつしみぶかく、たっぷりと重感のある豊満な軀を、かすかにふるわせつつも、歓喜の発散に堪え、鼻呼吸だけをたかめて両眼をとじているりくの表情を、内蔵助は、いま、

(りくも、よろしかった……)

なつかしくおもいうかべるのであった。

「さて……」

急に、内蔵助は炬燵からひざをぬき、机に向って何やら熱心に手紙をしたためている息子の主税へ、

「ちょと、出てまいる」

と、いった。

振り返った主税の顔に血がのぼっている。

この長男ひとりを死の道づれにする内蔵助なのだが、山科にいたころ、金をあたえ、しかるべき案内の者をたのみ、十五歳の彼へ、

「おもうさま、あそび呆けてこい」

と出してやったものだ。

案内者は、むかし、浅野家の京都藩邸に出入りしていた扇問屋の主人・恵比須屋市兵衛という男で、彼の報告によれば、

「いやもう、とんでもないことに……ひょいと、四条の陰間茶屋へ御案内いたしましたところ、そこの、幸之助と申す色子と、すっかり……」

すっかり意気投合してしまい、女体を知らぬ主税は、知らぬままに、十七歳の男色を売る若衆と情を通じ合ってしまったという。

「それも、よかろ」
内蔵助は恵比須屋へ、
「若衆の情は濃いそうな」
「はい、さようで」
「わしは知らぬが、おぬしは？」
「ござります」
「さようか」
「その幸之助と申す若衆、まさに……」
「逸品と……？」
「はい、はい。さすがに主税さま、お見たてがちがいまする」
主税がいま傍目もふらずしたためている手紙は、京都にいる幸之助へあてたものであろう、と、内蔵助は感じた。
「お前は手紙を書いているがよい。同志が来たら、五ツ（午後八時）までにはもどるとつたえておくように」
「はい」
「どこへの手紙じゃ？」
「は……？」
「但馬の母へか……弟へか……」
「いえ……は……さようでござります」
母親に似て、躰つきも大きくたくましく、どう見ても美男とはいえぬ主税が、あからめた顔をうつむけ、書きかけの手紙の上へおおいかぶさるようにした。
内蔵助は、頭巾をとり、部屋から出て行った。

三

およそ一刻（二時間）後……。
大石内蔵助は、か細い少女の裸身を抱きしめていた。
胸板の肉置きもうすく、腰も細い。青白い冷たい肌であったが、いまは全身が鮮紅色に染まり、肥やかな内蔵助の躰の下で、少女は戦慄にちかいみだれ方をしている。
少女は、青々と剃りあげたあたまを苦しげに左右にふり、するどくあえいでいた。
ここは、赤坂・裏伝馬町にある比丘尼宿とよばれる娼家の一室であった。
娼婦たちは、いずれもあたまをそりあげた尼の姿で、黒の頭巾をかぶり、白衣の下に浅黄色のえりをつけたじゅばんを着、数珠を手にして客の前へあらわれるという趣向である。
比丘尼宿は、万治・寛文のころから流行しはじめ、元禄の時代に入ってからも猟奇趣味の嫖客が後を絶たぬ。
裏伝馬町のほかに、神田や深川、四谷などにもあるそうだが、近頃は尼姿も本格ではなく、髪ものばしている比丘尼宿が多い中で、この赤坂・裏伝馬町のそれはむかしのままのかたちを守っているというので七軒ほどある娼家は大繁昌だし、また女の価も高い。
内蔵助が、ここを発見したのは、去年のいまごろで、このときは亡き主君の墓参という名目で江戸へ出て来たのである。
そのときの滞在は約二十日間。

むろん、高輪の泉岳寺にある浅野長矩の墓へ詣で、長矩・夫亡人瑤泉院が身を寄せている赤坂・今井の屋敷を訪問し、これをなぐさめたりしたが、もっとも大きな目的は、

〔浅野家の再興〕

についての運動を幕府へ仕かけている、その活潑化にあったといえよう。

（それもこれも、空しかったな……）

気味のわるいほど汗に濡れて身もだえしている比丘尼の少女を見下しつつ、

（これは……？）

内蔵助は、はじめて気づいた。

昼間でも、四方の戸をしめきったせまい部屋の中に、少女の汗のにおいがたちこめている。

その、つよいにおいが、常人のものではなかった。

（病んでいたのか……）

内蔵助は、ゆるやかな身うごきをやめ、

「これ……」

声をかけた。

少女は、こたえない。

「これ、お前……」

「あ……」

少女が眼をひらき、

「おじさま……」

甘え声を出した。

この店は〔山城屋〕といい、少女は〔一学〕という稚児めいた名をつけられている。

「一学、というたな」

「あい……」

「苦しげな……躰でもわるいのか？」

「いいえ」

一学は、けなげにかぶりをふって、

「終えて下しゃりませ」

しとやかにいう。店の主人の仕こみがよいらしく、去年、この店を見つけてあそんだとき、内蔵助の相手をした〔千弥〕という比丘尼もここちよい女であった。

「では……」

内蔵助は、すぐに終った。緩急自在である。

むかし、伏見・撞木町の廓で〔染衣〕という遊女を相手にしたとき、

「勝ちくらべ、しまひょわいな」

と染衣が仕かけたので、

「よいとも」

内蔵助はすぐさま応じ、昼の八ツ（二時）から、夜の四ツ（十時）まで、染衣の肌身からしばしもはなれずせめぬき、ついに、撞木町随一とうたわれた剛のものの染衣を降参させてしまったことがある。

内蔵助は、身づくろいをしたのち、山城屋一学を寝かせたまま、診察をおこなってみた。

医学は、若いころに京都の遊佐良仙にまなび、自分の東軍流の剣術よりは、

（いくらか増じゃ）

と、内蔵助はおもっているほどであった。

ふっくらと、やわらかい内蔵助の掌やゆびが躰のそこここを撫してゆくのを一学はうっとりとした表情で、

「痛……」

とか、

「よい、ここち」

とか、かすかにつぶやきつつ、身をゆだねている。

「ふむ……おもうたより悪くはない。そのまま、しばらくねむっていたらよい」

「よいのでございますか？」

「わしもねむる」

「あい」

「明日も来るぞ」

「あい」

「よい薬を持って来てあげよう。それを毎日のむのじゃ、よいか」

「あい」

「すると、食がすすむようになる。食がすすめば、この細い躰が実ってこよう。お前はまだ若い、いくつじゃ？」

「十六、にござります」

「さ、わしのふところでねむれ」

「あい」

一学は、安心しきった様子で、内蔵助の胸へ顔をうめてきた。

夜に入って……。

一学に見送られ、山城屋を出て行く内蔵助を、そのときちょうど真向いの〔小室屋〕という店からあらわれた町人ふうの立派な身なりをした中年男が見て、

「おや……？」

けげんそうにくびをかしげていたが、すぐに、細道を去る内蔵助の後をつけはじめた。

内蔵助は、これにまったく気づかぬらしい。

男は、内蔵助の提燈が石町の家へ入るところまで見とどけ、

「やはり、な……」

と、つぶやき、道を引き返して行った。

男の顔を、平間村の農婦おやすが見たら、

「あれ、旦那さま」

ためらうことなく、呼びかけたにちがいない。

おやすが、江戸にいたころ下女奉公をしていたという道具屋〔鍔屋〕の主人・家伴が、この男なのである。

四

翌日も、内蔵助は〔山城屋一学〕を比丘尼宿へおとずれた。

昼飯をすまし、早目に旅宿を出た内蔵助は、市ヶ谷田町にある薬種店〔堺屋八郎治〕方へたち

よっている。

堺屋は痰咳の妙薬〔清涼丹〕の本舗として著名であるが、京都の烏丸・三条上ルところの薬種調合処〔松山青竜軒〕とも業務提携をし、清涼丹の上方における販売は〔松山青竜軒〕が一手に引き受け、そのかわり青竜軒で調合する〔蘇命湯〕という名薬を堺屋が江戸であつかう。

この〔蘇命湯〕は万病にもちいて効能があるそうだが、内蔵助も、ずっと以前から、蘇命湯の薬効を知っていて、人にもすすめ、十年前に京都で亡くなった母の熊子へも、これをすすめてよろこばれたことがある。

「よく煎じて、日に三度、のむのだぞ」

一学は内蔵助が立派な桐箱に入った薬を出すのを見て、瞠目していた。

内蔵助が、やさしい、いつもの声音でじゅんじゅんと薬の煎じ方を一学へ教えている、その横顔を喰い入るように見つめたまま、一学の頬へ光るものがつたわりはじめた。

「や……？」

内蔵助がそれに気づき、

「どうした、泪などを……」

一学は、うつむき、何度もかぶりをふっている。

昨日の約束を、まさかこの客がまもり、このような真情を見せてくれようとは思いもかけなかったらしい。

「聞いておらなんだのか？」

「あまりに、うれしゅうて……」

「何と……？」

「このような御親切を受けましたのは、はじめてのことでございますもの」

「早速に煎じてのみなさい。わしがして見せてやろう」

一学の部屋には、火桶もあるし、茶器もそなえてある。内蔵助は薬のほかに、堺屋から煎じるための器まで買いもとめて来ていた。

「これだけで半年ほどは保とうが、薬の切れたときは、これで……」

と、用意の金包みを一学へわたし、

「日に三度、かならず忘るな」

「あい」

一学も真剣な面もちになり、あどけなくうなずいた。

一学に薬湯をのませ、しばらくやすませてから、内蔵助は、

「おいで」

しずかに、少女の躰をひざの上へ抱き寄せた。

その日。

内蔵助は夜にならぬうち、山城屋を出た。

夕闇のたちこめた戸外から、内蔵助と入れちがいに山城屋へ入って行った若い武士が、

「一学はおるか」

と、若々しい声でいうのを、内蔵助は背に聞いて戸外へ出たのである。

（一学、繁昌だな……）

若い武士のことばには、雪ぶかい国のなまりがあった。

しっかりと筋肉の張った精悍な若者の顔貌が、ちらと内蔵助の記憶にのこった。

二日後に、山城屋へ行き、その若者のことを一学に問うと、
「山吉さまと申されます」
「ふむ。あのように元気な若者を相手にしていては、たまったものではあるまい？」
「まるで、この細い躰が押しつぶされてしまいそうな……」
「ふむ、ふむ」
「なれど、生直な、よいお方……」
「ほ。さようか」
「十日に一度ほど通うてまいります。でも、むりをせぬようにいうてございますが……」
「どこの家来じゃ。浪人ではあるまい」
「さあ……？」
その辺のことは一学も知らぬらしい。内蔵助もまた別に気にかかったわけではない。
こうして、二日か三日おきに山城屋へ通う一方、内蔵助の身辺も、いよいよ切迫したものにつつまれはじめた。
現在、江戸へ集結をした同志たちは、内蔵助をふくめて五十六名であるが、いざとなった場合、このうちの、数名は脱落するものと、内蔵助は見ている。
この夏から初秋にかけて、二十名に近い同志たちが脱盟していった。
これは、かねてから内蔵助が幕府へ向けて懸命におこなっていた主家の再興運動が失敗に終ったからだ。
主人が幕命によって切腹をさせられ、主家が取りつぶされたときから、内蔵助のはらはきまっていた。

この幕府の裁きが不当なものである以上、不当であることを幕府と将軍が天下に対してみとめてくれなくてはならぬ。
それには、幕府が浅野家を再興させてくれるべきであった。
または吉良上野介へ死をたまい、その家を取りつぶしてくれるべきだが、これは不可能というべきであろう。
それも、世間のだれの眼が見ても、浅野家の面目が立派に立つような再興でなくてはならない。
こちらが何度もあたまを下げ、幕府の同情を得て、当てがい扶持ほどの小さな家と名をもらうのなら、ごめんをこうむるというのである。
「大石様も、どうかしておられるのではないか……」
「そのようにはかろうてくれる公儀なれば、亡き殿に対し、あのような仕うちをする筈がないではないか」
「無駄じゃ。只一つ、吉良の首を討つまで!!」
江戸にいた堀部安兵衛、奥田孫太夫などの急進派は、内蔵助のねばりつよい再興運動に期待はもたなかった。
一説によれば……。
大石内蔵助は、浅野長矩刃傷の第一報が赤穂へとどくや、早くも京都周辺の地へ浪宅をかまえ、再興運動の準備にかかる気がまえを見せていたという。
内蔵助は、赤穂城を受けとりに来た幕府・目付役の荒木十左衛門へ熱誠をこめて、再興のことを嘆願し、荒木の口から直接に将軍・綱吉の耳へとどくようにした。これより後、京都へ移ってからは、尚も荒木へはたらきかけると共に、赤穂の遠林寺の住職・祐海を通じ、将軍の愛寵ふか

い江戸・護持院の大僧正・隆光をうごかし、さらに、刃傷当時、浅野長矩にとっては不利、吉良上野介にとっては有利にうごいた側用人・柳沢出羽守の権勢をも利用すべく、諸方へ指示をあたえている。

「そのために金が入用なれば、いくらでも……」

と、内蔵助は祐海和尚へ手紙を書いている。

ただし、

「天下に対し、浅野家がいささかでも面目がたたぬような再興の仕様ではならぬ」

との姿勢は、厳然としてくずさなかった。一歩も退かぬかまえなのである。

実に、これがむずかしいことであることを、内蔵助はよくわきまえている。

しかし、こちらの言い分が通り、立派に、主家の再興がかなうならば、なにも吉良の首を討つこともない。

それはとりもなおさず、将軍と幕府が、この裁決のあやまちをみとめることになるからである。

それだけに……。

幕府としても将軍としても、天下統治の体面上、あっさりと内蔵助のねがいをききとどけるわけにはゆかぬ。

一時は……浅野家へ好意を抱く目付・荒木十左衛門が、故長矩の一族である浅野美濃守邸をおとずれたときに、

「ちかごろ、御老中方の気配を見まするに、浅野家再興の見こみも、何やらあるような気がいたします。もっともこれは、それがしのみの考えでござるが」

と、もらしたことがある。

これが、今年の四月ごろであった。

吉良上野介の評判は、一年前の刃傷事件以来、悪化するばかりだ。

そもそも将軍・綱吉が、あのときの自分の裁断を後悔しているらしい。学識がふかく何事にも儀礼を重んずる綱吉だけに、年に一度の勅使下向を迎えてのたいせつな当日、こともあろうに饗応役の浅野が殿中に吉良の血をながしたと聞いたとき、激怒に眼がくらんでしまったのだ。

いうまでもなく、足利将軍家の血すじをひき、幕府と朝廷の間のとりもちをしている吉良の家格と、自分には如才のない老人の吉良をかばう気になったのも事実である。

浅野が短慮なら、将軍も短慮だったといえよう。

もとより、内蔵助にとっては旧主人や将軍や吉良の人格に深入りするつもりはない。する必要もない。

喧嘩両成敗という定法を、幕府みずからがやぶった一事が問題なのである。

（天下の法が曲げられては、武士も百姓も町民も生きてゆくすべもなくなろう）

このことであった。

ねばりづよい内蔵助の再興運動の結果が出たのは、この七月末である。

幕府は、――去年の凶変以来、江戸・木挽町の屋敷へ押しこめておいた故内匠頭長矩の弟・浅野大学に対し、

「閉門をさしゆるす」

むねを申しわたした。

これは悪いことではない。では浅野家を再興させてくれるのかといえば、そうではなく、

「松平安芸守へ引き取らせよ」

と、命じてきた。
松平安芸守は芸州・広島四十二万六千石・浅野本家である。
つまり閉門はゆるすが、本家へ行って居候になれというわけだ。
ここに、再興の望みは断たれたといってよい。
間もなく、播州・赤穂へは、永井直敬が三万三千石をもって入封する。
（もはや、これまで）
内蔵助は、ここに復讐の一途へ突きすすむ決意をかためた。主家の再興運動に努力したのは家臣として当然のことなので、それが駄目なら最後の方法によって、政道の非を正せばよろしいのである。
これまでの同志は、およそ三つの方向へわかれている。赤穂開城の折に、
「自分と共に進退をのぞむ人びとのみ、おあつまり下され」
内蔵助が、城内においての切腹、幕府からの受城使を迎えての籠城など、さまざまな段階を経て、城をあけわたすまでに、えらびぬいた同志は百名におよんだ。
これも年が明けて元禄十五年となった今年には、八十名弱となっていい、いよいよ主家再興の望みがなくなったとなるや、
〔主家の再興のみを希望するもの〕
〔主家の再興と復讐を並行して希望するもの〕
の二派から二十名に近い脱落者が出た。
閏八月に入ると、毎日のように脱落者が内蔵助のところへやって来て、さまざまないいわけを、赤くなったり青くなったりしながらいい出し、

「この上は……」
好き自由にさせてくれとたのむのである。
「よいとも」
一言のもとに内蔵助はこたえた。
一年前の事件当初の興奮がさめてしまえば、腹を切る情熱も失せるのが当然なのである。
脱落者の中には、もと足軽頭をつとめた進藤源四郎もいた。
進藤は、山科の内蔵助の隠宅にも近い篠田に居をかまえてい、彼は内蔵助の次女・るり（四歳）を養女にもらいうけている。
進藤の妻女は内蔵助の叔母にあたる。山科の内蔵助の家も進藤の地所を借りて建てたものであった。
「それがしも、いささか思うところもござれば……」
と、進藤源四郎がもぞもぞといい出すのへ、
「相わかった」
内蔵助は、にっこりとして、
「るりをよろしゅう、たのみましたぞ」
他意もなく、こころからいったものである。
るりは後に、浅野本家の臣・浅野監物夫人となる。
進藤は脱盟を悔い、山科の田園にさびしく一生を終えた。

五

十一月十九日となった。

内蔵助は、借家の一室で算盤をはじきながら、書類をつくっている。

これは……。

事件以来、藩の公金をみずから監理し、藩札の引き換えやら、藩士たちへの退職金をはらい、主家と関係のふかい寺院へ、永代供養をたのむ寄附金などを差し引いた残金六百五十余両の収支をまとめつつあるのだ。

この金は、もし主家再興がかなったら、浅野大学へひきわたすつもりであった。

しかしいまは、そのすべてを吉良邸討ち入りの費用に当てつつあるのだが、

（さて……十両ほどの不足になろうか。そのぶんは、わしが出しておこう）

この書類を、討ち入り決行の直前に、故主の未亡人へとどけるつもりの内蔵助であった。

この借家は三間で、借主は大石主税（変名・垣見左内）となってい、内蔵助は、その伯父ということだ。小野寺十内ほか六名の同志も、同じ小山屋弥兵衛の長屋を借りて住んでいる。

「父上……」

次の間から、主税が、

「大高源吾殿、見えられました」

「おお。これへ……」

大高が入って来、

「四方庵宗遍どのへ入門がかないました」

と、いった。彼の眼はかがやいている。

「それは、よかった」

内蔵助もうれしげである。

四方庵宗遍は、江戸でも有名な茶人で、吉良上野介の気に入られ、吉良邸へもよく出入りをしている。

宗遍の口から大高が、吉良のうごきを知ることは、非常によいことだ。もっとも信頼のおける情報が入ると見てよい。

いま、内蔵助がもっとも腐心していることは、吉良上野介がまちがいなく、本所の自分の屋敷にいる日をつきとめることにある。

それが、実にむずかしいことなのだ。

出羽の国・米沢十五万石の殿さま、上杉綱憲は、吉良上野介の実子であった。

また、上杉の先々代・定勝のむすめ富子は、吉良の夫人でもある。

この富子との間に生まれた綱憲を、吉良は、上杉の養子にさせた。

このため、吉良は富子の兄でもあり、上杉家・先代藩主でもあった綱勝を毒殺したという説がある。

それが事実でないにせよ、このとき、吉良上野介の暗躍ぶりのすさまじさは、いまでも〔語りぐさ〕になっているほどだ。

とにかく、綱勝が不可解な急死をしたのちに、まんまと、吉良は我が子を上杉家へ送りこんでしまった。

こういうわけで……。

上杉綱憲としては、実父の吉良を、

（なにともして、米沢の城へうつしたい）

と、ねがっている。

けれども、上杉の家臣たちは、あまり、吉良に同情を寄せてはいない。

屈強のさむらいを十余人ほど、吉良の附人として本所の屋敷へさしむけ、吉良の身辺をまもらせている程度であった。

上杉家で、吉良上野介に好感を抱くものは、ひとりもないといってよろしい。先代殿さま怪死の一件を、まだ上杉家では忘れきってはいない。

さらに……。

「吉良屋敷討入りについて、幕府の邪魔だてはあるまいとおもう」

いつか、大石内蔵助が吉田忠左衛門に、そういったことがある。

「それは……？」

「幕府は、われらに吉良を討たせるつもりなのであろうよ」

「……？」

「おもうても見なされ」

「は……」

「去年八月、吉良は、呉服橋の屋敷替えを命ぜられ、本所へうつされた。これを、なんとごらんだな？」

それは、去年初秋のことで、幕府が、

「本所松坂町、松平登之助屋敷跡へ移るべし」

と、吉良へ命じて来た。

屋敷が呉服橋にあるのと、本所にあるのとでは、大へんなちがいである。

呉服橋は、江戸城の郭内といってよい。

ここへもし、赤穂浪人たちが討ち入りをかけるとなれば、将軍おわす江戸城を侵したことにもなるのである。

本所となれば……ここは少し前まで下総の国の内で、いわば新開地。元禄のそのころでは、まだ江戸郊外といってもよかろう。

「本所へ、うつれとか……」

屋敷替えを命ぜられたとき、吉良上野介は、不安と恐怖におびえた。

浅野長矩の短刀をうけた額と肩の傷は癒っていたけれども、吉良は家督を子の左兵衛義周へゆずり、隠居してしまっている。

それもこれも、事件以来、吉良の評判が悪くなるばかりで、将軍も幕閣の人びとも、急に冷たい態度となり、あれほどに親密であった柳沢出羽守なども、吉良との面談をさけようさけようとしている。

不安で、さびしくて、たまらなかった。

ことに……。

今年になって、浅野家再興のことがもみ消されてしまってから、赤穂の浪人たちが続々と江戸へあつまり、本所の屋敷のまわりにも、住みついているらしい。

そうわかっていても、幕府は知らぬ顔をしている。

「こうなれば、一時も早う、米沢へ引きとってもらいたい」

吉良は、桜田の上杉藩邸をおとずれては、綱憲にせがむ。

綱憲も、実父のことだけに、そのことを考えないではなく、

「我が手に引きとりたい」
重臣たちに催促をしては、幕府の許可を得ようと急いでいるが、どうも、うまく事がすすまないのだ。重臣たちも幕府も、冷淡をきわめているのである。
上杉綱憲は、このごろ、どうも健康がおもわしくない。それを、むしろさいわいに、
「綱憲どのを見舞いたい」
と、吉良上野介は桜田の上杉屋敷へ出かけて行き、何日も滞在する。
本所の屋敷と上杉藩邸と行ったり来たりで、
「本所にいるのか、おらぬのか、どうもはきとつかめぬ」
手をつくして探索をつづけている赤穂浪人たちも、音をあげているのだ。
「かまわぬ。押しかけろ!!」
もう待ちきれずに叫ぶ者もいる。
吉良の行列が本所の屋敷を出入りするのは、わかる。
しかし、これを見張っているのは同志二、三名にすぎない。
(あ……吉良めが帰って来た)
と、わかっても、そこには大石内蔵助もいないし、同志のすべてがそろっているわけではない。
「討ち入りは、同志のすべてによっておこなう」
これが、内蔵助の信念であった。
血気の数名が、乱暴に吉良の行列を襲ったところで、それは旧浅野の家臣としての政道への抗議にはならない。只の喧嘩さわぎに見なされかねないし、狂人あつかいにされても仕方がない。
また、行列をまもる附人にかこまれ、吉良を討ちきれぬ公算がつよい。

「大高源吾が四方庵へ出入りするようになったので、実は、ほっとしている」
と、内蔵助は吉田忠左衛門にいった。
大高の報告をうけた翌日のことであった。
「源吾を四方庵へ引き合せてくれましたは、中島五郎作どのにござる」
と忠左衛門もそのことを知っていた。
中島五郎作は、京橋・三十間堀の富商で、内蔵助とも前々からの知合いであった。
「五郎作は、われらが同志のつもりらしい」
「いろいろと骨を折ってくれましてな」
「のちのち、五郎作にめいわくをかけるようなことがあってはならぬ」
「心得ております」
「今日は、あたたかい」
「昨夜は強う冷えましたな」
「冬は、かなわぬ」
いいさして、内蔵助が炬燵から立ちかけた。
「いずこへ?」
「あたたかいゆえ、外を歩いて来よう。大事の日も近い。大事の前に風邪ひいてもならぬし、いまから躰をきたえておかぬと……」
「は、はは……」
「ふ、ふふ……」
内蔵助が次の間へ出て行くと、主税が面皰だらけの顔を真赤にし、書きかけの手紙をあわてて

机の下へ隠した。

六

山城屋一学は、ここ数日会わぬうちに、かなり健康をとりもどしていた。

（若さとは……ことに、若い女のからだとは、おそろしいものじゃ）

青く静脈が浮き、しんなりと細かった一学の両股に見ちがえるほどの肉がついてきてい、肥った内蔵助の腰をしめつけてくるちからに、女の精気が感じられた。

「ほう……」

内蔵助が、眼を細めて一学のうす汗がみなぎっている童女のような顔を、上からのぞきこむようにすると、

「あれ……」

一学は、はずかしげに顔をそむけ、

「いやでござりまする。いやでござりまする」

「食がすすむようになったか？」

「いや、いや……」

「どれ」

と、内蔵助は、一学の顔を横向きにさせ、小さな耳のつけ根の裏側へ鼻を寄せて嗅いだ。

「あれ、もう……」

「まて」

「いや、いや……」

「ふむ。においが変った」

「え……？」

「だいぶんに、お前の躰はようなった」

「まことでござりますか？」

「耳のな、この裏がわのにおいには、その人びとの精気がにじみ出ている。ここがな乾いてしまい、いやなにおいがするようになると、もういかぬ」

内蔵助は、むっちりとふくらんだ手ゆびをのべ、一学の耳の裏を撫でた。

若い女のあぶらが、内蔵助の人さしゆびへうすくついた。

「は、はは……よかったのう」

「うれしゅうござります、とのさま」

「とのさま、か……」

「あい、とのさま」

「これは……ま、そうしておくさ」

「これから、ずっと、ここへ来て下さりますか？」

「来る、つもりじゃ」

「つもりなぞと……それでは、いや」

「お前のところへ通うて来る、あの若いさむらいは、……？」

「あれからまだ……」

「金がつづかぬのであろう」

「あい」

うなずいた一学が、ふっと、
「わたくしを……あの妻に……妻にしたいほどじゃと……」
「あの若ざむらいが、そう申したのか」
「あい。それを聞いて……」
「うれしかったであろう」
「あい」
「あの男、お前が初めての女ご……ちがうかな？」
一学が、にっこりとうなずいた。
帰りぎわに、内蔵助は数枚の小判を紙につつみ、
「これはな、お前があずかっておき、その山吉何とやら申す若者がここへ何度も来られるよう、はかろうてやれ。ただし、山吉には申すなよ」
「あれ……また、このようなおこころづかいを……」
「よいわさ。薬を、毎日のんでいるな？」
「あい。忘れませぬ」
「忘れるなよ」
ここへも、もう来られなくなるだろうという予感が、内蔵助にはあった。
外へ出ると、水の底にはいるような夕暮れであった。空だけが夕焼けのいろをのこし、町も道も冷え冷えと冴えわたっている。
江戸城・赤坂御門前を右へ……溜池につづく壕ぎわの道を、内蔵助は前こごみになった姿勢で、しずかに足をはこんで行く。

壕の土手のどこかで、鵠鵲が澄み通った声でさえずっているのが聞こえた。
「もし……」
うしろで声がした。ふり返って見て、
「あ……」
大石内蔵助も、さすがに口をあけたまましばらく声がなかった。
声をかけた男は、道具屋の鍔屋家伴であった。
「御家老さま」
家伴は、むかし彼が浅野家の家来だったころの呼びかたで内蔵助へ、
「久しゅうござりました」
栗鼠のようにすばしこそうな双眸をくるくるとうごかし、
「江戸においでござりましたのか」
おどろいたようにいい出た。
「うむ」
内蔵助がうなずき、
「母ごは、お達者か？」
「先年、亡くなりまして」
「それはそれは……」
どちらからともなく、二人は歩き出している。
この二人、十五年ぶりの再会であった。
鍔屋家伴は、もと服部宇内といい、京都藩邸勤務の藩士だったものである。

生まれついての道楽者で、刀剣の鑑定もやるし、絵も描く、俳諧にも凝るし、酒も女も大好きという男で、内蔵助がまだ三十にならぬころ、

「めずらしいあそびを見つけましたゆえ、ぜひぜひ御上洛のほどを……」

などと、よく赤穂へ手紙をよこしたものである。

内蔵助の生母・熊子は、京都の風光を好み、夫・良昭が大坂藩邸勤務中に病死してからは、赤穂へもどらず、京都へ移り住んだ。

それで内蔵助は、年に一度、京都藩邸への公用を名目にして、母をたずねることをならわしとした。母を見舞うこともあり、別のこともありで、京へ来たときの内蔵助は手当り次第に諸方の遊所をめぐり歩き、女体におぼれつくしたものだ。

そうなると、京都藩邸づめの服部宇内が一役買うことは当然なわけで、二人そろって編笠に顔をかくし、藩邸外のどこぞで落ち合い、いそいそと遊びまわったものである。

宇内なじみの女を内蔵助が買うこともあれば、内蔵助なじみの妓に宇内が手をつけることもあり、それがまた二人には、たまらなくおもしろかったものだ。

ところが……。

服部宇内は、遊びの金の必要上、器用にまかせ細工物をこしらえて売ったり、道具の鑑定をして手数料をもらったり、内職というには大きな稼ぎをはじめるようになった。

これが、藩中で問題となりはじめた。

年に一度の放蕩をたのしむ内蔵助とちがい、節度もなく遊びまわるのだからたまったものではない。

「武士にあるまじきふるまい」

「俸禄をいただきながら、町人どもとまじわり、金もうけをするなどとは……」

「夜な夜な、酒気ぷんぷんとして藩邸へもどってくるそうな」

と、赤穂へも京都からのうわさがひろまるようになった。

折しも殿さまの内匠頭長矩は江戸藩邸にいたが、このことを耳にしたら、

「ふとどきなやつ。宇内めに腹を切らせよ」

と、いいかねない。切腹させられても文句はいえないことを宇内はやってのけているのだ。内蔵助は、すぐさま服部宇内を赤穂へ呼びつけ、重臣たち列席の上で「ふとどき者め！」大いに叱りつけた。

宇内、不服である。

あれほど仲よく、共に遊びまわった仲ではないか。恥をかかすにもほどがある。

（おりゃ何も、藩の公金を盗みつかったわけではない。自分の才覚で金を得ているだけではないか……）

むっとして、宇内が押しだまっていると、

「不服か。不服なら退身せよ!!」

なさけようしゃもなく、内蔵助が怒鳴った。

宇内、憤然として、

「よろしゅうござる。それがし、退身つかまつる」

叫んだのをすくい上げるように、

「よろしい。たしかに聞いた。殿さまへはわしより申しあげておく」

ぴしりきめつけておいて、内蔵助は颯と立ち、後をも見ずに赤穂城内の用部屋から出て行って

しまった。

こうして、服部宇内は赤穂藩士を辞め、江戸へ出て町人となり、得意の才能を生かして道具屋となった。現在の古美術商といったところか……。

かくて服部宇内は〔鍔屋家伴〕になったわけだが、ときに元禄元年の夏という。

七

「どうじゃ、宇内」

と、十五年ぶりで大石内蔵助が鍔屋家伴にいった。

「武士をやめて、よかったではないか」

宇内あらため家伴は苦笑するばかりであった。

あれから鍔屋家伴は内蔵助をさそい、日本橋北詰の裏河岸にある〔日野伝〕という蕎麦やへ連れこんだ。

江戸の市中に、種々雑多な食べものやが出来るのは、もっと後年のことで、元禄のそのころは、蕎麦やと茶漬やのみが大流行である。ことに近年は〔蒸蕎麦切〕といって、湯でさらった蕎麦を水で洗い、これをせいろうに入れて蒸す調理法が考案され、冬などは、

「これにかぎりますな」

と、鍔屋家伴は、熱く蒸しあがった蕎麦切を柚子の香りのする汁につけて賞味しながら、

「御家老。いかがで？」

「うまいな」

〔日野伝〕は、本所元町の〔原治〕とならび称された蕎麦やで、店がまえも立派だし、夜もおそくまで営業をしている。

二人は、入れこみの大座敷と廊下をへだてた小座敷を借り受け、炬燵も出させ、酒をくみかわした。

（なるほど……）

家伴は、十五年前、内蔵助があれほどに激怒して見せ、自分に退職をもとめた理由が、やっといま、のみこめた気がした。

「武士をやめてよかったではないか」

という一言の裏には、つまり、「お前は武士でいるよりも町人で暮したほうが幸福だとおもうたゆえ、わざと仕むけて退身させたのだ」という、内蔵助のふくみがあったのだと思い至ったのである。

ましてや、いままで家伴が赤穂藩士でいたなら、御家の大変に出合い、いやでも浪々の身となっていたろう。むろん、殿さまのうらみをはらそうという気はなかったろうが……。

この十五年間に、家伴がきずき上げた実績は大きい。池ノ端仲町に店舗を持ち十余人の奉公人をつかい、細工と鑑定の名人として諸大名の屋敷へも出入りをゆるされ、資産もふくれあがるばかりだ。老母は亡くなったが、妻との間に二男三女をもうけ、得意の絶頂にある鍔屋家伴なのだ。

「御家老さま。江戸へは何御用あって？」

「いろいろとな」

「いろいろと……？」

家伴は一瞬、さぐるような眼のいろになったのを、内蔵助はさりげなく話題をそらし、

「ちかごろ、どうじゃ？」

「相変りませず……」
「やっておるか？」
「はい。めずらしきあそびも、いろいろとふえましてな」
「ほほう」
「いかがで？」
「よいな」
「明日？」
「うむ……ま、よかろう」
「では、この店で、明日の八ツごろ」
「どこへ案内するつもりじゃ」
「ま、おまかせ下されましょう」
「ふむ……」
「それとも、御多忙にあられますか？」
「なぜ？」
「え……いや、別に……」
「わしは昔から多忙であったことのない男よ。おぬしもよう知っている筈ではないか」
「なるほど、さようでござりました、さようでござりました」
「酌をしてつかわそう。さ……」
「かたじけのうござります……それはさておき、昨年の一大事には、さぞ御心痛のことでございましたろう」

「ふむ……ま、ひと通りはな」
「吉良さまと、殿さまでは、水とあぶら……」
「亡き殿は、二十年前に一度、年少のころに勅使接伴の御役目をつとめたこともあられたのだが……」
「まだ、お若いころで」
「さよう」
「なれど、その折は、御家老さまの大伯父さまにあたられる大石頼母さまが江戸家老ゆえ、万事に遺漏もござりませぬでしたが、このたびは安井、藤井の両御家老で、殿さまをうまくおたすけすることが出来ませなんだようで。あの二人は無能なお方ゆえ……」
「いや、時勢が変ったのよ。物すべてがぜいたくになり、華美を重んじ、何事にも金のちからが大きくものをいうようになった。その金のちからをたのむ吉良どのの教えをうけつつ、御役目をつとむる亡き殿にはお気の毒な時勢になってしもうた……それが原因じゃな」
「ははあ……」
「こうと知ったなら、おぬしを前もって江戸家老にしておくのだったわ」
「これは……おそれいりまする」
「さて……そろそろ別れようではないか」
「どちらへお滞留で？」
「空人介を申すな。明日をたのしみにしていよう」
「心得ましてござります」
「まこと久しぶりじゃな、おぬしとあそぶのは……」

「腕によりをかけまして」
「おもいきった女をな、よいか」
「心得ておりまするとも」
にやりと笑みかわし、大刀をとって座敷を出ようとした内蔵助が、ふと立ちどまり、
「平間村の軽部五兵衛な、むかし浅野家へ出入りしていた……」
「はい。存じております」
「先月の末、軽部へ数日、滞留した」
「ほ。さようで」
「わしの給仕に、近くの寡婦でやすと申す女が出てくれてな」
「ははあ……」
とぼけきった家伴の眼と内蔵助の眼がぴたりと合ったとき、どちらからともなく、くすくすと笑い出していた。
「いやもう、仕こみのよい女であった」
「さようで」
「だれの仕こみか……亡くなった亭主どののか、それとも、人の女房となる前にどこぞで教えこまれたものか」
「なるほど、なるほど」
「では明日」
「たのしみにいたしております」

八

翌日は、あたたかく晴れわたった。
けれども、大石内蔵助は鍔屋家伴との約束をやぶり、日野伝へ顔を見せなかった。新しい情報が、大高源吾からもたらされたからである。
昨日。脇屋新兵衛と名のり、町人になりすましている源吾が、四方庵宗遍のもとへ茶の稽古に出ると、宗遍が、苦笑しつつ、こういった。
「私は、よく本所の吉良上野介さま御屋敷へまいるのですが、来春早々、吉良さまは出羽の米沢へうつられますとかで……それがな、いたく私をお気に入りなので、共にまいれ、と、かようにおおせられます。せめて半年がほどは米沢にいてくれ、と、な。どうも困りました。まだ春も来ぬうちに、雪にうもれた出羽の国なぞへ御供をするのはどうも……ふだんより、お目かけられているだけに、ことわりきれもせず……」
宗遍は、源吾のことを、いささかもうたぐっていない。
出入りするようになってから日も浅いのに、源吾を気に入ってくれ、稽古にあがると、なかなかに帰そうとはせず、夕餉の相手までさせるらしい。源吾は茶道にも文学にも造詣がふかく、話題も豊富な上に、武士としての品格もあり、四方庵宗遍は、
「新兵衛どのと物語りしていますと、時のたつのを忘れてしもう」
などという。
大高源吾の報告を聞き、同志たちは色めきたった。堀部父子や吉田忠左衛門、奥田孫太夫などの重だった同志が、石町の内蔵助仮寓へ早朝からあらわれ、

「いかが？」
内蔵助の決断をせまった。
言下に、内蔵助は、
「では、吉良屋敷討ち入りは年内のうち……さよう、来月十四日は亡君御命日でもあれば、この日を目安にいたそう」
きっぱりといった。
問題は、その日に、吉良が在邸するか否かである。
つい三日ほど前に、上杉藩邸へ滞在していた吉良が帰邸したという報告があったばかりだし、今年中には、もう上杉へは行かぬと見てよいが、だからといって安心はできない。
帰邸したかとおもうと、すぐにまた上杉へ出かけて行く例が今までにも多かったからだ。
吉良邸内の絵図面も手に入れたし、邸内警衛の人数などもおよそ見こみをつけてある。
討ち入り当夜に使用する装束や武器なども、諸方にかくしてあるし、もしも上杉家から助勢の人数が駈けつけて来た場合、これを迎え撃つ手筈もすでにきめられていた。
町内の夜まわりを装い、神崎与五郎たちが、吉良邸を中心に両国広小路一帯にかけて、町割や道幅までこまかに計った図面をこしらえてある。上杉ばかりか、他家からも人数が出て立ち向ってくる場合もあり得る。これをどの場所でふせぐかを、一同はめんみつに研究をしていた。
「いよいよじゃな」
「この足かけ二年、いや辛抱の要ったことよ」
などと、内蔵助をかこみ、同志たちも今日は気がたかぶっているようだ。
そのうちに、

「中田理平次が、どうもあぶない」
と、堀部安兵衛がいい出した。あぶないというのは、いよいよ機がせまって精神が動揺し、盟約をやぶり、姿をくらましたのではないかというのである。
すでに、内蔵助が江戸へ着いてから、中村渋右衛門、田中貞四郎、鈴木重八、小山田庄左衛門の四名が脱落していた。
「変節漢め、斬ってしまえ！」
「理平次をさがし出せ」
烈しくいい出す者もいた。
「いや……」
内蔵助がこれを押えた。
「他人はひと、われはわれでござる。どちらが善いのでも悪いのでもない。人のこころの移り変りなど世の常のことにて、めずらしゅうもない」
淡々といい捨て、
「これからも脱けて行く人びとのあろうやも知れぬ。そのときは貴殿達、これを引きとめたり、口やかましゅういいたてたりなさらぬことじゃ」
「いや。われらが心配をいたしますのは、脱け出してゆく者の口から、大事が他へもれることにござる」
と、奥田孫太夫がいい出た。
これに対し、内蔵助は微笑をもってむくいたのである。
秘密の大事は、すでに世上へもれているといってよいのだ。いままでに二十余人におよぶ脱落

者が出ているし、そのうちの一人・糟谷勘左衛門などは、いち早く自分のむすめ聟へ「討ち入り決行」のことをうちあけてしまっている。ところが、この智どのは、伏見奉行の建部政字の家来であって、建部奉行は吉良上野介の親類なのだ。

建部の口からきいて、吉良自身が「討ち入り」を予期しているものと見てよい。

「それよりも……」

内蔵助は一同を見まわし、

「今月末か、または十二月に入ってすぐ、どこぞで同志の全部をあつめ、最後の結束と打ち合せをおこなわねばなるまい」

「いかさま」

吉田忠左衛門がひざをすすめ、

「かねてより、深川八幡境内の伊勢やと申す茶屋と、それがしよしみがござる。ここへ頼母子講のあつまりと称して寄り合いましては？」

「けっこう。さように取りはからわれたい」

夕暮れが来ていた。

他所からあつまった同志たちが二人、三人と内蔵助の仮寓から出て行った。

すぐ近くの長屋に、医者となって暮している小野寺十内だけが、最後に残った。

「共に夕餉を……」

と、内蔵助がすすめたからである。

台所で、大石主税と近松勘六が食事の仕度にかかっている。

「主税。ごちそうは何じゃ？」

居間から内蔵助が声をかけた。

「大根汁に大根のなます……」

「大根づくしじゃな」

「それに、豆腐もありまする」

「おお、そうじゃ」

内蔵助が、はたとひざを打ち、

「忘れていた。ほれ。一昨日に近江より牛の肉の味噌漬がとどいていたではないか」

「あ……さようでした」

主税が、戸棚から牛肉の入った小さな桶を持ち出すのをながめ、小野寺十内が顔をしかめ、

「あの、牛の肉をめしあがるので？」

「好物でござる」

「ははあ……」

「近江牛は名物。京の知り人から送りくれましてな。もっとも精がつきすぎるので、主税のような若者にはかえって毒になりもそう。ときに十内殿。お丹どのからの便りは、ちかごろ……？」

「五日ほど前に」

いいさして小野寺十内は、老顔を少年のようにあからめる。十内は以前、京都留守居をつとめて百五十石。

いまは六十歳の老人ながら、京へのこして来た妻女・丹との仲むつまじさは浅野家中に知れわたっている。

夫婦とも和歌にたくみで、相聞のやりとりも濃やかなものだそうな。

で……内蔵助が、
「さだめし、その便りには、お丹どの近詠のそえられてござったろう？」
「はあ」
「お聞かせ下さるまいか」
「では……」
十内は両眼をとじ、妻が送ってよこした和歌を二度くりかえし詠じた。

暮れてゆく秋と磐瀬の山風に紅葉かつ散る音のさびしき

と、いうものである。
内蔵助は、きき終えて、しばし声もない。
この秋、十内の母も亡くなり、十内も江戸へ去り、ひとり京都に暮している丹女の心境がまざまざとおもわれる。
気がつくと、台所の物音もやんでいた。
主税も勘六も、十内の声に……丹女の歌に、こころをうばわれているらしかった。

九

三日……。
五日……あわただしく日がすぎて行った。
内蔵助もいまは、仮寓から出るわけにはゆかない。いつ、どのような情報が入るやも知れぬし、それに対する処置も至急をきわめなくてはならぬからだ。
（服部宇内……いや、鍔屋家伴が案内してくれるというあそびの女。どのような女か……家伴は、腕によりをかけて、と、申していたが、さだめし逸品であったろうに……いや、惜しいことをした）
炬燵にぬくもりつつ、内蔵助はうっとりと、そのことを考えている。
考えてはいるが未練をのこしているのではない。考えていること自体が、こころたのしいのである。
方法はどれを採るにせよ、幕府政道のあやまちを正そうという初一念は、去年三月の事件以来、内蔵助の肚の底へずっしりとたたみこまれ、微動だにせぬ。
主家再興の件について、あれほどねばり強くやったのも、それが浅野の臣としての、順当な手つづきであったからである。
内蔵助は、この大事をおこなうために「生死」のことは念頭になかった。
幕府と将軍があやまちを悔いあらためてくれるなら、自分たちは生きていてもよいし、死んでもよいのである。
死をおもうことは、若くとも老いても同じことなのであった。
しかし、もし息・主税が、たとえば京にいる若衆の幸之助を慕い、同志の列から脱出してしまおうとも、内蔵助は、これをとがめない。
（それもまた、人の生き方よ）
なのである。
いま、決死の討ち入りを前に、いささかでも士気おとろえる者は、

（遠慮なしに出て行ってもらいたい）
こころから、そうおもう。
十一月二十九日となった。
この夜……。
大高源吾が内蔵助をたずねて来た。
源吾の顔色に、ただならぬものがあった。
この日の午後に、源吾が四方庵宗遍の稽古へ出て、
「次は、来月の六日に参上いたします」
と、いった。この日を最後の稽古として、ひそかに別れを告げるつもりでいたのだ。
すると四方庵宗遍が、
「いや、六日はおりませぬ。吉良様で朝の茶会がありますのでな」こうこたえた。
六日朝に、吉良上野介が茶会をひらくのなら、五日夜はかならず本所の屋敷にいるにちがいない。
「そりゃ、まことか」
「尚も、探りますが、とりあえずお知らせに」
「よし。念を入れよ。まだ六日ある」
「はい」
「まことなれば、五日夜、討ち入ろう」
「さようでござりますか」
源吾の顔が紅潮した。

「主税、吉田うじに来てもらうよう」
「はっ」
主税が編笠をわしづかみにして立つのへ、
「こころしずかに行けい」
内蔵助がたしなめた。
主税は恥じ、面皰だらけの顔を赤くして、そっと家を出て行く。
近松勘六は、近くの小野寺十内を呼びに出て行った。
夜ふけから翌朝までかかり、幹部たちが協議し、五日夜の討ち入りを目標に、尚も事実をさぐることになった。
十二月一日が来た。
情報が、次々にあつめられた。
どうもまちがいのないところらしい。
「なれど……」
大高源吾が、
「五日の夕刻から、将軍家が柳沢出羽守屋敷へ御成りというわさもございますが」
と、いい出した。
将軍・綱吉が、気に入りの柳沢出羽守や牧野成貞邸へ遊びに来るのは、以前からたびたびのことで、当初のうちは儀式張って、いろいろとうるさいことだったのが、このごろは、あまり大仰にせず、出かけて行くようである。
だが、将軍が城を出て、行列をつくり、江戸府内を通行するのであるから、

（もしも、同じ夜に討ち入りをかけては、大石様の常づね申さるる順当の道に外れはしないか……？）

と、源吾は杞憂したものであろう。

「ふむ……」

内蔵助は、しばらく考えていたが、

「それにはかまわぬ。本所は御府内とおもわずにいてよろしい」と、決断を下した。

なんとしても、五日夜は絶好の機会なのである。一説には内蔵助が将軍外出のことを考慮して、五日の討ち入りを中止したともいわれているが、そうではない。

翌十二月二日。

頼母子講の集会と称し、深川八幡境内の茶屋〔伊勢や〕へ、同志のすべてが集合をした。

町人姿もあれば、医者風の老人もあり、伊勢やも全く怪しむ様子はなかった。

このとき、赤穂浪士の総勢は五十名である。

一同、ここにあらためて最後の誓約をし、こまかに打ち合せをとげて散会をした。

十

大石内蔵助が、池ノ端仲町にある鍔屋家伴の店の前へ立ったのは、二日後の十二月四日の昼下りであった。

「あ……」

折しも、店先へ出ていた家伴が、店の前の通りを行きすぎつつ、編笠をあげて顔をのぞかせた内蔵助を見るや、すぐに店から出て、追いすがって来た。

「御家老……」

「いや、先日はすまなんだ」

「夕暮れまで、お待ちいたしておりました」

「そりゃ、まことにすまぬ」

「おいそがしゅうございましょう」

「いや、ちょっと風邪をひいてな。風邪には毒じゃ」

「ははあ……」

「今日はどうじゃ？」

「私は、いつにても」

「では、まいろう」

「いま仕度を……ま、お寄り下さいませぬか」

「よいわ。ふらふらと、このあたりを歩いていよう」

「さようで……では、すぐにまいりますゆえ、あまり遠くは……」

「心得た」

間もなく、家伴が引き返して来、内蔵助を見つけて、先へ立った。

鍔屋家伴が内蔵助を案内したのは、浅草橋・北詰にある〔井筒や〕という船宿であった。

二階の奥座敷へ内蔵助をひとりのこし、家伴はどこかへ出て行った。

半刻（一時間）ほどたったろうか……。

「ごめんなされませ」

廊下からひっそりと入って来た足音が次の間でとまり、襖の外から、

「綾丸にござります」
「お入り」
「はい」襖が開いた。
内蔵助は（あ……）と、息をのむと同時に、
（家伴め、こりゃ勘ちがえじゃ）
と、おもった。
女ではないと見た。
縫とりも美しい小袖を着流し、水もしたたる若衆髷にゆいあげた美少年なのである。
（わしは、せがれの主税とはちがう。はて、わしが色子ごのみでないことを知っている筈じゃが……）
と……。
綾丸と名乗った若衆が、するすると内蔵助のそばへ寄りそい、酒の酌をした。そのえりあしを見て、
（女か……）
さすがの内蔵助も、どきりとしたものだ。
くびすじが男のものではない。ほっそりと、たおやかに匂いたっている。
盃をおき、内蔵助が綾丸のやわらかい肩から腕をまわした。
胸のふくらみが、はっきりと息づいていた。
綾丸は〔踊り子〕であった。これが後年〔芸妓〕に転化するわけだが、三味線浄瑠璃・舞の芸をもって大名や武家の宴席にはべるようになったのが、その発生である。男装の踊り子がいたのも、当時の男色流行の影響があったからであろう。
〔綾丸〕というのは妓名で、これらの女たちは〔七五三田組〕とか〔八汐組〕とかよばれる組にそれぞれ所属していて、組頭がこれをたばねている。
内蔵助も江戸の踊り子については、よく耳にしていたけれども、これとあそぶのは初めてといってよい。
しかも、男の衣装に圧迫された女体の、一種異常なまめかしさに、内蔵助の血は熱くなった。
「これ……」
「あい……」
しずかに抱き寄せる。
化粧気のない顔立ちで、少年のように眉が濃い。
だが……。
左手で綾丸のえりもとを押しひらくと、意外なほどに豊熟した乳房があふれこぼれてきたのである。
得もいわれぬ香気が綾丸の胸肌からたちのぼってきた。
（ふうむ……）
内蔵助の双眸がかがやいた。
顔に化粧をしていないのに、この踊り子は躰化粧をうっすらとほどこしているのであった。
小さな乳首に紅がぬられている。
久しぶりで、大石内蔵助は興奮をおぼえた。
何も彼も忘れ、内蔵助は綾丸の乳房へ顔をうめていった。

ゆたかな乳房をほこる前髪の若衆なのである。

夜具ものべぬままに、綾丸の肢体は強烈な反応をしめした。

夕暮れになってから……。

綾丸が帰って行った。

手まくらで寝そべりながら、内蔵助は余燼のほてりにうっとりと身をまかせている。

「ごめん下されましょう」

鍔屋家伴の声が、次の間でした。

「おお……お入り」

「はい」

ほの暗く夕闇がただよっている中に、家伴の顔が笑って、

「いかがで？」

「ありがたかった。江戸の、踊り子の、ああした女ははじめてのことよ」

「と、存じましてな」

「ようはかろうてくれた」

「御熱中の御様子にて……」

「いかさま」

「私めも、うれしゅうございます」

「礼を……」

内蔵助が金包みを出すと、家伴はこれを辞退しかけた。しかし、すぐに考え直したらしく、ていねいに押しいただき、ふところへ仕まいこむと、

「お乗物がまっておりますが……」

と、いった。

「それは……むかしのままに、よう気づく男じゃ」

「おそれいりまする」

うなずいた内蔵助が炬燵から立ち、身仕度にかかるのへ、鍔屋家伴が実に何気もない口調で、

「明日また、いかがでござります。私も急に、明日がひまになりましたので……と、申しますのは、実は明五日、かねてよりごひいきにあずかりおりまする吉良上野介さまの、六日朝の茶会の御仕度を手つだいますため、昼すぎから、本所の吉良さま御屋敷へまいることになっておりましたところ……急に、六日の茶会がおとりやめになりましたので、この体をもてあましそうなのでござります。いかがでござりましょう。明日もまた、おつきあいをねがえませぬか？」

「ふうむ……」

「吉良さまは、明夜、柳沢出羽守さま御屋敷へ、急に、およばれになりましたのでな」

「ほう……」

「このところ、吉良さまは、将軍家にうとまれ、何やら御きげんを損じてしもうたらしゅうござります……で、な……くどくどと何度も柳沢侯にお取りなしをねがい出ておりましたところ、明五日、将軍家が柳沢さま御屋敷へお成りになるということで」

「ほほう……」

「ま、柳沢出羽守さまも、このところ何かと評判のよろしゅうない吉良さまを気の毒におもわれたのかして、将軍お成りをさいわい、久しぶりに、吉良さまへも将軍家のお声をかけていただこうという……どうも、そのようなことらしいので」

「ほほう」
「いかがでござります、明日？」
「よいとも」
「では、この船宿にてお待ちいたしております。明日は、また別の踊り子に趣向をこらさせまして」
「たのしみにしていよう」
家伴に送られ、駕籠へ乗りこんだとき、内蔵助が家伴の眼をひたと見つめ、
「かさねがさね……」
ふかぶかと、あたまを下げた。
この夜。石町へ帰った内蔵助は、
「わしが耳にしたこともあるゆえ」
と、家伴の名は少しももらさず、急遽、明五日夜の討ち入り中止を指令した。
そして明五日は、またも家伴と共に一日中を遊び呆けたのである。家伴は、もう吉良の〔き〕の字も口にのぼせなかった。

十一

「やはり、昨日朝の茶事は取りやめになったようで」
と、大高源吾が内蔵助へ報告に来たのは七日夜であった。この日……源吾は四方庵宗遍をたずねたところ、宗遍が、
「昨日は、急に吉良さまの茶会が取りやめとなったので、一日中、在宅しておりましてな」

と、いったそうである。
この日。同志・瀬尾孫左衛門と、矢野伊助の二人が逃走したという知らせが入った。二人とも内蔵助に仕えていた者で、
「お前たちは討ち入り決行の日まで、平間村の軽部屋敷におれ」
と、命じておいたのである。
二日の深川八幡における会合には、この二人も列席させたが、すぐ帰してしまい、五日の討ち入り当日の午後までに、
「江戸へもどるよう」
といいつけてあったが、二人とも四日の夜半に軽部邸を脱走して姿をくらましてしまったのである。
七日になって、軽部五兵衛からの密書で、二人が逃げたことを内蔵助は知った。
主税や近松勘六が大いに憤慨するのへ、
「わざと平間村へのこし、逃げやすいようにしてやったのじゃ」
内蔵助は、くすくすと笑った。
こうなると、やはり十四日が討ち入りの目標となってくる。
同志たちは、あせりはじめた。
内蔵助は、もう外出をせぬ。
外部から赤穂浪士をたすける中島五郎作や、羽倉斎という、もとは京都の妙法院宮の家来だった人物や、内蔵助の遠縁にあたる大石無人などが懸命にはたらいてくれた。
堀部安兵衛の親友で、当代の書家とうたわれた細井広沢も助力を惜しまぬ。

ことに羽倉斎は、歌道を通じて吉良邸へ出入りをしてい、この人の口から、

「六日に取りやめとなった茶事が、十四日の夕刻からおこなわれるらしい」

と、大高源吾の耳へ入った。

源吾は、十日の昼ごろ、二度と会えまいとおもっていた四方庵宗遍を訪問し、おもいきって、

「いささか事情のございまして、近いうちに上方へまいることになりました。年が明けて早々に、と、おもいおりますゆえ、その前に一度、ぜひぜひ年内に参上いたし、お別れのお茶を……」

切り出してみると、宗遍は名残り惜しげに、

「それはそれは……せっかくに親しゅうなれましたものを……なれど、いたしかたもござるまい。さよう、お別れの……うむ、十四日。十四日には、あらためて年忘れの茶事が吉良さまでもよおされます。それがすめば、ゆるゆるとお目にかかれましょう。十五日ではいかが？」

「けっこうにござります」

何気なく辞去をしたが、大高源吾は五体が燃えあがるようなおもいがしている。

四方庵を出て、すぐに石町へ駈けつけ、内蔵助へ報告をすると、

「それのみにては、まだ、こころもとない。五日夜のこともある。尚も手をつくしてしかとたしかめよ」

めずらしく、きびしい声でいった。

同じ日の夜……まだ源吾が内蔵助のところにいるうち、本所林町に住む同志の横川勘平が来て、

「来る十四日。吉良屋敷に茶会が……」

と告げた。

こういうわけであった。

横川勘平は、本所に近い亀戸村の羅漢寺の住職・松雲と仲がよい。この松雲和尚も茶の湯をたしなむので、吉良上野介からよく茶事にまねかれるのだ。

この日。横川が羅漢寺をおとずれ、それとなくさぐりを入れるつもりでいると、

「これはようおこし。ひとつ、自慢の筆をもって返書をしたためていただけぬか」

こう松雲和尚がいい出した。

「よろしゅうござる」

その返書というのが、吉良の茶会のまねきの返書なので、吉良からの手紙は、家老・松原多仲の代筆で、こうある。

「主人こと、近々、上杉家御屋敷へ引き移られるにつき、来る十四日に当屋敷お名残りの茶会をひらかれるにつき、貴僧もぜひぜひ御来会あって御饗応の御とりもちをしていただきたい」

松雲和尚に代って返事をしたためる横川勘平は、筆をとる手ゆびのふるえを押えるに必死であったという。

しかも彼は、

「ついでのことに、御返事をとどけてさしあげましょう、と、こう申し出まして、松雲和尚の使者に立ち、吉良屋敷へ返事をとどけがてらに、邸内の様子もうかがってまいりました」

と、いった。

それでも内蔵助は、まだ決断を下さぬ。

十二日に、羽倉斎からも、

「十四日にまちがいなし」

と、いってよこした。

「こなたは、いつにても仕度はととのうている。尚も念を入れよ」
内蔵助は、ねばりにねばり、
「十四日の朝に、源吾に、もう一度、四方庵へ行かせよ」
と命じた。
十二月十四日は、前日から雪がふり出し、その中を大高源吾が四方庵宗遍をおとずれ、
「明日の御約束にございましたが……前を通りかかりましたので」
すると宗遍が、
「残念ながら、ゆるりとおはなしをしているひまがござらぬ。吉良さまより、今夕の茶会のことで早目に来てほしいと、かように申されて……これより急ぎ出向くところゆえ、明日をたのしみに」
せわしくいう。
このことを大高源吾から聞いて、
「よろし」
はじめて、内蔵助がうなずいた。
次いで、米屋になっている前原伊助から、
「ひそかに見張っておりますと、たしかに四方庵どのが吉良屋敷へ入って行かれました」
報告が入った。
「では、かねて打ち合せたるごとく、急がれよ」内蔵助が、莞爾としていった。

十二

元禄十五年十二月十四日は、現代の一月二十日にあたる。
前日来の雪も、昼すぎには、ふりやんだが、江戸市中は積雪にうもれ、寒気がきびしい。
数日前に、もっとも信頼のできる同志の一人とおもわれている毛利小平太が脱落したので、討ち入り決行に直面した赤穂浪士は、合せて四十七名となった。
この四十七名が集結をする場所は、いずれも吉良屋敷に程近い本所の同志宅、林町の堀部安兵衛、相生町の前原伊助、徳右衛門町の杉野十平次の三カ所である。
討ち入りの装束は、小袖も頭巾も、火消役人のかたちにきめてある。これは集合や途中で役人などに訊問されたときの用意であった。
大石内蔵助・主税の父子は、同じ石町住いの同志たちと共に、十四日の午後おそくなって仮寓を出て、両国・矢の倉の堀部弥兵衛の浪宅へおもむいた。ここは本所にもっとも近いし、いったんは弥兵衛宅へあらわれ、酒と飯のもてなしを受けてから、集合場所へ出かけて行く同志たちも多い。
弥兵衛の婿の堀部安兵衛も来ているし、安兵衛の友・細井広沢も、
「こたびは、おめでとうござる」
数十個の生卵をみやげに、深川の家から駈けつけて来てくれた。
弥兵衛と安兵衛の妻女が、この生卵へ焼鴨の小片をまぜて味つけをし、大鉢に入れ、熱い飯にかけたのを、同志たちにすすめている。
「これまでのお心入れ、かたじけのう存ずる」
と、内蔵助は細井広沢へ礼をいった。
吉良邸討ち入りの「趣意書」をつくるとき、内蔵助は、その中の文章や語句について、学識ふ

かい広沢に何度も念を入れ、是非を正してもらったのである。

夜に入って、皓々たる月が出た。

弥兵衛宅を出たとき、内蔵助は、つきそって来る主税をかえりみて、やさしく笑いかけ、大男の息子を見上げるようにしながら、

「何事にも力まぬよう」

「はい」

「力むと、本来のはたらきができぬものゆえ」

「はい」

緊張しきっている主税の青い顔へ、血がのぼってきたようだ。

（こやつ、十五歳で死ぬるか……）

父親として、ふびんにもおもうのは当然であったろう。幸之助という色子と愛し合えたことが、この息子の十五年の生涯における只ひとつの〔色彩〕であったと見てよい。むろん、同志の列に加わったのは主税自身の決意によるものであって、内蔵助が命じたことではなかった。

積雪をふみ、小さい躰をいっそう屈めつつ、

「冷えるの……寒いの」

つぶやきつぶやき、内蔵助は本所へ向った。

十三

赤穂浪士四十七名が、吉良屋敷の表と裏の両門から屋敷内へ討ち入ったのは十四日の夜半もすぎ、十五日となった午前二時ごろともいうし、四時ごろともいわれる。

四十七名のすべてが屋敷内へ斬って入ったのではない。何よりも吉良上野介を逃がしてはならぬ。ゆえに、屋外の諸方をかため、蟻一匹も逃がさぬ手配りにしたため、屋内へ突入した同志は表裏を合せて二十名ほどであった。

これを迎え撃った吉良方は、上杉家からの附人がおよそ二十名。吉良の家来が二十名。それに雇い入れた浪人七、八名がいて、総勢四十余名ほどと見てよい。

だから、はじめのうちは非常な苦戦であった。屋外へ飛び出して来たものを、戸外の同志が引き受けて闘うようになってから、こちらの形勢が有利に転じた。

大石内蔵助は、黒革包みの火事頭巾をかぶり、瑠璃紺緞子の着込に、同様の鎖入り股引をつけ、黒小袖に火事羽織といういでたちで原惣右衛門・間瀬久太夫の両名をしたがえ、表門に立ち、指揮を下した。

門内から表玄関への空間の両側は、右手が供待の〔腰掛〕で、左がわは塀になっている。堀部弥兵衛ら五名が、このあたりをまもり、外へ出て来る敵と闘うことになっていた。

屋内での決闘のすさまじい響みが、まるで海鳴りのように聞こえる。

凍りついた積雪に、月の光がみなぎりわたっていた。

中庭へ通ずる玄関傍の塀のすぐ向うでも、刃と刃の打ち合う物音や、激烈な気合いの声がほとばしってきはじめた。

すでに半刻が経過している。

使者の間につづく雨戸を蹴破り、二人の同志と闘いながら玄関がまえへあらわれた敵があった。

内蔵助が立っている門内からは相当の距離があるのだが、その敵は間七次郎、近松勘六の二人を猛然と圧迫しておいて、

「早く、上杉へ知らせよ!!」
玄関から走り出た味方へ叫んだ。
「応!!」
その武士が表門の右、勝手門へ通ずる道へ駈けこもうとするのを、
「待てい!!」
走り出た横川勘平が手槍でさえぎった。
間、近松の両士の追撃を背に「上杉家へ!!」と叫んだ敵が、まっしぐらに表門へ向って走り寄って来た。
血飛沫をあびているが、手負いの若い獣のような精悍さで、
「おおう!!」
おめき声を発して、真一文字に大石内蔵助へせまって来た。
その若い武士の顔を見て、
(や……こやつ、山城屋一学のもとへ通いつめていた、あの山吉とか申した男ではないか)
内蔵助が、そう思った瞬間である。原惣右衛門の槍が若い敵を突き倒していた。
悲痛な叫びをあげ、山吉は雪へもぐりこむように倒れ伏した。彼が、米沢の上杉家から派遣された附人らしいことを内蔵助は、このときはじめて察知した。
惣右衛門が、とどめを入れようとするのへ、
「惣右衛どの、待たれい」
内蔵助が、声をかけた。
「は……?」

「その男、ちと、わしが知り合いの者じゃ。気をうしなったらしいが、死んではおるまい」
「いかにも……」
「ちょと血どめをして、ほれ、向うの供侍の中へ放りこんでおいてやれ」
「心得ました」
「ようはたらいたものと見える」
「刃こぼれもひどうござる。や……まだ若い……」
もとより、吉良ひとりを討てばよいのだから、重傷に失神した敵までむりに殺す必要はない。
惣右衛門は内蔵助のいうままにはからった。
ところが……。
目ざす吉良上野介の姿は、なかなか発見することができないのである。
「寝所の臥床には、たしかにぬくもりが……」
との報告も受けた。
どこへかくれたものか……。
それとも、秘密の逃げ道でもあって、戸外へ逃れ出てしまったものか……。
「おりませぬ」
「くまなく邸内をさがしましたなれど……」
邸内の闘争の物音がしずまるにつれ、内蔵助の前へ同志たちが次々にあらわれては、あせりと口惜しさに顔をゆがませて報告をしに来る。
「もっとよく、さがすように」
とか、

「念を入れよ」
とか、
「あせって見逃すな。おもいもかけぬところに、かくれ場所はあるものじゃ」
とか、いちいち指令をあたえつつ、内蔵助は用意の床几へ腰をおろし、根がはえたようにうごかぬ。
大石内蔵助の顔には、かすかな微笑がただよっていた。
いま、内蔵助は、但馬の国・豊岡にいる妻のりくの顔を、躰をおもいうかべている。
三十四歳のりくの肌身のあたたかさ、わずかに肌理はあらいのだが、内蔵助にとっては十五年余をなじみつくした肌ざわり、肌の香りであった。
いまの内蔵助の脳裡には、山城屋一学も踊り子の綾丸も、いままで手をのべた無数の女たちも座をしめてはいなかった。
闘争の音が、吉良をさがしまわる叫びと足音に変ってきている。
夜明けも近かった。
吉田忠左衛門や小野寺十内が、駈け寄って来ては、内蔵助へ何かいいかける声も切迫の度を加えつつある。
「うむ……うむ……」
それへ、うなずきつつ、内蔵助は床几から腰を上げようともせぬ。
妻の、大きく肉づいた下腹の、その臍下のあたりから陰所のふくらみにかけて、女性にしては濃密にすぎる秘毛のしげりを、内蔵助は、なつかしく脳裡にえがいていた。
と……。

あたりが騒然となった。
「吉良上野介殿、見つけ出しましてござる!!」
だれかの大声が、内蔵助の耳朶をうった。
大石内蔵助の腰が、床几から、ゆるやかにはなれた。

逆転

一

風は、まったく絶えていた。

真夏の熱気が、閉めきった部屋の中にむれこもっている。

木立に鳴きこめている蝉の声が、むれこもるその熱気に重圧感をあたえ、いかな若者でも、この部屋の中にいたならげんなりと倒れ伏したまま、手のゆび一つ、うごかす気にもなれまい。

だが……。

内田十蔵とたか女にとっては、たがいの肌身を抱き合うのが半月ぶりのことであった。

「ああ、十蔵。もう……もう、どうなっても、わたくしはよい。な、何も彼もうち捨てて、わたくしは……」

露呈された豊満な乳房が汗にぬれ光り、たか女が烈しく身をもむと、その乳房から汗の玉が飛び散った。

たか女は、十蔵の厚い胸へ乳房を押しつけ、のしかかるようにして、むさぼるように十蔵の口を吸いはじめた。

六年前まで……。

出羽の国（山形県）山形の城下で暮していたころのたか女が、このように烈しい仕ぐさをしようとは、たかの亡き夫・中根政之助の、

（おもいもよらぬこと）

であったろう。

（み、みんな、おれが教えたのだ。この、おれが……）

そうおもうと内田十蔵も、たか女が旧主人の未亡人であることも忘れてしまう。

自分が、いまだに中根家の奉公人として、たか女と、故中根政之助の実弟・才次郎につかえている身であることも忘れはててしまう。

たか女には義弟にあたる中根才次郎は、今日、旧主・秋元摂津守の江戸屋敷へ出かけている。

旧主といっても……。

才次郎とたか女が、兄であり、夫であった中根政之助の敵・井上弥五太郎を討ち果したときには、もちろん帰参がかなうのである。

そして……。

才次郎は亡兄政之助のあとをつぎ、五十石三人扶持の中根家の当主となり、たか女は、亡夫の敵を討った貞女として、国もとの人びとから、ほめたたえられるにちがいない。

そのことを、いまの十蔵とたか女は、忘れきっている。

中根才次郎が外出のすきをねらってする、あわただしく、そして切ない〔あいびき〕なのであった。

「私は、もう……もう、あなたさまを捨てて、逃げるつもりにはなれませぬ」

「う、うれしい、十蔵……」

「はい、はい……」

十蔵は、たか女の肥やかな腰を両腕に抱きしめ、

「な、なれど……いったい、これから、どうしたらよいものか……」
「いわぬと……そのようなことは、いわぬと約束をしたではないか、十蔵」
「才次郎様に、気づかれてはおりませぬでしょうか？」
「だいじょうぶじゃ、十蔵」
「なれど……」
「もう、よして下され。だまって、もっと強う、わたくしを……のう、十蔵。十蔵、じゅう……」
「おたかさま……」
三十五歳の十蔵の体軀は、若党として中根家に奉公していた二十代のころから筋骨がたくましかった。
そして、敵討ちの旅に出てから、尚更に十蔵のたくましさには厚味が増し、六年間の旅の苦労が、いささかも彼の肉体を損ねていない。
井上弥五太郎と、つまらぬことから喧嘩沙汰となり、弥五太郎に斬り殺された亡夫・政之助のか細い男の躰になれていたたか女にとっては、
（男とは……こ、このようなものであったのか……）
一年前、たがいのこころとこころが通い合った五年間の、つもりにつもった想いが激発し、どちらからともなく、はじめてもとめ合ったときも、今日のように暑い日盛りで、やはり才次郎は外出をしていた。
「この汗……ひどい汗……」
たか女が、ようやく十蔵の躰からはなれ、
「いま、水と手ぬぐいを……」

「あ……私が、いたします」
「お前は、やすんでおいで」
「もったいないことを……」
「なんの……なんでもないこと」
こういって半身をおこし、十蔵を見やったたか女の眼に女のよろこびがあふれている。
十蔵は目をとじた。
「十蔵……」
「はい」
「案じなくともよい」
「は……？」
「わかりはせぬ。だいじょうぶじゃ」
「えっ……？」
眼をひらいた十蔵に、
「首尾よう、敵・井上弥五太郎の首討って、国もとへ帰ったのち、わたくし未亡人として、才次郎どのの世話をうけ、一生を送ることとなろうし……そして十蔵、お前も中根家の若党として、共に、あの、なつかしい山形の城下で暮すことになる。のう、そうではないか」
「それは、もう……」
「そして……お前とわたくしとの、こうした間柄が、だれにも知られず……そっと、いつまでもつづく。たとえ、お前が妻をめとったとしても……」
「おたかさま。だれが女房などを……」

「まことか、それは……」
「はい、はいっ……」
「うれしい……」
たか女が、身をかがめ、十蔵の胸肌を舌でなぶりつつ、
「なれど、こうして……いつまでも、敵が見つからぬままに、お前と暮しているのも、たのしいこと……」
と、おそるべきことをささやいてきた。
十蔵は、凝然となった。
六年前に国もとを出立したときは、亡夫・政之助の、
「うらみを、この手ではらさずにはおかぬ！」
と、気負いたち、女ながら小太刀の修行もしたたか女だけに、親類たちも、敵討ちの旅に出ることをゆるしたものである。
その、たか女が夫のことも敵討ちのことも、いまは念頭にない。
いつも、たか女の五体を燃やし、くすぶりつづけているのは、内田十蔵の肉体であり、濃い体臭なのであった。
十蔵も、いまは、
（いっそ、おたかさまをつれて、どこぞの遠国へ逃げてしまおうか……）なぞと、おもいはじめている。
国もとにいたときも、旅へ出てからも一人ひそかに商売女を抱いたことは数え切れぬ十蔵だが、まるで処女にもひとしかったほどに何も知らなかった「たか女」を、

（おれが、女にした。亡き主人どのは、まるで一年もおたかさまといっしょに暮して、なにをしていたのだろう？）
そう思うにつけ、いよいよ、たか女が愛しく、
（どうにも、はなれがたい……）
のであった。
「あの……いま、水を……」
たか女が、十蔵の耳朶へ息を吹きこむようにしてささやき、立ちあがったたか女が、しどけない姿のまま、台所との境の障子をあけ、
「あっ……」
と、叫んだ。
内田十蔵が、あわてて裸身を起したとき、
「見たぞ！」
台所から、するどい男の声がかかった。
まぎれもなく、中根才次郎の声である。
「義姉上。このざまは、どうしたことだ。やはり……やはり、そうだったのですな。亡き兄上に、なんと、いいわけをなさる」
「さ、才次郎どの……」
「ゆるしませぬ……これ十蔵。おのれも覚悟しろ！」
才次郎は、すでに大刀をぬきはなっていた。

二

それからあとのことを、内田十蔵はよくおぼえていない。
無我夢中であった。
下帯ひとつの裸体でいただけに、層倍、十蔵の、
〔防衛本能〕
が強烈になっていたともいえよう。
十蔵がわれにもどったとき……。
すでに、中根才次郎は息絶えていた。
十蔵とたか女が抱き合っていたのは、三間あるうちの中にある六畳間であったが、才次郎は奥の間の縁先へ、半身を乗り出すようにして倒れている。
戸障子は、内側から叩き破られ、戸外の草地に、十蔵は立ちすくんでいた。
「あっ……」
悲鳴に似た叫びを発し、十蔵が縁先へ飛びあがった。
わが手につかんでいる刀は、死んだ才次郎のものである。
斬りつけられて、これをふせぎ、ふせぎながらもみ合いとなるうち、
(おれが、才次郎様の刀をうばいとり、斬った……)
のであった。
(し、しまった……)
十蔵は刀をはなし、才次郎の死体を屋内へ引きずりこみ、戸障子をしめ、戸外の気配をうかが

った。
草地の彼方に、正覚寺の土塀と、こんもりとした木立が見える。
人の気配はない。
ここは、牛込の馬場下町(現・新宿区馬場下町)ということになるが、当時は江戸の郊外といってもよく、近くの穴八幡神社や正覚寺のような寺社のまわりに町家がかたまり合っていた。
あとは畑地と木立が北から西へつらなり、人家もすくない。
中根姉弟と十蔵が、一年半ほど前から住み暮しているこの家は、もと、正覚寺のもちもので、先代の住職が隠居所にしていたものだそうな。
その後、住む人もなかったのを、中根姉弟が借りうけたものである。
姉弟が、夫と兄のかたきを討とうとしているとき、正覚寺でも好意的に、家を貸してくれた。
それのみではない。
十蔵がいま、穴八幡の門前で小さな茶店をひらくことができたのも、正覚寺の住職の口ききがあったからこそ、といえよう。
よしず張りの茶店ながら、十蔵は小女ひとりをつかい、貧しくとも中根姉弟が暮すに困らぬだけの稼ぎをしている。
仇討ちの旅に出てから六年もの歳月がすぎると、国もとの親類たちも、援助をしてくれなくなる。
ことに中根家は五十石三人扶持という、物や金がありあまるほどの身分ではないし、親類たちも同様、姉弟の生活をめんどう見きれるものではない。
三年ほど前から、内田十蔵が衣食の入費を稼ぎ、たか女と才次郎が敵・井上弥五太郎をさがし

まわるという状態となったが、

「ほんに……十蔵がいてくれなんだら、世間を知らぬわたくしも才次郎どのも、飢死をしていたやも知れぬ」

つねづね、たか女がいうように、旺盛な十蔵の生活力が、これまでの姉弟の〔大望〕をささえてきたようなものであった。

そのくせ……。

中根才次郎は十蔵の前で、決して弱みを見せようとはせぬ。

「きさまはよいな。茶店のあるじになりすまして、ぼんやりと暮しておればよいのだから……おれも姉上も足を棒のようにして敵をさがしまわっているというに、きさまは気楽だ」

つけつけといったりする。

きいていて、たか女がたまりかね、義弟をたしなめたりすると、

「姉上は何を申される。家来が主人につかえ、身を粉にしてはたらくは当然。十蔵は祖父の代から、わが中根家の恩をこうむっている身でござる」

傲然としていいはなつ。

こうした才次郎の性格は、少年時代のころからのもので、だから十蔵も気にしてはいなかったのだが、

（おれがいなかったら、どうして食べて行くつもりなのだ）

おもしろくなかったことは事実である。

ことに、江戸へ住みついてからは才次郎の焦りはつのるばかりであった。

そのたびに十蔵は、こうおもった。

（おれは才次郎様のためにつくしているのではない。おたかさまにおつかえしているのだからな）

敵の井上弥五太郎の姿を、江戸で見かけたという人が、数人いる。

秋元藩の江戸屋敷につとめていて、弥五太郎の顔を見知っている藩士だけでも二人いた。

「あとをつけ、居所をつきとめ、中根姉弟に知らせてやろうとおもうたが……見うしなった」

とのことだ。

弥五太郎は江戸にいるらしい。

だからこそ、江戸へ住みつき、さがしまわってきたのだ。

「それもこれも……もはや、むだになってしまいましたな」

ややあって、たか女が十蔵にいった。

才次郎の死体を葛籠の中へ押しこみ、あたりに飛び散っている血痕をふきとってのちのことだ。

「と、とんでもないことに、なってしまいました」

「いいえ……」

たか女が、かぶりを振った。

「これでいい……よかったのかも知れませぬ」

「おたかさま……」

たか女の双眸は、かがやいていた。

「十蔵。逃げましょう。二人して、生まれ変るのです」

「ですが、私は……十蔵は主殺しの罪を犯しました。大手をふって歩けませぬ」

「ですから十蔵、逃げるのです」

「は……」

「井上弥五太郎のことなど、忘れてしまいましょう。ね、十蔵。そのほうがよい。そのほうがよいのです。十年もたてば、わたくしたちのことなど、国もとの人びとは、すっかり忘れてしまうにちがいない」

内田十蔵とたか女が、

「これより上方へまいって敵をさがすことになりましたゆえ……」

と、正覚寺へいい出て、馬場下町の家を去ったのは、その翌朝であった。

十蔵に殺された中根才次郎は、昨日のうちに先発した、と、いっておいた。

才次郎の死体は、夜半に十蔵がはこび出し、高田の馬場の西側の崖下の土へ深く埋めこんでしまったのである。

三

その後。

十蔵とたか女の消息が、まったく絶えた。

中根姉弟の親類たちや、主家の秋元藩の人びとは、十蔵とたか女のみか、中根才次郎も、

「行方知れずになってしまった……」

と、おもいこんでいる。

三年、四年とたつうち、人びとは、中根姉弟の仇討ち一件のことを、ふっとおもい出すことがあっても、すぐに忘れてしまうようになった。

はじめのうちは、

「いったい、いつになったら敵の井上弥五太郎を討って帰るのじゃ」

「われら親類ども、家中の方々に肩身がせまくて、おもても歩けぬ」

などと、ろくな援助もせぬくせにこぼしぬいていた親類たちも、中根姉弟が山形城下を発して九年目になると、たがいに口へものぼせなくなっている。

親類たちは、いずれも身分が低いことだし、さほどに肩身のせまいおもいをせずにすむようになっていたのである。

もともと、この仇討ちの原因が、あまりぱっとしたものではなかった。

たか女の亡夫・中根政之助は、藩の〔勘定方〕に属していて、なるほど算勘の道に通じてはいたけれども、天下泰平の世の中だけにさむらいの表芸たる武術のほうには、さっぱり関心がなかった。

そして……。

政之助を殺して逃げた井上弥五太郎も同様であったといえる。

弥五太郎の役目も、政之助と同じ〔勘定方〕であった。

屋敷も、となり合っていた。

政之助が、たか女と結婚した翌年に、弥五太郎もよねという妻を迎えている。

この二組の夫婦に子が生まれぬまま、さらに一年がすぎた。

そして、弥五太郎が政之助を殺した。

その殺害の理由が、よく、のみこめぬのである。

その日。

御城での勤務を終え、肩をならべて帰宅する中根政之助と井上弥五太郎が、突然、何か声高に

いい合ったかとおもうと、政之助がうしろをふりむき、小者へ、
「与助。さがっておれ」
と、叫んだ。
同時に、弥五太郎も自分の小者へ、
「伊平。もっとさがってついて来い」
と、いった。
小者たちの証言によると、政之助の顔面は怒りに青ざめていい、弥五太郎の顔は紅潮していたそうな。
そして弥五太郎の口もとには、何か引きつったようなうす笑いが浮かんでいたという。
主人たちにいわれて、小者ふたりは後ろへ下り、後にしたがって行く。
それから政之助と弥五太郎は、尚も、声を押し殺しつつ、いい争っていたようだが、間もなく、たがいの屋敷前へ来たので、にらみ合いながら別れて門内へ入った。
何やら口論をしたことはたしかであるが、このときに〔変事〕は起らなかった。
起ったのは、その夜のことである。
「となりへ……弥五太郎のもとへ行ってまいる」
こういいおいて、中根政之助は隣家の井上弥五太郎を訪問した。
これは、事実であった。
政之助は、弥五太郎の居間へ通され、そこで約半刻（一時間）ほど語り合っていた。
大声ではない。
ないがしかし、押し殺した声の口調といい切迫した気配といい、尋常の談合ではないことが妻

のよねにもわかった。
だが、まさかに、このとき、あのような変事が起ろうとはおもわなかったらしい。
と……。
突如、弥五太郎の居間の内から異常な物音とうめき声が起った。
このとき、井上家にいたものは、妻のよねと、若党一名、小者・下女を合せて四名である。弥五太郎の両親はすでに他界していた。
（あの物音は、ただごとでない……）
と気づいたよねが、夫の居間へ駈けこんで見て、
「あっ……」
驚愕した。
中根政之助の胸に、小刀が突き立っている。
流血の中で仰向けに倒れ、息絶えている政之助の左手に、鞘のままの大刀がつかみしめられていた。
弥五太郎は妻へ駈け寄り、その口を押え、
「お、落ちつけ」
ささやいた。
「あ……」
「落ちつけ。声を出してはならぬ。よいか。よ、よいな」
よねがうなずくのを見てから、弥五太郎は廊下へ出て、あたりの気配をうかがった。
さいわいに、この様子を知っているものはよね一人のみらしい。

弥五太郎に胸を刺されたときの政之助の声がうなり声のようなものだったから、せまい屋敷内にいる奉公人たちの耳へもとどかなかったのであろう。

居間へもどり、うしろ手に障子を閉めた井上弥五太郎が妻に、

「こ、これまでだ……」

吐き捨てるように、

「ば、ばかなことをしてしまった……」

と、いった。

「な、なにごとか……？」

よねが、おもわず夫の胸へすがりつくと、弥五太郎がへなへなとくず折れるがごとく其処へすわりこみ、

「ゆるしてくれ、よね」

「ど、どうなされたのでございますか？」

「つまらぬことだ」

「え……？」

「きくな」

「なれど……」

「きかれてもこたえぬ」

「旦那さま……」

「し、仕度を、早く……」

「お逃げに……？」

「む……そうだ」

武士が〔喧嘩沙汰〕で人を殺害したときは、その場で自分も自殺するのが、もっとも正しい処置である。

こうすれば、被害者の親族が仇討ちの旅へ出て苦労をかさねることもない。

つまり、武士の掟である〔喧嘩両成敗〕のことをみずから実践することによって、諸人へかける迷惑をふせぐわけである。

こうなると藩庁も、被害者へはあわれみをかけ、加害者には、

「いさぎよいことをした」

と、同情が寄せられ、それぞれの遺族たちを悪くあつかうようにはしない、ことも大いにあり得る。

それに双方が死んでしまったのだから、喧嘩の理由もわからぬし、それがさまざまなことによい結果をもたらすことにもなろう。

次の正しい処置というのは……。

加害者が、自首して出ることだ。

こうなると藩庁が裁きをつけねばならぬことになる。

それは、

「ぜひにも裁いてもらいたい。自分があの男を殺したについて、こういう理由があったことを人びとに知ってもらいたい」

その意思があればこそ、ということになる。

けれども、井上弥五太郎の場合は、みずから、

「ばかなことをしてしまった……」
と、妻にもらしている。
裁きをうけたい、と思うような理由があって中根政之助を殺したのではないらしい。
それならば、すぐさま自決するのが武士の作法なのだが、弥五太郎には、その勇気が出なかった。
弥五太郎も政之助同様、剣術にはあまり縁のない藩士で、もちろん、真剣をぬいて人を殺したのは初めての経験であった。
なにか、いい争っているうち、どちらかに殺意が生じた。
そのとき、政之助は大刀をつかんで引きぬこうとし、弥五太郎は大刀にかまわず、帯にさしこんでいた小刀をぬいて飛びかかった。
その、大刀をつかむ間だけ、政之助は立ち遅れたことになる。
たがいに剣術の修行をしていないのだから、力量は五分と五分だ。
となれば、一瞬でも早いほうが勝つことにもなる。
そこで、弥五太郎が勝った。
勝ったが、このままではすまぬ。
だから、みずから死をえらぶよりも、逃亡をえらんだのである。
「わたくしも、共に……」
逃げよう、という妻のことばを制し、
「かならず、ひそかに迎えに来る。お前にまで害はおよぶまい。実家へ帰り、待っていてくれ。たのむ、たのむ」

と、弥五太郎がいった。
ともあれ、
(一刻をあらそう)
場合であった。
よねは、とっさに決意し、旅の仕度をととのえ、有金をかきあつめて夫にわたした。
夫は、逃げた。
その後も、よねは別室に引きこもり、中根政之助の死を知らせなかった。
夜ふけて……。
中根家のものが、あまりに主人の帰りがおそいのをあやしみ、井上家へ迎えに来た。
これで、すべてがわかった。
よねは、このときまで、夫の居間での惨劇を知らぬふりをしていたわけだが、のちになって藩の目附役のきびしい取調べを受け、ついにすべてを自白した。
よねは、実家の稲本忠兵衛方へ「おあずけ」となった。
こうなると、中根政之助の実弟・才次郎が兄の敵を討ってのち、中根家をつがねばならぬ。
それでないと、中根家は断絶してしまう。
家が取りつぶされた武士が食べて行く道は他にない。才次郎は、剣術も相当にやっていたことだし、むしろ、勇気凛々として、山形城下を後にした。
才次郎は出発にあたり、
「義姉上は、待っていなされ」
と、たか女にいった。

そのとき、たか女が、
「ぜひにもつれて行っていただきたい。このわたくしの手で、夫の敵に一太刀なりとも……」
強くいい出て、同行をもとめたことは、すでにのべた。
若党の内田十蔵が二人の供をしたのは、家来として当然のことであったし、十蔵は根岸流の手裏剣の名手で、彼はその妙技を〔殿さま〕の秋元摂津守の前で披露したこともある。
「内田十蔵がついて行くのなら、もう勝負は決ったようなものだ」
と、当時は家中の人びとがうわさし合っていたほどだ。
「こうなると井上弥五太郎も、必死で逃げぬと、な」
「見つけられたなら、もう、それまでのことだ」
十蔵も、
(弥五太郎の両眼へ、おれが手裏剣を撃ちこんでくれよう。さすれば、おたかさまおひとりにても、敵の首を討てるはずだ)
ひそかに、おもいめぐらしていたようであった。
内田十蔵に手裏剣を教えたのは、秋元摂津守の家来で馬廻役をつとめる井張権太夫という人物だという。

四

中根姉弟と十蔵が国もとを出てから十年目の、天明三年の夏となって……。
内田十蔵の姿を、京都に見出すことができる。
十蔵は二年ほど前から、京都に住みついていた。

それまでの二年間に、十蔵とたか女が江戸をはなれ、諸国を転々とまわりながら暮しつづけてきたありさまをくわしく描きのべるまでもあるまい。
いずれにしても、生活力の旺盛な十蔵のことだから、貧しくとも衣食に困らぬだけの日々を送っていたにちがいない。
いまの内田十蔵を、旧知の人が見てそれとわかるまい。
十蔵は、三十九歳になっている。
たか女と江戸を逃げたころは、筋骨はたくましかったが、小柄だし、痩せてもいて、あまり見栄えのする風貌ではなかった。
それがいま、見ちがえるようになってしまった。
顔にも躰にも、みっしりと肉がつき、総髪を肩のあたりまでたらし、鼻下からあごへかけて実に見事なひげをたくわえ、小ざっぱりとした衣服をゆるやかに着て、袴をつけ、大小を帯して悠然と歩むさまは、どこから見ても、
〔ひとかどの武芸者〕
に見える。
なるほど十蔵は、その手裏剣の腕前から見れば、たしかに〔ひとかどの武芸者〕にちがいない。
また事実、いまの十蔵は、武芸者として生きているのである。
名を、
〔山本丈介〕
と変え、京都の松原通り高倉に、根岸流・手裏剣の道場をかまえていたのだ。
京は、むかしから天皇おわす都であって、徳川幕府が江戸へ本拠を置き、日本諸国の大名を統

一して天下をおさめるようになってからは、あまり武術とは縁のないところになった。
それでいて、十蔵の〔山本丈介〕の道場に、可成の門人がいるというのは、同じ武術でも刀や槍をつかうのではなく、手裏剣を教えているからであった。
これは、人と人とが闘うのではない。
的を置き、これに向って手裏剣を投げ撃ち、命中の率を高め、技術が向上するにつれて連打の業も冴えてくるのがおもしろいし、
「いや、そのな。しゅりけんやるようになってから、躰の工合が、しごくよろしい」
などと、門人のうちの半数をしめる町人たちが、よろこんでもいるらしい。
そういえば、手裏剣の稽古などは、町人たちがする武技としては適当なものといえるやも知れぬ。
相手に打ちたたかれることもないし、怪我をすることもない。
的に向って手裏剣を撃つことは、一種の〔気ばらし〕にもなる。
それにまた、
「もうこうなれば、いつ、どのような泥棒さんが押し入って来ても、私、負けませぬわい」
道場へ通って来る五条橋・東三丁目の丹波屋の若主人・幸太郎などは、だいぶんに自信をつけたようだ。
町人たちばかりではない。
諸大名が京都にもうけてある藩邸から武士たちも来る。
京都というところは、こうした身分のちがう人びとが一つ場所にあつまり、稽古事をしていても、和気あいあいとしているのだ。

武士だからといって威張りかえることもないし、町人だからといってみずから卑下することもない。
三方を、ゆるやかな山なみにかこまれ、風光が美しく、優雅沈着な雰囲気が、町にも家にも、人のこころにもただよっている。
以前にも、敵・井上弥五太郎をさがしまわっていたころ、十蔵は中根姉弟と共に二度ほど京都へ入ったことがあった。
しかし、こうして二年も住みついて見ると、
「京で、一生を終りたいものだ」
「わたくしも……」
たか女ともども、口にのぼせずにはいられないほどの落ちつきを、十蔵は感じている。
十蔵とたか女は、もう事実上の夫婦といってよい。
二人が、ここに住みつきたいというのも、秋元摂津守の藩邸が京都にないことも、その理由の一つにあげられよう。
藩邸がなければ、秋元家の人びともめったにあらわれぬ、ということになる。
もっとも……。
旧知の人と出合ったときには、
「いまだに、敵が見つかりませぬ」
と、いっておくつもりであった。
中根才次郎については、
「いまは別のところをさがしている」

そういえばよい。

「なれど、もはや、国もとの人びとも、わたくしたちのことは忘れておりましょう」

と、このごろのたか女は平然たるものだ。

国もとにいたころのたか女は、ことさらに美しい女というのではなかったけれども、くろぐろとした双眸がいつもうるんでい、うなじの生えぎわのあたりの肌がしっとりと若い凝脂に照っていて、俗にいう男好きのする顔立ちであった。

いま、たか女は三十一歳になっている。

子を生まぬ故か、四つ五つは若く見えるし、肌身は、いよいよ肉置きがゆたかになり、

（おれの両腕にもあまるような……）

おもいさえする十蔵なのだ。

その日。

内田十蔵は、建仁寺の南側に住む印判師の上田宗六をたずねた。

宗六は、六十に近い老人なのだが、

「おもしろうて、たのしゅうて……」

といい、十蔵の道場へ来て手裏剣を稽古している変った人物だ。

この宗六へたのんであった印形をうけとり、ついでに清水寺へ参詣をした十蔵が五条橋へかかったのは七ツ半（午後五時）ごろであったとおもわれる。

夏の京都の蒸し暑さは有名なものだが、この日も日中の火照りが夕暮れとおもえぬ強さで残っていて、十蔵は正面から夕陽を編笠に避け、手ぬぐいで汗をぬぐいつつ、五条橋をわたりはじめた。

ここで十蔵は、かつてあれほどさがしもとめていた敵・井上弥五太郎と出合ったのである。

五

そのとき、内田十蔵が編笠をとらなかったら……。十蔵にとっての〔異変〕は起らなかったろう。

橋の中央まで来て、満面にながれる汗がふきとりにくいため、十蔵は浅目の編笠をぬいで左手に持ち、右手の手ぬぐいで顔をふいた。

このとき……。

五条橋の西詰から、橋をわたって来た町人ふうの男が、笠をぬいだ十蔵の顔を見て、立ちすくんだものである。

十蔵も、何気なく見返して、

「あっ……」

と、いった。

その、でっぷりと肥えた、どこかの大きな商家のあるじとも見える立派な身なりの中年男こそ、井上弥五太郎だったのである。

弥五太郎は、敵もちの身だけに、十年後のいまも絶えず警戒をおこたらない。

それだけに、人がちがったような十蔵の顔を、

（中根家の若党の、内田十蔵……）

と、見ぬいた。

その瞬間に、すさまじい勢いで弥五太郎が十蔵の腰へ飛びついた。

「ああっ……」

十蔵は狼狽した。

十蔵は、むしろ、知らぬ顔をして弥五太郎とすれちがい、敵を見のがすつもりになりかけていた。

弥五太郎を、ここで……まだ人通りも多い五条橋の上で討ちとったならば、主家の敵を討ったことになる。

そうなれば、たか女ともども、奉行所の調べをうけねばならぬ。

敵を討つための必要な書類は、いまも万一のときにそなえて、たか女が所持しているから、罪にはならぬ。

それどころか十蔵は、主人をたすけて仇討ちを仕とげた忠義者になるわけであった。

それはよい。

それはよいが、そうなると十蔵は、たか女につきそって国もとの山形へ帰らねばならぬ。

それも、まあよい。

まあよいが、しかし……。

十蔵が殺害した中根才次郎のことを、どういえばよいのか。

才次郎が別行動をとって、敵をさがしまわっているといいわけをしても、それなら、たか女とも十蔵とも何らかの連絡がとれていないはずはない。

連絡がとれているなら、十蔵が弥五太郎を討ったことも、やがては知れるはずだ。

その才次郎が、いつまでも帰って来ない、姿を見せない、ということになると、これは只事ではなくなる。

たか女と十蔵が同じ家に住み暮していただけに、当然、二人がきびしく問いただされることに

なろう。

そうなったら、どうする……であった。

なによりも、京の町でたか女と二人きりで、たのしく暮している現在を、十蔵は打ちこわされたくなかった。

そのおもいが、電光のごとく十蔵の脳裡を疾ったとき、井上弥五太郎は十蔵の腰から引きぬいた小刀を振りかざし、

「やあ！」

猛然として、斬りつけてきた。

弥五太郎も、十蔵が手裏剣の名手であることを充分にわきまえている。

一瞬のおくれで、自分の生命にかかわると感じたにちがいない。

「あっ……」

十蔵は、あわてて飛び退った。

だが、かわしきれず、左の肩先を浅く斬り裂かれた。

「うぬ！」

息をつく間もなく、弥五太郎は斬りかけて来る。

十蔵は、逃げた。

逃げながら、

（逃げきれない）

と感じた。

（このまま逃げていたら、うしろから斬られてしまう）

それほどに井上弥五太郎の追撃は烈しかった。
弥五太郎は、十蔵との距離がへだてられたら、
(手裏剣を撃ちこまれる)
と、おもっている。
それだけに、
(なんとしても……)
追撃の手は、ゆるめられぬとおもっていたのであろう。
十蔵より二つ下の三十七歳になる弥五太郎だが、死にものぐるいになっているだけに、
「あっ……」
またも十蔵は、背中へ一刀を受けた。
こうなると十蔵も、逃げているばかりではすまない。
十蔵は振り向きざまに身を沈め、追って来る弥五太郎の腰へ組みついた。
「おのれ!」
もがいて、上から十蔵の背中を突き刺そうとする弥五太郎の躰を、十蔵がおもいきり突き飛ばした。
二人は、五条橋を走りわたって、東詰の、橋のたもとで闘うことになった。
弥五太郎を突き飛ばしておいて、十蔵は大刀をぬきはらった。
剣術のほうは、手裏剣とちがってあまり得意でないが、なんといっても十蔵のほうが長い刀を持っている。
「えい、や!」

内田十蔵は大刀を振りまわして、井上弥五太郎へ肉薄した。
肉薄しつつ、
(弥五太郎が、逃げてくれればよい。逃げれば追わぬ)
と、あたまのどこかでおもっている。
それだけ、十蔵に余裕が生まれてきていたといえよう。
ところが……。
弥五太郎は逃げなかった。
十蔵のほかに、中根才次郎も駈けつけて来るような感じがしている。
猫に追いつめられた鼠の反撃であった。
「たあっ!」
弥五太郎が、十蔵からうばい取った小刀を胸のあたりにかまえ、突進して来た。
十蔵は、夢中で大刀を打ちおろした。
「ぎゃあっ……」
井上弥五太郎の絶叫があがった。
脳天を斬り割られた弥五太郎が、小刀を振り落し、
「うわ、わ、わわ……」
血を噴出しながら仰向けに倒れ、即死した。
内田十蔵は、茫然と立ちつくしている。
あたりはもう、いっぱいの人だかりであった。
その群集のざわめきの中から、つかつかと十蔵の前へすすみ出たものがある。

武士であった。

武士は、

「東町奉行所・与力・浦部源六郎」

と名のり、十蔵に、奉行所への同行をもとめた。

浦部与力は部下の同心一名、小者二名をしたがえている。

こうなっては十蔵も、逃げかくれは出来ない。

かくて……。

内田十蔵は主家の敵を討った〔忠義者〕となり、たか女ともども国もとへ帰らざるを得ないことになったわけだ。

十蔵に討たれた井上弥五太郎は、当時、大坂の富商〔佐渡屋歌兵衛〕の番頭……というよりは顧問のようなことをしていたということだ。

佐渡屋歌兵衛は諸大名の蔵屋敷や武家に出入りも多いことだし、もとは大名の勘定方にいて財政に精通していた井上弥五太郎を重宝にしていたにちがいない。

当日。

弥五太郎は息ぬきに、京都の色町のなじみの女のもとへ行くつもりで、前夜に泊った高倉松原下ルの宿屋〔八尾屋宗五郎〕方を出て、五条橋へさしかかったとき、内田十蔵と出合ったことになる。

京都の町奉行所は、たか女と十蔵のことを秋元摂津守の江戸藩邸へ申し送ると同時に、大坂の町奉行所へも照会をし、井上弥五太郎が身を寄せていた佐渡屋歌兵衛をも取り調べさせた。

佐渡屋歌兵衛は、肚のふとい男で、奉行所の役人に、こういったそうである。

「はい、はい。井上弥五太郎が敵もちの身であることは知っておりました。なれど、それは私どもとは別にかかわり合いのないことでございます。はい、はい。弥五太郎から、いろいろ身の上のことをきいたこともございます」

六

井上弥五太郎は、佐渡屋歌兵衛に、次のようなことをもらしたことがあるという。

「……まったく、ばかなことをしたものです。私が殺した中根政之助の女房、たかは、政之助へ嫁ぐ前に、二度ほど、私の腕に抱かれたことがありましてな。と申すのも、たかの実家と私の亡母の実家とは縁つづきで、幼いころから、よう見知っていたもので……いやいや、こちらから仕かけたのではない。たかのほうが私に……、ま、そこで、ついつい手を出してしまったのだが、私にはすでに親のきめた許嫁もあったことだし、たかと夫婦になろうなぞとはつゆ思い申さなんだ。

ま、それはたかにしても同様で、中根政之助という許嫁があったことゆえ、これはつまり、私とたかとのあそびごとだったので……たかも、何くわぬ顔をして政之助のもとへ嫁ぎ、私もよねという妻を迎えた。それはもう、政之助は私とたかとのことを、いささかも知らなんだので……。

このまま、何事もなくすぎて行けばよかった。いまとなって、つくづくと、そうおもいます。さ、ところが……。

たかが嫁入った中根政之助の屋敷は、私のとなりだったのでしてな。はじめのうちは私も、たかも、どこまでもそ知らぬ顔にて何事もなく月日がすぎて行ったわけなのだが、そのうちに……

と申すのは、このふしぎなものでしてな、男女の仲というものは……。

となり同士のつきあいをするうち、なにともなしに私とたかの目と目が合うと、ことばにも声にもならぬ想いが通い合うのですな。政之助の女房となってからのたかの躰に、むすめのころにはおもいもかけなかった人妻の色気というものがにじみ出てきて……いささかその、今度はこちらも、何やら胸がさわいでまいったようなわけで。

そのうちに……。

いつとはなく、俗に申すよりがもどったということになってしもうた。政之助が月に何度か、御城の夜の宿直に出る。そのすきをねらって私が、庭から境の土塀を乗りこえ、たかの寝間へ忍んで行ったものです。

いや、まったく悪い。私も、たかも悪い。

こうなると、いつしか政之助が感づいたのですな。そのほかのものたちは気づかないが、そこは夫婦の仲というものでしょうよ。

そこで、あの日のいい争いとなった。私は、どこまでも知らぬ存ぜぬで通しぬこうとしたが、だめでしたよ。

政之助が、かっとなって大刀をつかんだとき、私はもう無我夢中で小刀を引きぬき、飛びかかっていました。

それにしてもなあ、御主人。

うわさにきけば、なんと、たかは政之助の弟・才次郎と共に、私の首を討つため、国もとを旅立ったそうな。

さようさ。私との情事がおおやけになることをおそれていたのであろうか……いざとなって、才次郎と私が出合うたとき、そのことを才次郎に私がもらしはせぬか、との懸念があったもの

か……。

それとも、まこと私のことを憎んでいたものか。どうも、女という生きもののすることはわかりませぬなあ」

佐渡屋歌兵衛は、奉行所の役人に、

「それもこれも、いまはもう、井上弥五太郎さまがあの世へ行てしもたので、申しあげたのでござります。生きておいでなれば、なにもしゃべりはいたしませぬ。むかしの弥五太郎さまのことは……はい、もう私の知らぬことなのでございます。私にとって弥五太郎さまは、まことに便利重宝なお人でござりました」

と、語った。

この佐渡屋の告白がなされる前に、内田十蔵とたか女は、秋元藩の江戸屋敷へ向けて京都を発している。

二人だけの旅ではない。

大坂にある藩邸から秋元家の士が三名、京都へあらわれ、町奉行所に引き取られていた二人をまもり、江戸へ向ったのである。

大坂から駈けつけて来た藩士三名は、口ぐちに十蔵の仇討ちをほめそやした。

このときも話題になったのは、

「ときに才次郎殿は、いま、いずこにおられる？」

ということであった。

これに対して、たか女は、

「中国すじをさがしまわっておりますが、間もなく、京へもどってまいりましょうゆえ……」

顔色も変えずにこたえた。
藩士たちも、すぐになっとくをしたようだ。
十蔵が、才次郎とたか女に知らせず、自分ひとりで井上弥五太郎を討ったのは、早まった仕様ともおもえるが、
「なにしろ、ばったり顔を合せ、いきなり弥五太郎から斬りつけてまいりましたので、捕えるゆとりがありませんなんだ」
と、十蔵がこたえたので、
「もっともなことだ」
藩士たちは、
「才次郎殿も、おぬしのしたことを、きっとよろこんでくれよう」
こうして十蔵とたか女は、三名の藩士と共に江戸へ向ったわけだが、ここで二人はおもいきったことをしてのけたものである。
江戸屋敷へ到着し、折しも参覲で江戸にいる殿さまの秋元摂津守への目通りをし、仇討ちの報告をおこない、おそらく、
〔おほめのおことば〕
をたまわったのち、そのまま江戸にとどまって才次郎が顔を見せるのを待つ、ということになるか。
または一足先に国もとの山形へ帰ることになるか……おそらく、江戸へとどまることになる……公算がつよいと見てよいだろう。
晴れて帰国をするには、中根家のあとをつぐ才次郎ともどもに、ということになるのが当然である。

だが……。
その中根才次郎は、すでに、この世の人ではないのだ。
しかも、敵を討った十蔵の手で殺されている。
このことを知るものは、十蔵とたか女のみなのである。
いくら二人が……秋元家の人びとが待ったところで、才次郎は帰って来ない。
となると……。
どうなるか、であった。
現に、大坂では佐渡屋歌兵衛が、井上弥五太郎からききとったことを、お上へ申したてている。
このことは、江戸へ向いつつある十蔵とたか女のうしろから、大坂町奉行所の調書となって秋元藩へとどけられることになるのだ。
（あぶない……）
と、十蔵とたか女は直感したものと見える。

七

京都を出てから三日目の午後。
かの鈴鹿峠をこえて、この日は関の宿へ泊ろうという、その峠越えの最中に十蔵とたか女が逃げた。
うまく三人の藩士の目をくらまして逃げるつもりであったが、藩士のうちの旗原瀬兵衛がそれと気づき、他の二人へ呼びかけると共に、二人を追いかけて来た。

内田十蔵は、逃げきれぬと見て、ついに手裏剣を投げ撃った。
十蔵が投げた手裏剣は、茎が六角、先が三角形の太目のもので、長さは六寸余。
これを二個、背後から追いせまる鳩原へ投げつけた。
一個は、鳩原の右の眼球をつらぬき、脳の一部へ達し、一個は胸に突き刺さった。
悲鳴をあげて転倒した鳩原瀬兵衛を、後から駈けつけて来た二藩士が抱き起したとき、すでに鳩原は息絶えていた。
「こ、これは……？」
「いったい、どうしたことなのだ」
「ともあれ、二人を……」
「うむ」
二藩士は峠のあちこちを、必死でさがしまわった。
しかし、夕闇がたちこめてくるし、どうにもならない。
あきらめざるを得なかった。
夜になって、二藩士は関の宿へ下って一泊し、翌早朝、一人は京都町奉行所へ、一人は江戸藩邸へ急を告げることにした。
そのうちに、大坂からの調書がとどく。
秋元藩としても、
「これは、やはり、たか女と十蔵めが姦通をしていたにちがいない」
見きわめをつけざるを得ないことになった。
この年が暮れ、翌年の夏が来ても、依然、中根才次郎は行方不明である。

「もしや……？」
「十蔵とたか、が、才次郎を殺害したのではないか？」
「おのれたちのふしだらな所業を、才次郎に見つけられてのことにちがいあるまい」
「いかさま」
「間ちがいなし！」
ということになった。
事態がこうなって……。
だれよりも激怒したのが、殿さまの秋元摂津守であった。
「まことにもって、けしからぬ。わが家の恥これにまさるものはない！」
殿さまは、
「ぜひにも……」
内田十蔵とたか女をさがし出し、
「斬って捨てよ」
きびしく、いいわたした。
そこで、藩士の中でも腕きき、のもの十名をえらび、
〔上意討ち〕
の討ち手として、出発せしめたのである。
中根姉弟と内田十蔵が、あれほどの歳月をかけてさがしたのに、なかなか見つけることのできなかった井上弥五太郎を、偶然に、こころならずも十蔵が討ち果すまでに、十年という年月がかかっていた。

ところが……。

上意討ちの主命をうけて国もとを発した藩士たちは早くも、この年の晩秋の或る日に、十蔵とたか女を発見している。

十名の藩士は、五名ずつ二手に別れた。

一手は、東海道を上方から中国すじへ……。

一手は、信州から中仙道へ出て、美濃から近江をさがしまわることにした。

いったん、江戸藩邸へあつまった十名の藩士は二手に別れて江戸を出発した。

信州から中仙道へ向う五名の藩士は、つぎのごとくであった。

森口清左衛門（四十歳）
井坂伝蔵（三十五歳）
鳥飼太助（二十八歳）
田中与平次（二十五歳）
市口半平（二十二歳）

この五人の討ち手が、信州・佐久郡・望月の宿駅へ入ったのが、天明四年十一月（現代の十二月）一日の午後であった。

ここまで、江戸から四十四里二十丁。

急げば五日の行程であったが、五人の藩士は十六日を要している。

これはつまり、道々に十蔵とたか女の行方をさぐりながら旅をつづけて来たからだ。

望月は、戦国のころに、望月遠江守の城があったところだ。

このあたりは、むかし、望月の牧とよばれて、良馬を多く産出したところである。

立科（現・蓼科）の山脈がつらなるところ、北佐久の裾の高原の一角に、望月の宿駅がある。

佐久の盆地を岩村田、塩名田とぬけ、百沢から瓜生峠をこえた五藩士が、望月の宿へ入ったのは八ツ（午後二時）をまわっていた。

すでに、信濃の国は冬である。

それでも、このところ晴天がつづき、道中をするのには快適なほどで、

「あたたかいのう」

と、最年長の森口清左衛門が目を細めると井坂伝蔵が、

「よい日和がつづくうちに、早う和田越えをしてしまおうではないか」

「なれど和田峠をこえたところで、つぎは木曾の山路を歩かねばならぬ」

「どうも、大きな声ではいえぬが……」

と井坂が、うしろからついて来る鳥飼・田中・市口の三藩士をちらとかえり見て、

「なあ、清左衛門殿。どうも、とんだ御役目をいいつかってしまったものだ」

「いかにも、な……」

「見つかればよい。だが、あの十蔵とたかめを見出せぬときは、これから先、何年も旅をつづけなくてはならぬのだからな」

「そのことよ。われら五人……いや、上方へまわった五人を合せて十人が、それぞれ、仇討ちの旅に出たのと同じようなものじゃからな」

「おもえば、十余年前のあのとき、中根政之助と井上弥五太郎が、あのような争いごとを起さね

ばよかったのだ。あの二人が原因なのだからな」
「さればよ、伝蔵。人を殺めたるとき、その場において腹掻っ切って相果てるが武士の道というは、このことなのじゃ。あの折、弥五太郎が自害しておれば、われわれも……いや内田十蔵とおたかも、中根才次郎も、あのような目にあわずにすんだのじゃ」
「さ、そこだ」
「そこが、どうした？」
「われわれが……いや貴公が、人を殺めたるとき、その場を去らずにいさぎよく腹が切れるかな？」
「これは、ぶれいな……」
いったんは年下の井坂伝蔵をにらみつけた森口清左衛門の両眼が、すぐに笑って、
「そのことよ」
「どのことだな？」
「そうからむな、伝蔵。いのちが惜しいのは、だれしも同じことじゃ」
「ふ、ふふ……」
「は、はは……」
「ま、清左衛門。うしろから来る三人を見なされ。まことに元気がよいことだ」
「三人とも初旅だし、若くもあるし、たのしいのだろうな」
「なれど、清左衛門殿」
「む……？」
「十蔵に出合ったるときは、よほどに注意をせぬといかぬ」

「十蔵の、手裏剣のことか」
「さよう。あれは、すさまじいものだ。拙者は何度も見ている」
「かねての手はずのとおりにやってのける。これしかないではないか」
「いかにも、な……」
二人とも、語り合いつつ望月の宿場へ入る。
板ぶきに石をのせた屋根とわら屋根が、幅四間の道の両側にならび、旅籠も七軒ほどあった。
宿場の西側に、鹿曲川がながれてい、宿場町をぬけて鹿曲川へかかった長さ約六間の橋をわたり、中仙道は次の宿場の芦田へ向っている。
この日は、芦田をすぎて長久保へ泊るつもりの五人であった。

八

五人は、宿の中程にある〔すみや〕という茶店で足をやすめることにした。
熱い茶と、焼だんごをとり、腰をかけて休むうちに、もっとも年が若い市口半平が、街道の向う側の高処にある大友神社の木立をながめ、
「あそこに、白く咲いているのは枇杷の花ではありませぬか？」
となりの井坂伝蔵に声をかけた。
「どれどれ……？」
と、井坂伝蔵が立ちあがって戸口へ出た。
そのとき……。
茶店の前の街道を、すっと過った二人の旅人を見て、

「あっ……」
井坂伝蔵が、のけぞるように身をそらし、あわてて戸障子を閉めたものだ。
「どうした？」
と、森口清左衛門。
「十蔵、らしい」
「なに……」
血相変えて立ちあがる四人を制し、井坂がそっと戸障子を引き開け、すぎて行った二人の旅人の後ろ姿を見て、
「まさに」
と、いった。
井坂は、国もとにいたころの内田十蔵をよく知っている。
女づれの、旅の浪人の右肩がすこしあがった後ろ姿に見おぼえがあった。
「女は……？」
「しかとはわからぬ。なれど十蔵と共に旅しているのなれば……」
「うむ」
井口とならんで、街道を見た森口が、
「気づかれなかったようじゃ」
「どうする？」
「よし」
森口は、とっさに決意し、四人と共に街道へ飛び出した。

旅人の姿がちらほらしている。
そのほうが、二人を包囲するのに、
（かえって都合がよい）
と、森口は考えたのである。
「伝蔵は、与平次と共に、この茶店の裏がわから川をわたり、宿外れの橋のたもとで待ちうけてくれ」
「心得た」
井坂伝蔵と田中与平次は、身をひるがえし、茶店の土間を裏手へつきぬけて行った。
森口清左衛門は、茶店の亭主に茶代をはらい、ただならぬ五人の様子を見ておろおろしている亭主に、
「なんでもない、なんでもない」
笑いかけた。
さすがに年の功もあり、一刀流の剣士として藩内でも知られた森口だけに、なかなか落ちついている。
それにしても……。
五人が通って来た中仙道を、一足おくれて急いで来た十蔵とたか女が、なぜ五人の存在に気がつかなかったものか。
これは、望月の一つ手前の塩名田の宿駅から信州の小諸へぬける道があり、二人は、この道をぬけて中仙道へあらわれたのであろう。
だから十蔵とたか女は、小諸から塩名田へ出て、すこし前にここを通りすぎた五藩士のあとを、

それと知らずについて来たかたちになったわけだ。

午後の陽ざしが、まだ、あたたかい。

森口・鳥飼・市口の三士は、笠に顔をかくし、道の両側に分れ、つとめてさり気ない様子で、先へ行く十蔵とたか女との距離をせばめて行った。

十蔵とたか女が、道を左へ曲った。

このとき……。

茶店の裏手から鹿曲川をわたりきった井坂と田中の二人が、畑道を突切り、正面にある城光院という寺の山門前を右へ走った。

この道をまっすぐにすすめば、宿外れの街道にかかる橋の西詰へ出ることになる。

二人は、橋のたもとの両側へ分れ、木立の中へ身をひそめた。

田中与平次は、手槍の鞘をはらい、これをふところへ入れた。

若いにしては、行きとどいている。

間もなく……。

十蔵とたか女が、橋の向うの道を近づいて来るのが見えた。

井坂伝蔵も大刀をぬきはらい、笠をかなぐり捨てた。

旅人の姿が、ほかにはない。

こうなると、いつまでも身をかくしつつ尾行も出来ぬので、二人のあとからせまる森口ら三士は大刀の鯉口を切って、足を速めた。

内田十蔵は、橋へかかろうとして、はじめて背後にただならぬ気配を感じたらしい。

十蔵が振り向いた。

そして、たか女に何か叫んだ。

「それっ！」

と、森口清左衛門が左手に笠をはねのけ、抜刀して駈け出した。

つづく鳥飼・市口も、同時に大刀をぬきはらって肉薄する。

内田十蔵が笠をはねのける間もなく、ふところへ入れた手に手裏剣をつかみ、

「や！」

つづけざまに連投した。

手裏剣が、するどい音を発して空間を切り裂き、三方に疾った。

「わっ……」

市口半平が、喉へ手裏剣を突き刺され、戸板を投げ出したように転倒した。

このとき、身を沈めつつ十蔵へ迫った森口清左衛門が、

「えい！」

すくいあげるように、十蔵の足をないだ。

十蔵が躍りあがって、これをかわし、

「たか。早く逃げろ」

と、わめいた。

「うぬ！」

側面から鳥飼太助が突きこむ一刀をかわした内田十蔵は、腰をひねりざま、

「たあっ！」

鳥飼の左肩を切った。

このさまを見て、橋の西詰の木立にかくれていた田中与平次が飛び出そうとするのへ、
「まだ、まだ！」
道の向うの木蔭から、井坂伝蔵が制した。
たか女が、六間の橋を、こちらへ走り逃れて来た。
だが、十蔵のことも気にかかったと見え、
「は、早く……あなた！」
声をふりしぼって十蔵へ呼びかけつつ、またも橋板を二歩三歩ともどる。
そのとき、市口を撃ち倒し、鳥飼に重傷を負わせた内田十蔵は森口清左衛門が打ちこんで来た一刀を辛うじてかわし、
「たか……」
呼びかけつつ、左手をふところへ入れて橋を駈けわたりはじめた。
「待て十蔵。御上意じゃぞ！」
森口が叫んだけれども、きくものではない。
十蔵は、ほとんど橋をわたりきったところで、ふりむきざまに左手の手裏剣を一本、森口へ投げつけた。
森口が身をひるがえして、これをかわす。
実に、この瞬間である。
橋の西詰に待ちうけていた井坂・田中の二人が、猛然として内田十蔵へ襲いかかった。
「あれっ……」
それと気づいたたか女が悲鳴をあげた。

「ぎゃあっ……」
十蔵の絶叫がおこった。
ここに、二人が待ちうけていようとは、十蔵もたか女も考えおよんではいなかった。
田中与平次がくり出した手槍は、振り向きかけた十蔵の下腹をじゅうぶんに突き通した。
息をのんで立ちすくむたか女へ、井坂伝蔵が刀をつきつけた。
「あ……うう……」
槍のけら首を左手につかみ、よろよろと立って、
「た、たか……」
かわいた声で一言、いいさした十蔵のうしろから清左衛門が駈け寄り、
「やあ！」
肩口から背中へかけて斬った。
「うわ……」
けら首をつかんでいた十蔵の左手がはなれ、同時に右手の大刀が地に落ちた。
田中が、手槍を引きぬいた。
すさまじい声をあげ、十蔵が前のめりに転倒した。
「よし」
と、森口が田中に、
「あとはよい。二人、やられた。おぬし早く……」
「承知」
こたえた田中が橋をわたり、鳥飼と市口の介抱に駈け去った。

倒れ伏した十蔵は、ひくひくと手足を痙攣させているが、もはや死んだのも同様といってよいだろう。

たか女は、橋板の上へひれ伏していた。

その前に立ちはだかった井坂が、

「清左衛門殿……」

「む……？」

すると井坂が、くびをふって見せた。

女ゆえ、斬りにくいらしい。

「お、お助け……お助け下さいますよう……」

おもてもあげず、両手で二人を伏しおがむかたちになり、たか女が、

「むりに……あの、わたくしはむりやり、十蔵に手ごめにされ、脅されて、やむなく、これまで……十……十……十蔵は悪人、で、ござります。十蔵のためにわたくしも……さ、才次郎殿も、十蔵が殺害を、いたしました。わたくしは女の身ゆえ、いたしかたなく……」

ふるえ声でいいつつ、ようやく顔をあげたたか女の眼は、一椀の食物を前にした野良犬のようであった。

内田十蔵は、完全に息絶えていた。

「どういたそう？」

ささやいてくる井坂伝蔵を目で制し、森口清左衛門が大刀をつかみ直し、

「わしがやる」

と、いい、すすみ出てたか女にいった。

「御上意である。覚悟をせよ」

深川猿子橋

一

陰陽師・平井仙竜ときけば、ばかに年よりくさい感じもするが、おはると夫婦になったときの仙竜は、二十六歳の若さであった。

「いやもう、何ともいえないのだ。おはるのからだから桃の花の匂いがするのだものねえ。甘ずっぱくて清らかで……あれのからだの、どこもかしこも、すべすべとして、ふっくらとしていて……どうにもこうにも、さわるのがもったいないような……」

と仙竜は、親しい友達やら、行きつけの居酒屋〔ほかけや〕の亭主・伊兵衛やらに、もう有頂天になって新妻の自慢をしたものである。

仙竜は、ゆたかな顔だちで目もとすずしく、鼻ふとく、唇あつく……という男としては、かなり立派な風貌の上に、体軀も大きい。

陰陽師という商売柄、ひげをたくわえているのは、年の若さを隠すためであった。

陰陽師とは、占いや祓などをおこない、天文や暦学にも通じ、吉凶を判断して災厄をよけるための祈禱をしたりする。今でいう易者と祈禱師を兼ねたもので、いずれも京都の土御門家へ運上金をおさめ、営業の鑑札をもらっている。

仙竜は、少年のころに両親をうしなった。

父親は、神田紺屋町の釘鉄銅問屋〔日野屋〕の通い番頭であったという。

孤児となった仙竜をひきとってくれたのは、仙竜の母の従兄にあたる鹿島相模である。

鹿島は、陰陽師であったから、

「この道をすすんでみたらよい」

仙竜を教導してくれ、一人前の陰陽師に仕立てあげてくれた。

独立してからの仙竜は、若いに似ず易もうまく、祈禱もたくみな上に、たくまざる愛嬌と威厳があって、大いに繁昌をした。

それもこれも、鹿島相模の育て方がよかったのであろう。

こういうわけで、独立してからも、仙竜は、

「小父さん、小父さん――」

と鹿島老人をよんでは、親しく鹿島家へ出入りしていた。

老人は、一度も妻帯したことはなく、したがって子も無いためか、

「仙よ、仙よ」

と、可愛がってくれる。

深川森下町の鹿島老人の家に、おみきとおはるの母娘が住みつくようになったのは、寛政六年の春ごろからであった。

「どうじゃ、仙竜。おはるさんは、いい娘だぞ。考えておけよ」

意味ありげに鹿島老人がささやいたときには、すでに平井仙竜、おはるに夢中であった。

「あの母娘は気の毒な身の上でなあ」

老人は、仙竜と〔ほかけや〕で酒をくみかわしながら語った。

おはるの父であり、おみきの夫であった蒲生彦作も、元は陰陽師で、鹿島老人の後輩であった

そうな。

「若いころは蒲生も身状が悪くてな。どうも酒色におぼれてしまい、一時は陰陽師の鑑札も取りあげられ、江戸へ流れて来てからも、何度も名を変えたりして、ひそかに……」

ひそかに営業をつづけていたらしい。

蒲生彦作の人生に芽がふいたのは、四、五年前のことだ。

麻布・市兵衛町に宏大な屋敷をかまえる六千石の旗本で、神保左京の〔病気快癒〕の祈禱をしたところ、たちまち左京の病気が快復してしまった。

「そのころは、すでに彦作も心を入れかえていたのじゃ。まあ、女房どのの苦労の甲斐があったというわけじゃし……それに、娘のおはるちゃんも、日に日に美しい娘に育って行くのを見て、彦作もつくづくと考えたのじゃろよ」

だから、蒲生彦作の誠意をこめた祈禱をうけた神保左京が、

「あの者を、これから出入りにさせい」

すっかり気に入ってしまい、

「わしが命を救うてくれたおぬしじゃ。望みのものをとらす。申せ」

大よろこびで、そういったが、

「過分のめぐみをうくることは、のぞみませぬ」

と、蒲生は決して欲張らない。

「あの陰陽師は廉潔の者じゃ」

神保左京の信用は絶大なものとなった。

間もなく、蒲生彦作は、その経理事務の才能をみとめられ、神保家の用人として抱えられることになったのである。

大身の旗本でも、主人の左京が派手好きで遊び好きだから、内情は楽でなく、四十人に近い家来や使用人を抱えた神保家の財政は行きづまりというかたちであった。

それが、蒲生が用人となってから、二年たらずのうちに危機を切りぬけた。

「わしの目に狂いはなかった。あっぱれなやつ」

ところが、蒲生彦作は寛政五年十月二十三日の夜、神保家の家老とあらそい、刀を抜き合って闘い、斬り殺された。

「いかに用人といえども、元は陰陽師じゃ、後に残された母娘も泣き寝入りということよ」

と、鹿島老人は平井仙竜にいった。

やがて、老人は急病で死んだが、そのときにも、仙竜へ、ひそかに、

「おはるという娘、嫁にして損はないぞ」

にやりと、言いのこしてくれたのだ。

老人の初七日の夜に、仙竜は、母娘を前にし、

「おはるさんを、いただきたい」

と、申しこんだ。

おはるの頸すじに血がのぼった。仙竜は（しめた！）と思った。商売女には何度も手を出している仙竜だが、このような、清い芳香を放つ処女とむつみ合ったことは、かつてない。

おはるとの初夜を思うと、仙竜は目がくらみそうになった。

母親のおみきが、娘の様子を見てから、

「ありがとうございます、仙竜さん。私どもも、こうなっては身をよせるところもありませぬ。

あなたとおはるが夫婦になってくれますことは、ほんとうに嬉しい。嬉しいが……おそらく、娘は、あなたと一生そいとげるというわけにはまいりますまい。このことは亡くなった鹿島さんにも申してはおりませぬが……」

といった。

「え……？」

おどろいて、仙竜がおはるを見やると、おはるは、異様に眼を光らせ、決意をこめて、しっかりとうなずき、

「それでよろしかったら、もらって下さいまし」

二

母娘は、仙竜に、そのわけを語ろうとはしなかった。

（まあ、いい。何よりも、おはるを手に入れてしまうことだ）

楽天家の仙竜だけに、

（おはるを女房にしてしまってから、わけを聞き出せばいい）

と思っている。

仙竜は、八丁堀の家を引きはらい、深川森下町の亡き鹿島老人の家で、おはると新世帯をもつことにした。

鹿島相模についていた客も、たちまち仙竜のものとなったし、

「御祈禱も大したものだ」

「易もあたる」

「仙竜さんの御祈禱をうけてから、うちの息子のどもりが、すっかり治ったよ」

などと、すこぶる評判もよかった。

陰陽師などという商売は、何よりも信用が第一で、信用あれば、信者の心理状態が祈りの効果をうけいれるものなのである。

おはるも、まめまめしく仙竜につかえた。

ときに、おはるは十八歳であった。

ひまさえあれば、あちらこちらへ出かけて女房の惚気ばなしをやっていた平井仙竜も、一年ほどたつうちに、

（どうもいかん。どうも気にかかる……）

胸が、さわいできた。

（このおはるが、おれと一生そいとげられぬというわけは何だろう？——何としても、こいつだけは聞いておかなくてはいかん）

桃の実は、少しずつ熟しかけてきている。

仙竜の愛撫にも、おはるは我知らず声をあげ、はげしいこたえ方をするようになってきていた。

それでいて、何かが、仙竜とおはるの間をへだてている。

外出から帰って来た仙竜が、何やら深刻な表情で、ひそひそと語り合っているおはるとおみきを見かけたことも何度かあった。

そんなとき、母娘は、ハッと口をつぐみ、取ってつけたような笑顔で、仙竜を迎えるのである。

仙竜は、ひとりで易をたててもみた。

見たが、駄目だ。

自分とおはるのことを占うとき、どうしても仙竜の心はみだれてくる。
無我の境に入ってたてる易でなければ、いくらやってみても無駄なことは、仙竜自身が、よくよくわきまえていることであった。
ついに、仙竜は、おはるをせめた。
「夫たるおれに、お前が秘密をもっているということは、とてもたまらない。頼む。頼むから、わけを聞かせてくれ。なぜ、おれと一生そいとげられないのか、言ってみてくれ」
「すみません」
「言え、言ってくれ」
「でも……」
おはるはともかく、義母のおみきにしても、変なところがある。
天気さえよければ、おみきは朝のうちから家を出て、どこかへ行き、夕方まで帰って来ない。
何をしに行くのか、不明である。
とにかく、あまり執拗に仙竜がせめたてるので、おはるも、たまりかねたらしい。
「では……」
おみきに内密で、おはるは、すべてをうちあけた。
そのことを聞いたとき、仙竜は、びっくりした、というよりも馬鹿馬鹿しい感じが先にたち、
「そんなお前……今更、そんなバカなことを……」
むしろ、苦笑をもらして、
「忘れてしまえ。つまらぬことじゃないか」
事も無げにいったものである。

「そうかもしれません」
おはるは、屹と顔をあげ、
「でも、私と母とにとっては、つまらぬことではないのです」
つまり、母娘は、蒲生彦作の敵を討とうというのである。
尚も、おはるは、くわしい事情を語った。
ま、こういうわけだ。
神保家の用人となってからの蒲生彦作は、主人のみか、神保の家来たちの人気も得た。
ひろく世の中を見て来ている上に、永らく陰陽師をしてきただけに、人の心をよむことを心得ている蒲生だから、何事にも、
「蒲生殿――」
でなくては夜もあけぬというありさまになってきた。
こうなると、面白くないのは、家老の崎山平内である。
今までは、自分が一手に切りまわしていた神保家であった。
蒲生彦作の出現によって、いまは、すっかり影がうすくなった前の用人・菅生伝蔵をうまくつかいこなし、出入りの商人たちともなれ合い、崎山家老は、かなり私腹をこやしていたものだ。
しかも、崎山は父祖の代から神保家の家老をつとめている。
（蒲生がいては、今におれも……）
主人の左京から遠ざけられ、そのかわりに、蒲生彦作が家老になる、ということも考えられないこともない。
それほどに、主人は蒲生用人を可愛いがっている。

それに、蒲生の財政整理によって、崎山家老は汚職の数々を、蒲生につかまれてしまった。
だが、蒲生彦作は、このことをあばき立てることもせず、何事につけても、
「崎山様、崎山様――」
と、家老をたてるように心がけている。
これが却って不気味でもある。
(蒲生め。何をたくらんでおるやら……?)
蒲生によって、おのれの汚職が、いつ主人の耳に入るか知れたものではないという不安が、猜疑を生む。
猜疑の目には、実体が映らぬこと、当然である。
蒲生彦作にしてみれば、
(おれが、六千石の旗本の用人になれたのも、みな殿様のおかげだ。妻や子のおかげだ。これからは、もう決して、身をあやまることはしまい。おれも四十を五つもこえたのだからなあ)
こういう気持で、だれにも彼にもよく思われ、つつがなく、一生を終えたいと思えばこそ、崎山家老の過去にも目をつぶっていたし、むしろ、愛嬌をふりまき、家老の気に入られようともつとめてきた。
安住を願う心には、卑屈が宿る。
その卑屈さが、崎山家老をして、
(あのような幇間のごとき奴に、御屋敷の財務をまかせておいては、行末とんでもないことになる。家老として放ってはおけぬ)
勝手きわまる理由を、おのれの立場につけさせてしまった。

崎山平内は、先ず、屋敷へ出入りをする目明しにたのみ、ひそかに蒲生彦作の過去を洗いはじめた。
日本橋から深川にかけての陰陽師たちは、蒲生彦作の過去だけを知り、現在を知らない。
「あの男は、いやもう大変な男でして……」
目明しの耳に入るのは、蒲生の、だらしのない過去ばかりであった。
「さもあらん」
と、崎山家老は小躍りした。
すぐに、崎山は、このことを主人へ密告した。
神保左京は、蒲生用人をよび、これを詰問した。
その結果は「前非を悔いておるゆえ、かもうな」ということになった。
(おのれ蒲生め――またも殿様を言いくるめおった)
ここまで家老として面目をうしなっては、家来たちの物笑いになるばかりだ。
寛政五年十月二十三日の夜――。
「殿より急ぎの御用あるによって、すぐさまおいで願いたい」
という呼出しが、神保邸内の長屋に住む蒲生彦作にかかった。
こういうことは、今までにも、しばしばある。
何の用かと思って出むくと、主人の酒の相手を申しつけられたりする。
世間の裏道を歩いて来た蒲生の話は、神保左京にとって、何度きいても飽きないほど面白い。
退屈すれば、すぐに「蒲生を呼べ」と声がかかる。
この夜も、彦作は何のうたがいもなく長屋を出て、裏庭から内玄関へ向った。

「待て――」

裏庭の闇の中から、ぬっと、崎山平内と、平内の部下・川口、岸口、鹿野など七人があらわれた。

ここで、否も応もなく、蒲生彦作は斬殺された。

死んだ蒲生の手に、蒲生の脇差を、崎山たちが握らせた。

これより先、崎山家老は、神保家の親類に当る旗本の伊沢内記に、

「家のため、私めは蒲生彦作めを斬捨てまする」

と、報告している。

伊沢内記は、かねてから取入っている崎山がひいきでもあるし、何かにつけて、崎山が蒲生の悪口だけをふきこんであるから、

「後はひきうけた。蒲生のごとき悪者を生かしておいては世のためにならぬ」

といった。

身分がよくて、家来だけに取巻かれていると、耳に入ってくるものは一つだけになる。

伊沢内記は、蒲生彦作斬殺の翌朝、すぐさま神保家へやって来て、

「このようなことを公にいたしては、神保の家名にもかかわろう」

と、神保左京を説き伏せた。

神保左京もまた、唯々諾々として、これに従った。こんな殿さまだから、一介の陰陽師を自家の用人に取りたてたりするのだ。

三

そのころにも、奉行所という立派な警察があり、同じ時代の西欧諸国とくらべ、少しも遜色のない活動をしていた。

けれども、支配階級の横暴な一面は、むかしも今も変らないものであって、

「奉行所の方には、わしが手をまわしておく」

と、伊沢内記が言ったかどうかしらぬが、ついに、この事件は闇から闇へほうむられた。

「その方たちには、やがて、扶持をあたえようから、安心しておれ」

と神保左京は、おみきとおはるに言ってくれたが、翌年の二月になると、

「永の暇をたまわる」

ということになり、母娘は神保屋敷を追い出されてしまった。

すべては、伊沢内記と崎山平内のはからいによるものである。

こうなれば、もう泣寝入りであった。

母娘は、それでも、

「旦那さまも刀をぬいたのだから……」

「お父さまも、崎山平内と斬り合ったのだから……」

と、互いに、なぐさめ合いつつ、鹿島相模老人に引きとられていった。

ところが、それから半月ほどして、鹿島老人の留守中に、神保家の中間をしている砂吉という若者が、母娘をたずね、深川にやって来た。

砂吉は、渡り中間にはめずらしく朴訥な若者で、亡き蒲生彦作に可愛いがられていた。

「どうにも、たまらなくなっちまって……やって来ました。実は……」

砂吉は、あの夜、偶然に裏庭を通りかかり、蒲生用人が、なぶり殺しになるのを目撃したとい

うのである。

「今更、こんなことを言っても、どうにもなるものじゃありませんが……どうにも口惜しくて口惜しくて……」

と、砂吉は涙声でいった。

母娘の顔色が一変した。

自分がもらしたなどとは決して他言してくれるな、と、砂吉が帰った後で、おはるの方から母親に切出した。

「母さま。これでは、父さまが浮かばれませぬ」

「お前も、そう思うかえ」

母親の光る目が、空間にむすびあった。

神保の用人となってからの蒲生彦作が、妻と娘にそそいだ愛情は、以前の放埒が放埒だっただけに、尚更、ふかい感動を母娘にあたえていたと言ってよい。

奉行所へ訴え出ても、無駄なことは、わかりきっている。

砂吉を証人にして……とも考えてみたが、

「何としても、肚のくろい人たちのすることには、私たちの力ではかなうまい」

とおみきがいった。

「そんなことよりも、母さま。私たちの手で、父さまのうらみをはらしましょう」

おはるが、決意をこめ、

「私たちでも、やれないことはない。このまま泣寝入りをすることはない。かたきうちは、さむらいだけのものじゃアない」

と叫ぶようにいった。

これで、二人の覚悟がきまった。

(畜生め……)

とすべてを聞いた平井仙竜は、

(その、中間の砂吉というやつは何という馬鹿野郎なんだ。そいつが、おはるや義母(おふくろ)に、つまらぬことをふきこみさえしなけりゃア、いっそ幸せに三人が世を送ることが出来たのに……)

大いに、くやしがった。

もっともである。

(なるほど、それでわかった。おふくろが外へ出て行くのも、その崎山何とやらいう家老の隙をうかがいに行っているンだな。しかし……)

しかし、無駄にきまっていると仙竜は思った。

(女の手で、侍の首が討てるわけがない)

そう思うと、また別な考え方も出来る。

(なあに、そのうちに、あきらめるだろうよ)

平井仙竜らしい楽天的な考え方だ。

(ふン、どっちにしても、おれは助太刀なんぞはしないぜ。すぎたことは忘れることだ)

すぎたことは忘れろ、と、むろん何度も言いきかせた。

すると、おはるは、どうせ、その位の返事しか仙竜には出来ないのだろう、そう思っていた、とでもいうような顔つきになって、

「もう、このことは忘れて下さい」

さっぱりと言ったきり、この後は、いくら仙竜が言い出しても、話にはのらなかった。
一年たち、二年たった。
おはるの軀は花をひらいた。腕のつけ根に乳房に、腰に、みなぎるような女のあぶらがのって、
「もうもう、何ともたまらなくなってきた」
と、平井仙竜を夢中にさせた。
仙竜は、いつしか、妻と義母の敵討ちなぞということを忘れてしまったかのようだ。
もちろん、自分が、そんな騒ぎに巻きこまれるつもりはない。
事実。おみきの外出も、ぴたりとやんだ。
(おふくろも、あきらめたのだな)
そう思っても、すぐに忘れた。
おふくろも女房も、あかるい微笑を絶やさず、仙竜に、よくつくしてくれる。
(よし、おれも、もっとはたらくぞ、そして、お前たちを、もっと幸せにしてやる。これでもう、子供が生まれてくれりゃア言うことはないんだが……)
仙竜は、陰陽師として生き方に精魂をこめた。
深川一帯で平井仙竜の名を知らぬものはないほどになった。
信者もふえた。
収入(みいり)もふえた。
森下町の家の両隣の長屋を買い、これを改造し、立派な祈禱所も設けた。
(おれは幸せだ、おれは……)
妻も義母も、敵討ちのことは、もうあきらめているようであった。

大身の旗本の家老で、外出のときには家来、小者をしたがえている崎山平内を、女の手で討てよう筈がない。
むろん、崎山にしても、蒲生彦作の遺族のことなどは、まったく念頭になくなっていたのである。

四

寛政十一年十一月十一日の夕方に、平井仙竜は、日本橋・堀留町にある下り傘問屋「萬屋(よろず)文六」方へ出かけた。
萬屋の子供で、十歳になるおよのという少女が風邪をこじらせ、高熱を発し重態となったので、病患快癒の祈禱をおこなうためであった。
仙竜は、夜を徹して、病間の次の間で祈りつづけた。
このような祈禱によって少女の病気が左右されるのではないのだが……。
とにかく、一夜明けると、少女は危機を乗りこえ、つめきっていた医者も、
「先ず、大丈夫」
と、いってくれた。
仙竜も大いに面目をほどこした。
萬屋の人々にもよろこばれ、せめて朝飯なりと、食べていってもらいたいと引きとめられたが、
「いや、もう結構でござる」
どうせ食べるなら、一時も早く家に帰って、おはるが仕度してくれる膳につきたいところだ。
仙竜は、萬屋のすすめをことわり、六ツ半(午前七時)には、帰途についた。

曇ったい寒い朝である。
風が、するどく空に鳴っていた。
萬屋がととのえてくれた宿駕籠にゆられ、仙竜は、新大橋をわたって深川へ入った。
それより少し前に、富岡八幡宮へ朝詣でに出かけたおみきが、猿江代地町の知人のところへ寄って用事をすませ、新高橋をわたり、これも、森下町へ急いでいた。
(仙竜どのは、昨夜は夜通しの御祈禱か……大変なことだ)
おみきも、亡夫の彦作が陰陽師であっただけに、徹夜の祈禱が、どれほど心身にこたえるかを、よく知っている。
(おはるも、仙竜どのと夫婦になって幸せのようだし……もうもう、すぎ去ったことは、つとめて忘れるようにした方がいいのかもしれない……)
そんなことを思いながら、大横川に沿った西町河岸を歩いていて、
(あッ……)
おみきは、目をみはった。
向うからやって来た侍が、林播磨守下屋敷の角を、ついと曲ったのを見かけて、
(たしかに、崎山平内……)
おみきは、駈けた。このときのおみきは、仙竜とおはるのことなど考えてもみない。
林屋敷の土塀の角から、おみきは、はっきりと崎山平内の後姿を見た。
おみきの目が、つりあがった。
崎山は、このあたりに並ぶ武家屋敷の道を、ゆったりと歩いている。供もない。一人きりであった。

なぜ、崎山が、こんなところをと思うよりも先に、おみきは、廻り道をして駈けに駈けた。
「おはる、おはる――」
森下町の家へ、ころげこむように、おみきが飛びこんで来た。
「母さま。顔が、まっ青(さお)――どうなされた」
おはるが訊くのへ、
「いる、いる」
「何が？」
「崎山平内が、一人きりで、すぐそこに、いる」
「えッ――」
「お前はよい。私、ひとりで、やる」
「母さま……」
「お前は、いけない。仙竜どのを大切にして……」
あえぐように言い、おみきは押入の中の葛籠(つづら)の底から、短刀を引き出した。
と――物もいわずに、おはるが母親と折り重なるようにして手をのばし、もう一つの短刀をつかみとった。
「おはる――」
「一緒にやりましょう、母さま」
「けれど……」
「仙竜さんは、わかってくれます」
「でも……」

「御上のおさばきも及ばぬまま、なぶり殺しにされた父さまのうらみを、このままにしてはおけません」

「おはる……」

「弱いものにも、これだけのことが出来るのだということを見せてやります。崎山を討てなくてもよい。母さまと私が、人の目のある町中の道で、崎山に斬られてもいいンです。そうなれば、とても隠し終せるものじゃアない。崎山も、きっと、御上のおとりしらべをうけなくてはなりますまい」

「その通りなのだよ、おはる――」

「それでいい。それだけでも、やらなくてはならない。弱いものだからといって、泣寝入りはごめんです」

「仙竜さんに、すまない」

「この三年間、私は一生かかってつくしてあげることを、あの人にしてきたつもりです。あの人も、わかってくれましょう。さ、早く。早く――」

叫ぶなり、おはるは外へ飛び出した。

おみきも、これにつづいた。

裏手へまわった母娘は、六間堀・升河岸の道を走って、猿子橋のたもとまで来た。

「来る、来る……」

おみきが、うめくようにいった。

崎山平内が、向うからやって来る。

道の右手は井上英之助の下屋敷で、左手は六間堀町の商家が並び、その向うは深川明神の社だ。

崎山の姿が、井上屋敷の塀に沿って来かかったとき、

「おはる――」

おみきが、おはるの手をつかみ、猿子橋を渡りきった。

「こ、ここで、両方から……」

母娘の顔いろは、鉛色に変じている。

眼は充血し、ふた目とは見られぬすさまじさだが、案外に、道を行く人は気づかない。

寒い風がうなっているので、橋をわたる人たちは、顔をうつ向け、急ぎ足になっている。

異様な女ふたりの様子に目をとめるゆとりがない。

それに、冬の朝のことで人通りも少なかった。

母娘は、橋のたもとの両側に、しゃがみこんだ。

崎山平内が、猿子橋にかかった。

とろんと、目も唇元もゆるんでいる。

崎山は近頃、愛宕山の水茶屋の女を世話している。

この女を、深川菊川町二丁目に囲い、五日に一度は、麻布の神保屋敷から通って来る。

内密のことだから供をつれて出るわけにはいかない。

泊るときもあり、昼間来て夕暮れに帰ることもあった。

崎山平内が、てらてらと寝あぶらに光った顔をゆるませつつ、猿子橋をわたりきった瞬間である。

何ともいえぬ叫びをあげて、おみきとおはるが、両側から短刀を突き入れて来た。

「何をするか！」

武芸の心得もない女たちが突き入れた短刀は、崎山の軀から三尺もはなれたところで無茶苦茶に光った。

「こやつ、蒲生の……」

あたりを見まわし、いきなり崎山は刀をぬいた。

新大橋をわたり、御籾蔵の道を、平井仙竜が乗った駕籠が来かかったのは、このときであった。

「いけねえ、斬合いだ」

駕籠かきが、駕籠をおろし、

「女二人に侍が斬り合ってる。見ものだね、こいつは――」

といった。

仙竜は、ハッとした。

「女ふたりだと……」

駕籠から出て、

「あぁッ！」

仙竜は、無我夢中で駈けていた。

このときの仙竜には、いささかの理性もない。妻の危険を助けるということだけで、義母のおみきのことさえも考えてはみなかった。

「おはる。おはるッ」

まっしぐらに猿子橋へ駈けて行き、

「逃げろ！」

叫びつつ、崎山平内に組みついた。

五

町方のものが来て、双方を引きわけたとき、崎山平内の疵は八カ所。おみき、おはる、平井仙竜は、それぞれ五、六カ所の疵をうけていた。

崎山は神保屋敷へ、仙竜たちは森下町の家へはこばれ、手当をうけた。

「畜生め。こんなことになって、一体、誰が得をするンだ」

重傷に苦しみつつ、仙竜は、わめいた。

仙竜は、崎山の脇差をうばいとって、闘ったのである。

おはるも、おみきも軽傷だったので、

「すみません、すみません」

あやまりつつ、懸命に仙竜の看病にあたった。

仙竜の信者やら、近所の人々やらがつめかけ、大さわぎになった。

二日後に、崎山平内が死んだという知らせが入った。

仙竜が突き刺した腹の疵が命とりになったらしい。

その翌日になると、苦しみもがいていた平井仙竜が、しずかになった。

「疵が痛くない……もう死ぬのだなあ」

「あなた……」

「おはる。崎山の奴、死んだとなあ」

「は、はい」

「敵、討てたじゃないか」

「……」
「やろうと思えば、出来るもンだなあ……」
「すみません。あなたを、こんなに……私も母さまも、これでは……これでは却って……」
「昨日までは、おれも、つまらないことをしたもンだと思ったよ。お前も、おふくろも、このおれもな」
「は、はい……」
「だが、今は違う」
「え……？」
「おはる。よくおぼえておけ。人間、いざ死ぬときが近づいてくると、あんまり苦しくないもンだよ。三十年生きても、百年生きても、同じことなんだなあ」
「あ、あなた……」
「仙竜どの……」
母娘が泣きくずれるのを、仙竜は見て、かすかに笑った。
「おはる。それから、おふくろさん……今日になり、死ぬことが、あまりおそろしくなくなってきて、私は、初めて、お前さんたちの気持がわかってきた。強いものは、弱いものを馬鹿にしちゃアいけないのだ。偉そうな奴は、弱そうな奴を見くびっちゃアいけないのだよなあ。とても手がとどかねえと思った侍の腹を、おれは……刀をにぎったこともないこのおれが、見事に突き刺したンだものねえ」
この夜、平井仙竜は、二十九歳の生涯を終えた。
この後、おみき、おはるの母娘に奉行所の取調べがあったが、

「お構いなし」
ということになった。

解　説

佐藤隆介

仇討（あだうち）という単語を、たとえば広辞苑で調べてみると、

「君父などを殺した者を討ちとって報復すること。かたきうち」

とあり、続いて仇討狂言について、

「仇討を題材とする浄瑠璃・歌舞伎劇。近世演劇で重要な一類をなす」

と、解説している。

日本人は昔から仇討というテーマに強く惹（ひ）かれるようである。日本三大仇討といえば、曾我兄弟の富士の裾野の仇討、伊賀上野の荒木又右衛門の三十六人斬り、それから四十七士の忠臣蔵、というのが通り相場になっているが、われわれにとっては史実がどうであったかということより、芝居や講談本を通じて得たイメージのほうが身近である。

たいていの読者にとって、仇討とは、

「悪人が正義の使者に討たれること」

に他ならない。かたきとして狙われる人間は、まず例外なしに悪人ときめつけられている。それは仇討の出発点を考えれば一応もっともなことといえよう。

Aなる人間がBという人間を殺す。そこから事は始まる。殺人という大罪を犯した者がそのままに放置されてよいという理屈はない。報復は人間の最も原始的な本能の一つである。子どもの

喧嘩であっても、兄弟のどちらかがやっつけられたら、もう一方が出かけて行って仕返しをしなくてはおさまらないだろう。

まして、事は殺人である。主人なり父なりを無残に殺された場合、身内の者や肉親の怒りと悲しみは察するにあまりがある。その怒りと悲しみに共感するから、われわれは、どうしても「仇討をする側」に立ってしまい、かたきイコール悪人の図式をそのまま何の疑いも持たずに受け入れてしまうことになる。

いわゆる三大仇討の場合でも芝居や講談で描かれる「討たれる側」の工藤祐経、河合又五郎、吉良上野介は、いずれも憎々しい文字通りの敵役である。毎年師走になるときまって上演される忠臣蔵は永遠の人気ドラマだが、忠臣蔵のある限り、日本人の仇討に対する判官びいきの心情は変わることがないだろう。

しかし、一口に仇討といっても、実にさまざまな事例があった。忠臣蔵ばかりが仇討ではないのである。そのことを一つ一つ池波正太郎は例証してみせる。それが本書〔仇討群像〕である。この小説集を読んだ後では、読者のこれまで疑いもしなかった仇討の概念が大きく変わっているだろう。

〔よろいびつ〕の一篇では、細井家の用人・西村太兵衛が、主人細井新三郎の用金百両を奪って逃走した新参の家来・池尻小文吾を主命によって討つという話が物語られている。小文吾が西村用人の妻・秀を連れて逃げたことから、西村太兵衛にとっては「妻のかたき」討ちということになる。少なくともそういう名目のもとに、

「憎むべき獅子身中の虫けら、小文吾と姦婦・秀の首を打てい。ゆるしてはおけぬ!!」

と、細井新三郎が激怒して命ずるのである。ところが事実は、小文吾とお秀は一緒に逃亡したのではない。公金に目がくらんだ小文吾と、主人細井新三郎のけしからぬふるまいにたえきれなくなったお秀が、たまたま同じ夜に姿を消しただけのことである。

この一篇で池波正太郎が描き出してみせたのは、仇討という美名のもとで行なわれた愚行のもっとも極端な例である。ここにはまともな人物は一人として出て来ない。

事もあろうに家来の妻に懸想し、いうことをきかなければ夫の用人としての地位を奪いとると脅す主人も主人なら、その主人のいうことを一度だけきいてやってくれと妻に哀願する用人も用人である。自堕落に享楽的な日々を送ることしか頭になく、眼前に百両というまとまった金を見れば、考えも何もないままこれをつかんで逃走する池尻小文吾も、救いのない小悪党でしかない。

お秀についていえば、多少同情すべき点もあることはあるが、ケチな小悪党の小文吾とずるずる一緒に暮らし始めるような、所詮はだらしのない水茶屋上がりの女に過ぎない。

考えてみれば、〔よろいびつ〕の一篇は、今日のわれわれの生活の中にどこにでもころがっていそうな話ではないだろうか。新聞の三面記事や週刊誌に、これに類する事件を発見するのは造作もないことであろう。

細井家という旗本を一つの企業に置きかえてみれば、当主の細井新三郎は社長、用人の西村太兵衛はさしづめ社長室長、あるいは秘書課長だろうか。池尻小文吾は駅弁大学のスポーツ部出身で入社したばかりの見習い社員というところ。というように考えてみると、ここに描かれている醜い仇討騒ぎは、現代社会の縮図といえなくもない。

三流企業の経営者ほど説教癖が強いもので、その点においても、細井新三郎が何かといえば家来から女中に至るまで書院へ呼びつけ、ながながと武士のたしなみを説いてきかせる姿に、自分の勤める会社の社長を思い浮かべて苦笑いするサラリーマン氏は少なくないだろう。

仇討とは、元来、生まれるべくして生まれたそれなりに妥当なシステムである。ことに徳川将軍の威令のもとに諸大名がそれぞれの領国を統治していた封建制度の時代には、仇討のシステムは不可欠のものであった。それというのも諸大名の領国は、それぞれに独立の法律を持った別々の国であったからである。

ある藩内で殺人事件が起きても、犯人が他国の領内に逃げ込んでしまえば、もはや藩庁としてはどうすることも出来ない。現代において、日本国内で犯罪を行なっても外国へ逃亡してしまえば手が出せないのと同じである。一応、今日では国際刑事警察機構いわゆるインターポールというものがあり、たとえ外国へ高飛びをしてもそう簡単には逃げ切れないようになっている。しかし、今日のような情報化社会においてすら、外国へ逃亡した犯人が逮捕され、正式な法の手続きを経て刑を執行されるケースはそう多くはない。

ましてや徳川時代のことである。人を殺しても他国へ逃げ出してしまえば、そのまま逃げ得ということになりやすい。そこで考え出されたのが仇討というシステムに他ならない。原理的にいえば、仇討とは、

「一時的に法を執行する権利を委託されて行なう正義の行為」

ということになるだろう。

その仇討が正当なものとして認められた場合には、領主から日本全国共通の仇討免許状が下付される。もちろん同時に幕府へも、このことが領主なり藩庁なりから届け出されるわけである。

つまり、仇討は単に肉親による報復であるばかりでなく、社会的に公認された一種の警察活動ということが出来る。仇討という恐らくは日本独特のシステムを理解しようとするなら、この点に注意しなければならない。ひとたび仇討が公認され、仇討免許状を下付された以上は、当事者はいかなることがあっても仇討を遂行しなくてはならない。

そもそもの出発点は「肉親を殺されたことに対するうらみ」をはらすという、きわめて個人的な感情問題であったものが、この時点からは個人の次元をこえて、いわば社会的義務に変わるのである。それも、ちょっとやそっとの義務ではない。仇討をしなければならない人間の運命は、その日から大きく変わって行く。

武士の場合は、仇討を成功させない限り生きて行くことが出来ない。自分の家もつぶされ、自分も家族も路頭に迷ったまま一生を終わることになる。こうなると仇討は感情問題や意地の問題などではなく、生活そのものの大問題となる。

めざす相手が短期間のうちに発見出来、なんとかこれを討ちとることが出来れば、見事に武士の面目を保った者と称讃され、大手を振って故国に帰れる。そうでない限りは旅から旅への絶望的な日々が果てしもなく続くのである。

三年、五年とそういう苛酷な歳月に翻弄されていれば、たいていの人間は精神も肉体もすり減ってしまう。そもそも何故にこんな苦労を続けなければならないのか、その根本さえも定かではなくなってくる。無理もないことだ。当初は激発していたうらみの感情も次第に稀薄になって行く。たとえ消えさることはないにしても、それ以上に日々の孤独な苦しさが重くのしかかってくる。

〔興奮〕という一篇では、馬鹿気たことから始まった仇討のプロセスが、八年の歳月を経てどのように完結したか、その間、仇討にかかわりあった人間たちがどのように変質して行ったかを、池波正太郎は詳細に描き出している。ちなみに、この一篇は著者自身がその仕上がりに満足しているものという。会心の作ということであろう。池波正太郎が仇討を主題とする小説を執拗なま

でに書き続けているのは、仇討ほど「人生」というものを煮つめてみせるものはないからである。

池波正太郎自身、あるエッセイ集の中で次のように述べている。

「討つ方も、討たれる方も、絶えず人生の断崖のふちをわたりつつ、逃げて、追って、必死の生活模様を展開するのだし、その状態も多種多様である。……彼ら二人のみのことではない。彼らの家族、そして彼らを取り巻いている社会や経済の状態。ときによっては、そこに政治的に大きな問題さえ生まれることがあって、そうなると単なる〔敵討ち〕だけを描くのではなく、種々の環境に発生する人間のドラマに共通した主題をとらえることを得るわけだ」

ここに池波正太郎の〔仇討群像〕をどう読むかに対する最も適切な解答がある。池波正太郎が書く仇討小説は決して単なる復讐物語ではない。本書に収録されている九篇のどれを取っても、主題は仇討そのもののカッコよさなどではなく、仇討という突発的事件に巻き込まれた人間たちの、のっぴきならない生きざまに他ならないということである。

同時にまた、仇討というもののいかに多くが愚にもつかない発端から展開して行くものかを、われわれは知る。

〔よろいびつ〕では、いやしくも五百石の旗本が用人の妻女に邪(よこしま)な情欲を燃やしたことが発端である。

〔興奮〕と〔波紋〕では、衆道が動機となっている。〔情炎〕においては、一種の変質者による殺人が事の始まりであり、〔逆転〕という一篇では、もとはといえばつまらぬ女のことが、ちょっとした弾みで殺人にまで発展してしまう。

これらの各篇においては、男と女の問題（男と男の問題も含めて）がそれぞれ仇討の発端なのだ。〔大石内蔵助〕の一篇だけは、政治的な倫理を問うという壮大なテーマが根本にある点で異

色だが、ここでも池波正太郎がもっぱら描いているのは、一人の男性としての内蔵助の「女あそび」に他ならない。

そういう角度から本書を読み直してみると、〔仇討群像〕と題してはいるが、これは人間という生きものを衝き動かしているセックスの欲望の恐ろしさを描いた作品集ではないかとも思える。

大石内蔵助が（ということは、作者・池波正太郎自身が）いみじくもいっている。

「父祖代々の家老を居ねむりしながらつとめていて、朝夕の食事をおいしく食べ、たまさかにはおもいきり女の肌の香におぼれる……ま、人の一生というものは、つきつめれば、只これだけのことが渋滞なくおこなわれてゆくことにあるのだから、このまま、あと十年か、二十年か……ゆったり生き、やがて死ねればよいのだが……」

現実には、なかなかそれだけのことが渋滞なく行なわれない。思いもかけぬ事件が突発し、人生は音を立てて崩れて行く。そして、その突発事件の底には、ほとんどつねに男と女の問題がからんでいるのである。〔情炎〕という作品は、そういう意味でまことに象徴的な一篇であろう。

足軽の内山文五郎は、組頭の屋敷へ下女奉公に来ていた百姓むすめ・ぬいを一目見た瞬間から、どうにもならぬ性的衝動のとりことなる。夫婦になってくれと執拗にもちかけるが相手にされない。ぬいが同じ足軽仲間の伊東政七に嫁いだ後も、文五郎のリビドーは激しさをますばかりである。一度力ずくで犯したぬいの白い裸身が頭にこびりついて離れないのだ。文五郎は髪に白いものがまじりはじめた年齢(とし)になっても、毎夜、あの夜のぬいのことを思い浮かべる。

結局、内山文五郎は、その激し過ぎるリビドーゆえに死なねばならない。

（おれは、ただなぐさみに、おぬいを、あのような目にあわせたのではねえのだ）

と、焼けつくような想いを胸の底に沈めながら、狂気の一夜にぬいの下腹部から奪った数本の

恥毛を守り袋にしまい込んでいる内山文五郎の姿は、憎しみを誘うというよりも、むしろ哀れである。この男は確かに一種の狂人であるかも知れないし、その行為は正当化し切れるものではない。しかし、これも男の愛情（歪められた形ではあれ）であることは否定し得ないであろう。

文五郎を狂わせ、ぬいを狂死させ、ぬいの夫・政七を無残な死に追いやったその狂気は、いわば男の肉体が原始の昔から現代に至るまで変わることなく秘めている本能的欲求ではないのか。われわれにも、程度の差こそあれ、その狂気は宿っているのではないのか。

池波正太郎が終始一貫して描き続けているものは、一言でいえば、人間という生きものの一切を剝ぎ取った裸の姿である。裸にされた人間の姿は、いつの時代も少しも変わりがないということを、われわれは池波正太郎によって思い知らされる。

最後に老婆心から申し添えるが、折角この〔仇討群像〕を読まれた読者には、是非、同じく文春文庫としてすでに刊行されている〔剣客群像〕〔忍者群像〕の二冊をも読まれることをお勧めする。池波正太郎ならではの小説の醍醐味を満喫出来る三部作だからである。

だが、それでもまだ、この作家の途方もなく広大な小説世界のごく一端を垣間見たことにしかならない。池波正太郎の作品群は、その質においても、その量においても、本当の小説好きが生涯を通じて伴侶とするに足りる、いや、それ以上のものがあるからである。

（コピーライター）

文春文庫

仇討群像（あだうちぐんぞう）

定価はカバーに表示してあります

1980年6月25日　第1刷
2000年8月5日　第31刷

著者　池波正太郎（いけなみしょうたろう）

発行者　白川浩司

発行所　株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102-8008
TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-714220-1

初出

よろいびつ　小説新潮　37年10月号
興奮　別冊文藝春秋107号（44年3月）
坊主雨　オール讀物　42年4月号
波紋　小説新潮　41年4月号
敵　別冊小説現代　46年4月号
情炎　小説現代　45年4月号
大石内蔵助　オール讀物　44年1月号
逆転　小説サンデー毎日　45年11月号
深川猿子橋　小説現代　38年10月号
以上「池波正太郎短編小説全集・5」（立風書房　53年9月刊行）に収録

池波正太郎　鬼平犯科帳全二十四冊
池波正太郎　蝶の戦記上・下
池波正太郎　おれの足音上・下　大石内蔵助
池波正太郎　火の国の城上・下
池波正太郎　幕末新選組
池波正太郎　忍びの風全三冊
池波正太郎　剣客群像
池波正太郎　忍者群像
池波正太郎　仇討群像
池波正太郎　その男全三冊
池波正太郎　旅路上・下
池波正太郎　夜明けの星
池波正太郎　雲ながれゆく

池波正太郎　乳房
池波正太郎　秘密
池宮彰一郎　受城異聞記
伊集院静　受け月
五木寛之　青年は荒野をめざす
五木寛之　蒼ざめた馬を見よ
五木寛之　樹氷
五木寛之　にっぽん退屈党
五木寛之　涙の河をふり返れ
五木寛之　幻の女
五木寛之　白夜草紙
五木寛之　わが憎しみのイカロス
五木寛之　裸の町

五木寛之　金沢望郷歌
五木寛之　ステッセルのピアノ
伊藤三男　小説・徳川三代　家康・秀忠・家光をめぐる人々
井上ひさし　青葉繁れる
井上ひさし　四十一番の少年
井上ひさし　手鎖心中
井上ひさし　イサムよりよろしく
井上ひさし　おれたちと大砲
井上ひさし　合牢者
井上ひさし　黄色い鼠
井上ひさし　さそりたち
井上ひさし　花石物語
井上ひさし　江戸紫絵巻源氏上・下

井上ひさし　もとの黙阿弥
井上ひさし　野球盲導犬チビの告白
井上ひさし　イヌの仇討
伊野上裕伸　火の壁
井上靖　おろしや国酔夢譚
井上靖　その人の名は言えない
井上靖　魔の季節
井上靖　白い炎
井上靖　紅花
井上靖　地図にない島
井上靖　戦国城砦群
井上靖　月光
井上靖　若き怒濤

井上靖　遠い海
井上靖　流沙（上・下）
井上夢人　もつれっぱなし
色川武大　離婚
色川武大　怪しい来客簿
色川武大　あちゃらかぱいッ
色川武大　虫けら太平記
宇江佐真理　幻の声（髪結い伊三次捕物余話）
内田春菊　ファザーファッカー
内田春菊　あたしが海に還るまで
内田春菊　南くんの恋人
内田春菊　シーラカンス・ロマンス
内田春菊　愛のせいかしら
内田春菊　凛が鳴る
うつみ宮土理　紐育（ニューヨーク）育ち　マサオ
内海隆一郎　一杯の歌
海老沢泰久　スーパースター
海老沢泰久　美味礼讃
海老沢泰久　みんなジャイアンツを愛していた
海老沢泰久　監督
海老沢泰久　ただ栄光のために（堀内恒夫物語）
海老沢泰久　帰郷
海老沢泰久　二重唱〈デュエット〉
遠藤周作　男の一生（上・下）
遠藤周作　女（上・下）
逢坂剛　水中眼鏡（グール）の女

池波正太郎　夜明けのブランデー
池波正太郎　ル・パスタン Le passe-temps
池波正太郎　池波正太郎の春夏秋冬
池波正太郎編　鬼平犯科帳の世界
池部良　風が吹いたら
伊佐千尋　逆転（アメリカ支配下・沖縄の陪審裁判）
伊佐千尋　司法の犯罪
伊佐千尋　沖縄の怒り（コザ事件・米兵少女暴行事件）
伊佐千尋　愛するがゆえに（阿部定の愛と性）
石寒太　山頭火
石井好子　パリ仕込みお料理ノート
石垣純二　常識のウソ
石川三千花　顔が掟だ！
石川三千花　石川三千花の勝手にシネマ（シネマ通信）
石川中野翠　ともだちシネマ
石川好　ストロベリー・ロード上・下
石川好　ストロベリー・ボーイ（ストロベリー・ロード PART2）
石原慎太郎　ガーデン・ボーイ（ストロベリー・ロード PART3）
石原慎太郎　現代史の分水嶺
伊集院静　亡国の徒に問う
伊集院静　あの子のカーネーション
伊集院静　神様は風来坊
伊集院静　時計をはずして
伊集院静　アフリカの燕
伊集院静　半人前が残されて
伊集院静　兎が笑ってる

文春文庫 最新刊

朱の丸御用船
吉村 昭

幕府の御用船から米を奪った漁師達を襲う悲劇、追いつめられた人間心理。解説は勝又浩

異端の空
太平洋戦争日本軍用機秘録
渡辺洋二

日本最初のロケット戦闘機、最速の実験機、幻の前尾翼機などの開発にかけた男達を描く

家族熱
向田邦子 原作

傲慢な舅と夫、生さぬ仲の二人の息子に仕えて十三年、家族の心中の先妻の存在に後妻は

夜と女と毛沢東
吉本隆明・辺見 庸

思想界の巨人と、記者出身の作家が、オウム事件、中国、性を、体験を踏まえて白熱討論

スペイン5つの旅
中丸 明

スペインに魅せられ移り住んでしまった著者が、タクシーを使って楽しむ旅のコツを開陳

南へ
新・放浪記2
野田知佑

熊本、鹿児島、沖永良部、そして豪州、フィジーへ。南へ惹かれるこの衝動はなんだろう

ギョーザのような月がでた
椎名 誠

パリ島で神の山に登る、久しぶりの文芸講演、星降る町で上映会。好評のシリーズ第八弾

本の運命
井上ひさし

十三万冊の本をいかに集め、どう読み、なぜ大図書館をつくったか？出久根達郎の解説付き

朝茶と一冊
出久根達郎

暮らし、そして、読む。思わぬ面白本が満載。読書の達人の、底抜けに楽しい書物エッセイ

もっとウソを！
男と女と科学の悦楽
日高敏隆・竹内久美子

精子をめぐる男と女の闘い、若い女がダイエットに走る理由など、師弟による爆笑科学話

サッカーの世紀
後藤健生

ブラジルとアルゼンチンとの違い、ACミランの名称の由来など、世界のサッカーを俯瞰

鬼平犯科帳
新装版（九）（十）
池波正太郎

時代小説の定番ベストセラー「鬼平」シリーズがリニューアル。大きい活字で読みやすく

マンチェスター・フラッシュバック
ニコラス・ブリンコウ 玉木 亨訳

十六年前の惨殺事件の記憶。捨て去ったはずの闇が、今またジェイクをあの街に呼び戻す

白球の王国
トマス・ダイジャ 佐々田雅子訳

南北戦争の末期、血なまぐさい戦場に白球が舞う。いつか兵士たちに友情が芽生えて……

迷信なんでも百科
ヴァルター・ゲルラッハ 畔上 司訳

科学技術・テクノロジー万能の現代で、いまなお根強く残る迷信をめぐるさまざまな話題